

東北学院大学 教養学部論集

第 173 号

2016 年 3 月

[論 文]

エル・グレコと彼の父祖たちの芸術

——古代美術とビザンティン美術をめぐる画家のヴァザーリ『列伝』評釈——

…………… 松 井 美智子…………… 1

Aufzeichnungen von TILESIIUS zu den drei Aufenthalten in Kamtschatka 1804 und 1805

1. Teil: Ankunft in Kamtschatka im Sommer 1804

…………… フリーダー・ゾンダーマン…………… 29

ルートヴィヒ・ホール『覚書』を読む 思索と表現 2) ……………吉 用 宣 二…………… 67

The Effect of Self-Gravity in Linearly Perturbed Euler Equations for a Rotating Thin Fluid Disk

…………… TAKAHASHI Koichi…………… 123

「生きる力」の展開…………… 八 幡 恵…………… 145

戦後初期話し言葉教育の史的検討

——コミュニケーション概念受容の変遷から——…………… 渡 辺 通 子…………… 159

[翻 訳]

ヴィルヘルム・ラーベ作 薬局ヴィルデマン (2)…………… 門 間 俊 明 訳…………… 194

東北学院大学学術研究会

目次

〔論 文〕

- エル・グレコと彼の父祖たちの芸術
——古代美術とビザンティン美術をめぐる画家のヴァザーリ『列伝』評釈——
.....松井美智子..... 1
 - Aufzeichnungen von TILESIIUS zu den drei Aufenthalten in Kamtschatka 1804 und 1805
1. Teil : Ankunft in Kamtschatka im Sommer 1804
.....フリーダー・ゾンダーマン..... 29
 - ルートヴィヒ・ホル 『覚書』を読む 思索と表現2)吉用宣二..... 67
 - The Effect of Self-Gravity in Linearly Perturbed Euler Equations for a Rotating Thin Fluid Disk
.....TAKAHASHI Koichi..... 123
 - 「生きる力」の展開.....八幡 恵..... 145
 - 戦後初期話し言葉教育の史的検討
——コミュニケーション概念受容の変遷から——.....渡辺通子..... 159
- 〔翻 訳〕
- ヴィルヘルム・ラーベ作 薬局ヴィルデマン (2).....門間俊明訳..... 194

●印の著作は東北学院大学学術研究会のホームページからも読むことができます。
 <<http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/research/journal/committee.html>>にて公開中です。
 東北学院大学 <<http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/>> から、
 研究・産学連携→学術誌→学術研究会（紀要、論集）へとお進み下さい。

執筆者紹介（掲載順）

- | | |
|--------------------|--------------|
| 松 井 美智子
(森 美智子) | (本学教養学部 教授) |
| フリーダー・ゾンダーマン | (本学教養学部 教授) |
| 吉 用 宣 二 | (本学教養学部 教授) |
| 高 橋 光 一 | (本学 名誉教授) |
| 八 幡 恵 | (本学教養学部 准教授) |
| 渡 辺 通 子 | (本学教養学部 准教授) |
| 門 間 俊 明 | (本学教養学部 講師) |

【論 文】

エル・グレコと彼の父祖たちの芸術

—— 古代美術とビザンティン美術をめぐる画家のヴァザーリ『列伝』評釈 ——

松 井 美 智 子

エル・グレコが生前に所蔵したヴァザーリ『美術家列伝』は、1568年刊行の第二版（ジュンティ版）である。彼はそこにおよそ7,000語にのぼる書き込みを行なっており、具体的にはジュンティ版第1巻に10箇所、第2巻に106箇所、第3巻に187箇所を数える。加えて、本文の数多くの箇所に下線を書き残してもいる¹。本稿は、その中の古代美術とビザンティン美術に関わる欄外註と下線部に着目してゆく。これらは、ジュンティ版第3部の同時代美術に関する評釈と比較すれば、量的にははるかに少ない。しかしルネサンスにおいて芸術規範の位置を占めたギリシアに端を発する古代美術、そしてビザンティン美術は、エル・グレコにとっていわば父祖たちの芸術であることを考慮するなら、彼がそれらをどのように捉えていたか、彼の芸術史観を考える上でもすこぶる意義深いと言えよう。

第1章 古代美術をめぐる

あらかじめ確認しておかねばならないのは、古代美術に関するエル・グレコによる註釈および下線部は、ヴァザーリによって記述された本文に即して限定的に行なわれていることである。これに対して、彼が同じく書き込みをおこなった書物、すなわちダニエレ・バルバロが註釈を付して編纂した古代ローマの建築家ウィトルウィウスの『建築十書』（1556年、ヴェネツィア刊）の場合、彼はテキスト自体とバルバロによる註釈をきっかけとして、往々テキストの文脈を相当逸脱して持論を展開しようとする。古典建築の規範としてきわめて高い權威を有する『建築十書』において、彼は古代建築および古代美術全般に関して『列伝』以上に多くの書き込みを行ない、これらに対する彼の評価と理論的な立場を明快に表明している。また古代ギリシアの美術家たちを、たびたび「わがギリシアの父祖たち [mis padres

¹ エル・グレコのほかに、フェデリコ・ズッカロの手になる書き込みが5箇所、またエル・グレコの弟子ルイス・トリスタンによる書き込みが17箇所含まれている。「ティツィアーノ伝」に書き込まれたズッカロのコメントにエル・グレコが「この加筆はフェデリコのものであり、十分だ [esto sobreescrito es de Federico y basta]」と註釈を付していることから、エル・グレコ所蔵の『列伝』はズッカロからエル・グレコに贈与され、弟子のトリスタンに渡ったと推定される。Xavier de Salas, Un exemplaire des “Vies” de Vasari annoté par Le Greco, *Gazette des Beaux-Arts*, 1967, LXIX, pp. 176-180.

griegos]」という語を用いて記述しているのも特徴的だ。他方、『列伝』の註釈にはこの言い回しは登場しない。『建築十書』において、この語を用いつつ古代美術に対する彼の評価を記した重要な一節を引用してみる。

「我々の時代は、わがギリシアの父祖たちがエジプト人達におこなったように、彼ら（古代人たち）を正してきたとは言わないものの、彼らを模倣し、（さらに）困難に思われることには、我々の時代においては、古代人たちが決して到達しなかった考え [concep-tos] に遭遇してきたからである。…すなわち彫刻においてミケランジェロは、他の彫刻家には決して見られなかったほどの驚嘆すべき審美眼 [un gusto tan mirable] を備えたのであり、またティツィアーノの色彩の美 [la eunusta de los colores] についても、これらの語をもって語りえよう²。（括弧は筆者による補足。以下同様。）

この一節は、ヴァザーリが『列伝』の序論で展開しているマクロな芸術史観、すなわちルネサンスの三時代を経て16世紀にミケランジェロの登場によって当代の美術はついに古代美術を凌駕するに至ったとみなす進歩的發展史観を、エル・グレコは基本的に共有していることを端的に示している。それと同時に、パオロ・ピーノやルドヴィコ・ドルチェらヴェネツィア派の美術理論に同調しつつ、色彩画家としてのティツィアーノを彫刻家ミケランジェロに比肩する存在、すなわち画家のカテゴリーにおいては随一の存在と位置づけていることも明らかである。

これに対して『列伝』への註釈には、古代美術に関する彼の理論的見解を再構成するため直接的に資するような記述は、とくに見当たらない。しかしながらヴァザーリによるテキストと、ジュンティ版第3部第2巻の冒頭に挿入されているジョヴァンニ・バッティスタ・ディ・マルチェッロ・アドリアーニの書簡は、さまざまな古代の画家や彫刻家の具体的な名前、活動と作品についての記述を含んでいるため、古代美術に対するエル・グレコの関心の所在がいつそう具体的に浮き彫りとなっているように思われる。以下、それらを詳細に吟味してみることにしてよう。

² トランスクリプションは次のとおり。“nostra edad resta non digo a corejerlos como an echo mis padres Griegos a los egiptios seno a ymitarlos paresse deficile donde pues se a visto conceptos yn esta nuestra edad que los Antigos nunca dieron yn ello … Micael Angelo tuvo un gusto tan mirable quel nunca se vio yn hotro scultor e con que palabras se potrebe dezir la eunusta de los colores de Titiano”. 邦訳はフェルナンド・マリーアスらの解釈を参考とした。Fernando Marías/ Agustín Bustamante García, *Las ideas artísticas de El Greco*, Madrid, 1981, pp. 131-135, 235-236, esp.134. 当該箇所は *I dieci libri dell' architettura di M. Vitruvio tradutti et commentate da Monsignor Barbaro eletto Patriarca d' Aquileggia*, Venecia, 1556, IV, vii, p. 123. 以下も参照。Fernando Marías, El Greco y los usos de la antigüedad clásica, in *La Visión del Mundo Clásico en el Arte Español*, Jornada de Arte, 1993, pp. 173-82.

1) ジュンティ版第1巻および第2巻より

古代美術に関するエル・グレコの着目箇所は、ジュンティ版第1巻と2巻にそれぞれ1箇所含まれている。

まず第1部序論（「列伝の序」）の一節で、ヴァザーリは、古代ローマ人による美術品の略奪について触れ、ローマや属州で制作された数よりも多い、略奪された彫刻により、都市ローマは彩られていった。たとえば、小さな島でしかないロードスには、ブロンズ像や大理石像あわせて三万體を超える彫像があったと述べている³。古代美術に関する彼の最初の評釈行為は、この一節に下線をほどこすことから始まっている。

次の第2巻においても、冒頭の第3部序論第3葉目以下に下線を1箇所引いているに過ぎない。しかしながら、興味深いことに、それはヴァザーリがルネサンスにおける古代の影響に対して、初めて完全かつ膨大な信頼を与えたとみなされてきた、有名な論述箇所に合致している⁴。

それは以下の通りである。プリニウスが記していた著名な古代作品——《ラオコーン群像》や《ベルヴェデーレの大トルソ》、《クレオパトラ》や《ベルヴェデーレのアポロン》など——が発掘され、それらを見ることによって、クワトロチェントの美術家たちの達成できなかった表現を、のちの美術家たちは発見できた。これらの古代彫像は、その甘美さや荒々しさ、生きた人体の最大の美から引き出された肉付き表現や、運動表現の点で、この上ない優美さを見せている。これらの古代作品こそ、無味乾燥で、生硬で、見た眼の心地よさを欠いたある種の様式を克服する原動力となった、と述べた箇所である⁵。

当代美術の出発点にあって、古代彫刻の果たした役割は多大であったと捉えるヴァザーリの認識は、註釈者エル・グレコにとって同調しうるものだったか否かここでは判然としないものの、その認識の意義を看過しなかったことは確かと言えよう。

2) ジュンティ版第3巻より

第3巻（『列伝』第3部第2巻）の冒頭部には、フィレンツェの人文学者でコジモ1世により公国の公的歴史家のひとりに任命されていたジョヴァンニ・バティスタ・アドリアーニ

³ Fernando Marías, *El Greco y el arte de su tiempo : las notas de El Greco a Vasari*, Toledo, 1992, p. 75. 『列伝』の当該箇所は以下の通り。Vasari, *Le Vite...*, 2nd.ed., Firenze, 1568（以下 Vasari-Giunti と略記）、I, p. 69.; Vasari-Milanesi, *Le Vite...*, I, p. 219.（邦訳は「第1部序論（列伝の序）」高梨光正訳、『美術家列伝』第1巻所収、中央公論美術出版社、2014年、p. 105.）

⁴ E. パノフスキー『ルネサンスの春』中森義宗・清水忠訳、思索社、昭和48年、pp. 38-44, esp. p. 39. (E. Panofsky, *Renaissance and Resuscitations in Western Art*, Stockholm, 1960.)

⁵ Fernando Marías, *op. cit.*, p. 80. Vasari-Giunti, II, Proemio.（「第3部序論」越川倫明訳『美術家列伝』第3巻所収、中央公論美術出版社、2015年、p. 5.）

によるヴァザーリ宛て書簡(1567年9月8日付)(図1)が41ページ(頁番号なし)にわたって収録されている⁶。この書簡は、ヴァザーリの友人でジュンティ版の成立に指針を与え大きな影響を及ぼしたV.ボルギーニによって、トレンティーノ版とは異なったいっそう普遍性を有する美術の歴史的記述へと『列伝』を変貌させるため、扱う時代と地域をより広範囲に拡大し、古代美術をもカバーすることを企図して、執筆を要請されたものである⁷。この書簡部分に、画家はコメントをまったく書き込んではいない。しかしながら多数の箇所を下線をほどこしており、彼の関心を引いた箇所を浮き彫りにしている。

[1] まず画家ゼウクシスをめぐって、ユノ神殿を飾る最も美しい女性ヘレネーの像を描くためにクロトンの美女5人を選んだという、きわめて有名なエピソードに着目している⁸。このエピソードは、アルベルティの『絵画論』(1435/36年)、カスティリオーネの『廷臣論』(1528年)、P.ピーノの『絵画問答』(1548年)、L.ドルチェの『アレッティーノ』(1557年)、さらにまたP.ロマツォの『絵画論』(1584年)等に繰り返し再録されていた⁹。したがって、エル・グレコにとって、この逸話はアドリアーニ書簡が初見だったのではなく、むしろこれらの幾つかを通じて既知であった可能性こそおおいにありうることに思われる。そうであるとすれば、下線を引くというテキスト行為に底流するのは、逸話そのものに対する行為者の関心を反映しつつも、芸術論における常套的論述への着目という側面を伴っていた、と見るべきかもしれない。

[2] エフェソスの画家パラシオスをめぐって、彼は初めて人物像に全体の均衡を与え、また初めて顔を生き生きと細やかに写し取り、頭髮には愛らしさ [leggiadria]、無限の優美

⁶ アドリアーニの書簡はジュンティ版においては第3巻(第3部第2巻)の冒頭部に挿入されたが、1759-60年にG.ガエタノ・ボッターリが最初の近代版を編集の際、本来相応しい場所として第1巻の冒頭部(第1部総序の前)に置いた。ミラネージ版、R.ベッターニ/P.パロッキ版もそれに準じている。Eliana Carrara, Giovanni Battista Adriani and the drafting of the second edition of the *Vite*, *Journal of Art Historiography*, n. 5, December, 2011, pp. 1-21. *Giorgio Vasari, Le Vite...*, ed. R. Bettarini/F. Barocchi, Firenze, v. 1, p. 232.

⁷ P. Lee Rubin, *Giorgio Vasari: Art and History*, New Haven and London, 1995, pp. 192-197. Robert Williams, *Art, Theory, and Culture in Sixteenth Century Italy*, Cambridge, 1997, pp. 30-33. この書簡の内容と出典に論究したK.フライによれば、書簡はプリニウスのテキストの要約に過ぎないとされているのに対して、E.カッターラによれば、アドリアーニは書簡の冒頭で美術の起源論を展開、建築や彫刻に先駆け絵画こそ最古の起源を有し、古代ギリシアにおいては絵画だけが自由人に相応しいとされた絵画の高貴性を強調、順次ギリシア画家、ローマ画家、塑像、鑄像、石像の各彫刻家へと論を進めているのに対して、プリニウスでは、第35巻冒頭部でまず絵画の没落を述べ、論述は古代イタリア絵画から始まり上記の自由人と絵画の件は35巻77節に登場するなど、両者の異同は少なくないと指摘されている。*Le Vite...*, ed. K. Frey, München, 1911, p. 224. Eliana Carrara, *op.cit.*, pp. 1-4. Sarah B. McHam, *Pliny and the Artistic Culture of the Italian Renaissance: the Legacy of the "Natural History"*, New Haven and London, 2013, pp. 273-285. 『列伝』の歴史記述とその地理的構成については以下を参照。伊藤拓真「ヴァザーリの歴史記述の内と外:『芸術家列伝』の地理的構成」、『西洋美術研究』no. 13, 2007年, pp. 18-43.

⁸ Fernando Marias, *op.cit.*, p. 95. 当該箇所は Vasari-Giunti, III, p. 7.; Vasari-Milanesi, I, p. 27.

⁹ Sarah B. McHam, *op.cit.*, p. 345, (161).

さを与えたとする箇所を下線を施している¹⁰。これは、肖像表現への画家としての註釈者の関心を反映しているのであろうか。

[3] パンフィロスに関する箇所では、パンフィロス自体でなく、アペレスに言及した箇所を下線を付している。まずアペレスは他ならぬこのパンフィロスから学んだ、彼こそがアペレスの師匠であったことに着目しているのだ¹¹。これは、古代ギリシアの伝説的な画家の芸術的系譜に関心を示したものと言えるかもしれない。それは『列伝』におけるヴァザーリの基本姿勢と重なるものである。

エル・グレコはアドリアーニ書簡全体を通じて、古代ギリシアの美術家たちの中でも画家アペレスに格別の関心を示し、さらに9箇所を下線を残している。

[4] まず、アペレスはプロトゲネスの業績を高く評価した、しかし自分は絵から手を引くべき時を心得ている点では勝るとした有名なエピソードに加えて、飾り気のないきわめて誠実な心の持ち主であったとする一節に注目している¹²。このエピソードも、[1]と同様にアルベルティ、カスティリオーネ、ドルチェらに繰り返し引用されたものであった¹³。

[5] 次に、アペレスは一本の線も引かずに過ごすことは一日たりともない習慣を保っていたという箇所である¹⁴。技芸における絶え間ない修練の重要性を表す、格言にさえなったこの一節をエル・グレコはよく知っていたとみえ、『列伝』の「フラ・バルトロメオ伝」において辛辣なコメントでこの逸話を援用している事実があり、その意味でも興味深い¹⁵。

[6] 続いて、靴屋がアペレスの描いたサンダルの欠点を批判、アペレスはそれを受け入れて修正を施すものの、それに増長した靴屋によるそれ以上の絵画の批評までは認めなかったという逸話¹⁶。

[7] また、アペレスはアレクサンドロス大王に寵愛され彼だけが大王の肖像画の制作を

¹⁰ Fernando Marías, *op.cit.*, p.96. 当該箇所は Vasari-Giunti, III, p. 7.; Vasari-Milanesi, I, p. 28.

¹¹ *Ibid.* 当該箇所は Vasari-Giunti, III, p. 9.; Vasari-Milanesi, I, pp. 31-32.

¹² *Ibid.* 当該箇所は Vasari-Giunti, III, p. 9.; Vasari-Milanesi, I, p. 33.

¹³ Sarah B. McHam, *op.cit.*, p. 324, (15).

¹⁴ Fernando Marías, *op.cit.*, p. 96. 当該箇所は Vasari-Giunti, III, p. 9.; Vasari-Milanesi, I, p. 34.

¹⁵ 「フラ・バルトロメオ伝」において、サヴォナローラの失脚後僧籍に入ったバルトロメオは、修道院にいて絵筆をとるようにと懇願されたにもかかわらず、政務や規律に関わる職務以外のことには一切眼をくれず、もう絵は描かないと決めてからすでに4年以上が経っていた。しかしついに聖バルナルドゥスの絵の制作に取りかかると記された箇所に、エル・グレコは次のような欄外註を記している。「フィレンツェの画家は、一本の線を引くこともなく一日を過ごしてはならぬというギリシア人の言葉とは正反対に（振舞ったのだ）。」[Pintor fiorentino que (...) al roves de lo de letr (...) griego que no abia de pasae dia sinlin [ea]] 当該箇所は Vasari-Giunti, II, p. 37; Vasari-Milanesi, IV, pp. 182-184. (「フラ・バルトロメオ伝」石澤靖典訳、前掲書、第3巻、p. 101.) なお、プリニウスを典拠とする、一本の線を引くこともなく過ごすことは1日たりとてないというアペレスの逸話は、S.B. マッカムによれば、アルベルティ、ピーノ、ドルチェ、ロマッツォらの芸術論には登場していない。Sarah B. McHam, *op.cit.*, p. 323, (6).

¹⁶ Fernando Marías, *op.cit.*, p. 96. 当該箇所は Vasari-Giunti, III, p. 9.; Vasari-Milanesi, I, p. 34.

許されたというエピソード。

[8] さらにアペレスは大王の愛人カンパスペに恋すると彼女を下賜されたという有名な逸話にも、下線を引くことを忘れていない¹⁷。

プリニウスを典拠とするこれら [6] [7] [8] のエピソードは、絵画芸術の高貴性や「知識人のための絵画」を唱道するため、古代の重要な範例として上記の [1] と同様にアルベルティ、ピーノ、ドルチェ、ボルギーニ、ロマッツォらによる芸術論に常套的に引用されていた¹⁸。したがってすでに述べたように、エル・グレコにとってこれらの逸話もアドリアーニ書簡が初見だったわけではなく、その幾つかを通じておそらくは既知であって、美術批評に占めるこれらの逸話の重要性を再確認するという程度の意味を担っていたということかもしれない。

[9] 次は、エフェソスのためにアレクサンドロス大王の肖像を、ゼウスの雷電を携えた姿で描いたアペレスは、金貨で報酬を支払われたが、その金貨は枚数を数えてでなく秤で計って与えられた、という箇所である¹⁹。エル・グレコの関心は、権力者が美術家のきわめて優れた才能に対して、深い理解ばかりでなく、金貨を重量で計って与えるほどに潤沢な報酬で報いたという点にあったとみえる。貴顕による美術家への潤沢な金銭による報酬を記したエピソードは実際『列伝』に少なくないが、彼はこのほかにもヴァザーリをめぐる2箇所に着目しており、このテーマに関心を抱いていたことをさらに裏付けてくれる²⁰。

[10] あるときアペレスは他の画家たちと競って馬の絵を描いた。競争相手たちに加勢する人びとによる不公正な裁定を懼れて、アペレスは馬たちに審判させるよう要求、馬たちは彼の絵に嘶いてその技量が証明された、というエピソードが次の下線部である²¹。

画家による対象再現の迫真的な描写力が、人間の眼ではなく、他の生き物たちによって証明されるという物語パターンは、プリニウスに数多く、このアペレスをめぐる逸話に先行し

¹⁷ *Ibid.* 当該箇所は Vasari-Giunti, III, p. 9.; Vasari-Milanesi, I, p. 35.

¹⁸ Sarah B. McHam, *op.cit.*, pp. 322-324, (1) (7) (10). なおきわめて著名な [7] [8] の逸話はエル・グレコが読んでいたとみられるカスティリオーネ『廷臣論』にも登場している。

¹⁹ Fernando Marías, *op.cit.*, p. 96. 当該箇所は Vasari-Giunti, III, p.9.; Vasari-Milanesi, I, p. 35.

²⁰ 「ヴァザーリ伝」で、1536年カール5世のフィレンツェ入城に際して凱旋門アーチのアップラートを設置完成したところ、大公は所定の400スクードに加えて、約束の期日までに完成させられなかった者達から取り上げた300スクードをさらにヴァザーリに与えた、という箇所に下線を残している。Fernando Marías *op.cit.*, p.80. 当該箇所は Vasari-Giunti, III, p. 985.; Vasari-Milanesi, VII, p. 659.

もう一箇所は第3部序論の終末付近の一節で、ふんだんな報酬と幸福に促されて高名な美術家たちは優れた作品を制作したが、この我々の時代に正当な褒賞 (la giusta remunerazione) があるならば、疑いなく古代の芸術家たちが作り出した以上に偉大な作品が生み出されることだろう、とヴァザーリの記した箇所に、エル・グレコは辛辣な皮肉を込めて次の註釈を付している。「我々の時代に属する者のうちで彼はもっとも裕福であった、と言える (にもかかわらず)、その彼が行なった通りなのだ。[como yzo el que no pudo decir que no sia stato el mas rico de quantos a bido en Nuestra era]」 Fernando Marías, *op.cit.*, pp. 80, 126. 当該箇所は Vasari-Giunti, II, Proemio.; Vasari-Milanesi, IV, pp. 14-15. (『第3部序論』、前掲書、第3巻、p. 8.)

²¹ Fernando Marías, *op.cit.*, p. 96. 当該箇所は Vasari-Giunti, III, p. 9.; Vasari-Milanesi, I, p. 37.

てゼウクシスによる有名な「ブドウの絵」と「ブドウを持つ子供の絵」などのエピソードが存在しており、これらはアドリアーニ書簡にも再録されている²²。しかしながらエル・グレコはこれらの逸話には下線を引いていない。馬による審判のエピソードに、彼がとくに関心を抱いた理由も定かでない。ライバルたちに勝利するための美術家の機略、しかも判断を人間でなく動物に委ねることで奏功するという発想の逆転に妙味を感じたということであろうか。

〔11〕 アペレスの個別作品に関する最後の下線部は、彼が新しい手法と美しい構想力で《誹謗（ラ・カルンニア）》を描いたという箇所である²³。このエピソードはプリニウスには含まれておらず、ルキアノスを出典としたアルベルティの『絵画論』に再録されており、註釈者はアルベルティを通じて既知であった可能性があるだろう²⁴。

〔12〕 アペレスをめぐるエル・グレコの最後の着目点は、彼ののちは誰も活用できなかったものだが、完成された作品の上にきわめて薄く塗布することで、絵を埃から保護し色彩を落ち着かせる効果をもつ暗褐色の色彩あるいはワニス〔un color bruno, o vernice〕を創案した、という箇所である²⁵。『列伝』では個別の美術家をめぐる技法に関する記述は数多く、註釈者はしばしばそれらの箇所でも関心の痕跡を残している。したがって、アペレスののちは誰ひとり模倣することはできなかったというこの伝説的なワニスに着目しているのも、意外というわけにはいかないだろう。

アペレスと同様、アレクサンドロス大王の宮廷芸術家であった彫刻家リュシッポスに関する記述は、プリニウスでは主要部分はアペレスに先立って扱われるが、アドリアーニ書簡ではアペレスの後、その後のギリシア画家、ローマの画家、ギリシアの塑像彫刻家を経て、それらに次ぐ鑄像彫刻家たちの箇所で登場する。

〔13〕 エル・グレコによる最初の反応は、ヴァザーリによるリュシッポスの綴り〔Lysippo〕を、欄外に〔Lysippoo〕と書き込むことであった²⁶。

〔14〕 続いてリュシッポスをめぐる2箇所に下線を引いている。そのひとつは、彼の彫像の様式的特徴を述べたもので、リュシッポスは彫像の頭髪を細部まで表わし、また従来より

²² Vasari-Milanesi, I, pp.27-28.

²³ Fernando Marías, *op.cit.*, p. 96. 当該箇所は Vasari-Giunti, III, p. 9.; Vasari-Milanesi, I, pp. 37-38.

²⁴ アルベルティ『絵画論』三輪福松訳、昭和57年、中央公論美術出版、p. 64.

²⁵ *Ibid.* Vasari-Giunti, III, p. 9.; Vasari-Milanesi, I, p. 38.

²⁶ Fernando Marías, *op.cit.*, pp. 96, 129. Vasari-Giunti, III, p. 25.; Vasari-Milanesi, I, p. 62. マリーアスはこの箇所について、ヴァザーリによる綴り〔Lyssippo〕に対し、エル・グレコは正しいと思えた綴り〔Lysippo〕を書き込んだと論じている。しかし実際のジュンティ版原本を確認すると〔Lysippo〕であるので、マリーアスの解釈には矛盾がある。グレコの実際の欄外表記〔Lysippoo〕はヴァザーリを訂正するためというより、むしろジュンティ版そのままに欄外に書き出そうとした（インデックスを意図していたかも知れない）その際に、筆の滑りが生じた可能性もおそらく排除されないだろう。

も頭部を小さくし身体をほっそりと見せる素晴らしいプロポーションで表現、過去の美術家たちは人物像を現実どおりあるがまま制作したのに対して、自分は見えるとおりに制作するのだとつねづね語っていた、という一節である²⁷。

無論、ここに記されているプロポーションにせよ、後半部分の、ありのままの客観的現実に対して芸術家自身の眼の判断、芸術の自由性を優位におく芸術観の表明にせよ、これらはエル・グレコ自身の美学によく合致しており、下線は彼の共感を物語ると言えるかもしれない²⁸。

[15] もうひとつは、リュシッポスの息子たちの中でもっとも有能な彫刻家だったエウティクラテスについて、彼は父親の様式のもつ心地よさよりも、堅固さや厳粛さの方を好みそれに打ち込んだ、という箇所の下線を引いている²⁹。父親と息子が同業でありながら、その好尚あるいは目指す目標が異なるという内容に、註釈者は関心を抱いたのであろうか。

アドリアーニの記述は、この後プラクシテレス、カラミス、プリユアクシス、クレシラス、エウフラノルの諸作品に触れ、次いでミュロンの弟子ブティエオ [Butieo] に及んだところで註釈者の下線が再び登場する。

[16] ミュロンの弟子ブティエオ [Butieo] は、火に息を吹きつけている少年を制作した、それは師匠に相応するほど美しいものだった、という箇所である³⁰。エル・グレコは、この『列伝』註釈を行なうはるか以前の1570年代初頭、ローマで《炭火を吹きながら蠟燭に火を灯す少年》(ナポリ、カポディモンテ美術館)を描いている。それが古代作品のエクフラシスであった可能性は高い。この下線部には、このような彼自身の過去の作品制作の契機、記憶に照らした古代の個別作品への関心が露呈しているのであろう³¹。

²⁷ *Ibid.* Vasari-Giunti, III, p. 25.; Vasari-Milanesi, I, pp. 63-64.

²⁸ この有名な一節は、ロマッツォも『絵画論』(1584年)および『絵画の殿堂のアイデア』(1590年)で再録しているが、「ミケランジェロ伝」でヴァザーリが記したミケランジェロの人体造形の9から12等身にもおよぶプロポーションと「眼の判断」の美学はこれに近接しており、エル・グレコはこの箇所にも着目して「比類がない [sin comparacion]」と称賛を表明している。Fernando Marías, *op. cit.*, p. 131. 無論、スペイン移住前後から最晩年に至るまでこのようなプロポーションの人体造形は彼の作品に広く見て取れるのは言うまでもない。以下も参照。リオネロ・ヴァントゥーリ『美術批評史』辻茂訳、1971年、みすず書房、p. 43.

²⁹ Fernando Marías, *op. cit.*, p. 96. Vasari-Giunti, III, p. 25.; Vasari-Milanesi, I, p. 64.

³⁰ *Ibid.* Vasari-Giunti, III, p. 26.; Vasari-Milanesi, I, p. 67. アドリアーニ書簡はこれに続いて、同画家が「アルゴナテウスの人々 [gli Argonauti]」「ガニユメデスを誘拐する鷲 [una aquila, la quale, avendo rapito Ganimede]」を制作したと記している。これらの内容は、プリニウス (Plinio, *NH*, 34-79.) に記された「ミュロンの弟子であったリュキオス」の作品と合致する。よってブティエオ [Butieo] は、リュキオスの転写の誤りであろう。(『プリニウスの博物誌』中野定雄・中野里美・中野美代訳、昭和61年、雄山閣出版、III, p. 1383.)

³¹ アドリアーニ書簡は、プリニウスを典拠に画家アンティフィルスによる火に息を吹きかけている少年の絵、また画家フィリクスによる同主題の絵も再録している。しかしこれらの箇所グレコは下線を残していないことも注目される。Vasari-Milanesi, I, pp. 48-49. この問題については、拙論「エル・グレコと古代 (I) —— 初期作品を中心に」『東北学院大学教養学部論集』第155号 (平成22年3月)、

〔17〕 註釈者によるアドリアーニ書簡最後の下線部は、ベルヴェデーレの《ラオコーン群像》の作者たち、ロードス出身のアゲサンドロス、ポリュドロス、アテノドロスの名前の記された箇所である³²。当代に再発見された伝説的なこの古代彫刻は、これらの彫刻家名を記したプリニウスの記述と同一視された。エル・グレコはこの名高い彫像の作者名を、記憶に刻もうとの思いで下線を引いたのかもしれない。

もっとも《ラオコーン群像》(図2)に対する彼の関心は、この下線部やすでに指摘した第3部序論の一節のほか、さらに『列伝』第3部の「ヤーコポ・サンソヴィーノ伝」にも残されている。ブラマンテはサンソヴィーノに大きな蠟製のラオコーン像の制作を依頼したのち、ブロンズ像に鑄造するため、ザッケーリア・ザッキ・ダ・ヴォルテッラ、スペイン人アロンソ・ベルゲッタ、ヴェッキオ・ダ・ボローニャといった他の彫刻家たちにも雛形を作らせたという一節である。彼はこの競作の参加者の一人として名の挙げたスペイン人に着目し、名前に下線を残しているのである³³。

アロンソ・ベルゲッタことアロンソ・ベルゲータは、『列伝』に言及されている数少ないスペイン人美術家の一人で、帰国後はトレドで活躍した。《ラオコーン群像》の模作の作成にこのスペイン人美術家が関与したとの記述は、さすがに看過し得なかったということなのだろう。

このように『列伝』に《ラオコーン群像》をめぐる残されたエル・グレコの反応は、この古代作品に対するきわめて強い関心を裏書きしている。それは上記第3部序論の一節に対する彼の反応に見た通り、16世紀の美術家たちが15世紀美術の様式上の欠落を克服し、いっそう優れたものを成就するための芸術的原動力であったという認識に関わるのかもしれない。またプリニウスはこの群像をどのような絵画、彫刻、その他いかなるものにも勝ると称賛し、アドリアーニはそれを書簡にそのまま再録してもいる。この群像が古代美術のなかでも随一であるという古代人の評価は、16世紀の美術家たちの共感のもと、『列伝』においてアドリアーニを介して当代に更新されていると言えるわけであり、この点においても、最晩年の彼がこの群像をパラフレーズした作品を残しているのは興味深いことである(図3)³⁴。

pp. 1-20.

³² Fernando Marías, *op. cit.*, p. 96. Vasari-Giunti, III, p. 6.; Vasari-Milanesi, I, p. 82.

³³ Fernando Marías, *op. cit.*, p. 117. Vasari-Giunti, III, p. 823.; Vasari-Milanesi, VII, p. 489. (「ヤーコポ・サンソヴィーノ伝」越川・森田訳、『ヴァザーリ ルネサンス彫刻家・建築家列伝』, 1989年, 白水社, p. 299.) イタリアにおけるアロンソ・ベルゲータについては以下を参照。Gonzalo R. Michaus, *Pedro Rubiales, Gaspar Becerra y Los Pintores españoles en Roma, 1527-1600*, Madrid, 2007, pp. 17-21.

³⁴ ラオコーン群像の同時代の評価と解釈については以下を参照。サルヴァトーレ・セッティス『ラオコーン 名声と様式』芳賀京子・日向太郎訳, 三元社, 2006年。Sarah B. McHam, *op. cit.*, pp. 215-223. エル・グレコの作品《ラオコーン》については以下を参照のこと。松原典子「エル・グレコの芸術理論と《ラオコーン》」『美術史研究』第34冊, 1995年, pp. 55-76. 岡田裕成「エル・グレコ《ラオコーン》秘められた異邦人のメッセージ」、『名画への旅 第11巻バロックの闇と光』所収, 講談社, 1993年,

とはいえ、実のところ、エル・グレコはヴァザーリの称賛した古代作品のすべてを手放しで評価しているわけではない。最後にあげるのは「ミケランジェロ伝」の一節における批判的なコメントである。

その一節とは、ヴァザーリによれば、古代人によって刻まれたヘラクレス像で、丘の上で雄牛の角を捕まえており、丘の周りには牧人、ニンフ、動物などさまざまな像を備え、並はずれた美しさを持つ作品であり、ミケランジェロはそれをローマ、ファルネーゼ宮の第2中庭に設置し修復して噴水に仕立てるよう提案したという一節である³⁵。この古代彫刻は今日《ファルネーゼの雄牛》(図4)と通称されているものだが、註釈者はこれをまったく評価せず、欄外に以下の書き込みを行なっている。

「このことから分かるのは、ミケランジェロへの熱中ぶりだけであり、それが彼に出鱈目を言わせているのだ³⁶。

エル・グレコは1570年末から72年秋頃までローマのファルネーゼ宮に寄寓していたことから、これを実見していたに相違ない。修復史を勘案すると、彼が眼にしたのはおそらく現状とは異なるものと思われるが、しかし「並はずれた美しさの作品 [opera certo di straordinaria bellezza]」というヴァザーリの評価に与することは、到底できないというのが彼の率直な意見であったと言える。

興味深いことに、ミケランジェロの名に結び付けられたこの群像は、ヴァザーリやフェデリコ・ズッカロの高評価に後押しされてその後なお高い名声を享受し、17世紀半ばにはパリの宮廷の関心を引くまでとなった。しかしながら1665年6月8日付けのシャントルーの日記に見るベルニーニや教皇大使の会話では、この群像の真価は「考慮に値するのはその規模の大きさと、ひとつの石からすべて掘り出されている像の数以外にはない」と酷評されている³⁷。このような評価の歴史の変遷を考慮するなら、同時代のオピニオン・リーダーに無批判に同調せずにエル・グレコの示した自らの審美眼への確信や自由さは、むしろじゅうぶん特筆に値するものと言えよう。

pp. 16-35.

³⁵ Fernando Marías, *op.cit.*, pp. 108-109. Vasari-Giunti, III, p. 753.; Vasari-Milanesi, VII, 224. (「ミケランジェロ伝」田中英道・森雅彦訳『ヴァザーリ ルネサンス画人伝』所収、白水社、1982年、p. 279.)

³⁶ トランスクリプションは“desto se be que no es solo la pa (...) de Micael A [ngelo] en azerle de desperates”. Fernando Marías, *op.cit.*, p. 131.

³⁷ Chantelou, *Journal du Voyage du Cavalier Bernin en France*, ed., Milovan Stanić, Paris, 2001, p. 53. ハスケル/ベニーニによれば、ヴァザーリはこの群像の主題をヘラクレスの難業と解釈し、その後1580年代までにプリニウス (NH, 36: 33-34) に記されたロードス島のアポロニウスとタウリスクス作品《ディルケの懲罰》と同一視された。フェデリコ・ズッカロはこれを「ディルケ」の物語と関連付けて記しており、ラオコーンとともに古代彫刻の頂点を極めた傑作と絶賛している。Federico Zuccaro, *Scritti d'Arte*, ed. by Detlef Heikamp, Firenze, 1961, pp. 259-260. Haskell and Penny, *Taste and the Antique*, 1981, pp. 11-12, 165-67.

第2章 中世における父祖たちの活躍とビザンティン様式をめぐって

エル・グレコが中世におけるギリシア人美術家の活動あるいはマニエラ・グレカ（ギリシア様式の謂。ビザンティン様式を指す）に関連する評釈を残しているのは、『列伝』第1部のみである。まず第1部序論（「列伝の序」）で、ヴェネツィアとピサにおけるギリシア人美術家の活動に着目して2箇所の下線を引いている。加えて「チマブーエ伝」に短いコメントを1箇所、さらに「アーニョロ・ガッディ伝」にいくぶん長い興味深いコメントを1箇所付している。

1) イタリアにおけるギリシア人建築家と「チマブーエ伝」の註釈

第1部序論における最初の下線は、ヴァザーリがヴェネツィアのサン・マルコ大聖堂の再建について述べ、ドメニコ・セルボが統領であった時代、すなわちキリスト暦973年にギリシア人建築家の設計によるギリシア様式で再建された、という箇所である³⁸。

次いで、ピサの大聖堂の造営が行われた、それはドゥルキオン出身のギリシア人ブスケットという当時としてはきわめて稀な建築家のオーダーと設計によるものであった、と記された箇所に下線が引かれている³⁹。ヴァザーリの絶賛するピサの大聖堂は、無論ロマネスク様式によるものであるが、エル・グレコはこれらイタリアの著名な大建築に関わった父祖たち、その活躍に矜持を感じながらペンを走らせたのかもしれない。

「チマブーエ伝」におけるエル・グレコの註釈は、伝記冒頭部分の次の箇所に関連している。チマブーエがサンタ・マリア・ノヴェラ修道院で読み書きを学んでいたころ、ゴンディ家礼拝堂（サン・ルカ礼拝堂）の装飾のため、「古代ギリシアの優れた様式ではなく、当時の拙い様式 [non nella buona maniera greca antica, ma in quella goffa moderna di quei tempi]」すなわちビザンティン様式で制作するギリシア人画家たちが招聘されていた。この礼拝堂は聖堂の主礼拝堂の横にあり、そのヴォールトと表側の壁画は、今日でも見られるように、時の経過でひどく傷んでいる。彼らがそれらを制作するのを眺め、またその手ほどきを受けてチマブーエは絵画技術を学んでいった、とヴァザーリの記した一節である⁴⁰。この一節は、古代の終焉以来死滅していた美術の再生がいよいよチマブーエとともに始動するというヴァザーリの歴史観を、『列伝』で明確に具現するため記述された重要な箇所に一致している。したがっ

³⁸ Fernando Marías, *op. cit.*, p. 75. Vasari-Giunti, I, p. 77.; Vasari-Milanesi, I, pp. 235-36. (「第1部序論」, 前掲書, 第1巻, p. 112.)

³⁹ *Ibid.* Vasari-Giunti, I, p. 77.; Vasari-Milanesi, I, p. 237. (邦訳は同上)

⁴⁰ Vasari-Giunti, I, p. 83.; Vasari-Milanesi, I, pp. 248-9. (「チマブーエ伝」高梨光正訳, 前掲書, p. 123.)

て、まずここに註釈者の着目している事実そのものが、たいへん意義深いと思われる。そして彼がそこに『列伝』の作者に対する幾分かの皮肉を込めながら付したコメントは、以下の通りである。

「どうしてそれを混同できたのだろう」⁴¹。

註釈の意味は必ずしも明確でない。だが、ヴァザーリの叙述に対する異論ないしは事実誤認を指摘しているのは間違いのないと思われる。フェルナンド・マリーアスはこの註釈について、エル・グレコはチマブーエ芸術の起源をめぐって否定的なコメントを行なったのだと論じている⁴²。ここでは、16世紀の半ば過ぎにヴァザーリやエル・グレコがゴンディ家礼拝堂で見た装飾とはどのようなものであったか、とくにヴァザーリの言うように「今日でも見られるように、時の経過でひどく傷んでいる」からには、それをギリシア人の手になるビザンティン様式と判別可能であったのかどうかは鍵となるように思われるが、それを正確に知ることは難しい⁴³。いずれにしても、ヴァザーリは真のビザンティン様式を知らないののではないか、というエル・グレコの疑念は、次の註釈にはっきりと表明されているように思われる。

2) ジョット vs ビザンティン様式

それは「アーニョロ・ガッディ伝」で、ヴァザーリがアーニョロの弟子の一人チェンニーノ・チェンニーニの著書の一節を引用しつつ、ジョット芸術の意義を述べたすこぶる有名な箇所である⁴⁴。「ジョットこそ、絵画の技をギリシア風からラテン風に翻訳した」と記した『絵画術の書』の著者チェンニーニ。その彼にとって、ジョットは絵画芸術をギリシア風すなわちちぎこちないビザンティン様式から、美しく、明快で、喜ばしいものへとつくりかえ、的確な判断力と多少の理性を持つ人すべてに好意的に理解され認められるようにしたと思えた、

⁴¹ トランスクリプションは“como lo pudo conf (...)”。ここではフェルナンド・マリーアスによる解釈 [cómo lo pudo confundir] に依拠した。Fernando Marías, *op.cit.*, pp. 76, 125. 但し、動詞を [confirmar] と捉えることも可能であり、その場合は「どのようにして彼はそれを確認できたのだろうか」の謂となる。この場合、評釈はおよそ300年前の出来事を史実のように語るヴァザーリへの疑念を表したと解釈しうるかもしれない。

⁴² *Ibid.*

⁴³ サンタ・マリア・ノヴェッラ修道院聖堂の主礼拝堂（トルナブオーニ礼拝堂）の向かって左横に位置するゴンディ礼拝堂は、今日プルネレスキの著名な木彫像《磔刑のキリスト》を擁する礼拝堂としてよく知られている。1264年にイル・グレコと通称されたラニエリ師によって聖ルカ礼拝堂として建造され、1319年以降スカリア家に委ねられた。1503年以降ゴンディ家の手に渡り、内部はジュリアーノ・ダ・サンガッロによって刷新された。現在、礼拝堂では1932年に発見・修復され、2009年以降再び修復作業が行われ完了したヴォールトの壁画断片が公開されている。《四福音書記者》の一部がかろうじて識別できるに過ぎないものの、1270～80年頃のフィレンツェ派の手になるものと今日見なされている（図5）。想像の域を出るものではないが、16世紀半ばに彼らの見たものが、もしこの壁画であったとすれば、上記の註釈はヴァザーリの事実誤認を指摘、あるいは彼の作為的な物語に眼を向けたものだったかも知れない。ビザンティン美術に対するヴァザーリの理解については以下を参照。T.S.R. Boase, *Giorgio Vasari; The Man and the Book*, Washington, 1971, pp. 73-92.

⁴⁴ Vasari-Giunti, I, p. 199.; Vasari-Milanesi, I, pp. 645-646. (「アーニョロ・ガッディ伝」, 前掲書, p. 338.)

と記された箇所である。ここに下線を施したエル・グレコは、欄外に次の註釈を書き込んでいる（図6）。

「彼の言うあのギリシア様式について本当にもし彼が精通していたのならば、彼の語る
ところではそれを別なやり方で論じたであろうものを。私が言うのは、ギリシア様式を
ジョットが行なったことと比較するなら、ジョットの行なったことはギリシア様式に比
べて単純だということであり、それはギリシア様式が創意豊かな困難さについて教えて
くれるからなのである」⁴⁵。

エル・グレコのこの一節は、短いもののひじょうに意義深い内容を多々含んでおり、それは次の4点に要約しうると思われる。

[1] ギリシア様式すなわちビザンティン様式との比較のもと、ジョット芸術の特質を、単純な、簡素なという意味で当時も使われた語 [simple]⁴⁶ で評している。

[2] エル・グレコ自身の芸術の出発点でもあったビザンティン様式を、彼は創意豊かな困難さ [dificultades ingeniosas] を教えるものと捉え、積極的な価値づけを行なっている。

[3] [2] で、ビザンティン様式を評すため使われている「困難さ」という語は、ミケランジェロ、ヴァザーリをはじめ16世紀の同時代人たちによって美術批評で繰り返し用いられた概念であり、それを躊躇なくマニエラ・グレカの特質に当てはめている。

[4] 大きな文脈において『列伝』で展開されているヴァザーリの芸術史観、その図式の根幹をなす重要な概念であると今日捉えられているもの——ジョットは拙いビザンティン様式の拘束から完全に抜け出すことができ、優れた絵画術を蘇らせた、すなわち「死せる絵画

⁴⁵ トランスクリプションは以下の通り。“Si supiera lo que es verdaderamente aquella manera griega que el di (...) de otra sorte la trataría en lo que dize digo comparan (...) la con lo que yzo Jotto que e cosa simple a comparaç (...) de lo que se ensenna # deficultades engen (...) sas en aquella”. フェルナンド・マリアスはこの一節に含まれる [dificultades engen (...) sas] について、1997年の著作で [dificultades engañosas]（「人の眼を惑わす困難さ」）と読解する解釈を提示した。Fernando Marías, *op.cit.*, pp.76,125. これに対して2008年ニコス・ハジニコラウは、当該箇所が厳密には [i] の1文字が加わった [dificultades engeni (...) sas] と記されていると公表し、むしろ [dificultades ingeniosas]（「創意豊かな困難さ」）と読解するのが適切であると指摘している。N.Hadjinicolaou, *La defense del Arte Bizantino por El Greco: Notas sobre una paradoja, Archivo español de arte*, Julio- Septiembre, 2008, pp. 217-232. esp., 221-222. 確かに、エル・グレコはウィトルウィウス『建築十書』への書き込みの中で、色彩の模倣はもつとも困難であり、それは芸術の精通者の眼さえも惑わすと論じる際に [engañar] の語を用いており、この語をイリュージョン効果を生む、優れた自然再現を評する語として用いている。問題の箇所がビザンティン様式の特徴を指していることを考慮するなら、ハジニコラウによる [dificultades ingeniosas]（「創意豊かな困難さ」）との読解は理解しやすい。なおマリアスも近年の論考ではこの部分を [dificultades ingeniosas o engañosas] と記述し、ハジニコラウの指摘に同調を示唆している。Fernando Marías, *Cuestionando un Mito: Leyendo documentos y escritos de El Greco*, 『エル・グレコ再考—1541-2014年：研究の現状と諸問題』所収, pp. 7-22, esp.16. (フェルナンド・マリアス「エル・グレコ神話を問う：画家の資料と著述を解説しながら」久米順子・大高保二郎訳、『美術史研究』, 第51号, 平成25年, 12月, pp. 155-185, esp. 173.)

⁴⁶ Sebastián de Covarrubias Orozco, *Tesoro de la Lengua Castellana o Española*, (Madrid, 1611), ed. de 1995, p. 896.

を蘇らせた画家」であり、彼によって「美術の再生」は遂げられたという概念⁴⁷——は、上記の註釈に即するならば、エル・グレコの同調しうるものでなかった可能性が考えられる。

そこでこれらの諸点に考察を加えるに先立って、この註釈の書き込まれた「アーニョロ・ガッディ伝」より前にヴァザーリの記している、ラテン風の芸術の再生者たる「ジョット伝」において、エル・グレコがどのような反応を残しているかを一瞥しておきたい。

「ジョット伝」に彼はコメントをまったく付していないとはいえ、数箇所を下線を引いている。ヴァザーリは伝記の冒頭部で、画家の誕生とチマブーエへの弟子入りの経緯に続いて、「あの拙いギリシア様式の拘束から完全に抜け出すことができ…現代的で優れた絵画の技術を蘇らせた」⁴⁸と、すでに上記〔4〕に関わる論述を行なっているものの、彼はここにとくに関心の痕跡を残してはいない。引き続きジョットの没するまでのさまざまな活動と作品の記述にも、同様のいささか無関心な態度を保っている。このように、ジョット作品への実質的な関心は何えないものの、しかしこれは『列伝』第1部に含まれる他の美術家たちの作品に対する彼の態度と、とくに異なるというわけではない。

むしろ興味深いのは、エル・グレコはジョットの死について記された直後の箇所、ダンテはもちろんペトラルカもジョットの人柄と作品に多大な敬意を払っていたとする一節から、ペトラルカの言葉の引用部分に下線を引いていることである⁴⁹。さらにもう一箇所、少し先のところで、ジョットは才気煥発で愛想がよく、ひじょうに機知に富んだ冗談を言う人であったとする一節から、ポッカッチョとサケッティがたくさん逸話を書き残しているという記述に続き、サケッティからの引用、すなわち身分卑しい男がジョットに盾に絵を描くよう依頼した逸話にまで下線を引いている⁵⁰。

これらの下線部が浮彫にするのは、註釈者エル・グレコの関心が、ダンテ、ペトラルカ、ポッカッチョ、サケッティという当代随一の文人、知識人から讃えられたジョットという美術家像に向けられていることだ。それは下線の当該箇所に引用されているペトラルカの言葉、ジョットの作品を評して、無知な者には理解されないが、芸術の精通者が驚嘆する作品であるという一節に集約されている、と言えるかもしれない。言い換えるなら「知識人のための絵画」というこの概念こそ、(ヴァザーリと同様に)エル・グレコの関心の的となっている

⁴⁷ ルネサンスにおけるジョット観の形成については以下の文献を参照。石鍋真澄「ジョット神話の形成——ダンテからヴァザーリまでのジョット関係の文献に関する一考察——」、『美学』、1978年夏号(113)、pp. 24-40、同秋号(114)、pp. 41-52。P. L. Rubin, *op. cit.*, pp. 287-320.

⁴⁸ 当該箇所は Vasari-Milanesi, I, p. 372. (「ジョット伝」, 前掲書, p. 190.)

⁴⁹ Fernando Mariás, *op. cit.*, p. 76. Vasari-Giunti, I, p. 129.; Vasari-Milanesi, I, pp. 401-402. (前掲書, p. 204.)

⁵⁰ *Ibid.* Vasari-Giunti, I, pp. 131-132.; Vasari-Milanesi, I, pp. 406-407. (前掲書, pp. 205-206.)

ように見えるのである⁵¹。

こうしたことを意識しつつ、ふたたび上記4点の要約に立ち戻って検討を加えてみよう。

まず上記〔1〕のジョット芸術を単純 [simple] であると評した点について。「単純な」あるいは「簡素な」という謂のこの形容詞が、註釈者にとってどういうものであったか、それを考える手掛かりは、この語を含む彼自身の記した他の評釈にあると思われる。

I) ひとつは「ミケランジェロ伝」のサン・ピエトロ聖堂の建造に関する一節で、サン・ピエトロを讃えてキリスト教国、いや全世界でもこれほど装飾豊かで壮大な建造物は他にない、とヴァザーリの記した箇所へのコメントである。

「それはないし、また（将来）あることもないだろう。これほどの装飾と創意があったなどとは（考えられない）。というも、これに比較すると、古代人の建築は単純なものの [cosa simple] だったからである」⁵²。

II) 『建築十書』「第5書」第8章で、ギリシア式テアトロとラテン式テアトロの作図法を論じた箇所へ註釈者の記したコメントの一部にも含まれている。

「単純な画家 [yl simple Pintor] はただ幾何学だけを価値あるものとするのであり、（単純な）建築家は数学（だけ）をそうするのである」⁵³。

III) 同じく『建築十書』「第7書」第7章では、古代建築に匹敵するような当代建築はないとするバルバロの註釈を批判しつつ、エル・グレコはふたたびサン・ピエトロのバシリカを例に次のようにコメントしている。

「サン・ピエトロ聖堂は非常に多様性にあふれ、しかもとても斬新であって、古代人たちのあの単純さ [sinplizidad] とはまったく無縁だ」⁵⁴。

上記3例に共通するのは、いずれも古代建築の特質を、当代建築との比較のもとで捉えている点であると言えよう。言い換えるなら、当代建築との比較のもとでこそ、とくに古代建築をこの語で形容するに相応しい典型例と彼は捉えていたようだ。加えて、上記II)の「単

⁵¹ エル・グレコはジョット作品をよく見知っていたと考えられる。パドヴァあるいはアッシジに赴いた可能性について、目下のところ彼の註釈から裏付けることは出来ないが、しかし少なくとも、フランチェスコ・サルヴィアーティの《十字架降架》を実見したと推定しうるサンタ・クロチェ聖堂のフィレンツェ、その滞在時には聖堂内のジョット作品に接しただろう。

⁵² “ne le ay ne se halla de aver (...) que le haya habido tan (...) de ornamenti e invenc (iones) porque la de los antigos era cosa simple para con esta”. Fernando Marías, *op.cit.*, p.131. 該当箇所は Vasari-Giunti, III, p. 765.; Vasari-Milanesi, VII, p. 249. (「ミケランジェロ伝」, 前掲書, p. 299.)

⁵³ “yl simple Pintor de ser solo la Geometria se aprezca, l’Architetto de ser Mathematico”. Fernando Marías/ Agustín Bustamante García, *op.cit.*, pp. 146-147, 238-239.

⁵⁴ “el templo de San Pieto tan vario e tan nuevo e tan alieno de quella sinplizidad -de figura -de los Antigos”. Fernando Marías/Agustín Bustamante García, *op.cit.*, pp. 151-152, 239-240.

純な画家 [y] simple Pintor] はただ幾何学だけを価値あるものとする」の一節は、透視図法に心酔した15世紀の画家たちを示唆しているものかもしれない。

したがってこれらを勘案するなら、ジョット芸術は、彼にあっては当代美術（絵画）との比較のもと、古代建築に相当する特質をもつものと捉えられていたとみなしうるように思われる。そして上記の3事例に即して考えるなら、「単純である」とは、具体的には、豊かな装飾性や創意を欠き、多元的な表現の論理に支えられることもなく、多様性や斬新さに乏しいという含意をもつ、と言えそうである。

無論、エル・グレコはビザンティン様式との比較のもとでジョット芸術を語ったのであるから、一見、ここに矛盾を孕んでいるようにみえるかもしれない。しかし彼はビザンティン様式を「創意豊かな困難さ [dificultades ingeniosas] を教える」と評して、16世紀の同時代美術家たちの重視した「困難さ」という後期ルネサンスの芸術論的概念でその特質を捉え、ビザンティン様式の当代イタリア美術との親近性あるいは現代性そのものを意図して強調している。確かに、当代に現役画家として活動のさなかにあり、しかもビザンティン様式を現に己が芸術の出発点としている註釈者が、ビザンティン様式を拙い過去の遺物などではなく、現在と不可分のものと捉えていたとしても何ら不思議ではあるまい。したがって、このように考えるならば、彼はジョット芸術を当代絵画との比較のもとに、上記のような含意をもって「単純である」と評しているのも理解し得ると思われるのである⁵⁵。

上記の要約〔2〕と〔3〕をめぐっては、同一主題を扱ったジョット作品と比較しつつ註釈者自身によるポスト・ビザンティンのアイコン画の考察を試みることで、その意味合いを吟味してみたい。

一方は、「ジョット伝」においてヴァザーリの言及しているジョット作品《聖母の御眠り》(図7)である。ヴァザーリは『列伝』第2版すなわちジュンティ版において、第1版のトレンティーノ版の出版時にはフィレンツェ、オニサンティ聖堂の翼廊にあったと記し、また

⁵⁵ たとえば16世紀同時代美術家のもっとも重視した「優美 [Grazia]」は、ルネサンスの言語体系において、「多様性 [Varieta]」と「装飾性 [Ornato]」の産物と捉えられていた。マイケル・バクサンドール『ルネサンス絵画の社会史』篠塚・池上・石原・豊泉訳、平凡社、1989年、第3章「絵画とカテゴリー」、pp. 188-263, esp. 226. (Michael Baxandall, *Paintings and Experience in Fifteenth Century Italy; A Primer in the Social History of Pictorial Style*, Oxford, 1988.) またピーター・バークによる「15, 16世紀の絵画・彫刻・建築を称賛する語彙を分析すると、趣味が自然なものから想像的なものへ、単純で控え目なものから複雑で困難かつ壮麗なものへ変化してゆくのがわかる」という趣味変遷の総括も重要。したがってエル・グレコはジョット芸術を実質的にビザンティン様式と比較しているのではなく、当代イタリア絵画と比較して「単純」と形容したと思われる。ピーター・バーク『イタリア・ルネサンスの文化と社会』森田義之・柴野均訳、岩波書店、1992年、pp. 227-241, esp. p. 241. (Peter Burke, *The Italian Renaissance; Culture and Society in Italy*, Princeton, 1986.)

ミケランジェロにこれほど真に迫った表現は不可能であろうと絶賛されたと述べている⁵⁶。今日、弟子達の関与が指摘されているとはいえ、ジョット様式の基本的特質をここにじゅうぶん見てとることは可能である。それは荘厳とも言える静寂感の中で、人間的な感情と心理の厳しい抑制的な表現に加え、主題の核心に焦点を据えて構築された簡潔な構図や、明快で現実的な空間把握、さらに堅固で触覚的な量感あふれる人体と事物の造形など、自然主義に一步踏み出した造形面のうちに、顕著な特質として表れていると言えよう。

一方、エル・グレコの同主題を扱った初期作品、すなわちビザンティン・イコンの一枚《聖母の御眠り》に着目したい(図8)。20代半ば頃の制作とみられるこのイコンは、聖書釈義の複雑で巧緻な視覚表現と言えるもので、それゆえに神学的な観想の実践に供されるべく企図された可能性も考えられる⁵⁷。

このイコンは、画面のほぼ下半分を占める「聖母の御眠り」を主体として、上部に「聖母被昇天」を連結させた図像で、大筋では、ギリシア正教圏で広く流布した一般的な図像タイプに依拠している⁵⁸。造形的には、金地を背景に空間や対象のいわゆる自然主義的表現からは一見したところ乖離しており、複雑な構成を見せている。まず画面右背後に描き込まれた建造物の門口は、エゼキエルの幻視に基づく「東に面した聖所の外の閉ざされた門」(『エゼキエル書』44: 1-3)の引喩とみられ、聖母マリアの永遠の純潔を象徴している。また画面下方の中央に横わるマリアの遺骸を取り囲む使徒たちは、彼らが「あらゆる地の果てから」到来しゲッセマネに集まったことを想起させるべく、被昇天のマリアの左右に、ふたたび胸像で雲の上に小さく表現されている。横たわるマリアを取り囲む教父たちの幾人かは、葬礼の祈祷文を吟唱する一方、赤子の形をした聖母の魂を受けとるためにマリアの遺骸に身を屈めるキリスト像のポーズは異例なもの(通常は直立している)で、とくにパレオロゴス朝以来「冥府下り」の主題で使われたポーズによく類似しているとみなされている。一方、眩しい光に包まれたキリストの上方では2天使が、高みへと上げられ「死を超えて生きる」聖母マリアへその眼差しを向けている。

聖霊は、聖なる光の源となってイコンの中心を占め、しかも中空に浮かぶ鳩として描かれ

⁵⁶ Vasari-Milanesi, I, pp. 396-397. (前掲書, p. 202.)

⁵⁷ この作品の発見者であるビザンティン学者 G. マストロプロスによれば、このイコンはプサラ島にトルコが侵攻した際、プサラ島の聖母の御眠りを記念する修道院から、1824年のギリシア革命の際にシロス島へと移された可能性がある。本作が本来修道院に所属していた作品であった可能性は注目に値すると思われる。El Greco. *Identity and Transformation, Crete, Italy, Spain*, ed. by J. Álvarez Lopera, Milano, 1999, pp. 340-342 (by G. Mastropoulos).

⁵⁸ *Ibid.* シロス島で発見されたこのイコンについては、このほか以下を参照。M. Acheimastou-Potamianou, Domenicos Theotocopoulos: The Dormition of the Virgin, a Work of the Painter's Cretan Period, in *El Greco of Crete*, ed., N. Hadjinicolaou, Municipality of Iraklion, 1995, pp. 29-44. *The Origins of El Greco: Icon Painting in Venetian Crete*, ed. A. Drandaki, New York, 2009, p. 108. *El Greco of Crete*, Iraklion, 1990, pp. 314-315 (by M. Acheimastou-Potamianou).

ているが、これはビザンティン図像において異例なばかりでなく、聖霊がこのような形で「聖母の御眠り（＝聖母の死）」図像に登場するのは、ヨーロッパにもまったく類例がないとたびたび指摘されてきた。G. マストロプロスによれば、これはおそらくギリシア正教の聖歌学と教父のテキストにおいて、聖母マリアの死はキリストの受肉と聖霊の恩寵下における聖母マリアの驚異と関連付けられることを踏まえて、創案されている可能性がある。足元をケルビムに挟まれ小さく描かれた被昇天のマリアは、頭部に冠を頂きつつ、聖母の死と埋葬に立ち会えなかった聖トマスに腰帯を施与し、それによって「聖母の御眠り」は聖母被昇天に加えて聖母戴冠とも繋がってゆく。天使の群れと光輝に包まれて表された被昇天のマリアは、「黙示録の女」に依拠して「身に太陽をまとい、月を足の下にしている」姿を見せている。ふたたび G. マストロプロスによれば、クレタ島のポスト・ビザンティンのイコノスタシスのサイクルは、受肉に先立つ受胎告知に始まり、聖母マリアの死と被昇天で完結するが、これはギリシア正教の教父たちのテキストと聖歌学において、上記と同様、言葉の受肉にも関連付けられることに起因するという。エル・グレコのイコン《聖母の御眠り》はそれらを踏まえ、救済論的かつ終末論的な類比的諸観念を要約した驚嘆すべき作品であると、彼は結論付けている⁵⁹。

このように、彼の《聖母の御眠り》はビザンティンの典礼と神学を踏まえて織り上げられたペダンティックで錯綜した観念の織物に譬えることすらできそうである。それは、無知な者には理解されないが、しかし神学と典礼および美術表現の精通者なら驚嘆するであろう作品と言い換えられるかもしれない。その意味では、このイコンもまた「精通者ないし知識人のための絵画」の一樣相を確かに備えているとは言えまいか。

この「精通者ないし知識人のための絵画」という概念を切り口として考えるなら、彼がビザンティン様式を「創意豊かな困難さ [dificultades ingeniosas] を教える」と評して、16 世紀の同時代人たちによって美術批評で繰り返し用いられた「困難さ」という概念をここに援用しているところにも、ひとつの論理が浮かび上がってくるように思われる。

D. サマーズによれば、後期ルネサンスの著述家たちによって用いられたあらゆる称賛の言葉のなかでも、「困難さ [difficoltà/difficultà]」という語ほど重要で頻繁に登場するものはおそらく他にない⁶⁰。この概念は、しばしば「容易さ/巧妙さ [facilità]」と緊密に連携する対概念と捉えられ、かつ「さりげなさ [sprezzatura]」とも関連付けられるものだが、これに

⁵⁹ *El Greco. Identity and Transformation, Crete, Italy, Spain*, ed. by J. Álvarez Lopera, Milano, 1999 p. 341.

⁶⁰ 「困難さ [difficoltà]」が美術批評の用語として登場するのは 15 世紀末以降とみられ、D. サマーズによれば、文芸および修辞学理論から美術理論に転用された。David Summers, *Michelangelo and the Language of Art*, Princeton, 1981, pp. 177-185, 506-509. この他にも以下を参照。マイケル・バクサンドール、前掲書, pp. 243-249. ピーター・バーク、前掲書, pp. 239-241.

つについては、宮廷人の振る舞いの理想を語るカスティリオーネ『廷臣論』に記された名高い一文が雄弁に要約している。

「すべてにある種のさりげなさを見せることです。…稀なことや立派な行為には困難がつきものですが、それをいともたやすくやってのけるとなると、この上もない讃嘆の念を人の心に呼び起こすものです。…ですから気品とは、技とは見えぬ真の技と申せましょう。」⁶¹

このように「困難さ」とは、けっして誰もが達成できるわけではない「稀少さ」や「立派さ」の実現を含意していた⁶²。また D. サマーズによれば、「困難さ」は所定の芸術法則から生じる新たな芸術的挑戦の達成を正しく認識しうる鑑賞者を想定しており、たとえば短縮法は、困難な技術的課題であるばかりでなく、達成された時にはそれ自体で味わい楽しめるものであり、めざましい技術的達成とみなされる。また、判断力や思慮分別における鑑賞者の限界が、「困難さ」の別の側面を明るみにもたらし、「困難さ」の正しい認識とは、その性格においてエンプレムの正しい認識に類似するものであった⁶³。「困難さ」を攻略することは、美術家においてはときに究極の高度な芸術課題の達成であり、そこに技術的のみならず精神的な価値を内包しているのに対し、鑑賞者においては深い思慮と知力を要請するのである。とすれば、美術家と観賞者の双方において、ここには「知識人のための芸術」が含意されているとは言えないであろうか。

実際、エル・グレコは『建築十書』への註釈の中で「困難さ」の語を使って次のように書き記している。

「私をもっとも困難であるとみなすのは、色彩の模倣である。というのも、それは見せかけによって、分別ある者たち [los sabios] の眼をも欺くからである」⁶⁴。

⁶¹ Castiglione, *Il Cortegiano*, ed., Cian, Book I, Chapter 26, p. 63. (邦訳『カスティリオーネ 宮廷人』清水純一・岩倉具忠・天野恵訳注, 東海大学古典叢書, 1987年, p. 89.)

⁶² 実際にヴァザーリ自身、ミケランジェロ芸術を評して過去のすべての芸術を凌駕する究極の芸術であると述べる時、「困難さ」という語を繰り返し用いている。第3部序論の末尾では「ミケランジェロの彫像は、より堅固な基礎の上に立ち、より徹底した優美さをもち、より絶対的な完全性を備えていることが分かり、ある種の困難な表現を自らの様式で実に流暢に達成しているので [condotta con una certa difficoltà si facile nella sua maniera], 本当にこれ以上巧みなものは決して見出すことが出来ないほどである。」(「第3部序論」, 前掲書, 第3巻, p. 8.) 当該箇所は Vasari-Milanesi, IV, p. 14. また「ミケランジェロ伝」では、《最後の審判》をめぐる長い記述の後にヴァザーリはこう記している。「確かに、彼がこの時代に生まれたことで、芸術家たちはたいへんに幸運だったのである。ミケランジェロがなしとげた絵画、彫刻、建築において、考え得るあらゆる困難のヴェールが取り除けられるのが解ったからである。」(「ミケランジェロ伝」, 前掲書, p. 272.) Vasari-Milanesi, VII, p. 215.

⁶³ David Summers, *op.cit.*, esp. p. 181. J. Shearman, Maniera as Aesthetic Ideal, in *Renaissance Art*, ed. by Creighton Gilbert, New York, 1970, pp. 181-221, esp. p. 195, (43) (44).

⁶⁴ “el una que es la ymitacion de colores que tengo yo por la mayor—dificultad—pues es engañar los sabios con aparentes”. Fernando Marías/Agustín Bustamante García, *op.cit.*, p. 226.

「もっとも困難さを有する芸術は、もっとも喜ばしいであろうし、それゆえにいっそう知的である」⁶⁵。

表現上の困難な課題をもっとも多く達成した芸術は、その精通者をもっとも喜ばせることができるからこそ、いっそう知的であるという彼の言葉は、「困難さ」をめぐるこの語に「知識人のための芸術」という含意が内包されているという彼自身の理解を、端的に裏付けていると言えよう。

「創意豊かな困難さ [dificultades ingeniosas] を教える」は、確かに彼が 20 代に制作したイコン画に妥当するであろう。しかしながら彼にとって、この評言は自身の特定の作品を前提としているというより、ビザンティン様式そのものに押し広げ理解されていると考えるべきであろう。ヴァザーリは、ビザンティン様式について、たとえば第 1 部序論の末尾で「多くの絵画は、一様に大きく見開いた眼と広げた両手につま先立ちといった様式で描かれている」、「いずれも不格好で醜悪で、これ以上ひどいものを想像しえないほどに、粗野でひどい様式」と繰り返し痛罵している⁶⁶。しかしこれに対して、註釈者エル・グレコはあえて「彼の言うあのギリシア様式について本当にもし彼が精通していたのならば、彼の語るところではそれを別なやり方で論じたであろうものを」と反論しているのである。これは、エル・グレコにとってビザンティン様式とは、自然主義から大きく乖離しているという特質によって一義的に理解されるべき対象などではなく、別種の特質——たとえば上記の彼自身のイコン画が例証するような、ビザンティンの視覚文化に立脚しつつ、固有の典礼と神学を踏まえた宗教的諸観念を伝える「困難な」織物として捉えられていた、ということなのかもしれない⁶⁷。

「アーニョロ・ガッディ伝」の一節にエル・グレコの遺したジョットとビザンティン様式をめぐる評釈は、研究者たちに解釈の困難さと当惑をもたらしている。フェルナンド・マリーアスは、「単純ではあるもののジョットの新しさとの比較において、当代ビザンティン絵画の特質の幾つかを擁護している」と解釈している⁶⁸。さらに加えて近年では 1480 年頃のアンドレアス・リッツォスの作品を例に挙げ、そこに知覚の独創性と新しい空間性の獲得を読み

⁶⁵ “la Arte la que tendra mas deficultad sera el mas dileto e por consequenza mas enteletuale”. Fernando Marías/Agustín Bustamante García, *op. cit.*, p. 227.

⁶⁶ Vasari-Milanesi, I, pp. 242-243. (「第 1 部序論」, 前掲書, p. 114.)

⁶⁷ N. ハジニコラウは、ギリシア正教の聖堂に供されるべき絵画がビザンティンの典礼に合致することが極めて重要な要件であったことを、16 世紀末ヤコポ・バルマによるヴァネツィアのギリシア正教会サン・ジョルジョ聖堂モザイク画原案が退けられた事例を挙げて論じている。N. Hadjinicolaos, *op. cit.*, p. 223.

⁶⁸ Fernando Marías, *op. cit.*, p. 77.

取ろうとしている⁶⁹。一方、ニコス・ハジニコラウは、註釈者の議論を「諸芸術は時とともに連綿と継承されつつ、成長・増大してゆくことを表明している」と解釈し、また「彼自身が捨て去った絵画形式である、ヴァザーリの言う〈ぎこちないギリシア様式〉に対するエル・グレコの大胆な擁護は、主に感傷的理由（彼自身の過去の正当化）と愛国的理由（16世紀における当代ギリシア人に同一視される芸術文化の擁護）に起因していると、私には思われる」と結論付けている⁷⁰。このハジニコウラの批評は、ヴァザーリの提示した芸術的価値認識が今日ひとつの規範と化している現実をはからずも例証しているばかりでなく、まさしくヴァザーリと同時代にふたつの異なった芸術文化を現に体験している一美術家が、彼に固有な所与の環境から掬いあげた生の認識を、今日我々が再構築することの困難さを物語っているように思われる。

クレタ島からイタリアを経て、スペイン、トレドに至るエル・グレコの作品には、ときに密やかに、またときには明確にポスト・ビザンティンの視覚文化、造形や図像の慣習の記憶が刻印されている。たとえば1586-88年に彼の描いた《オルガス伯の埋葬》（図9）の構図と図像には、彼自身の作品《聖母の御眠り》の造形の記憶をはっきりと見て取ることができよう。ビザンティンの伝統は、彼の言葉の通り「創意豊かな困難さを教えてくれる」肥沃な靈感源として、1580年代後半以降、彼によってむしろ意識的に捉えられていたのかもしれない。彼の『列伝』註解は、そうした側面をも密かに示唆してくれているのではなかろうか。

【付記】 本稿は平成27年度科学研究費に関わる成果の一部である。

⁶⁹ フェルナンド・マリーアス、前掲論文、pp. 173-174.

⁷⁰ N. Hadjinicolaou, *op. cit.*, pp. 231-232.

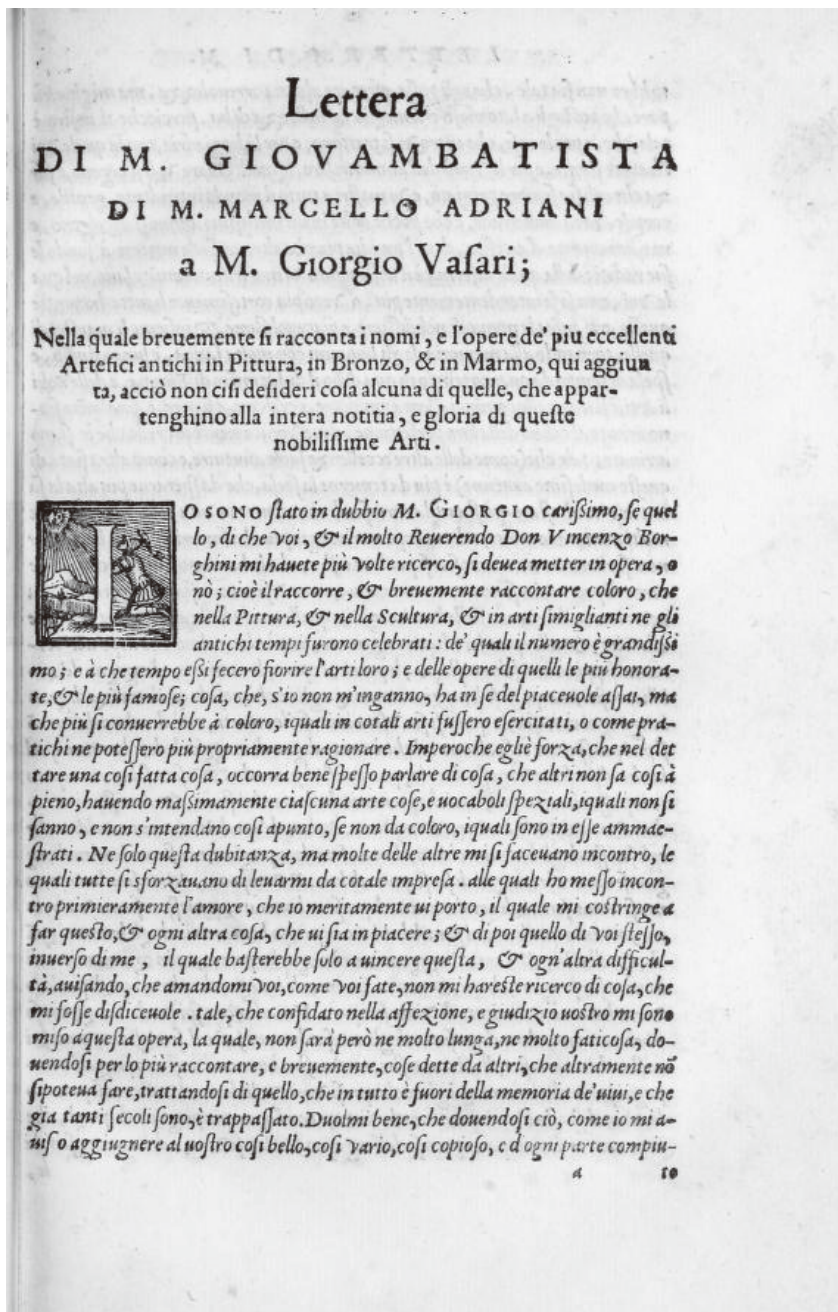


図1 ヴァザーリ『美術家列伝』第2版第3巻所収
 G.B. アドリアーニ書簡冒頭頁

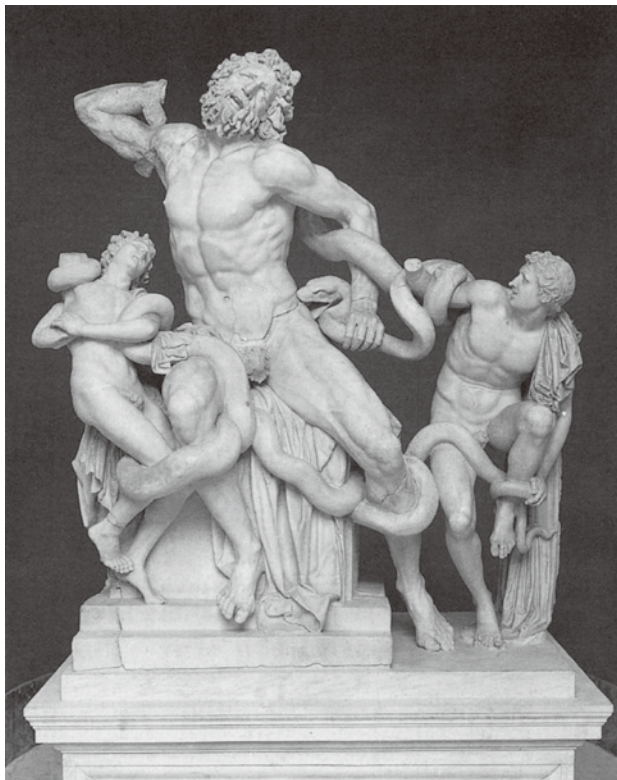


図2 《ラオコーン群像》 ローマ、ヴァティカン美術館



図3 エル・グレコ《ラオコーン》
ワシントン、ナショナル・ギャラリー



図4 《ファルネーゼの雄牛》 ナポリ，国立考古学博物館



図5 作者不詳《四福音書記者》 フィレンツェ，サンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂
ゴンデイ家礼拝堂ヴォールト

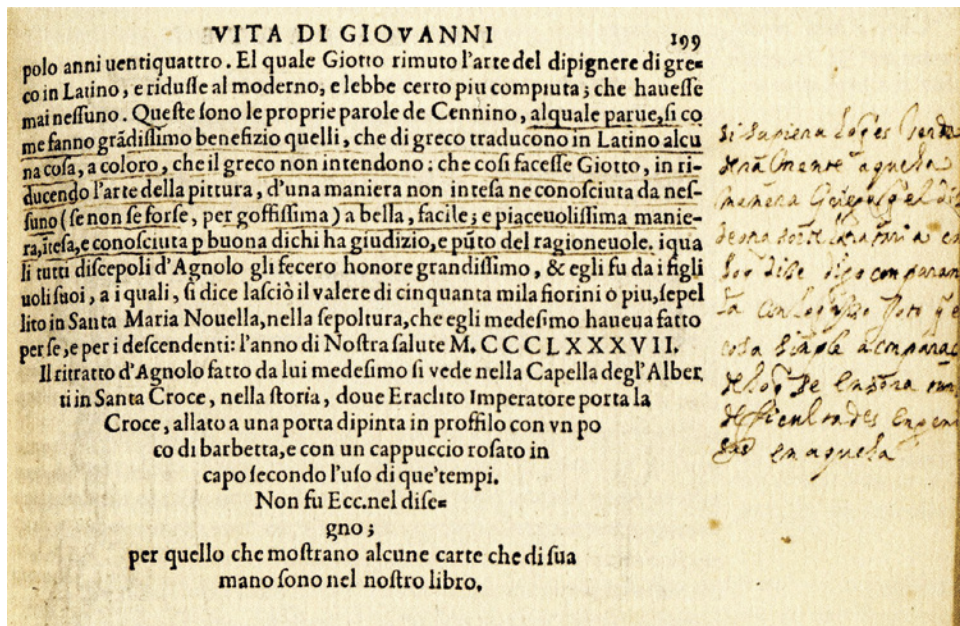


図6 「アーニョロ・ガッディ伝」におけるエル・グレコの下線と欄外註



図7 ジョット《聖母の御眠り》ベルリン、国立絵画館



図8 エル・グレコ《聖母の御眠り》 エルムポリス（シロス島）、聖母の御眠り聖堂



図9 エル・グレコ《オルガス伯の埋葬》 トレド、サント・トメ聖堂

El Greco and the Art of His Ancestors : His Annotations on Ancient Art and Byzantine Style in Vasari's *Vite*

Michiko MATSUI

(1) It seems very notable that some El Greco's underlined items on *Vite* suggest that he was aware well of some key points of Vasari's art historical conceptions and his art ideology : 1) In *the Preface of the Third Part of Vite*, he paid attention to Vasari's descriptions concerning discoveries of the famous ancient sculptures (for example, *Laocoön, the Torso of Belvedere*). They contributed, in Vasari's opinion, to the change of the style from the second stage of Renaissance to the third one. 2) In *the Life of Cimabue*, El Greco noted the passages about an episode, deemed to be untrue, written by Vasari on the Greek masters working in the Gondi Chapel and Cimabue's early style. Then he left an annotation "como lo pudo conf (...)"—according to Fernando Mariñas, we can read it as "cómo lo pudo confundir". It tells us he doubted that Vasari was able to recognize the true Byzantine style.

(2) El Greco noted the various passages in the essay of M. Marcello Adriani. They tell us his great interest for painter Apelles and his attention to many very famous anecdotes—for example, those of Apelles and Campaspe, Apelles and the cobbler, Apelles as Alexander's exclusive portrait painter, Lysippus and his figures of slender proportion, Zeuxis and five girls of Crotona. We know that those episodes were already very popular and referred to frequently by various Renaissance art theorists such as Alberti, Pino, Dolce, Lomazzo, Castiglione. Therefore it would be possible that these reveal not only his interests for the anecdotes themselves but also for the stereotyped quotations by his contemporary art critics.

(3) In *the Life of Giotto*, El Greco noted him as a highly esteemed painter by the *letterati*, such as Petrarca, Dante, Boccaccio and Sachetti. We can say that it reflect his deep concern for the concept of "artists revered by intellectuals".

(4) El Greco annotated in *the Life of Angnolo Gaddi* as follows : " Si supiera lo que es verdaderamente aquella manera griega que el di (...) de otra sorte la trataría en lo que dize digo comparan (...) la con lo que yzo Jotto que e cosa simple a comparaç (...) de lo que se ensenna # deficultades engen (...)sas en aquella".

We can find the word “simple” or “simplicity” also in other annotations.

- 1) “ne le ay ne se halla de aver (...) que le haya habido tan (...) de ornamenti e invenc(iones) porque la de los antigos era cosa simple para con esta”, in *the Life of Michelangelo*.
- 2) “yl simple Pintor de ser solo la Geometria se apreza, l’Architetto de ser Mathematico”, in *Vitruvio*, book 5, chap.8.
- 3) “el templo de San Pieta tan vario e tan nuevo e tan alieno de quella simplizidad –de figura –de los Antigos”, in *Vitruvio*, book 7, chap.7.

These tell us his perception that the word “simple” or “simplicity” seems the most suitable for the ancient architecture in comparison to the contemporary architecture. So we can consider that El Greco regarded the art of Giotto as one paralleled to the ancient art (paintings) in comparison to the contemporary art, that is, late Renaissance paintings including those of El Greco. If that is the case, it is understandable that he used a key word of late Renaissance art criticism—*dificultades/difficultà*—for the Byzantine style. It is conceivable that he could keep the vastly different artistic imagery and image cultures of both Byzantine and late Renaissance. From the end of 1580’s on, El Greco seems to have realized his Byzantine heritage as fruitful resources of artistic inspiration.

[Article]

Aufzeichnungen von TILESIIUS zu den drei Aufhalten in Kamtschatka 1804 und 1805

Frieder Sondermann

1. Teil : Ankunft in Kamtschatka im Sommer 1804

Abstract

Although the schedule and the results of the 1st Russian circumnavigation (1803–1806) are already well-known, this transcript of notes kept by the German naturalist Wilhelm Gottlieb Tilesius offers insight into the challenges faced during the voyage, both personally and scientifically.

A. Zur Quellenlage

Die anfangs publizierten Aufzeichnungen zur ersten russischen Weltumseglung 1803–1806 unter dem Kapitän Adam Johann von Krusenstern (1770–1846) auf der “Nadeshda” sind authentische, aber zensierte Zeugnisse von Reiseteilnehmern. Zum einen handelt es sich um die Mannschaftsmitglieder, also ausgewiesene Seeleute. Zum anderen sind es Naturforscher, die man zur wissenschaftlichen Erforschung unbekannter Regionen mitgenommen hatte. Zu erwarten ist, dass die Seeleute ihr Augenmerk auf Nautik und Navigation in Verbindung mit Meteorologie richteten, während die Naturforscher Informationen zu Flora und Fauna, Krethi & Plethi beisteuerten. Von Tagebüchern erwarten wir Hinweise auf menschliche Befindlichkeiten, die aber nicht für die Öffentlichkeit bestimmt sind und damals wahrscheinlich der Zensur anheimgefallen wären. Wenn Personen all diese Aspekte berücksichtigen, ist das ein glücklicher Zufall, der uns ein facettenreicheres, buntes Bild liefert. Bei den endlich edierten Aufzeichnungen des deutsch-baltischen Seeoffiziers Hermann Ludwig von Loewenstern (1777–1836) ist dies tatsächlich der Fall.¹

Als eine ansprechende Mischung aus Bemerkungen über die persönlichen Nöte, aus detaillierten

¹ In russischer Übersetzung und Kommentierung durch A.B. Krusenstern, O.M. Fedorova und T.K. Schafranovska (St. Petersburg 2003) erschienen, dann auf Englisch durch Victoria Joan Moessner (University of Alaska Press 2003), wenig später gefolgt von ihrer kommentierten Transkription aller Tagebücher nach der Originalfassung (Mellen 2005), hier Band 2 in 2 Teilen.

Notizen über Pflanzen und Tiere, sowie aus anthropologischen Erkenntnissen beim Kontakt mit fremden Kulturen sind auch die schriftlichen und bildlichen Notate des deutschen Forschers Wilhelm Gottlieb Tilesius (1769-1857) aufschlussreich und verdienen es, einem weiten Kreis von Interessenten bekannter gemacht zu werden. Was er an offiziellen Dokumenten für Krusensterns Reise um die Welt geliefert hat, ist seit langem bekannt.² Da aber viele seiner Papiere nie vollständig ediert wurden und bis heute in verschiedenen Archiven und Museen schlummern, sollten sie wieder ans Licht der Öffentlichkeit gebracht und stärker beachtet werden. Bisher wurden nur verschiedene Auszüge seines Tagebuches in Transkription veröffentlicht.³ Da meine Artikel sich schwerpunktmäßig mit Japan und Südchina beschäftigten, blieben Tilesius' Ausführungen zu den anderen besuchten Regionen bislang unberücksichtigt.

Zwei Lücken lassen sich wenn schon nicht komplett schließen, so doch wenigstens verkleinern : die Aufzeichnungen über den Zwischenstopp auf der Marquesasinsel Nuku Hiva⁴ sowie die dreimalige Einkehr der Expedition in die kamschadalische Awatschabucht.

Im folgenden soll die östlichste Region Russlands aus der Sicht von Tilesius vorgestellt werden. In meiner bisherigen Wiedergabe der Hauptquellen waren die erste Anreise wie auch der sich anschließende dramatische Aufenthalt im Hafen von St. Peter-Paul nicht inbegriffen. Ebenso endeten die transkribierten Passagen des Tagebuchs über die Rückkehr von der japanischen Gesandtschaftsreise beim ersten Aufenthalt in Südsachalin.⁵

² Vgl. dazu Günther Sterbas verdienstvolle Tilesius-Bibliographie (s. in Anm. 3 bei Teil 3).

³ Eine wichtige Vorarbeit leistete Hans Hasert in seiner Hausarbeit *Das Leben des Wilhelm Gottlieb Tilesius v. Tilenau (1769-1857), der als Zeichner und 'Naturalist' auf der 'Nadeshda' an der ersten russischen Weltumsegelung unter dem russischen Kapitän Adam Johann von Krusenstern teilnahm* [Typoskript, Potsdam 1965].

In folgenden Ausgaben des 東北学院大学, 教養学部論集 (Faculty of Liberal Arts Review, Tohoku Gakuin University) finden sich mehrere Artikel zur Weltumsegelung von mir :

- Tilesius und Japan (Teil 1) : Tagebuchauszüge über Ankunft und Aufenthalt in Nagasaki 1804/5. In : No. 154 (2009, Dezember) S. 105-147.

- Tilesius und Japan (Teil 2) : Tagebuchauszüge über die Rückreise von Nagasaki nach Kamtschatka 1805. In : No. 155 (2010, März) S. 21-53.

- Frieder Sondermann und Günther Sterba : Tilesius und Japan (3. Teil) : Allgemeine Bemerkungen zu Japan und Bibliographie seiner Schriften. In : No. 156 (2010, Juli) S. 55-94.

- Frieder Sondermann und Günther Sterba : Tilesius und Japan (4. Teil) : Sein Kontakt zu Thunberg und das Verzeichnis der Tilesius-Illustrationen in der Leipziger Universitätskustodie. In : No. 157 (2010, Dezember) S. 39-74.

- Errata (1., 3. und 4. Teil). In : No. 159 (2011, August) S. 111-113.

⁴ Elena Govor hat in ihrem umsichtigen Werk *Twelve Days At Nuku Hiva* (Honolulu : University of Hawai'i Press 2010) diesbezügliche Textauszüge veröffentlicht, die z.B. mit weiteren handschriftlichen deutschen Dokumenten von Tilesius ergänzbar sind.

⁵ Siehe Sondermann (Anmerkung 3), No. 155, S. 49, wo die Bemerkungen bis zur Rückkehr am 5. Juni 1805 wiedergegeben sind.

Hier werden nun die Berichte von Tilesius über den dreimaligen Aufenthalt auf der damals wie heute russischen Halbinsel Kamtschatka vorgelegt. Da sie seit Beginn des 18. Jahrhunderts ein von mehreren wissenschaftlich sowie kommerziell ausgerichteten Expeditionen aufgesuchtes Territorium geworden war, konnte man nach 1800 kaum noch sensationelle Entdeckungen von dort erwarten. Ein gebildeter Deutscher dürfte der Meinung gewesen sein, durch einen in *Krünitz's oekonomischer Encyklopädie* abgedruckten Lexikonartikel über diesen fernen Landstrich bestens informiert zu sein.⁶ Außerdem lagen ja mehr oder weniger aktuelle Augenzeugenberichte von Krasheninikov, von der dritten Cook-Reise, von La Pérouse, Billings, Pallas, Sarychev und anderen Forschern vor. Eine im Jahr 1803 erschienene Landkarte⁷ über die östlich und westlich der Beringstraße gelegenen riesigen Territorien war damals für Laien wohl vollkommen ausreichend, wo sich heutzutage "Google-map" Benutzer über unzureichende Skalierungen von Straßenzügen beschweren.

Mit wie vielen Entbehrungen und Gefahren die Erkundung dieser Weltgegenden verbunden war, haben die Betroffenen meist in ihren Berichten zumindest dezent anklingen lassen. Tilesius war da nicht anders. Deshalb ist die Lektüre seiner Texte gerade in menschlicher Hinsicht von Interesse. Als Vollblutforscher notierte er selbst bei körperlichem Leiden seine wissenschaftlichen Beobachtungen über die Umwelt. Diese sollen hier jedoch nur bedingt berücksichtigt werden. Das heißt, dass vor allem viele Pflanzen- und Tierbeschreibungen ausgelassen werden. Naturgeschichtlich interessierte Leser werden daher eher enttäuscht sein.

Zwar ist auch der zeitliche Ablauf der Expedition hinreichend bekannt. Dennoch sollen so vollständig wie möglich alle kalendarischen Bemerkungen in chronologischer Reihenfolge wiedergegeben werden. Auf dem russischen Schiff wurde damals das offizielle julianische Datum verwendet, wengleich im westlichen Europa die gregorianische Zeitrechnung längst eingeführt war. Hinzu kam auf der Weltreise die Tatsache, dass es eine abweichende Ortszeit gab. Das hier durchgehend verwendete gregorianische Kalendarium ermöglicht einen schnelleren Vergleich mit den bereits publizierten Quellen. Dennoch kam es bei Tilesius immer wieder zu Nachlässigkeiten und Unstimmigkeiten in der Tageszählung.⁸

⁶ Das Lexikon ist als "Krünitz Online" im Internet aufrufbar. Das Stichwort "Kamtschatka" wird im Band 34, 1785, S. 65-120 abgehandelt.

⁷ Diese "Carte von dem Meer von Kamtschatka . . . Gezeichnet von Ferd. Götze" war Beilage in den *Allgemeinen geographischen Ephemeriden* 1803, XI. Band, 3. Stück.

⁸ Das gilt etwa für die folgenden Wochentagangaben: Da der 25. Juli 1794 ein Mittwoch ist, ist das vorausgegangene Datum nicht korrekt. Ebenso ist der 1. September 1804 ein Samstag. Mittwoch der 10. September

In Erinnerung zu rufen ist kurz die “Aktenlage”. Den Kern der vorliegenden Publikation bilden die Auszüge aus dem so genannten Mühlhäuser Tagebuch (Stadtarchiv Mühlhausen/Th. Tilesius Sammlung 82/291), das vielleicht als Zwischenlager für verstreute Vorlagen anzusehen ist, wobei es auch als Gedächtnisstütze für die späteren Vorlesungen als Privatdozent in Göttingen⁹ und Leipzig (1827-1832) oder für die Redebeiträge bei den Versammlungen der Gesellschaft deutscher Naturforscher und Ärzte 1834 (Stuttgart) und 1837 (Prag) diente.¹⁰ Sicher aber ist es eine überarbeitete und immer wieder ergänzte Version verschiedener vorausgegangener Papiere, die unmittelbar vor Ort entstanden waren. Die Aufzeichnungen fungierten neben der Gedächtnishilfe auch als Dokumentation seines Forscherfleißes und nach 1840 immerhin noch dem privaten Vergnügen des Verfassers als nostalgisches Lesefutter. Die ins Tagebuch aufgenommenen Briefkonzepte waren wohl als prophylaktische Beweismittel für seine Auseinandersetzungen mit dem russischen Gesandten Nikolai Petrovich Rezanov (1764-1807) gedacht.

Im Bestand des Stadtarchivs Mühlhausen befinden sich weitere umfangreiche Teile von Tilesius’ Aufzeichnungen, die er wohl bis zu seinem Tode behalten hatte. Ein Teil seiner Bibliothek kam unter den Hammer.¹¹ In manchen Bänden finden sich seine handschriftlichen Kommentare und “Berichtigungen”. Die heute fehlenden Bände 1 und 3 des so genannten Tagebuches müssen gleichfalls umfangreiche Notizen und Illustrationen vom Anfang und vom Ende der Expedition enthalten haben, wenn sie so detailliert wie der heute noch vorhandene Band 2 als “Fortsetzung des Tagebuches auf der Reise um die Welt” (Tilesius Bibl. Nr. 82/291) geführt worden sind. In ihm füllen die Nachrichten aus Nordostasien mehr als fünfzig Seiten, somit rund ein Fünftel dieses Bandes. Diese Mühlhäuser Tagebuchaufzeichnungen dienen gewissermaßen als Leithandschrift. Weitere dort vorhandene Aufzeichnungen zu Kamtschatka müssen hier unberücksichtigt bleiben, da sie als Kopie nur schwer lesbar sind (z. B. Nr. 81/661). Eine Autopsie vor Ort wäre erforderlich.

Vor allem in der Sammlung Darmstaedter der Staatsbibliothek zu Berlin gibt es handschriftliche

1805 müsste nach seiner eigenen Zählung der 11. Sept. sein.

⁹ In seiner Bewerbung für eine Reisebegleiterstelle (Mühlhausen-Tilesius Sammlung 82/515) erklärte er 1823: “Doch haben mir meine Zuhörer, die den Academischen Vorlesungen in Petersburg und Göttingen beywohnten, immer versichert, daß ich beßer spräche als ich schriebe” (zitiert nach Hasert S. 85 [siehe Anm. 3]).

¹⁰ Um 1820 hat Tilesius als Mitglied der naturforschenden Gesellschaft zu Leipzig in diesem Kreis referiert. Die Universität Leipzig hat ein Verzeichnis der Vorlesungen veröffentlicht: http://histvv.uni-leipzig.de/dozenten/tilesius_von_tilenau_wg.html

¹¹ Ein erster Bücherverkauf nach 1835 sollte Aktienverluste wegen des Konkurses der sächsischen Eisenbahngesellschaft mildern. Kurz vor seinem Tod wird 1853 ein heute unauffindbares Supplementheft Nr. IV für den Verkauf seiner Bibliothek durch das Leipziger Antiquariat J.M.C. Armbruster angekündigt.

Aufzeichnungen über Tange und Fuci und Cellularien aus dem (Teil-)Nachlass (NL) Tilesius. Von diesen Manuskripten werden aber nur die folgenden Konvolute zur Ergänzung herangezogen :

- NL Nr. 7 (5 Blätter) : Es geht um den Zeitraum ab 22.6. bis 4.8.1804. Auf dem letzten Blatt setzen die knappen Notizen über Kamtschatka nach der Ankunft in der Awatscha Bucht (Sonntag 15. Juli 1804) ein.

- NL Nr. 9 (18 Blätter) Den Anfang dieses Konvolutes bilden Nachträge zum Aufenthalt im brasilianischen S. Catarina und zur Insel Nuku Hiva.

Dann folgt ab Bl. 7r[ecte] - 10r die ausführliche Berichterstattung von der “Ankunft in Kamtschatka und Beschreibung des Landes, der Produkte, des Havens und einiger wenigen Nationalmerkwürdigkeiten”.

Diese “berliner” Passagen sind fast wortgleich mit den “mühlhäuser” Notizen. Welcher Text der ursprüngliche ist, muss hier offen bleiben.

Ab Blatt 10v[erso] bis zum letzten Blatt 18 beschreibt Tilesius den “Zweiten Aufenthalt im Peter Pauls Haven von Kamtschatka 1805” im Früh- sowie den 3. Aufenthalt im Spätsommer, wobei viele Seiten mit umfangreichen Tier-, speziell Fischbeschreibungen gefüllt sind.

- NL Nr. 11, Bl.7r-8v bringt weitere Nachrichten über Kamtschatka, einen toten Wal, den Mammut-Backenzahn (mit Abbildung).

Das vollständige, offiziell zu führende Diarium für den Auftraggeber, d.h. für die russische Regierung in der Person des Generals Jan Pieter van Suchtelen (1751-1836) oder für die russische Marine - aber sicher nicht für die an Kosten und Planung beteiligte Russisch-Amerikanische Compagnie (RAC) - mag sich noch im Marine- oder Akademiearchiv in St. Petersburg befinden.¹²

B. Warum lohnt sich die Sichtung und Wiedergabe?

Die bequeme digitale Vergleichung der seit langem gedruckten Expeditionsberichte Krusensterns und Heinrich Georg von Langsdorffs (1774-1852) in der Datenbank “Siberian-Studies.org”¹³ kann inzwischen ergänzt werden durch die Bucheditionen der Tagebücher Hermann Ludwig von Loewen-

¹² Auszüge vom “Tagebuch” finden sich im Archiv der Russischen Akademie der Wissenschaften, St. Petersburg, im Font IV, op. 1, d. 800 und 800a.

Tilesius-Archivalien im Marine-Archiv (RGAVMF) könnten auch ergiebig sein.

¹³ Als Teil der Kulturstiftung Sibirien werden hier interkulturelle und auch historische Studien zugänglich gemacht, u.a. in der Bibliotheca Kamtschatica.

sterns¹⁴ (russ., engl. und dt.), Rezanovs (russ. und japanisch), Fedor Ivan. Shemelins (1755–nach 1818) und Makar Ivanovich Ratmanovs¹⁵ (1772–1833) (russ.). Unbedingt vergleichen sollte man das Tagebuch Tilesius’ in Verbindung mit den sehr persönlichen Beobachtungen Hermann Ludwig von Loewensterns. Erst dadurch erhalten wir ein wirklich facettenreiches Psychogramm der Expeditionsteilnehmer. Die Befindlichkeit des unbeugsamen Naturforschers “Tillesius” wird aus der Sicht dieses deutsch-baltischen Offiziers als Rechthaberei und Hoffart kritisiert und macht die vielen bissigen Konfrontationen¹⁶ erklärbar, welche die beiden fast zu einem Duell veranlasst hätten. Nur der alle Passagiere aufrüttelnde Selbstmord des Offiziers Petr Trofimovich Golovachev (1777–1806) auf St. Helena im April 1806 konnte zu einer Aussöhnung führen.¹⁷ Aber den Anschuldigungen vor dem Freitod gingen von Seiten des Naturalisten keine Klagen über den russischen Offizier voraus. Hier als Beispiel nur ein Vorgeschmack auf den Ton dieser Auseinandersetzungen aus dem Tagebuch Loewensterns vom 11. September 1805¹⁸ :

Heute machte Tillesius einen ungebührlichen Lärm, wegen einer Comode, welche wie er sagt, verlohren gegangen sey. Da dießes bloß durch seiner eigenen Nachlässigkeit hat geschehen können, so gab ihm Romberg den Rath ; bey unserer Ankunft in Kronstadt, besser auf seine Sachen Acht zu haben. Denn eben so wie seine Comode, wahrscheinlich jetzt die Reise nach Kodiak gemacht hat ; so könnten auch dort, seine Kisten und Kasten in unrechte Hände gerathen. – Tillesius mit einer wichtigen Miene, welche uns allen ein Lächeln abnöthigte, sagte : Das gehört alles der Expedition ; und ließ es uns nur zu deutlich verstehen, das wir dafür zu verantworten hätten. Ich sagte ihm hierauf : Wir haben eben so viel Theil an der Expedition wie sie. Auf ihre Sachen aber Acht geben, wird gewiss keiner, wenn sie es nicht selbst thun. – Was ich auf Deutsch gesagt hatte, wiederholte ich auf Russisch, und fügte hinzu, mich an meine Cameraten wendend : Wir müssen Vorkehrungen treffen, um durch dießen Menschen keinen Verdruss zu haben. – Hierauf fuhr mich Tillesius plötzlich an, und warf es mir vor, das ich Russisch rede, da ich doch von ihm spräche. – Sie können es mir nicht vorschreiben, antwortete ich ; in welcher Sprache ich reden soll ; unhöflich ist es aber

¹⁴ Zu den Editionen von Frau Moessner siehe Anm. 1.

¹⁵ Jüngst erschien die voluminöse und reich bebilderte Ausgabe von Ratmanovs Aufzeichnungen, herausgegeben von Olga Fedorova : *Chtoby luchshe tsenu dat’ svoemu Otechestvu...* : *pervaia russkaia krugosvetnaia ekspeditsiia [1803–1806] v dnevnikakh Makara Ratmanova* (Sankt-Peterburg : Kriga 2015).

¹⁶ Z.B. am 31. Mai und 4. Juni 1805 zu einem verlegten Buch ; am 21.–23. April 1806 vor St. Helena.

¹⁷ Über seine (fiktive) Liebschaft mit einer Japanerin als auslösenden Faktor hat Larissa Ash ein russisches Drama “Saga o Nagasaki” (Moskau 2014) verfasst.

¹⁸ Das Original befindet sich im Krusenstiern-Fond des Nationalarchivs von Estland (EAA, Tartu). f. 1414-3-4, Blatt 133r. Eine solche Form der digitalen Präsentation (Einsicht nach Registrierung) wäre auch für die Tilesius-Materialien im Stadtarchiv Mühlhausen wünschenswert.

von Ihnen, sich in ein Gespräch zwischen mir und meinen Cameraten zu mischen und mir noch vorschreiben zu wollen, in einer anderen Sprache, als Russisch zu sprechen. – Tillesius wurde noch Gröber und sagte mir endlich ; ich solle schweigen. Dieße Zumuthung ärgerte mich, und ich machte, ziemlich laut bekannt, das Tillesius verrückt ist. Tillesius war noch so vernünftig und schwieg still, und auch ich hielt es für besser dießen halb Tolln Menschen laufen zu lassen”.

Tillesius war seit der Rückreise aus Japan im Frühjahr 1805 von Krusenstern zum offiziellen Chronisten ernannt. Das “Annalieren” in Form eines “historischen Tagebuchs”¹⁹, wie er es in einem Briefkonzept an General Suchtelen vom Oktober 1805 nannte²⁰, führte aber nie zu einer eigenständigen Publikation. Das Primat der Erstveröffentlichung hatte selbstverständlich beim Kapitän gelegen, der damit auch die Deutungshoheit für den Verlauf und den Erfolg der Expedition beanspruchen durfte. Tillesius klagte schon im Verlauf der Reise immer wieder über mangelnden Informationsfluss (z.B. pag. 145 vom 7.Sept. 1805) und ließ Lücken im Text, wo er später präzise Maße und Datierungen ergänzen wollte – es aber dann unterließ. Doch er wollte wenigstens nachträglich seine eigene Sorgfalt unter Beweis stellen. Selbst in der Kurzform seiner Tagebuchaufzeichnungen legte er (sich) entschuldigende Rechenschaft über seinen guten Willen, die widrigen Naturumstände und Gehässigkeiten der Anderen ab. Offensichtlich erfüllte das Tagebuch also auch eine psychologische Ventilfunktion als “Klagemauer”.

Doch den erbitterten Konflikt zwischen Krusenstern und Rezanov im Sommer 1804 erwähnte Tillesius in den hier vorgelegten Aufzeichnungen gar nicht. Das von der russischen Untersuchungsbehörde angeordnete offizielle Vergessen der Schuldzuweisung im Führungsstreit bedeutete indes nicht, dass er vorsichtshalber auch nach der Heimkehr ins Vaterland seine diesbezüglichen Erinnerungen hätte verschweigen müssen. Der agile Heinrich Georg von Langsdorff (1774–1852) hingegen umschrieb in seinem Buch die Dissonanzen mit dem Gesandten während der späteren Etappen elegant (z.B. “besondere Vorkommnisse”). Erst seine brieflichen Äußerungen gegenüber Krusenstern zeichnen ein ausgesprochen negatives Bild des umtriebigen Gesandten.²¹

¹⁹ Siehe dazu im berliner NL 8, pag. 3r.

²⁰ Stadtarchiv Mühlhausen, Tillesius-Sammlung 82/661. pag. 257 : “Von *S. Petersburg* aus ist mir aufgetragen worden, ein historisches Tagebuch zu schreiben.”

²¹ Vgl. seinen Brief aus Tobolsk vom 20. Dez. 1809, wo er schreibt : “Endlich ist es denn einmal Zeit einige Worte von mir hören zu lassen, nachdem ich nun Jahre lang, mögte ich sagen, lebendig todt war. Alles was wir in Brasilien, der Südsee und in Kamtschatk : erlebten, das ist nichts in Vergleich der Auftritte und Trauer-

Tilesius befand sich als Naturforscher stets in einer Konkurrenzsituation mit Langsdorff, gegen den er trotz Seniorität und offizieller Bestallung nicht nur publizistisch einen schweren Stand hatte. Beim Vergleich mit der übersichtlich strukturierten – durch einen Dritten korrigierten und daher gut lesbaren – Druckfassung der *Bemerkungen auf einer Reise um die Welt* (Frankfurt/M. 1812) erkennt man das Skizzenhafte und gleichzeitig überbordende, manchmal redundante und sich verzettelnde Vorgehen von Tilesius. Natürlich ist dieser Vergleich unfair, eben weil Tilesius kein druckfertiges Manuskript sondern nur private Aufzeichnungen verfasst und hinterlassen hat. Durch seine Artikel zu speziellen Themen, durch akademische Berichte veranschaulichte er die Früchte der Expedition. Man kann nur rätseln, was er wie in seinen Vorlesungen und Vorträgen den Hörern an persönlicher Einschätzung vermittelt hat.

Bereits während der Reise klagte Tilesius über Benachteiligung bezüglich der personellen und materiellen Unterstützung seiner Arbeit (kein Jäger, kein Spiritus). Langsdorff hatte sich standhaft geweigert, ihm Handlangerdienste zu leisten oder gar als bloßer Gehilfe angesehen zu werden. Rezanov, dem utilitaristisch gesinnten Verantwortlichen auf Seiten der RAC, war das rein wissenschaftlich orientierte Interesse des Mühlhäusers, der sich nicht seinen Befehlen fügen wollte, ein steter Dorn im Auge. Die Konflikte waren also unvermeidlich.

Langsdorff nutzte nach seiner Rückkehr aus Amerika 1806/7 ausgiebig die Gelegenheit, nördliche Parteien von Kamtschatka aus erster Hand kennenzulernen. Er wurde somit zum profunderen Kenner dieser Provinz und ihrer Bewohner. Seine alsbald formulierten Reformvorschläge haben – ähnlich wie die anklagenden Passagen in Krusensterns Buch²² – die russische Regierung zum Handeln gezwungen und den Zorn der RAC hervorgerufen.²³

scenen deren Augenzeuge ich seyn mußte. [...] Man kann sich leicht vorstellen, daß ein Ignorant, wie Resanoff, der für Wissenschaft nicht das geringste Gefühl hatte, für diese auch nicht die geringsten Hilfsmittel gab.” Das Dokument befindet sich im Archiv der Akademie der Wissenschaften, St. Petersburg, Font 31, 1, 11. Siehe dazu meinen Aufsatz “Zeitgenössische Urteile ueber Nikolai Petrovich Resanov (1764-1807)”. In: *Ronbun shuchishi toshite no ryokō-ki*: “*Wakamiya-maru*” to “*Nadeshda-go*” no kiroku. Sendai: Sendai shimin kokusai kōryū jigyō jikkō iinkai. Heisei 14 (2000 Juli), pp. 52-85.

²² Im 2. Teil, dort in der 2. Abteilung das gesamte Kapitel 8 (“Über den jetzigen Zustand von Kamtschatka”), Seite 1 - 59 (dt. “Volks”-Ausgabe im Verlag Haude und Spener, Berlin, 1812).

²³ Über die Pläne, Langsdorff in Kamtschatka administrativ einzubinden, siehe im von Marie-Theres Federhofer und Diana Ordubadi herausgegebenen Band *Adam Johann von Krusenstern/Georg Heinrich von Langsdorff/Otto von Kotzebue/Adelbert von Chamisso: Forschungsreisen auf Kamtschatka [Auszüge aus ihren Werken]* (Fürstenberg: Kulturstiftung Sibirien 2011) die Hinweise von Diana Ordubadi “Die Halbinsel Kamčatka in den Schriften des Leiters der ersten russischen Weltumsegelung (1803-1806) Adam Johann von Krusenstern und seines Naturforschers Georg Heinrich Freiherr von Langsdorff” S. 137-155, hier S. 149 bis 153.

Tilesius selbst wollte dennoch nicht auf den Kontakt zu Langsdorffs Doktorvater Johann Friedrich Blumenbach (1752-1840) verzichten, da dieser besonders durch seine angesehene Zeitschrift *Göttinger gelehrte Anzeigen* (GGA) der profilierteste Multiplikator für die Beurteilung und Verbreitung von Entdeckungen im naturhistorischen Bereich war. Also übersandte er ihm Mammuthaare und Berichte seiner Entdeckungen.²⁴

Bei der von Rezanov massiv vorgetragenen Forderung nach einem geologischen Gutachten war Tilesius sicher nicht nur zeitlich überfordert. Der amerikanische Geologe und Kartograph William Maclure (1763-1840) etwa stufte ihn als Geologen und Biologen nicht sehr hoch ein, bot ihm im Frühjahr 1810 trotzdem vergebens an, auf seine Kosten von St. Petersburg nach Paris mitzufahren, wo man die Elite der französischen Naturwissenschaftler hätte treffen können.²⁵

Auf linguistische Feldforschungen ausgerichtete Dokumente zur Bevölkerung Nordasiens (Sprachvergleich, Wortlisten) finden sich bei Tilesius fast gar nicht. Er schweigt sich selbst in seinen privaten Papieren fast immer über soziale, politische oder soziale Missstände aus. Zwar darf man weder bei ihm noch bei Krusenstern antirussischen Parolen gegen den offensichtlich ausbeuterischen Kolonialismus erwarten, aber zumindest eine höhere Sensibilität für stark gefährdete und unterdrückte Ureinwohner. Da er selbst der russischen, englischen und französischen Sprache nicht sehr mächtig war, blieben auch die menschlichen Kontakte sporadisch und oberflächlich.

Ein weiterer Konkurrent war der dritte ausgebildete Mediziner an Bord, Dr. Carl Espenberg (1761-1822)²⁶, dessen Praxis als Schiffsarzt so gut wie nie erwähnt wird. Als Hautexperte hat Tilesius nur private Reisenotizen über die Bewohner in Südbrasilien, Nuku Hiva und Hawai'i hinterlassen.²⁷

²⁴ Angekündigt im Tagebuch pag. 151 ; sein Brief vom 24. Sept. 1805 wurde dann abgedruckt in GGA Bd. 12, 6. Stück (1806), S. 498-502. Weitere dort veröffentlichte Briefe von Tilesius finden sich im 6. Stück des 12. Bandes (1806) zwischen den Seiten 492 und 505. Tilesius wurde zwischen 1818 und 1822 oder 1823 Rezensent für diese Zeitschrift, bevor er in Unfrieden mit dem Redakteur ausschied.

²⁵ Vgl. *The European Journals of William Maclure*. Edited, with notes and introduction by John S. Doskey (American Philosophical Society, Philadelphia 1988) [Memoirs series vol. 171] S. 273f.

²⁶ Im 3. Band von Krusensterns *Reise um die Welt* (St. Petersburg : Schnoor 1812) lieferte Espenberg "Nachrichten über den Gesundheits Zustand der Mannschaft auf der Nadeshda, während der Reise um die Welt in den Jahren 1803, 1804, 1805 und 1806". Seine Aufzeichnungen während der Reise wurden sowohl im Berliner *Freimüthigen* als auch in Storchs Zeitschrift *Rußland unter Alexander dem Ersten* veröffentlicht.

²⁷ In der Staatsbibliothek zu Berlin PK Hss.-Abt. NL Tilesius Nr. 5 gibt es Aufzeichnungen zu Hautkrankheiten. Inzwischen hat Jean De Bersaques einen Aufsatz zu Tilesius verfasst : "Wilhelm Gottlieb Tilesius - a forgotten dermatologist" (W.G.T. - ein vergessener Dermatologe) in : *Journal der Deutschen Dermatologischen Gesell-*

Sein 1807 voreilig geplantes Bildwerk (ein Tafelband als “Voyage pittoresque”) zur Weltumsegelung kam mangels finanzieller Unterstützung durch den Grafen Nikolai Rumjantsev (1754–1826) und im zweiten Anlauf – parallel zu Krusensterns Bemühungen – nach 1810 durch den französischen Verleger Leclerc nie zustande.²⁸ Für den Expeditionsleiter Krusenstern wären die nie gelieferten gedruckten Kommentare zu den Illustrationen im Krusenstern-Atlas (1814) wichtig gewesen. Der erste Versuch im Band 3 der “Naturhistorischen Früchte” hatte schon 1813 bewiesen, dass Tilesius sich nicht kurz fassen konnte. Daher scheint die unausgesprochene briefliche Absage seiner naturhistorischen Kommentierung um 1825 Erleichterung geschaffen zu haben: für Krusenstern sicher finanziell, der sich dennoch eine private Abschrift fürs Familienarchiv erbat²⁹, aber wohl auch für den überforderten und gesundheitlich angeschlagenen Tilesius.

Krusensterns und Langsdorffs Bücher hätte Tilesius mit allgemeinen Schilderungen wohl kaum übertreffen können. Nicht als souveränen Entomologen, sondern als “Wurmprofessor” und “unzuverlässigen Geist” hatte ihn der mitreisende Astronom Johann Caspar Horner (1774–1834) kurz nach der Rückkehr im April 1807 abgeurteilt.³⁰ Georges Cuvier hatte privat schon 1803 über die “Sottisen” bei der Klassifikation von Tintenfischen gestichelt. Johann Friedrich von Eschscholtz tat ein

schaft. Band 9. Heft 7 (Juli 2011), S. 563–580.

²⁸ Zu den französischen Kontakten siehe auch meinen Artikel “Heinrich Julius Klaproth (1783–1835) und Johann Caspar Horner (1774–1834) über Kontakte zwischen Europa und Asien.” In: *Tohoku Gakuin Daigaku Nin-gen joho kenkyu [Journal of Human Informatics]* No. 13 (March 2008) S. 59–86, wo S. 71 und 74f. von der indiskreten französischen Publikation über RezanovsInkompetenz berichtet wird. Hinweise auf Tilesius’ Kontakte nach Frankreich gibt es in meinem ersten Tilesius-Artikel (s. Anm. 3, No. 154, S. 109–112). 2013 sind weitere Briefe von Tilesius an den Verleger Josef Viktor Leclerc (1789–1865) aus dem Jahr 1810 verauktioniert worden. Krusenstern hatte schon seit 1809 vergeblich versucht, bei diesem Verleger die französische Übersetzung seiner Reisebeschreibung erscheinen zu lassen. Daher taucht dessen Name im Briefwechsel Krusenstern-Horner zwischen 1810 und 1816 immer wieder auf.

²⁹ Von Tilesius verfasste Abschrift der Krusenstern-Briefe aus Petersburg im Mühlhäuser Stadtarchiv, Sign.: 82/515, die auch Hasert (s. Anm. 3) S. 112–118 zitiert. Im hier folgenden Briefzitat (10./22. Jul. 1824) gibt es (in Klammern eingefügt und mit roter Tinte geschrieben) einen sich rechtfertigenden Kommentar von Tilesius: “Die TafelErklärungen habe ich nicht bekommen, auch ist es nicht wahrscheinlich, daß Hartmann sie drucken wird. Man ist überall so arm geworden, daß auch nur wenige das Werk anschaffen würden, so reichhaltig es auch ist. Schade, daß Ihre Arbeit nicht fertig war, als ich meine Reise drucken ließ. **(Wie konnte ich dies da ich 13 Jahr lang am Krusenst. Atlas arbeiten und auch noch meine academischen Abhandlungen und Pallas Zoographia // Rossi Asiatica 3 Bände im Druck während der Zeit meines Aufenthalts (10 Jahre) liefern musste, ich war ja schon mit Arbeit überhäuft und konnte gar nicht an meine eigene Arbeit denken.)**”

Die letzte mahnende Bitte Krusensterns erfolgte am 22. Juli 1826: “Was Ihr Manuscript des vierten Bandes meiner Reisebeschreibung betrifft, so bitte ich Sie inständigst es mir zuzuschicken. Aber auf eine nicht kostspielige – aber doch sichere Art. Ich laße es vielleicht doch noch einmal drucken d.h. nicht auf meine eigene Kosten, wo nicht, so soll es in meiner Bibliothek als ein Andenken von Ihnen aufbewahrt werden.”

³⁰ Das Original befindet sich im Nationalarchiv Estlands, dem EAA (Eesti Ajalooarhiiv, Tartu) Krusenstern-Fond 1414–3–22, Bl. 7 (Mo. d. 22. April. 07. (und 23. April). Es war auch Horner, der Tilesius freundschaftlich, aber vergeblich vor der Heirat mit der nicht sehr guten und kaum häuslich-sanften Clementine warnte.

Gleiches öffentlich in seinem “System der Acephalen” (Berlin 1829), wo er Tilesius der weitschweifigen und verwirrten Darstellung von Quallen bezichtigte (S. 159f.). Ein breites Publikum hätte Tilesius mit seinen Algen- und Kleintierbeschreibungen sicher nicht zum Kauf dieses Fachbuches animieren können. Und je länger sich die Herausgabe seines allumfassenden Werkes verzögerte, desto unwichtiger und unzeitgemäßer musste es auch für Fachkollegen sein. In der Umbruchzeit zwischen der Naturkunde des 18. zu der des 19. Jahrhunderts hatte Tilesius den Anschluss an die neue Naturwissenschaft verloren. Er war durch die Expedition und die anschließend in St. Petersburg verbrachte Zeit zu einem akademischen Epimenides³¹ geworden.

Trotz alledem :

Wir erhalten ein anschauliches Bild von Tilesius mit seinen Leiden als nicht so junger Forscher in einem wenig kooperativen Umfeld. Anerkennenswert ist sein nie ruhendes, ausgedehntes Interesse an der Natur, allen Widerwärtigkeiten zum Trotz. Wahrscheinlich kann man von ihm sagen : “Nulla dies sine linea seu pictura.”

C. 1. Hinweise zur Edition

Um den Umfang dieses Artikels zu begrenzen, werden folgende editorische Eingriffe vorgenommen :

- Die chronologische Abfolge (weil Tilesius Einschübe und Nachträge an anderer Stelle liefert) hat Vorrang vor der seitengetreuen Textwiedergabe.
- Nicht immer kann man sich auf die Datierung bei Tilesius verlassen. Manchmal verwechselt er Wochentage oder gibt Daten an, die nicht mit denen der Mitreisenden übereinstimmen.
- Die erste Erkundung Südsachalins im Frühjahr 1805 fehlt in diesem Aufsatz.
- Die stichwort- und glossenartigen Überschriften auf den Blättern werden weggelassen. Eingefügte

³¹ So urteilte Carl Gustav Carus über seinen Vetter Tilesius in den zuerst 1866 erschienenen *Lebenserinnerungen und Denkwürdigkeiten* (Weimar 1966, 2. Teil, 5. Buch, S. 436f.) - nach dessen Ableben. Zu Lebzeiten ging von Lorenz Oken in seiner Zeitschrift *Isis* (zuerst 1817, S. 1511) die massivste Kritik aus. Vgl. den sehr kritischen Artikel (sign. : 67=vielleicht von Oken) zu Tilesius im 4. Supplementband für die 7. Auflage des Brockhaus'schen *Conversations-Lexikon der neuesten Zeit und Literatur* (Leipzig 1834) Band 4, S. 631f., hier S. 632 : “Diese Früchte sind aber nicht so bedeutend, als es der Sache nach scheinen möchte. Zwar ist Vieles beobachtet, [...] aber die Beschreibungen sind mit Abschweifungen aller Art durchflochten und des Wesentlichsten wird oft mit keinem Worte gedacht [...]”, der Verfasser sei “mit der Zeit nicht fortgeschritten”. Dies Urteil wurde in späteren Auflagen nicht widerrufen.

kleine Skizzen werden nicht reproduziert.

- Die Zeilen werden aus Platzgründen fortlaufend wiedergegeben. Das Mühlhäuser Mscpt. ist mit mehr als 40 Zeilen pro Blatt eng geschrieben.
- Die meisten naturhistorisch-taxonomischen Passagen, Listen und Beschreibungen von Pflanzen (z.B. Tangen wie im Berlin NL 2 Seiten mit Illustrationen)³², Tieren und Steinarten entfallen, was durch entsprechende Markierung erkennbar ist.
- Die Kommentierung beschränkt sich auf ein Minimum. Somit entfällt auch die Kontrolle der Nomenklatur nach Linné/Gmelin oder in anderen damals gängigen Bestimmungsbüchern für die vielen von Tilesius so genannten “nova species”.
- Orthographische Eingriffe (Interpunktion, Zusammenschreibung von Komposita, Vereinheitlichung bei Namenvarianten) in die Vorlage werden fast nicht vorgenommen. Die Umlautpunkte über dem y [ÿ] werden nicht dargestellt ; manche Umlaute entsprechen nicht unserer heutigen Schreibung. Reduplikationsstriche (z.B. Überstrich bei \bar{m} =mm) werden aufgelöst.
- Lateinische und geographische Begriffe sowie Rangbezeichnungen und Fremdwörter werden wie bei Tilesius meist kursiv gesetzt.
- Die Paginierung der Vorlage wird durch fette Zahlen / / angezeigt oder durch [] ergänzt.
- Unterstreichungen [auch wenn sie im Original z.B. bei den Datumsangaben nachträglich eingefügt sein mögen] werden ebenso wie die Wortstreichungen angezeigt.
- Nachträgliche Texteneinschübe über oder unter der Zeile sind durch geschweifte Klammern kenntlich gemacht.
- Unlesbare Wörter werden durch ...[?] angezeigt.

Zu den im Tagebuch verwendeten Maßen und Gewichten hier nur ein paar Konvertierungsbeispiele

1 Stof = ca. 1 Liter - 1 Werst = ca 1 km - 1 Zoll = 2,5 cm - 1 Elle = ca. 50 cm - 10° Réaumur = 13° Celsius - 1 Lot = ca 15 g - 1 Faden = 1,83 m - 1 (nautische) Meile = 1,852 m - 1 Knoten = 1,852 km/h

C.2. Hinweise zu Illustrationen

Die Illustrationen scheinen Tilesius am wirkmächtigsten gewesen zu sein. Er hat Duplikate seiner

³² Mit den Tangen bei Tilesius hat sich Michael Wynne 2006 und 2009 befasst. Zum Mammut gibt es Briefe an Caspar Wistar (1761-1818) und Benjamin Barton Smith (1766-1815) in den USA (American Philosophical Society, Philadelphia : Wistar Coll B W76 und ebd., Library Hall : Benjamin Smith Barton Papers, B D284.d, Series I).

Illustrationen aus Gefälligkeit für Kollegen angefertigt. Illustrationen aus seiner eigenen Sammlung befinden sich heute in der Leipziger Universitäts-Kustodie.³³ Nur wenig davon kann hier zur Veranschaulichung wiedergegeben werden. Vieles ist in den Krusenstern-Atlas (1813) und auch in Langsdorffs Buch (1812) aufgenommen worden, kann daher leicht im Internet als Digitalisat abgerufen werden. Die umfangreichste Wiedergabe von Textauszügen und dazu gehörigen Abbildungen aus verschiedenen Archiven und gedruckten Werken findet man in dem 2005 von Alexei Krusenstern und Olga Fedorova herausgegebenen synoptischen Band *Vokrug sveta s Kruzenshternom* (St. Petersburg : Kruga 2005). Olga Fedorova hat inzwischen auch das Bildmaterial im Horner-Nachlass der Universität Zürich (Völkerkunde-Museum der Uni Zürich [VMZ], Sign. : 820), von Philippe Dallais kundig ans Licht gezogen, in ihrer Ratmanov-Ausgabe (2015) verwendet :

Vorrang genießen also Abbildungen, die besonders anschaulich sind. Dazu zählen im 1. Teil

- Abb. 1 “Charte von dem Meer von Kamtschatka mit Capt. Ios. Billings und Mart. Sauers Reiserouten. Gezeichnet von Ferd. Götze” (Weimar 1803), aus : Allgem. Geogr. Ephemeriden 1803 XI.Bds. 3.St.
- Abb. 2 Karte der Ostküste von Kamtschatka (KRUS-Atlas Nr. XXIV)
- Abb. 3 Karte der Awatschabucht (KRUS-Atlas Nr. XXVII)
- Abb. 4 Blick auf die Koschka und Hafeneinfahrt [EAA f. 1414-3-4 ill. 107]
- Abb. 5 Blick von Koschka auf Kaserne jenseits der Hafeneinfahrt [EAA f. 1414-3-4 ill. 108]
- Abb. 6 Schaluppe im St. Peter Paul Hafen vor der neuen Batterie [VMZ Horner Nachlass, 820_1_10]
- Abb. 7 Fernsicht vom Hafen in der Awatschabucht [nach Tilesius] :
 1. Salzsiederei 2. Landspitze vor Kegelberg 3. Nadeshda im Hafen
 4. Kommandantenhaus 5. Koschka 6. die alte Batterie 7. Friedhof beim Paguna Retschka Fluss
- Abb. 8 Im Hafen von St. Peter-Paul [nach Tilesius] :
 1. Neue Batterie 2. Kasernen 3. Nadeshda. 4. das Lazareth
 5. Awatschinska Sopka 6. Kommandantenhaus 7. Kirche 8. Warenlager (RAC)

³³ Vgl. das Verzeichnis dieser Abbildungen durch Sterba, in : “Tilesius und Japan (4. Teil)” s. Anm. 3, Nr. 157, S. 61-70.



Abb. 1

D. Bericht über die Aufenthalte in Kamtschatka sowie Nordsachalin Verlauf der Reiseroute der “Nadeshda” und Landgänge

Kronstadt 7. August 1803 Abfahrt der “Nadeshda” und der “Neva”

Kopenhagen 15. August–8 Sept. (Tilesius kommt am 22. Aug. an Bord)

Falmouth, GB (Hafen und London) 28.Sept.–5. Okt.

Teneriffa 17. Okt–27. Okt. 1803

Santa Catarina (Brasilien) 21.Dez. 1803–4. Febr. 1804

Nuku Hiva (Marquesas Inseln) 9. Mai–18. Mai 1804

Hawai’i 8. Juni (kein Landgang)

Kamtschatka 1. Aufenthalt : 15. Juli 1804–7. September 1804

Nagasaki 8. Okt. 1804–17. Apr. 1805 (retour via Hokkaido und Südsachalin)

Kamtschatka 2. Aufenthalt : 5. Juni–4. Juli 1805

Nordsachalin ca. 20. Juli–29. Aug. (Erkundung bis zur Amur-Mündung)

Kamtschatka 3. Aufenthalt : 28. Aug.–9. Okt. 1805

Macao und Canton/Whampoa 20. Nov. 1806–9. Febr. 1806

St. Helena 4. Mai 1806–5. Mai 1806

Orkney-Inseln 17. Jul. 1806 (kein Landgang)

Kopenhagen 2.–6. Aug. 1806

Kronstadt 19. Aug. 1806

Durch einen Sturz auf der Insel Nuku Hiva am Fuß verletzt, des weiteren von Hämorrhoiden und Zahnschmerzen geplagt, sehnt sich Tilesius auf der Seereise von Hawai’i in Richtung Kamtschatka danach, endlich wieder gesund zu werden³⁴ und die Naturforschungen erneut aufnehmen zu können. Die Stimmung an Bord ist eisig, weil der Autoritätskonflikt zwischen dem Gesandten Rezanov und dem Kapitän Adam Johann von Krusenstern seit der Konfrontation auf der Insel Nuku Hiva ungelöst glimmt.³⁵ Über den ansonsten meist monotonen Tagesablauf berichtet Tilesius nur sehr selektiv. Die Ankunft in der Awatschabucht erfolgt am 15. Juli 1804, und nun notiert Tilesius, kaum genesen, zunächst nur diese kurzen Eintragungen (NL 7, 5r) :

³⁴ Tilesius war am 1.Juli aus seiner Kajüte aufgetaucht, lt. Loewensterns Tagebuch, in EAA (s. Anm. 18) f. 1414–3–4, Bl. 118.

³⁵ Vgl. Elena Govors Darlegung (s. Anm. 4) S. 31 und S. 204–213.

Sontags d. 15. Die erste Zeichnung von der noch fernen Kamtschadalischen Küste. Nachmittags in der *Awatschabay* im *PeterPaul* Haven vor Anker. Nach Tische an Land gegangen.

Montags d. 16. *Gadus {Callarius} Aegletinus*. *Salmo Trutta* und *Fario*. *Cottus scorpius* und *Scorpaena Asterias violacea* (letztere zergliedert. *Cottus horridus*

Dienstags d. 17. Julii 1804 *Excursion* auf Mineralien und Kräuter. Thonschiefer, Mandelstein, Quarz, Trapp.

M. d. 18. 19. Die *Actinia senilis* zergliedert und gezeichnet

Freitag d. 20. *Kamtschadalen* gezeichnet. *Balanus maximus* nebst der *Actinia senilis* oder dem Priap. auf dem Boden mit einem Loche esp.

Sonnabends u. S. 21. u. 22. Taucher *Colymbus* gezeichnet *Therm. 9°-10°*. R.

Montags. u. Dienst. d. 23. u. 24 die neue Scholle *Pleuronectes striatus* gezeichnet

Mitt u. Donnerst. d. 25. u. 26. *Excurs.* bot. Verdruß mit dem Gesandten welcher mich plagen wollte und doch meinen *Contract* nicht halten wollte. Regen

Freyt. u. Sonnabends d. 27. u 28. *Balanus max.* *Cancer macrour.* et *quella*

Sontags d. 29. Julii Regen. kalt 9° *Reaum.* *Cancer maja max.* vollendet-ausgezeichnet und zergliedert.

Montags d. 30. Julii. die *Officers* bey uns zu Tische, einen *Kamtschadalen* gezeichnet.

Dienstags d. 31. Julii Die große Krabbe zergliedert. Regen beständig

Mittwochs d. 1 August. *Fuci* aufgelegt. *Clathrus*, *sacharinus*, *Alatus maximus*

Donnerst. d. 2. august. Schellfische und Dorsch zergliedert Zeichnung entworfen

Fasciola Echinorinchi u. *Trichiuri* [] *Ascarides* et *Taeniae* gefunden

Freitag d. 3.

Sonnabend d. 4.

In dem gebundenen Diarium (Stadtarchiv Mühlhausen, Tilesius Bibliothek Nr. 82/291) beginnen die Kamtschatka-Aufzeichnungen auf pag. 30. Sie finden sich in fast wörtlich gleicher Form im hs. Text, der im Berliner Nachlass NL Nr. 9, Bl. 7r bis 10r vorliegt.

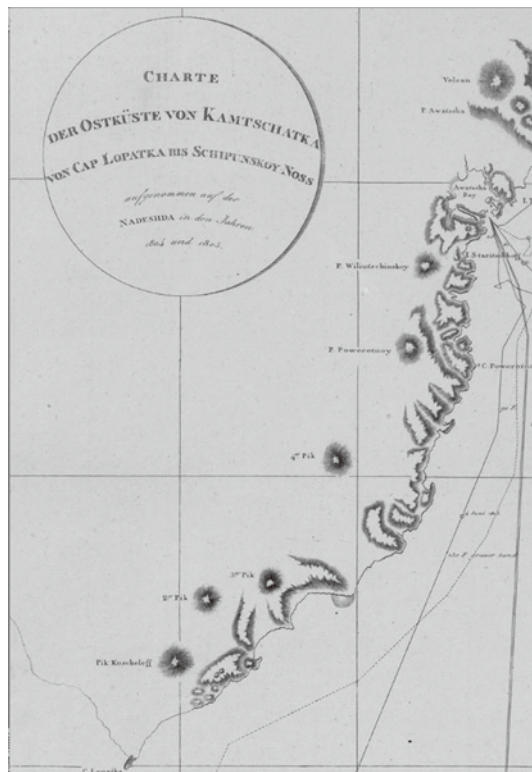


Abb. 2

/30./

Ankunft in Kamtschatka.

Beschreibung des Landes, der Produkte des Havens und einiger wenigen Nationalmerkwürdigkeiten.

Sontags Nachmittags den 15 Julii 1804 giengen wir im Peter-Pauls Haven von Kamtschatka vor Anker. Die Küste[,] welche bergicht und waldigt ist und auch überdieses noch durch den intereßanten Anblick mehrerer rauchender und auch mitten im Sommer immer mit Schnee bedeckter Berge und Vulkane im Hintergrunde die Aufmerksamkeit {eines} jeden Reisenden auf sich zieht, giebt einen malerischen Anblick, und erquickt das Auge durch ihr lachendes und frisches Grün. Eine Menge Fische und Seevögel, besonders Helmenten und Papageytaucher zeigen sich schon beym Eintritt in die *Awatscha bay*. Die rauhen Felsen, die sich nun dem Auge mehr nähern und die großen Maßen von Laven und vulkanischen Breschen, contrastiren mit dem grünen Teppich der Berge auf die angenehmste Weise, nur der erste Anblick der wenigen zerstreuten Hütten im Peter Pauls Haven

schien mir in der Ferne etwas ärmlich. Innerhalb der Bay, welche ungemein gros und ausgedehnt ist, erkennt man den Haven an den 2 stark hervorspringenden kegelförmigen Bergrücken und an der schmalen Erdzunge, welche hier die *Koschka* (d. Kazze) genannt wird, mit 6 bis 8 Trokkenhütten besetzt ist und den innern Raum des Havens einschließt.

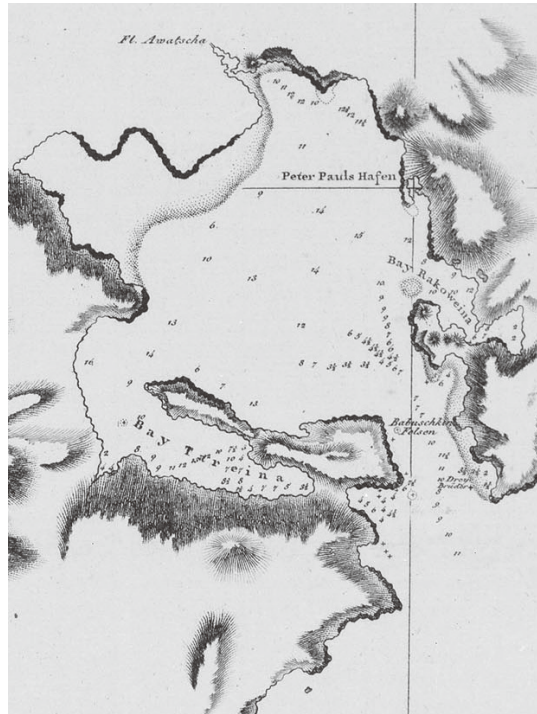


Abb. 3

Die Einfahrt in denselben ist so schmal, daß man kaum glauben sollte, ein großes und schwer beladenes Schiff könne hier in diesem schmalen Raume Tiefe genug finden um ohne Gefahr aufzustoßen, durchzupaßiren. Sie wird von der schmalen Erdzunge, die sich bis zu 50-60 Schritt Entfernung von dem gegen überstehenden hervorspringenden Bergrücken herausstreckt gebildet. Dicht am Ufer in dem Haven selbst stehen die *Casernen*, das Lazarett und die Magazine, alles ärmliche Hütten von Holz (ohngeachtet die letztere 20000 Rubel soll gekostet haben) und von einer Bauart, wie sie in kleinen Rußischen Dörfern zu seyn pflegt, nämlich durch parallel gelegte Baumstämme die sich an den Winkeln der Wände durchkreuzen. Dicht hinter und auch zum [Theil] zerstreut und in einiger Entfernung neben diesen stehen die Soldaten wohnungen. Die Zahl der Häuser im Peter Pauls Haven beläuft sich jezt auf 32. Wenn Fenster an diesen Häusern sind, so bestehen sie /31/ entweder

aus bloßen Luftlöchern oder aus Fischblase oder Seehundgedärmen[,] welche der Länge nach aufgeschnitten aufgespannt und an einander genäht worden sind. Dicht neben den Casernen, welche am Fuße des erwähnten hervorspringenden Bergrückens erbaut sind[,] liegen zum Theil noch ohne Lavetten 20 und mehrere meßingene Kanonen und es ist auch eine Batterie von Rasen hier aufgeworfen, welche aber fast verfallen ist und nicht mehr benutzt wird, zwei andere Batterien befinden sich aber am Eingange in den Haven und bestreichen beyde Seiten der Bay. Die eine befindet sich am Fuße der Koschka oder schmalen Erdzunge [Abb. 7, Nr. 6] und die andere gerade gegen über auf der Einsenkung des erwähnten vorspringenden Bergrückens [Abb. 8, Nr. 1]. Beyde sind leer und man bringt erst, so bald ein Schiff in der Entfernung bemerkt wird, einige gangbare Canonen dahin um zu salutiren. Als wir einfuhren, begrüßte man uns mit 7 bis 11. Canonenschüßen, die sehr gut und regelmäßig bloß aus zweien abwechselnd abgefeuerten Stücken fielen. Bey dem ersten Besuche, den wir von dem milit. Quartiermeister, dem Prikaschik oder Handlungsfactor³⁶ und einem Lotsen erhielten, nachdem wir leztern durch einen Canonenschuß eingeladen hatten, erfuhren wir, daß ein Major³⁷ die Person des Gouverneurs im PeterPauls Haven vorstelle und zu diesem begaben wir uns sogleich nach unserer Ankunft an Land. Er hat die größte und ansehnlichste Wohnung im Dorfe, welche einige Zimmer enthält, in denen Sr Excellenz der Japanische Gesandte abtrat und während der Zeit unseres hiesigen Aufenthaltes hier wohnte. Indefßen ist auch dieses Gebäude nur als eine niedrige Hütte von einem Stockwerke, aber von größerem Umfange und Bequemlichkeit als die übrigen zu betrachten.

Hinter dieser Majors=wohnung fängt sich der waldige Berg bereits {an} allgemach zu erheben. An dem Abhange dieses Berges ohngefähr 20 Schritte hinter der Majorswohnung ist Cpt. Clerk's Grabmal zu sehen, welches aus einem viereckigen hölzernen Kasten in Gestalt eines Schöpfbrunnen Kastens besteht, auf welchem eine kupferne Tafel, wie sie zum Beschlagen der Schiffe gebraucht zu werden pflegen, angenagelt ist. Auf dieser Kupferplatte ist folgende Inschrift in punctierten lateinischen Buchstaben mittelst eines eisernen Nagels und Hammers einpuncirt³⁸ :

At the foot of this tree lies the body of Capt.n Charles Clerke who succeeded of the command of his Britannic Majesty's Ships, the Resolution and discovery, on the death Cpt.n James Cook, who was unfortunately killed by [32] the natives at on Island in the South Seas, on the 14th of February. the Year 1779./and died at Sea of lingering Consumtion the 22 of August in the same

³⁶ Im Englischen meist als supercargo bezeichnet.

³⁷ Damit ist Anton Ivan. Krupskoi gemeint.

³⁸ Die Version lautet bei Krusenstern etwas anders : "At the foot . . . to the command . . . unfortunately . . . at an island in the South Seas . . . in the year 1779"

Year/aged 38.-”

*Copie sur l'inscription Anglaise par ordre de Mr. le C^{mt}e de la Perouse, chef d'Escadre en
Septembre 1787.*

Als Laperouse 1787 hieher kam³⁹ [,] war das Epitaphium so verfallen, daß er ein neues zu errichten für nöthig hielt.

Dicht neben dieser Commandantenwohnung ist die Kirche, eine kleine hölzerne Hütte, neben welcher an statt des Thurmes einige Stangen aufgerichtet sind, zwischen denen einige meßingene Glocken aufgehängt sind, welche die Bewohner des Havens zum Gottesdienst rufen. Der PeterPaul Haven wird von dem Fuße einiger Berge eingeschlossen⁴⁰, welche sich allmählich hinter dem Gebäude erheben und mit fetten Wiesenwachs und dichter Waldung besetzt sind, welche letztere sehr wenig behauen und benutzt wird und in welcher die mehresten Bäume zwerzig und verkrüppelt sind, auch unzählige verdorrte und vor Alters abgestorbene und verfaulte Stämme zu bemerken sind.

Von dem Gipfel dieser Berge herab ergießen sich mehrere klare Bäche, welche nicht nur das Dorf reichlich bewässern, sondern auch hier vor Anker liegende Schiffe mit einem gesunden und wohlschmeckenden Trinkwaßer versorgen können. Rechts hinter dem Dorfe zieht sich ein Thal zwischen den waldigen Berge hinunter, welches von der entgegengesetzten waldigen steilen Wand des erwähnten hervorspringenden Bergrückens begränzt wird. In diesem Thale ist ein kleiner Landsee, auf welchem sich beständig, besonders häufig aber gegen Abend eine [Menge] Möven und Taucher aufhalten, die zum Theil in den schilfigen Ufern deßelben nisten und brüten. Dieser Landsee wird nur durch einen flachen schmalen Erdstrich von dem Ufer der Bay getrennt, der hier hinter dem erwähnten hervorspringenden Bergrücken eine tiefe Bucht bildet, die linkerseits wieder durch einen waldigen steilen Berg begränzt wird, an deßen schmalen Ufer sich der Weg nach der zweiten Bucht, in welcher die {vormalige} Salzsiederey liegt, hinziehet.

Die Salzsiederey besteht aus 2 hölzernen jezt unbewohnten und öden Hütten, die ohngefähr eine gute halbe Stunde weit von dem Dorfe dicht am Seeufer liegen. In der einen Hütte ist die Pfanne {noch} zu sehen, die jezt aus ihrem Bette herausgehoben und so aufgestellt worden, daß sie vom Regen getroffen und vollends vom Roste verzehrt werden kann [s. Abb. 7, No. 1]. Die Ursach dieser Aufstellung war, weil die Pfanne an einer Stelle durchgebrannt {war und ausgebeßert} werden

³⁹ La Pérouse (1741-1788) verscholl mit den Schiffen *L'Astrolabe* und *Boussole* auf der Weiterreise bei den Salomoninseln. Clerke hatte nach Cooks Tod während der 3. Expedition das Kommando der Schiffe *Resolution* und *Discovery* übernommen, bevor er selber an Tuberkulose starb und in Kamtschatka beerdigt wurde.

⁴⁰ Hierher passt die Illustration aus dem Moskauer Skizzenbuch (doppelseitig).

sollte. Sie wartet aber noch immer in derselben Stellung auf die Ausbeberung. Es wollte sich niemand zu diesem Geschäfte verstehen, auch soll das Eisen gefehlt haben. Die umliegende Gegend ist hier sehr angenehm, auch findet sich nicht weit davon ein klarer Bach mit vortrefflichem Quellwaßer.

{Die Fortsetzung folgt X Seite 27.}⁴¹

/27./

Bemerkungen über Kamtschatka

eine Fortsetzung der auf Seite 32. aus Mangel an Raum
abgebrochenen Beschreibung. [x]

[x] In dem Peter Pauls Haven selbst haben wir nur wenige gebohrne Kamtschadalen kennen gelernt, in dem ganzen Dorfe befinden sich ohngefähr 3 bis 4. Die übrigen hatte die Neugierde aus einem nicht gar zu weit entfernten Kamtschadalischen Dorfe herbeygelokt, um das neu angekommene Schiff und die Europäer[,] die der Kamtschadale mit eben so neugierigen Augen angafft wie wir sie, zu sehen. Die Bewohner des Peter Pauls Haven sind Soldaten und zum Theil aus *Ochotzk* zum Theil auch aus *Irkutzk* gebürtig, es sind gröstentheils Huren⁴² die sich höhern und geringern zu jeder Stunde des Tages für etwas Thee und Zucker gern überlaßen[,] ihre Männer sind dem Trunk ergeben und werden dann gewöhnlich durch ihr Lieblingsgetränk, den Brandwein berauscht.

Der allgemeine Nationalzug dieser Leute ist Faulheit⁴³ - welcher nicht selten Begleiter des Mangels ist. Es ist sehr wahr, daß die Lebensbedürfnisse und die kärglichen Naturproducte im PeterPauls Haven unzulänglich sind, um allein ihre Existenz angenehm zu machen und Industrie zu erwecken ; aber sie verlaßen sich ganz auf das, was ihnen jährlich von *Ochotsk* zugeführt wird und haben gar keinen Trieb, durch eigne Anstrengung und Bearbeitung der wenigen brauchbaren Producte, welche ihnen die Natur darbietet, ihre Lage und Existenz zu verbeßern. Arbeit und Mühe ist gerade dasjenige[,] was hier im Peter Pauls Haven am theuersten bezahlt wird. Von allen den Leuten, welche (der Prikaschik) [für] die Amerikanische Compagnie miethete, um die Zucker und Coffefässer die Thee und Waaren Kisten, welche ausgeladen wurden, nach dem Magazine zu transportiren, verlangte und erhielt jeder 5 Rubel Tagelohn[,] der Kost und des Brandsweins gar nicht zu erwähnen. Das Magazin eine ärmliche hölzerne (Hütte), wie man sie in jedem Rußischen Dorfe trifft, kostet die Compagnie 20.000 *Rubel*.⁴⁴ Das Holz dazu kam nebst den Bauleuten mit einem Schiffe von *Ochotzk* hier an.

/28/ Welchen wohlthätigen Einfluß der Waaren Transport und die Ladung unseres Schiffes auf die

⁴¹ In NL 8 ist der Textanschluss fortlaufend.

⁴² Krusenstern spricht von weniger als 25 Frauen.

⁴³ Zur Faulheit der Bewohner vgl. NL 9, 9r. Über die Portugiesen hatte Tilesius Ähnliches gesagt.

⁴⁴ NL 9,9r : "Rubel zu bauen". Das wären etwa 4000 Tageslöhne für einen dortigen russischen Arbeiter.

Waarenpreise und auf das davon abhängende Wohlfinden der Bewohner des Peter Pauls Havens und der umliegenden Kamtschadalischen Dörfer gehabt hat und wie viel diese dem klugen Entwurfe unseres Capt. v. Krusenstern und seiner glücklichen Ausführung zu verdanken haben ; sieht man aus folgender Tabelle der bisherigen Waarenpreise, wie sie mit der Ausladung unseres Schiffes gleich unter die Hälfte herab fallen und bey allem Profit der Compagnie bestimmt festgesetzt werden konnten und musten.⁴⁵

/29./

Der Prediger des Ortes ist kein gelehrter Mann, als die andern Bewohner des Dorfes, er unterscheidet sich von ihnen bloß durch sein stilles schüchternes Betragen, durch sein langes, schlichtes herabhängendes Haar und durch ein seidenes Oberkleid und scheint {sich} auch nicht aus seinem vaterländischen Wohnsitze entfernt oder in einem Rußischen Prediger *Seminario* studiert zu haben, wie man mir sagte so ist er ein gebohrner Kamtschadale. Die National Physiognomie und der Habitus der gebohrnen Kamtschadalen ist ungeachtet sie mit der Asiatischen im Allgemeinen übereinstimmt, dennoch so ausgezeichnet, daß man nicht leicht einen eingebornen Kamtschadalen verkennen kann.⁴⁶ Sie kommen mehr mit den Japanern, als mit den Chinesen überein und machen gleichsam den Uebergang von den Asiaten zu den Europäern [Abb. im 2. Teil]. Ihre Augenlieder sind nicht so flach geschlitzt und nicht so klein als bey andern Eingebornen Asiens[,] doch ist der innere Augenwinkel nebst der Thränenarunkel eben so sehr und noch stärker herab einwärts gezogen. Die Stirn ist breit, noch auffallender aber sind es die Jochbeine, welche hier sehr breite Wangen bilden, zwischen denen Nase und Mund gleichsam versteckt liegen. Bey den Japanern hingegen sind die Jochbeine {und Wangen} nicht so breit, erstere hingegen mehr eckigt und hervorstehend. Die Nase der Kamtschadalen ist klein aufgeworfen, eingebogen, so daß man in die Nasenlöcher hineinsehen kann. Der Mund ist gros, die Lippen mehrentheils aufgeworfen und die Zähne sehr weis und vollzählig. Das Kinn ist klein ; aber die Ober-Lippe oder vielmehr der ganze Raum zwischen Nase und Mund ist gros und hervorstehend auch die Furche unter der Nase ist merklich und auffallend. Der Bug zwischen Stirn und Nase ist tief. Die Augen sind schwarz und glänzend. Das Haar ist schwarz schlicht herabhängend und dicht. Die Augenbrauen sind gewölbt und halb zirkelförmig gebogen (*arcus superciliares distinctea*) die Augen selbst stehen weit auseinander und treiben die Jochbeine dermaßen auseinander, daß der Oberkopf ein sehr breites Aussehen dadurch gewinnt. Ubrigens ist der Kopf aber

⁴⁵ Im Tagebuch folgt keine Tabelle, der Rest des Blattes ist leer. Aber Loewenstern hat eine solche vergleichende Preisliste unter dem Datum 3./15. August 1804.

⁴⁶ Die Vorlage zu den Abbildungen im Krusenstern-Atlas finden sich in den Moskauer "Skizzenbüchern" A und B. Vgl. hiermit den Probedruck mit Tilesius's Kommentar aus der Slg. Tilesius Nr. 82/405, Bl. 1.

abgerundet und nicht wie bey andern Asiaten oben zugespitzt, daher auch das Linneische *Praedicat*: *capite conice*^{*47} nicht wohl von ihnen gelten kann. Die ganze Physiognomie ist weit angenehmer munterer und ehrlicher, als bey andern Asiaten, ihr Blick scheint kindisch und aufrichtig, in ihren Augen liegt nicht die Falschheit und Verstellung[,] die den Chinesischen Köpfen eigen ist, auch nicht das ruhige tiefe Nachdenken und Mißtrauen der Japaner, sondern etwas Einfalt. Ihr Colorit ist zwar dunkel und brunett, doch ist es dabey gesunder und durch die rothen Lippen und Wangen und durch den Reizz der heftigen Winterkälte blühend. Ganz auffallend klein sind ihre Hände und Füße. Sie sind fast durch aus um einen Kopf kleiner als die Europäer[,] zwar dick, untersezzt und stämmig ; aber doch von ungemein gut proportionirten und gewandten Gliedern. Sie sind sehr abergläubisch und haben, ungeachtet sie sich zur griegischen [=orthodoxen] Kirche bekennen, noch eine Menge von Gözzen und abergläubischen Bildern.⁴⁸

Ihr Ton der Stimme ist singend und ihr vieles Zischen, wo mit sie auch selbst das Rußische aussprechen[,] klingt leut seelig und freundlich.⁴⁹

/40/

[...] Der Herr Gesandte, welcher auch zugleich zur Verbeßerung des Handels der bürgerlichen Verfaßung der Industrie usw. von *Kamtschatka* und *Codjac* von dem Monarchen autorisirt seyn soll, hat jezt allerley neue Speculationen und Entwürfe zu Kalkbrennereyen, zum Ersazz verschiedener Baumaterialien, als des Mörtels des Thons Lems der Sand oder Granit felsen, zu Kohlenbrenneyen, zu Salzsiedereyen, zum Ackerbau, zur Oekonomie und zu andern schönen Sachen, die sich in dieser rohen wilden Natur an der Spitze {in der beträchtlichen Entfernung} des nördlichen Asiens und bey so großem Mangel an den nöthigsten Naturproducten und Bedürfnissen nicht so gleich ins Werk richten laßen. Er hat mich täglich und stündlich um nachstehendes Mineralienverzeichnis, welches in der grösten Eile entworfen werden muste, geplagt und bitter gekränkt durch schändliche Vorwürfe meiner Unwißenheit, weil das Verzeichniß, ungeachtet ich alle Gebirgsarten, die sich in Geschieben und Bruchstücken irgend wo fanden, bey den Haren herzu gezogen hatte, seinen Vorstellungen und

⁴⁷ In Linnés *Systema Naturae* in der von Joh.Frdch. Gmelin besorgten 13. Ausgabe (Leipzig 1788) findet sich dieses Zitat im 1. Band, S. 24.

⁴⁸ NL 9,10r ergänzt so : “Manche gute und rühmliche Eigenschaft[,] die man ihnen zuschreibt, beruht auf diesem Aberglauben, namentlich ihre Zuversicht und Muth mit welcher ein einziger Mensch auf die Bären Jagd geht und gewöhnlich sein angeschoßenes Thier das mit voller Wuth auf ihn zurennt, mit einem kaum zu regierenden großen Spieße erlegt.” ~~Auffallend klein sind ihre Hände und Füße.~~”

⁴⁹ Im Berliner NL 9, Bl. 10r folgt hier noch die Bemerkung : “Beyliegende Abbildungen werden hoffentlich die bisher gegebene Beschreibungen beßer versinnbildlichen und das Mangelhafte und Unvollständige derselben ergänzen und berichtigen.”

Im Moskauer Skizzenbuch sind die Vorlagen der Physiognomie-Bilder für den Krusenstern-Atlas zu finden. Beide hat Olga Fedorova im Ratmanov-Werk in Farbe wiedergegeben (Anm. 15) S. 225 und S. 227.

Wünschen nicht entsprach.

/41./

Verzeichniß der vorgefundenen Mineralien auf den beyden
Kamtschadalischen Küsten und Bergrücken, welche den *PeterPauls* Haven
einschließen, in welchem wir vom 15. Julii bis 1804 vor Anker lagen⁵⁰

[...]

/42/

[...]

Wörtliche Abschrift eines *Rapports*, der am 23 Julii 1804 an Sr. *Excellenz*
C[ammer].H[err]. von *Resanof* abgestattet wurde

Ewr Exc. erhalten hiermit den Rapport von den vorgefundenen Steinarten von den beyden Küsten
der *Awatschabay*. Zeichnung und Beschreibung der hiesigen Thiere und Gewächse halten mich jezt
noch {auf *Excursion* und} am Arbeitstische. Sobald Ewr. *Excellenz* aber eine kleinere oder größere
Landreise vornehmen ; so werde ich nicht ermangeln, auf dero *Ordre* von Ihrem Gefolge zu seyn und
Sie werden mich dadurch in den Stand sezen, vielleicht wichtigere Gesteinsarten zu bemerken und
Ihnen gemeinnütziger Anzeigen zu machen, als diese.

Ich bin schon längst nicht mehr im Stande ein Thier in Spiritus zu sezen, weil ich keinen mehr von
H. *Schimlin*⁵¹ erhalte. Daher wollte ich Ewr. *Excell.* nochmals vorstellen und bitten, auf den für die
zoologische Sammlung bestimmten Brandtwein anzuweisen. Der Herr *Capit.* hat die Gütigkeit
gehabt, mir Zeit hero den nöthigen Brandtwein vorzuschießen, um die bereits halb leeren Gläser /43./
wieder einigermaßen aufzufüllen, demohngeachtet aber stehen noch einige Thiere nur halb=bedeckt in
den Gläsern und ich darf jezzo kaum mehr wagen, noch gerne von dieser Gefälligkeit Gebrauch zu
machen, zumal da der Monarch einen eigenen Vorrath von Brandtwein zu diesem Zwecke bestimmt
hat.

Zu gleicher Zeit muß ich auch eine Erinnerung, die meine Pflicht von mir fordert, beyfügen und
diese ist um so nöthiger, je länger ich damit zurückgehalten habe. Bisher d.i. von England und *Tene-*
riffa her ist nie das befolgt worden, was ich von dem Jäger verlangt habe. Jedesmal hat er vielmehr
seine Arbeiten als ein für sich bestehendes Werk betrachtet und versteckt und Thiere, die ich auszu-

⁵⁰ Dies ist der Obertitel auf dem Blatt. Das eigentliche Verzeichnis wird hier nicht zitiert.

⁵¹ Fedor Shemelin (1757–nach 1818) und der weiter unten (pag. 44) genannte Hofrat Fedor Pavlovich Fosse gehören zur RAC-Gruppe um Rezanov, auf die auch Loewenstern immer wieder verächtlich zu sprechen kommt. Fosse stand als ehemaliger Polizeibeamter im Verdacht, Spion der Regierung zu sein, s. Govor (Anm. 4) S. 31 und 34f.

stopfen verlangt hatte, wurden es nicht, neulich verlangte ich von ihm, daß er die hier so leicht zu erhaltenden und für die *Ornithologie* so wichtigen Seevögel abhäuten sollte, er erwiederte mir aber, daß er jezt Fische ausstopfen müßte. Da ich dies für eine bloße Entschuldigung halte, in dem der Herr Dr L[angsdorff]. seine Fertigkeit für diesen Zweig anwendet und Ewr *Exc.* auch auf keinen Fall werden befohlen haben, daß er seine nützliche Thätigkeit von einem Hauptzweige abwende, so bitte ich Ew. *Exc.*, dem Jäger einzuschärfen, daß er künftig das thue, was ich ihm befehle, weil sonst auch meine wärmsten Bemühungen, die naturhistorischen Sammlungen und Bemerkungen intereßant zu machen, einen zum Theil mangelhaften Erfolg haben müsten.

Uiberdieses haben wir hier Gelegenheit, so mancherley Landthiere (*Mammalia*) die für Rußlands Handlungsgeschichte und besonders den Rauchwerkhandel so intereßant und lehrreich sind, zu erhalten, von diesen wünschte ich, wäre es auch nur ein einziges *Exemplar*, wohl conditionirt in die Kaysersl. Natur. Samml. zu liefern und eine genaue Beschreibung zu geben.

Da ich zu wenig Mittel in Händen habe, diese Thiere selbst herbey zu schaffen ; so bitte ich Ewr. *Exc.* mich zum Besten der Wißenschaft durch Ihre Befehle und Volmacht zu unterstützen und dem Jäger und andern brauchbaren Leuten dazu *Ordre* zu geben. Nach *Stellers* Nachrichten⁵² findet man hier Bären, Wölfe, Füchse Rennthiere Zobel Hermeline Antilopen oder Steinböcke, Ottern an Flüssen und Seeufern.

Endlich muß ich auch noch eine kleine Voreiligkeit erinnern, welche vorgestern von H. H. Fossé begangen wurde : Die Mumie des Quansen⁵³, ließ ich, weil Ewr. *Excell.* befohlen haben, daß die *Spirituosa* und andere gesammelte Naturalien von hier nach *Ochotsk* gehen sollen, an Land bringen. Der Kasten mußte vorher geöffnet werden, weil der Steuermann seine Flaggen, mit welchen ich die Mumie, um sie vor den Mäusen zu schützen bedeckt hatte, /44/ herausnehmen wollte. Bey dieser Gelegenheit fand ich die Hand[,] welche mir vom Bürger *Gross*⁵⁴, *commissaire de la Republique francoise* nebst einigen *Echantillons* des gediegenen und krystallisirten Schwefels aus dem *Crater* des *Pic* geschenkt worden waren und welche ich mit in diesem Kasten verwahrt hatte. Da ich bey dem Kasten so lange bleiben muste[,] bis er wieder vernagelt worden war ; so konnte ich diese Hand nicht erst in Verwahrung bringen, sondern übergab sie einstweilen dem Apotheker⁵⁵ {mit dem Bedeuten,

⁵² Bezieht sich auf Georg Wlh. Steller's *Reise nach Kamtschatka* (St.Petersb. 1793) hrsg.v. P.S. Pallas.

⁵³ Die Guanachen waren die ursprünglichen, mysteriösen Besiedler Teneriffas. Um 1800 waren sie bereits ausgestorben. Ihre Grabstätten wurden geplündert. Im Berliner NL Nr. 12 gibt es sechs Blätter mit Aufzeichnungen und 2 Zeichnungen von Tilesius über sie und ihre Mumien. Schon von Teneriffa aus hatte Tilesius am 25 Okt. 1803 in einem Brief an den "Hamburger Correspondenten" darüber berichtet, was dann z.B. in der "Allgemeinen Zeitung" am 18. Dez. 1803 nachgedruckt wurde.

⁵⁴ *Der Franzose* Gross[e?] ist in den anderen Reisebeschreibungen nicht genannt und daher schwer identifizierbar.

⁵⁵ Apotheker oder Subchirurgus war der Engländer Sydham, über den erstaunlich wenig berichtet wird.

daß ich sie so bald wieder abhohlen wollte}. Dieser legt sie nachläßig und offen auf einen Kasten, wo sie die Matrosen bemerken und sie dem H. H. Fossé zeigen, dieser erklärt sie für gestohlenen Guth und nimmt sie ohne weitere Umstände zu sich. Der Apotheker war abwesend, die Hand war sein anvertrautes Gut und die Leute hatten Vermuthungen einer Dieberey dieses ehrlichen Mannes gehört und geäußert. Aber nicht Er blos in den Augen der Gemeinen, sondern auch ich in seinen Augen musten durch diesen voreiligen und unbedachtsamen Eingriff des H. H[ofrat]. F[osse]. in einem diebischen Verdachte erscheinen, und so etwas könnte leicht als eine sogenannte *Injurie* betrachtet werden. Dürfte ich Ewr. Exc. bitten durch dero hohe *Auctoritaet* künftig dergleichen eigenmächtige Eingriffe und Verdruß ergebende Vorfälle zu verhüten.

Ich verharre mit schuldigem *Respect*. Ewr Exc. ergebenster
d. 24. Julii 1804.

/NL 9-14v/ Fische und Würmer

Montags den 24 Julii 1804 wurden einige Schollen *{Pleuronectes flexus}* gebracht[,] unter denen sich eine besondere Art durch ihre breitgesteiften Floßen auszeichnet, ich habe sie nach dem Leben gemalt und sie unter dem Nahmen *Pleuronectes pinnato stricata pinnatus* nach S. Petersburg geschickt. Auf dieser Tafel befindet sich die Ausmeßung und kurze Erklärung beygefügt. Genauer als *Bloch*⁵⁶ habe ich ferner den kleinen Meerstichling *Gasterosteus aculeatus* (mit 3 Stacheln auf dem Rücken gezeichnet), eben so den *Blennius punctatus* vom 3 bis 5ten August. Mit vieler Sorgfalt zergliederte ich hier am 26 Julii 1804 die [...] Seeneßel *Actinia senilis* [...]

/45/

Am 25 Julii machte ich vorzüglich zur Beobachtung und Einsammlung der Tangarten eine große *Excursion* mit *Dr. Horner*⁵⁷, welcher die Landspitzen in der Bucht bestimmte {und} nach dem *Compas* zeichnete. Ich fand einen kleinen rothen schotenförmigen Tang in der Bucht, welcher vielleicht neu ist, ich habe wenigstens nie eine Zeichnung davon gesehen. Die Schoten hatten ein kleines Loch am Stiele. Die häufigsten Arten waren der Zuckertang, der Fadentang, der *fucus laciniatus*, *f. pluca-tus {foraminulosus}*, *lacerus* und *fruticulosus {tubulosus, fistulosus, saccatus, clathrus, alatus}*⁵⁸ [...]

⁵⁶ Marcus Elieser Bloch's (1723-1799) erdumspannende Naturgeschichte der Fische *Systema ichthyologiae iconibus CX illustratum* war ein von Tilesius immer wieder kritisirtes und hs. annotiertes Werk.

⁵⁷ Johann Caspar Horner (1774-1834) war Astronom und somit für Positionsmessungen wie auch die Anfertigung von Karten verantwortlich. Sein jahrzehntelanger Briefwechsel mit Krusenstern ist fast vollständig erhalten. Auch er sammelte Tange, die er später an Experten weiterleitete.

⁵⁸ Es folgen weitere Informationen zum Tang und zur hiesigen Landplage der Mücken.

/39./ Sontags

den 16 Julii und Mittwochs d. 1 August 1804, {den} *Gadus aeglefinas* und *Callarius* Dorsch und Schellfisch gezeichnet und zergliedert. Sie kommen hier unter einigen Abänderungen sehr dick breitköpfig und 2 bis 3 Fuß lang vor[,] haben besonders große Magen und freßen alle hier lebende Lachsarten oder Kothfische. Im Magen selbst finden sich keine Eingeweidewürmer, destomehr aber in dem Gekröse zwischen den zarten Häuten[,] welche die dicken Zoll langen {Blinddärme} ~~Villi Lib-~~ verbinden. Hier sieht man Bandwürmer Spiralwürmer und Fasciolen usw. [...]

/46./

Es kommt hier in Kamtschatka im PeterPaulsHaven im Julii und August besonders häufig vor ein sehr großes Kegelgehäuse *Lepas balanus* oder *Cornubiensis similis*, welches sich gern auf Zuckertang auch auf andere Schalen ansetzt und auf welches sich {wieder} gern die *Actinia senilis* ansetzt. Dieses vielschaalige Thier hat auf dem Boden, wo mit es auf deren Körpern festsitzt, ein Loch, durch welches eine Saugwarze, dergestalt anzieht, daß sie sich dadurch gegen alle Angriffe und Versuche es los zu reißen schüzzen kann. Außer dieser Eigenheit ist es weiter nicht ausgezeichnet als durch seine Größe[,] es erreicht 2 bis 3 Zoll Höhe.

Am 2 August 1804 zergliederte ich zum zweiten male den Dorsch und Schellfisch (*Varietaeten* mit breiten Köpfen und Barthfasern) und fand in ihren *Mesenterio* und Gekröse viele *Fasciolen* *Ascariden* und Bandwürmer.⁵⁹ Dies Besondere ist auf den Abbildungen selbst erklärt.

Am 3. Aug zeichnete ich den *Gasterosteus aculeatus* und den *Blennius punctatus*

Am 4. — die *Koschka* und den Peter Pauls Haven.

Am 5. — verschiedene Stellungen und eigene Beobachtungen, über *Medusa {accita Mull}*

Am 6. — Zergliederungen des großen Seesternes (welches am 13 August {wiederholt wurde.} *Larus Rissa*. [...]⁶⁰

Danach : “Ein weiteres Register erfasster meist maritimer Pflanzen und Tieren.

Vgl. dazu den Artikel von Michael J. Wynne “Marine algae and early explorations in the upper North Pacific and Bering Sea”. In : *Algae* 24 (2009) S. 1-29.

Tilesius sandte viele Proben an Prof. Franz C. Mertens (Bremen) und andere Gelehrte wie Carl Adolph Agardh. Seine Briefe an diese beiden Gelehrten sind noch vorhanden. Einen letzten Versuch der Bekanntgabe startete er 1834 mit der Übergabe seines umfangreichen Tang-Manuskriptes zur Bearbeitung an Philipp Franz Siebold (jetzt in Berlin vorhanden).

⁵⁹ NL9,16r zum 2.Aug. werden die gesundheitlichen Probleme an Bord durch das Essen halbgarer, von Parasiten befallener Fische erwähnt.

⁶⁰ Auf das Stichwort zu dieser Möwenart folgen dann auf pag. 46 Informationen zum Papageitaucher und zwei weitere Stichworte zu Groppen.

[pag.32 unten]

[...]

Dienstags

am 14 August⁶¹ war der General Koscheleff⁶² auf unserm Schiffe zu Gaste, besahe unsere bisherigen Arbeiten und beschenkte mich mit einer Quarzkrystallisation aus dem *Kirkanik* Fluße⁶³, den er auf seiner Reise hieher paßirt war. Der Tag wurde eben so glänzend als froh zugebracht, der Bruder des Generals wünschte die Reise mit uns weiter fortzusezzen⁶⁴.

Mittwochs d. 15 August. sehr warmes Wetter 13° R. Abends wird es jedesmal kühl und neblicht.

/33./

Donnerstag. den 16. August. 1804.

Scolopax punctata, der punktirte Brachvogel oder die graue gesprenkelte Schnepfe wurde heute dicht am Strande geschossen, er wog 5 bis 6 Loth und hatte eine Länge von 8 bis 9 Zoll, stimmte aber nicht ganz mit der Beschreibung überein, welche *Latham*⁶⁵ von ihm giebt. [...]

Heute schwammen um unser Schiff wieder eine große Menge *Medusen* namentlich die schöne *Medusa aurita*, die *Otto Fr. Müller*⁶⁶ in der *Zool. Daniï Vol.* beschrieben und abgebildet hat, auch die *clavata Forsk.* und *cruciata coerulea* [kl. Skizze eines viergetheilten Kreises] und noch mehrere. [...]

[47]

Sontag den 1 *Septembr* 1804. Es wurden schon durch Herbeyschaffung aller Kisten und Bedürfnisse Anstalten zur Abreise gemacht. Der *General Koscheleff* lud uns Abends zu einer Abschiedsschmause ein. Herr *Brikin*⁶⁷ unser bisheriger *Botanicus*, welcher den *Maler*⁶⁸ auf seiner Rückreise von

⁶¹ Loewenstern berichtet von einer harten Konfrontation zwischen Tilesius und Rezanov am Vortag (Montag 13. Aug.), die hier überhaupt nicht erwähnt wird.

⁶² Biographische Informationen zu Pavel Iwanowich Koscheleff (Koshelev), dem schon kurz vor der Abreise Langsdorffs 1806 der Prozess gemacht wurde, gibt es in Alexander Mikaberidze *Russian Officer Corp of the Revolutionary and Napoleonic Wars, 1795-1815* (New York, Savas Beatie 2005) S. 201f. Er war 1764 geboren und starb nach 1828. Auch nach der Strafversetzung bekundete Krusenstern ihm weiterhin öffentlich seine Dankbarkeit für die Hilfsbereitschaft während der Krise.

⁶³ Der Fluss Kirganik mündet von Westen kommend in den mittleren Abschnitt des nach Norden fließenden Kamtschatka-Fluss.

⁶⁴ Koscheleffs jüngerer Bruder Dimitri Iwanowitsch (1784-1807) begleitete die russische Gesandtschaft nach Japan, blieb nach der Rückkehr in Kamtschatka, wo er bei einem Unfall ums Leben kam.

⁶⁵ Johann Lathams *allgemeine Uebersicht der Vögel. Aus dem Englischen übersetzt... von Johann Matthäus Beststein.* Nürnberg 1796, 3. B., 1 Th. S. 102 zum Brachvogel (vgl. NL 9,17r). Auch Langsdorff besaß das Werk an Bord.

⁶⁶ Otto Friedrich Müllers Medusen-Forschungen in *Zoologicae Danicae Prodromus* (Havnae=Kopenhagen 1776) waren auch für Tilesius' eigene Laufbahn prägend, angefangen in Portugal über seine Dissertation bis zu dem langen Artikel in den *Naturhistorischen Früchten* (St. Petersburg 1813) S.1-108, und später.

⁶⁷ Fedor Petrovich Brikin nahm sich bald nach der Rückkehr zu Land in St. Petersburg das Leben, siehe Govor (Anm. 4) S. 26f.

⁶⁸ Stepan Semenovich Kurliandtsev (1770-1822) hatte beim Abgang vom Schiff seine Kajüte total zertrümmert. Von seinen auf der Weltreise gezeichneten Bildern hat sich bis heute nichts wieder auffinden lassen, s. Govor

hier nach *S Petersburg* begleitet, erzählte mir die Geschichte der famösen Ursachen und geheimen Triebfedern, die ihn zu der Trennung von uns nöthigten und versicherte mich, daß nicht blos das Mitleiden an der nicht {so} gefährlichen [Nierenstein-]Krankheit des Malers ihn zu diesem Entschlusse bewogen hätten, sondern, daß er vielmehr auch ohne den Maler abgereiset seyn würde. (*merito!*)

Montag d. 2 Septembr 1804. Abschiedschmaus auf unserm Schiffe.⁶⁹

Der *Capitaine* ließ sowohl dem *General* als dem Gesandten zu Ehren beym Abgange vom Schiffe 11 *Canonen* abfeuern und von den Matrosen auf den Masten ein {3maliges} *Hurrah* ruffen.

Dienstag den 3 Sept. war ich den ganzen Tag über mit Abschrift einiger Beschreibungen und Bestimmungen neuer oder merkwürdiger Thierarten[,] deren Abbildungen ich in den beyden erwähnten Rollen einschickte, beschäftigt, es war ein trüber regnichter Tag. Abends ließ der Gesandte an's Schiff sagen, daß er aufgebracht sey, weil ich ihm keine Visiten mache und befahl gleichsam, daß ich andern Tages ganz früh zu ihm an Land kommen sollte, ohngeachtet er mit mir selbst nichts zu sprechen hatte, sondern blos die Rolle mit den Zeichnungen haben und mit mir zanken wollte.

Mittwoch den 4 Sept.⁷⁰ Also ganz früh gieng ich mit meiner Rolle Zeichnungen, um keine Veranlaßung zu neuem Verdruß zu geben an Land, um dem Gesandten die Rolle Zeichnungen, auf die er im Grunde eben so wenig, als auf mich selbst ein Recht hatte, zu übergeben[;] aber wie fuhr mich dieser Mann an, als ich ins Zimmer trat ; es waren der *General* und seine Ganze Gesellschaft zu gegen und das war hinlänglich, um diesen Versuch[,] den der H. Gesandte um mir künftig befehlen zu wollen, machte, {zu} vereiteln ; ich sagte ihm ziemlich determinirt in Gegenwart des *Generals* und aller *Officers*[,] daß ich keine andern Befehle, als die ich bereits seit einem Jahre mit meinen *Engagements* Papieren in der Tasche führte und als freyer Mann bewilligt und anerkannt hätte, respectiren und befolgen würde, und daß es der Herr Gesandte weder in *Japan* noch in *Kamtschatka* noch auf irgend einem andern Plazze es versuchen sollte, mich mit solchen schändlichen und erniedrigenden Zumuthungen zu mißhandeln, wenn er sich nicht eine Klage, die ich gegen ihn bey dem Monarchen erheben würde, aussetzen wollte. Hierauf zog der Herr Gesandte gelindere Saiten auf und suchte seinen absichtlichen und prämeditirten Fehlgriff, so gut es gehen wollte, zu bemänteln. Indeßen konnte ich

(Anm. 4) S. 33.

⁶⁹ In Loewensterns Tagebuch sind diese Ereignisse auf den 1. Sept. 1804 datiert.

⁷⁰ Der zeitlichen Abfolge gemäß gab es lt. Loewenstern am 24.VIII. einen auf Französisch vorgelesenen Brief, der dann durch den Gouverneur für Rezanov ins Russische übersetzt wurde. Bei Loewenstern folgt am 25. VIII. der Streit mit Rezanov wegen der Vogelliste.

dennoch nicht ver-/48./ verhindern, daß er, in dem er diesen Angriff auf mich wagte, etwas begieng, was noch mehr den *General Suchtelen*⁷¹, als mich beleidigen muß. Meine Rolle hatte ich, wie es Höflichkeit und Anstand von mir verlangte, und wie es meine Pflicht war, an den H. *General Suchtelen* adreßirt, diese *Adresse* vernichtete der Gesandte sogleich {eigenmächtig} und krazzte sie gewaltsam mit seinem Federmeißer aus und überschrieb an statt der französischen Aufschrift mit einer Rußischen[,] die an den Präsidenten der *Academie* d.W. H.v. *Nowosiltzow*⁷² gerichtet war. Sowohl der *General* als die *Officirs* und auch die zurückreisenden Herrn, der H. C. *Brikin* und Graf *Tolstoi*⁷³ waren Zeugen dieses wider rechtlichen Verfahrens ; doch wagte es niemand, ungeachtet ich gar sehr dagegen protestirte, ihm Einhalt zu thun - und die Rolle wurde dem Herrn *General Koschleff* zur Absendung übergeben. Welchen Eindruck und Verwirrung diese Begebenheit machen wird, bin ich neugierig zu erfahren. H. *Nowosiltzow* wird aus dem Inhalte des Briefes sehr bald erkennen, daß ich die Zeichnungen und das Ganze nicht an ihn geschickt habe noch an ihn adreßiren wollte und daß ich an den Herrn *General Suchtelen* schreibe, warscheinlich wird er die Rolle diesem Herrn sogleich zuschicken und ihm seine Vermuthung eines begangenen Versehens und dieser daher entstehenden Verwirrung wegen mittheilen - Doch dem sey, wie ihm wolle, an mir liegt die Schuld derselben nicht. Ich wünschte nichts mehr, als, daß meine Arbeiten, seyen es auch wirklich nur Skizzen und Bruchstücke⁷⁴, von einsichtsvollen und sachkenntnißreichen Männern wie es der Herr President und die Herrn Academisten v. S Petersburg seyn müßen, gesehen und beurtheilt werden ; doch habe ich nicht das Recht, mich ohne Einladung und mit so mangelhaften und unvollendeten ungefeilten Bruchstücken, als es meine aufgeraften und eingesandten Bemerkungen und skizzirten Zeichnungen sind[,] vor eine so respectabele Gesellschaft hinzu stellen und {mich} gleichsam unverschämt in einem solchen Aufzuge {selbst} hinzuzudrängen, in dem ich gar wol weiß, daß man nur mit einer wohlgearbeiteten und fleißig ausgefeilten Abhandlung wie sie einst *Steller* /49./ von *Kamtschatka* nach *S. Petersburg* einsandte, vor einer gelehrten Gesellschaft erscheinen darf. Wollen der Herr *General Suchtelen*, {von} dem ich oder durch deßen *Protection* und Anordnung meines *Engagements* ich eigentlich in Rußische Dienste getreten bin und durch deßen speziellen Befehl, Ihm von mir

⁷¹ Zu Suchtelens Nachlass s. Bf. von Krusenstern (Russisches Militärarchiv Moskau Font 93, 1, 426, 1r+v, 2r+v). Vielleicht finden sich in anderen Teilen seines Nachlasses weitere Dokumente von Tilesius.

⁷² Nikolay N. Novosiltsev (1768-1838) hatte von 1803 bis 1810 als Präsident die Oberaufsicht über die Akademie der Wissenschaften

⁷³ Graf Fedor Ivanovich Tolstoi (1782-1846), berüchtigter Duellist und entfernter Vorfahr des berühmteren Schriftstellers. Er hatte sich auf Nuku Hiva ein auffallendes Tattoo anfertigen lassen. Vgl. bei Govor (Anm.4) S. 31f. und Nikolai Tolstoy : *Das Haus Tolstoi-Vierundzwanzig Generationen russischer Geschichte (1353-1983)*. Deutsche Verlags-Anstalt Stuttgart 1985. [The Tolstoys <dt.>.] hier S. 155-184 und Anm. S. 472-474

⁷⁴ Vgl die Ergänzungen in Berlin NL Nr. 10 (lat. Liste der in Petersburg am 1. Mai 1805 gelesenen "Definitiones descriptionis et annotationes animalium" und Beschreibung von brasilianischen Tieren).

schriftliche Nachrichten zu geben, ich gewißermaßen verbindlich bin, nur allein an Ihn zu adreßiren, meine eingesandten Bruchstücke der *Academie* vorläufig privatim mittheilen ; so kann dies ohne meine eigene Mitwirkung nicht anders als ehrenvoll für mich seyn, weil Seine *Excellenz* gewiß nicht unterlaßen {werden} mich zu entschuldigen und die Hinderniße und Lagen, in denen ich arbeitete, zu schildern : wenn sie [=Sie] es für gut befinden sollten, die Herrn Academisten mit meinen kleinen Beyträgen bekannt zu machen. Uibrigens habe ich auch meinerseits nichts vernachläßigen wollen, um der *Academie* meinen Respect und Hochachtung zu bezeigen, darum habe ich Sr. *Excellenz* {dem} H. *Praesidenten* v. *Nowosiltzow* meine schriftliche Aufwartung gemacht und Ihn vorläufig von meiner Person und Geschäften benachrichtiget.

Da die Ideen und zum Theil auch Ausführungen derselben[,] womit Sr. Exc. der Herr Gesandte der Naturgeschichte ihre Aufmerksamkeit würdigen, der Wißenschaft gar nicht vortheilhaft sind ; so halte ich es auch besonders in diesem Falle für meine Pflicht, mich an die Punkte meines *Engagements*⁷⁵, in welchem der Nahme seiner *Excellenz* {des Herrn Gesandten} noch eben so wenig, als die Verbindung {und *Subordination*}, unter welcher ich bey der Gesandtschaft stehen sollte, mit keiner *Sylbe* erwähnt wird, zu halten und {auch} die *Sanctionierung* dieser *Contracts* Artikel eben so unverbrüchlich zu wahren, als sie von dem Herrn Gesandten aus den Augen gesezt und verachtet werden. Mehrmals schon ist mir der Antrag geschehen, daß man diesen *Contract* vernichten und einen weit vortheilhaftern mit mir abschließen wolle. Mehrmals schon ist mir versichert worden, daß ein Gesandter, welcher die Person des Monarchen unter uns vorstellen soll, auch seine unumschränkte Macht habe. Ich habe dagegen nichts einzuwenden gehabt, als 1) seine *Exc.* sey nicht in meinen Artikeln als mein Befehlshaber genannt 2) solle nur in Japan von den Japonesern als Person des Ruß. Monarchen angesehen werden und 3) mein *Contract* sey unmittelbar auf Befehl des Monarchen von Seinem Gesandten in Sachsen⁷⁶ mit mir abgeschlossen worden und könne demnach nur auf *Special*Befehl des Monarchen wieder vernichtet, ich selbst aber zu keinem neuen *Contract* und Befehl gezwungen werden, weil sich die Begriffe befehlen, gehörchen /50./ mit den Begriffen, *Contract*, *accord*, Bewilligung nicht vertragen. Daß aber Sr. *Excellenz* der Herr Gesandte abgeneigt ist, meinen *Contract* zu

⁷⁵ Zum Engagement vgl. den in Voigt's *Magazin für den neuesten Zustand der Naturkunde* publizierten Artikel 1803, VI. Bandes 1.St. Juli 1803 "Auszug eines Briefs des Hrn. D. Tilesius an den Herausgeber, dessen Reise um die Welt betreffend. Mühlhausen den 1 Aug. 1803." S. 91-93. In diesem Auszug werden die Bedingungen des frz. Vertrages mit dem Russ. Minister General Chanikof (=Canikoff) vom 16. Jul. 1803 in Dresden ausführlich vorgestellt.

⁷⁶ Der General Basilius von Canikoff (1752-1829) war in Sachsen als russischer Gesandter aktiv. Bezüglich einer Anfrage Krusensterns nach diesen "Chanikoff" Ende 1825 charakterisierte Tilesius ihn als "wie ein ehrlicher Mann - kalt d.h. wie einer, der nicht Lust hat etwas zu versprechen was er nicht zu halten gesonnen ist." (Tilesius-Slg, Nr. 82/515, Bl. 5v).

billigen und die Artikel deßelben zu halten, befremdet mich nicht so sehr, als die Veränderlichkeit, mit welcher dieser Herr {selbst} zu sprechen und zu handeln pflegt. Nicht selten hat er mir heute abgeleugnet, was er mir gestern versicherte, nicht selten mir etwas {heute} eingeschränkt was mir noch vor wenigen Stunden unbedingt bewilligt worden war, nicht selten sein Ehrenwort mit der Versicherung, es nie gegeben zu haben, zurückgenommen und bey der geringsten Aenderung der Umstände auch anders gesprochen und gehandelt, wie vorher ; ich glaube bemerkt zu haben, daß der Metallreiz keinen geringen Einfluß auf diese Veränderungen gehabt habe und daß der Mangel eines diesem hohe Range angemessenen Ehrgefühls veranlaßt habe, daß man dergleichen Einflüssen und anziehenden Reizen zu wenig widersteht und zu leicht nachgiebt.

Vielleicht kann man sich auch daraus erklären, warum der kleine Aufsatz⁷⁷, den ich bey Gelegenheit der {von dem Gesandten} beschloßenen Hemmung und Unterbrechung unserer Reise um die Welt, als Vermittlungsbrief dem H. *General Koschleff* übergab, welcher ihn nebst seiner unvorgreiflichen Meinung dem Herrn Gesandten übergab, so wenigen Eindrücke auf letztern gemacht und so geringe Veränderungen in dem Betragen dieses Mannes gegen mich zur Folge gehabt habe. Ja ich muß {dem zufolge} so gar befürchten, daß ich ungeachtet meiner Beständigkeit in meinen Aufrichtigen Aeuserungen gegen diesen Herrn und ungeachtet der anhaltenden Vertheidigung meines *Contractes* und der mir in demselben zugesicherten Rechte, dennoch noch manchen Sturm von Erniedrigungen und Befehlen und Zumuthungen werde zu erwarten und abzuhalten haben.⁷⁸ [...]

/51./

Nach dem erwähnten Streite, den ich mit dem Herrn Gesandten hatte, gieng am 4 Sept. alles, was die Reise nach *Japan* mitmachen wollte, an Bord des Schiffes. Ich nahm Abschied von Herrn *Brikin*, dem Maler und von dem Grafen *Tolstoi*, welchem ich meine goldene Uhr zum Andenken gab, er schenkte mir 2 Tischtücher. Wir konnten heute nicht absegeln[,] denn als wir auf dem Schiffe ankamen, so hatte sich ein widriger Wind eingestellt und einige Herren giengen wieder an Land und blieben noch einen ganzen Tag und eine Nacht daselbst, bis sie früh {um 7} der Canonenschuß weckte und ihnen meldete[,] daß wir unter Seegel gehen wollten. Tags zuvor hatte uns der Herr *General Koschleff*, deßen Herr Bruder mit nach *Japan* geht, noch einmal besucht, bey seinem Abschiede wurden 13 Canonen abgefeuert, wir kamen, weil uns der Wind bald wieder ungünstig wurde, kaum bis an die 3 Brüder (3 steile Felsen am Eingange in die *Awatschabay*)⁷⁹ [,] wo wir wieder vor Anker gehen

⁷⁷ Vielleicht sind die vorausgehenden Passagen gemeint, die wie die Abschrift einer Beschwerde wirken.

⁷⁸ Auf pag. 50 folgen hierauf Hinweise zur Möwenart *Sterna stolidus*.

⁷⁹ Beeindruckender als Tilesius' Zeichnungen der 3 Brüder sind moderne Fotos.

musten. Es regnete beständig.

Freytags den 7 September 1804 giengen wir wirklich in See[;] es wurde bald stürmisch und es stellte sich daher bey unsern neuen Gästen und auch bey uns eine fast allgemeine Seekrankheit ein.

[...]

/35/

Auf Folio Royalformat. Verzeichniß der Abbildungen, welche am 1 September 1804 in einer Rolle von Kamtschatka nach Petersburg abgeschickt worden sind, durch den Gesandten, Kammerherrn von Resanow.

[...]

Zu diesen Abbildungen hätte [=hatte] ich hinzugefügt einige Beschreibungen der merkwürdigsten Thiere als 1. des Coti (*Viverra Nasualis*) s Brasilien. 2) Des Affen *Cerpopithecus Cynamilgus* L) s Brasilien, 3) der gehörnten Kröte (*Rana cornuta* L.) s Brasilien 4). des Meerschampingons (*Cometa Bras.*) welcher ein neues *Genus* bildet. 5) des *Cayman* oder amerikanischen Crocodills (*Lacerta alligator* L.) s Brasilien 6) der großen Teufelskrabbe aus Kamtschatka (*Maja maxima*) und des brasilischen Waßerschweins (*Cavia Capibara* L.) Auch waren noch kurze Bestimmungen und Beschreibungen mehrer kleiner Krabben beygelegt, unter denen sich mehrere neue Arten befanden, als *Cancer globulus* vom *Cap Frio* *Cancer vocans, scaber, rostratus, marmoratus, pisum etc.* Mehrere der hier beschriebenen Thiere befinden sich abgebildet in der auf der folgenden Seite verzeichneten Sammlung von Zeichnungen in Quartformat, die ich durch den Herrn *Capitaine v. Krusenstern* an H. *General Suchteln* schickte.

/36./

Verzeichniß der Abbildungen in {*Folio*} Quartformat, {und Octavblättern} welche in einer andern Rolle durch den Herrn C. v. Krusenstern an den Herrn *General v. Suchteln* am 2 *Septembr* 1804 von *Kamtschatka* nach *Petersburg* sind abgeschickt worden.⁸⁰[...]

/37./

[...] Um seiner Frau Gemahlin mit der Ansicht dieser neuen und merkwürdigen Gegenstände ein Vergnügen zu machen hat sie der H. *Capit. von Krusenstern* unversiegelt an seine Frau Gemahlin geschickt und sie gebeten, diese Sachen hernach an den H. *General v. Suchteln* zu befördern. Außer-

⁸⁰ Vgl. die etwas abweichende Liste in Voigt's *Magazin* 1805, IX. Bandes 5. St. S. 442-446.

dem hatte ich auch noch ein Heft Beschreibung und Abbildung der unter den wilden Völkern in *Brasilien* und der Südsee beobachteten Hautkrankheiten und noch ein anderes Heft über Nationaltänze und Gesänge der *Marquezas* Insulaner auf *Nukahiwah* und *Kamtschatka* nebst der Music für's *Fortepiano* gesezt für *Madame von Krusenstern* beygelegt. So lange unser *Maler Stepan Semenowitsch* noch bey uns war (d.h. bis *Kamtschatka*) und als ein vollkommen gesunder Mann seinem Amte vorstand, hatte ich als *Naturalist* noch keine Verbindlichkeit, dem Monarchen Abbildungen von Gegenden Nationaltrachten, Ceremonien, Gruppen und eigentliche Gemälde zu liefern, welches ich auch im strengen Sinne des Wortes als bloßer *Dilettant* der Kunst nie im Stande seyn werde - Doch hatte ich auch damals einiges, was mir interessant schien und meiner Liebhaberey für die Landschaftsmalerey und für Physiognomik schmeichelte, gezeichnet, womit ich dem Herrn v *Krusenstern* ein Geschenk machte, es waren Gegenden von der *Insel S. Catharina* in *Brasilien* und von *Teneriffa* und *Nukahiwah*, einige Phänomene und Köpfe. Diese hatte der H *Capitaine von Krusenstern* in derselben Rolle nebst seinem bisherigen Tagebuche an seine Frau Gemahlin geschickt. Da nun aber der Maler von unserm Schiffe abgegangen ist, und sein Amt nicht wieder besezt werden kann ; so habe ich bey mir selbst beschloßen, alle merkwürdigen /38./ Gegenstände unserer Reise, so viel es meine geringen Kenntniße in der Malerey erlauben, aufzufaßen und für das Werk {oder den Atlas} {des Capitaines} aufzubewahren. Es wäre ein unersezzlicher Verlust, gerade die Abbildungen als den instructivsten und wichtigsten Theil der historischen geographischen anthropologischen und überhaupt kosmologischen Bemerkungen auf unserer Reise um die Welt einzubüßen, und dieser Verlust wäre ja ohne diesen meinen Entschluß ganz unvermeidlich, da uns der Maler verläßt. Daß dabey freylich die Naturgeschichte nicht mehr so sorgfältig bearbeitet werden kann, wie bisher, wird jeder leicht einsehen, der beurtheilen kann, wie viel Zeit die Gemälde kosten, zumal wenn der Künstler nicht *ex professo* Maler sondern bloßer *Dilettant* der Malerey ist. Doch werde ich auch wol dafür Sorge tragen, daß mir kein wichtiger Gegenstand der Naturgeschichte entgehe.

Außer den vorstehenden Verzeichnißen habe ich auch noch ein Verzeichniß der brasilischen und Marquesanischen Vögel, welche der Herr Gesandte und der Jäger {vor mir} bisher sorgfältig versteckt gehalten hatten, entworfen, wovon eine Copie unter meinen Papieren liegt. Ich hätte dies nicht abzuliefern nöthig gehabt, ich wollte aber dennoch ein Unrecht lieber mit einer Bereitwilligkeit und Gefälligkeit erwidern, ungeachtet der Herr Gesandte erst 2 Tage vor der beschloßenen Absendung der Vögel mich um die Bestimmung derselben in *Kamtschatka* ersuchte zu einer Zeit, wo ich lieber meinen Eltern und Freunden einige Briefe geschrieben hätte. Ungeachtet dieser meiner vielen Aufopferungen aber habe ich dennoch immer Undank erfahren müßen.

Aus dem Verzeichniße der *skizzirten Abbildungen*[,] welchem zugleich die Tage an welchem sie entworfen wurden beygefügt sind, kann man ersehen, wie ununterbrochen und unermüdet ich in Kamtschatka fortgearbeitet und daß die ungerechte Behandlung auf mich und meine Pflichten gegen die Wißenschaft nicht den geringsten Einfluß gehabt habe.

[Im Tagebuch folgen die Nachrichten von der Gesandtschaftsreise nach Nagasaki und der Rückreise nach Kamtschatka, wobei ein Zwischenstop auf Hokkaido und Süd-Sachalin erfolgt (ab Bl. 119 Notizen zu Sachalin bis Ende May 1805).

Ab 3. Juni 1805 befindet sich die *Nadeshda* in der Nähe der Küste (Extrablatt VIII, nach pag. 122).



Abb. 4



Abb. 5

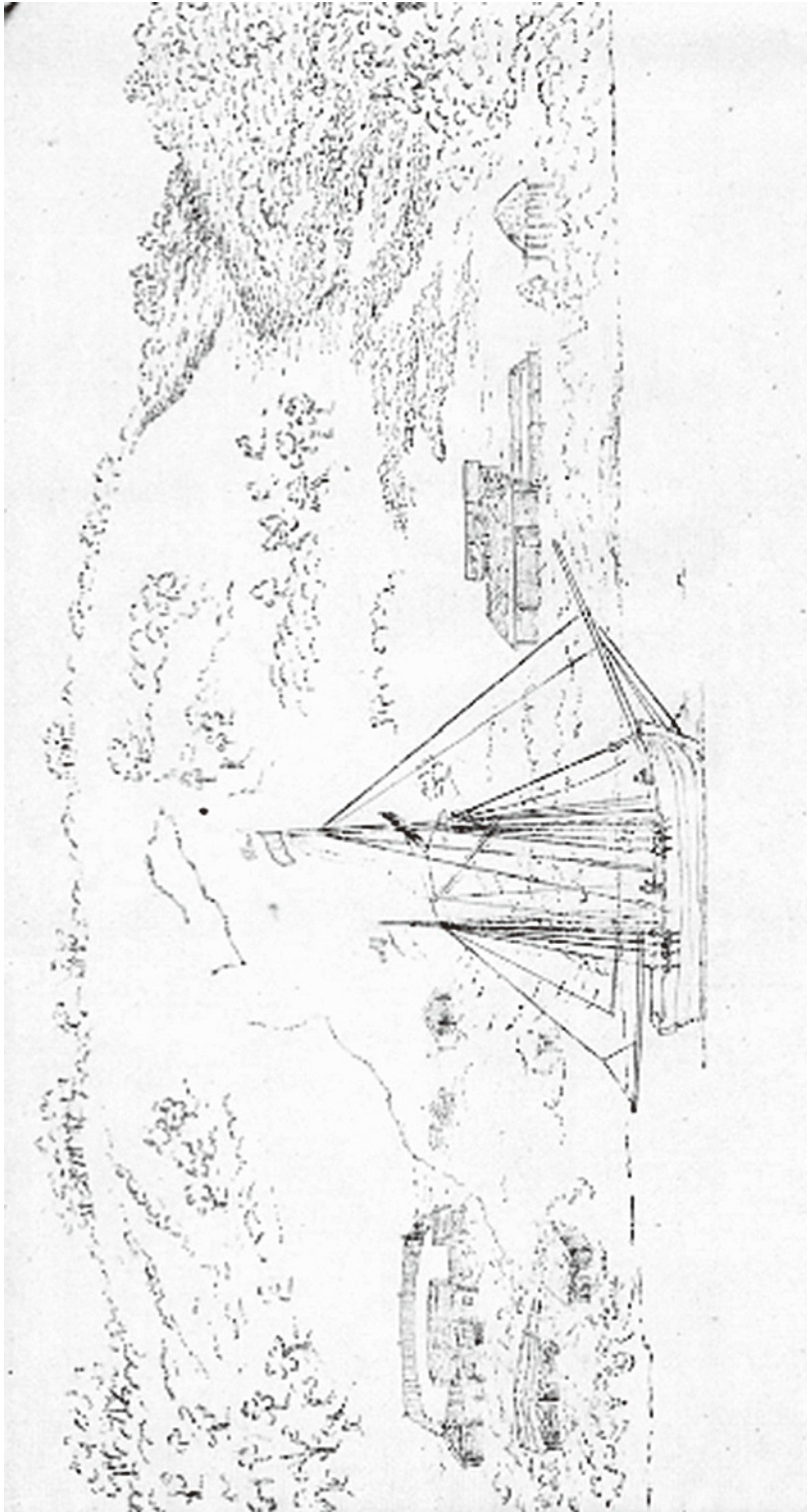


Abb. 6 Schaluppe im St. Peter Paul Hafen vor der neuen Batterie

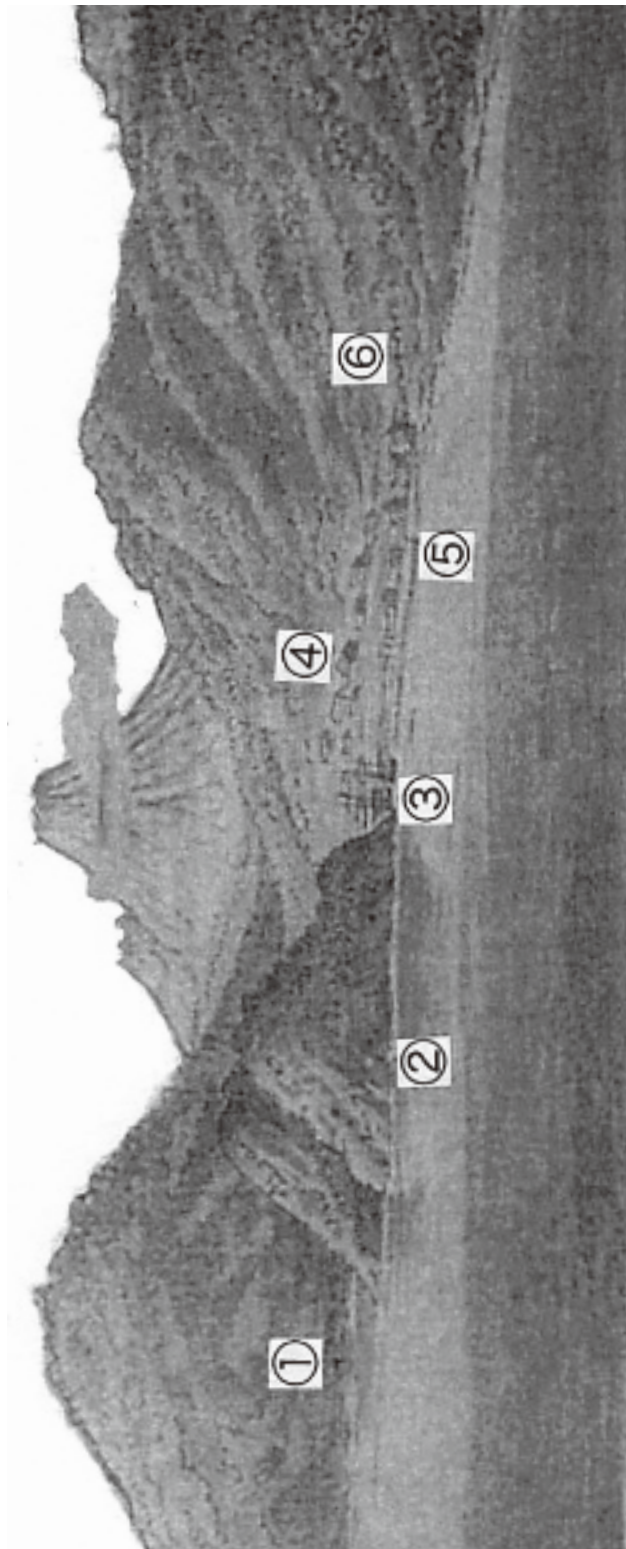


Abb. 7 Fernsicht vom Hafen in der Awatschabucht : 1. Salzsiederei 2. Landspitze vor Kegelberg 3. Nadeshda im Hafen 4. Kommandantenhaus 5. Koschka 6. die alte Batterie 7. Friedhof beim Paguna Retschka Fluss

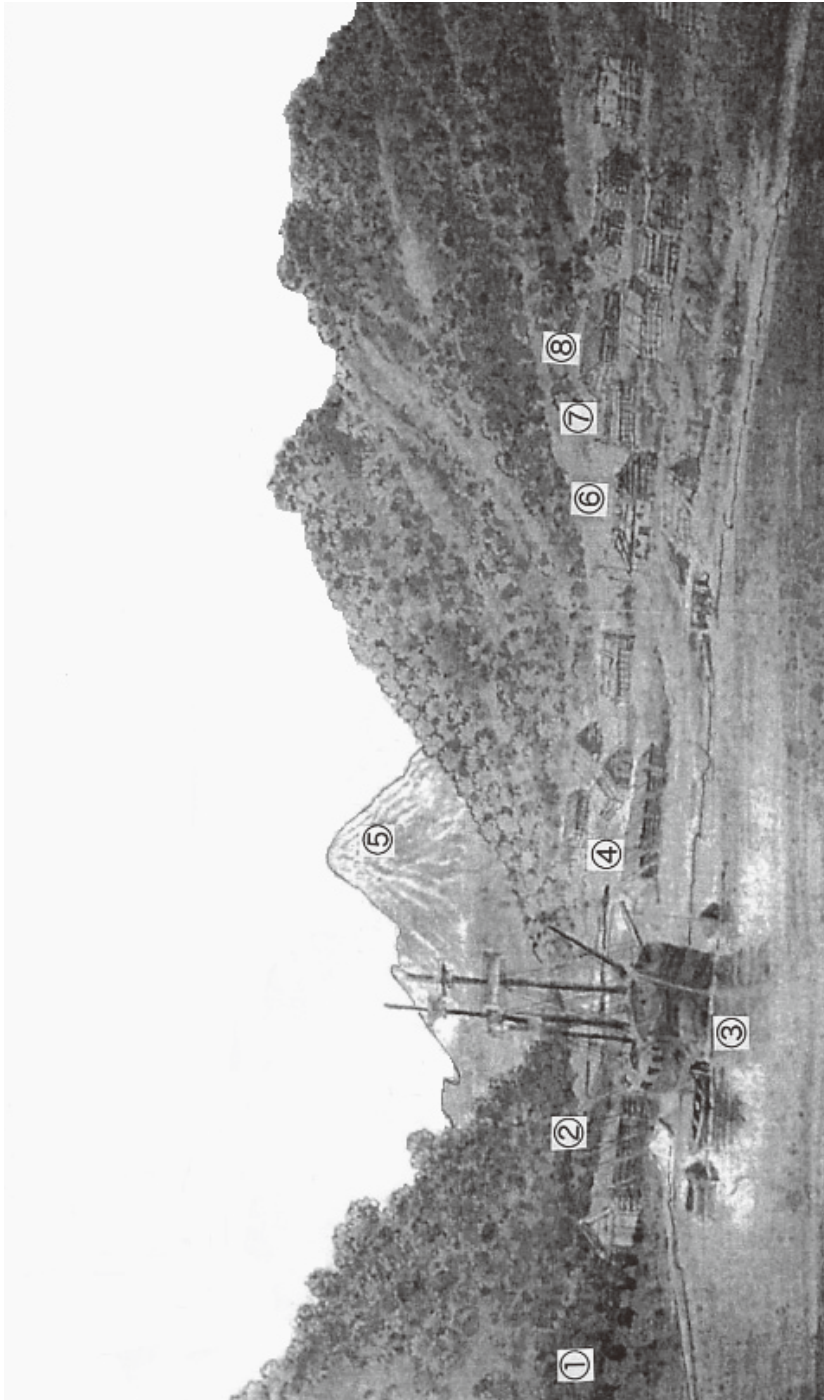


Abb. 8 Im Hafen von St. Peter-Paul: 1. Neue Batterie 2. Kasernen 3. Nadeshda. 4. das Lazareth 5. Awatschinska Sopka
6. Kommandantenhaus 7. Kirche 8. Warenlager (RAC)

【論 文】

ルートヴィヒ・ホール『覚書』を読む 思索と表現 2)

吉 用 宣 二

表現

1 表現は思索と等価である

アドルフ・ムシュクは、「ホールの作品を読む際に人が出会うのは、人が意味を授かった存在として自分に負っているすべてのものの想起である」¹⁾と言う。ホールは、生から思索とその表現を要請されていると考えた。ムシュクはホールの中に「書くことが必然的なものを意味しているそのような人」を見る。「ここで誰かが彼の言語のために一つの形式を探していた。彼が思っていた特別な人間にふさわしい形式を」²⁾。

ホールは、「価値は至る所で同じである。すべての行動においてただ外部に向かうことが重要なので、まさにこの形式困難がある。形式は外部である」(II/98)と言う。価値はそれぞれの時代、状況にふさわしい形で表現されなければならない。ホールの場合、彼が考えたことを、それに等価な形で表現することが重要である。ホールにとって思考と書くことは等価である。「私の鉄筆の中には鉛がある。極度の正確性、完全な妥当性が達成されなければならない」(VII/151)。「私の言葉、それは私によって責任を負われたという意味である」(I/8)。

ホールは言語表現について体系的に語らない。彼の方法は、個別の事柄に関して思考が火花を放つという具合である。本稿はその全体に散種された思索をホールの言語表現の方法という点で描こうとしている。その記述の線が私の「解釈」となる。広大なテキストの海の中を私はこのような航路を描いて横断した。

価値を伝達してきたのは言語である。「私は人間社会にとって、書くことの法外な意義、そして遡りながら、語ることの法外な意義を見る。というのは、一つの書かれた考えの上に、例えば10の語られた考えが後に成長しないか。そうして全体として、万有の闇の中から一

¹⁾ Mushug, Adolf: Ludwig Hohl. Schreiben als Forschung. In: Ludwig Hohl. Frankfurt am Main (suhrkamptaschenbuch materialien. st 2007) 1981. S.132

²⁾ Mushug: Ebd. S.130

つの差異化が、知が、行為が成長してくる。人間は関与的に、進歩しながら、力あるものとなる」(III/3)。言語は価値を伝達してきた。そして言語はそれと同時に言語を伝達してきたのである。価値が言語的に伝達される際に、言語表現の可能性が探求され、広げられてきた。この経過は平行に進行する。過去の価値を読み取ることは、その言語的表現を読むことと等価である。「思索」で述べた事柄はそのまま「表現」にも妥当する。

「知恵の事柄においてはただ、一つのすでにあったものに再び到達することが問題である」。それは「科学的な認識を可能な限り最高に満たすこと」である。「君の意識の生でもって。 - 意識からやってきて、意識の方へ行こうと努める生、意識の多くを持っている生でもって」(「47 到達可能なものと到達不可能なものについて」。『ニュアンスと細部』)。「遺産。それはただ、人が似たように体験すること、あの男の文の中に表明されないものを再発見することによってのみ可能である。 - 人が総体からあれらの文を再び形成することができ、それでもって、同じ苦勞をして、相応する新しい文を形成することができることによって。 - 人が自分の力で一つの大きな近さに達したならば、その時、火花がこちらに飛ぶ」(II/203)。

過去の文、表現のアーカイブを検索し、その表現を「意識の生」でもって満たす。それは模倣ではなく、創造的なパラフレーズである。過去の表現の遺産と現在の一回的な個が衝突する。「一つの直接的な表現。偉大な芸術作品はそれである。その中に過去の中からの一つの堅固な部分も見出されない、一つの表現だけが直接的であることができる。たしかに表現する人は過ぎ去ったものを受け入れた、しかし彼はそれを完全に輝きで満たした、液状にした(過ぎ去ったものは、流動化されている)。その結果彼は正確に、彼の必然性を満たすものだけを流させることができる。すべては奉仕する」(V/8)。

その表現は、容易なことではない。「苦境の中でただわずかの人たちが言葉の強さに向かって立ち上がる。その時、彼らは聞くことができる、語ることができる、偉大な芸術家たちは常にそのような苦境の中にいた」(V/23)。

2 方法 読む 読者 批評

表現は今まで表現されてきたものとの関連においてしか判断されない。価値が、今まで生きてきた人類の遺産であったように、ホールの方法は過去を「読む」ことに還元される。過去の文を読み、その思索を辿り、さらに継続すること、それがホールの方法である。そしてその経過を、思索に拮抗する強度でもって表現することをホールは試みた。

芸術はすべて歴史的形成物である。新しく表現を試みる人も、すでに歩まれた道をたどる

ことから始める。「キャサリン・マンスフィールドがチェーホフの模倣であると主張する人たち（チェーホフがいなければ無だっただろう、などと）、彼らに人は答えなければならない、君たちは正しいと。そしてチェーホフは彼の方でトルストイなしには無であった。トルストイ自身は、数人のもっと前の人からわずかの苦勞で導き出される。そしてこれらの以前の人たちはすでにアダムの中に前もって形成されていたもの以外に何も作り上げなかった。－われわれがいかなる父からも由来しなかったならば、われわれはもちろん、無であろう」(V/31)。

だから書く人はまず、読むことから始める。しかし「読む」ことは、知識のための消極的な要件ではない。「現実的な読者が一つの現実的な芸術作品を読み終えたことはない。／現実的な読者はある良く書かれたものの中に常に新しいページを発見するだろう、どの状態でも新しい効果が生まれる。彼が作品を〈暗記して〉知っていても、それは初めて正当に心の中のものとなる。彼の一部となり、いかなる終わりにも達しない、それは生のように産み続けるものであるから。－それ自身が生であるから、ものごとのリアルな一部であり、結果において見渡すことのできないものであるから。／リヒテンベルクのところに書かれている、〈偉大な本の確かな印は、人が年を取れば取るほどその本がもっと気に入るときにある。人が年とともにもっと賢明になると仮定して。というのは、一つの本は鏡であるから。サルが中を覗きこんでも、使徒は姿を見せることはできない〉。読むことを受身的な経過として表す人たちと語ることは賢明ではないだろう」(IV/1)。

ホールの文体は時に象徴的になる。「読む」はイメージでもって表現される。「もし君が読んでいるならば(…)君は、ある暗い部屋に入る誰かのようなのである。突然、それ以前のまあまあの明るさ、薄明かりから入って来る誰かである。少しずつ君の眼は任務を果たし始める、それは空間の中を動く(闇が丸く固まり始める、離れて行き始める)。そこから何が見ているのか。青白い父たちの集まり－君は彼らが静かに観察しながら振る舞っているあいだ、彼らに気づかなかった。あちこちにかすかに光る装身具、燭台が浮かび上がる。ここで宝石たちは燃えている、特に一つの深紅の、静かに燃えている宝石は。そして今、初めて徐々にそれとして認識される窓を通して、君は、摩訶不思議な外部、世界の中を見る(それは古い世界、君の日々の世界に他ならない)、たいそう段階を付けられて、たいそう描かれて、君が知っていたすべてよりもずっと豊かな…そして同時に、ふたたびとても華奢で、はかなく、ほとんど拭い去られて、時おり雨の日の窓ガラスの後ろの眺めのように、一枚の白い吸い取り紙の上で動く人物のように、より押しつけがましくなく、より硬くもなく。それはいったい何か。それはまさに君の日々の昔の世界だ、君がいた場所だ」(IV/17)。

ホールは「暗記する」こと、「二度、三度と読む」(IV/6)ことを強調する。あるいは読む

速度。「人は - 人がそこで様々な距離の中に身を置かねばならないように - 様々な速度で読まねばならない。(…) どの本の上にも、その著者が読まれたいと欲している速度を記している数字が書かれているべきだろう。(もし10が中くらいの速度を示しているならば、その時、1は例えば、それでもってヘラクレイトスが、後期のゲーテのいくらかが、カール・クラウス、ヘルダーリンが読まれるべきである数字となるだろう。エドガー・ウォレスの本の上には1000の数字が立つべきだろう)。人がバルザックを他の良き著者たちよりももっと速く読むことができる、読むべきである(50あるいは60の数字に即して - トストエフスキーは100あるいは200の数字に即して)ということは、決して彼が、他の著者たちの一人よりももっとわずかのスタイルを持っていることを意味しない。ただ彼が様々な平面で書いたということの意味するだけだ。極端にゆっくり読む人にとっては、バルザックのスタイルは決して明らかにされないだろう」(IX/82)。

読むことは、精神の活動を促進する力のベクトルを読み取り、その力の流れをさらに継続することである。その時、読むことは書くことと一致する。精神活動の促進の観点で見れば、読む／書くは精神活動の異なった側面にすぎない。「現実的に読むことは他のすべてよりも書くことに近い。／あるいは、私は、私が過去のあれこれの本の中に見出した個所、そして正確に同じことをこの上なく明瞭に述べている個所を思い出すように思う。そして私はその個所をスピノザ、あるいはモンテーニュに探しながら、それを見出すことができない、それは存在していなかった。私はただ、問題となっているものと触れ合う個所、あるいは外的には全く違っているが、それとの深い内的な一致の中に生きていて、一つの似たような地面から生まれた形成物である個所を見出したただけであった。それは読書労働を示していないか。その中で一つが別のものを越えて進行することを示していないか?。あるいは、読むことと書くことは、偉大な労働のただ二つの - もちろん潜在的に異質な - 表現であることを」(IV/4)。

「書くことは創造的であるが、読む際に人は何も創造しない」と人は言うが、その誤りは、「創造的であることについて誤った観念」から来ている。「書いている人にとって言葉はそこにはないだろうか、(…) 文法の数千年も強化された可能性がないだろうか。そしてさらに彼の前の人類が形成した考えたち、彼を囲んでいて、彼を通して流れている生の力によって作られた、強調の能力がないだろうか。そして彼の活動全体は選ぶことの中にある。 - 人が書く際に一つのより広い選択を持つということ、読む際には固有の選択を持つということ、それが相違の全体である」(IV/5)。「最良の読書はわれわれを書くことに、語ることに、考えることにあるいは少なくとも、まさに読まれたものを再び読むことに - 読み続けることにではない - 駆り立てる」(IV/18)。

読むと書くは同じ精神的な活動である。しかし書く人にとって読む人は他者である。「個人的な経験。他の人が理解しないという恐ろしい観念は無力にさせる。(…)それが一通の手紙を書く場合であれ、君はある個所を訂正し、その際にそれが訂正によって受け取る人のところでもっと理解できないものになることを知っている。君はその個所を再び、前の形に、君が怠惰なものと認識した形に - 慣習的な、それゆえに大部分死滅してしまった、それゆえに偽りの、つかむのではない形、信号言語 - に戻すべきか)。何をする？。何らかの可視的な観念のために読者に不誠実にならないために、十分なくらい読者を愛することが問題なのだ」(IV/15)。

送信も受信も同様に精神的な活動であるが、その間には深淵がある。「著述業は、同時に何かある仕方世界を変えようと思うことなしに、真剣であることはできないし、現実的な労働であることもできない。／精神的な活動の際の自発的な感覚は区別しない、区別することができない。それゆえに精神的な労働者は、すべての不幸な経験の後で何度も、また近くに作用することを試みるだろう。(…)芸術は状況にふさわしいものではない、それは絶対的で、厳密で、非和解的である。…しかし君は読者なしに書くことができない。君の労働から離れるな。そして各々の現実的な労働の法則は、その労働が内面を伴って外部に向かわなければならないということである。最後の意味で、すべての書くことはただ語ることである。そして語るために、君は一つの汝を必要とする。…つらい、身をもぎはなすことはそこで行われた。しかし今ここで。ここで今再び、何が問題となっているのか。芸術家が真の、道徳的に完全な関係を持つことができる一人の人、唯一の人に対して、精神を集中することが成功するということが問題となっている。彼の見られた、そして見られなかった読者、彼の未来の読者、彼の存在しているそして存在していない読者、彼の今まで聞いたことのない読者に対して。／そこに、一人の作家の最大の、そして最も困難な、とりわけ決定的な労働の本質があると、私は主張する。書くことの中にその本質があるのではない！。そうではなく、君の読者を、真の読者を、何度も、誰にともなく魔法で出現させることの中に。魔法で出現させる *zaubern* ことの中に」(IV/20)。

芸術は「絶対的で、厳密で、非和解的である」、あるいはそうあろうとする。それはその受容者を顧慮しない。「読者を捕えるために人は小説を書かねばならない。読者を失うために人は、よく書かねばならない」。スタンダールは「人は彼を百年後に理解するだろう」と予言した(VI/10)。『ツアラトウストラ』において、「ニーチェは悪い読者のためにそこにおけるそんなに多くを台無しにした、減らした、読者群にそのような犠牲をもたらした」。「われわれは『ファウスト』第二部を何にもまして評価しているが、「そこでは何も読者のために為されていない」(VI/37)。

「最も偉大な人間は、読者を気にかけることが一番少ない人である - しかし一人の読者を持つという、最高の確実さのもとで。…/ 〈一人の作家が彼の読者のために持つことのできる最大の敬意は、彼が決して、人が期待しているものをもたらし、そうではなく、彼自身が、自分のそして他者の形成のその都度の段階において正当で、有益だとみなすものをもたらしということである〉(『箴言と省察』)。(…) 一人の作家の価値は、時代に対する彼の抵抗において、測定される。(…) 一人の作家の意義は読者を問題にしない彼の能力と比例していると、 - あるライオンに即した確実性で - というのは、社会的なものなしにはうまくいかないから - しかし一人の読者、一人の素晴らしい読者を持つという能力に比例していると」(IV/21)。

「真の読者」は作家が想定する読者である。ホールは本を読み、そして自分も書こうとした。彼にとって、読むことは作家が想定する真の読者になることである、そして彼自身は作家として、自分の本を読むべき読者を想定する。「書く」ことがその「真の読者」を作る。テキストは、そのテキストが読まれることを望むように読む読者を作る。ホールは、『若きパルク Jeune Parque』を読み返すヴァレリー (VI/12) を引用する。「私の話題にしている変化。それは、作家をパートナーとみなし、そして可能な知的努力によって選択される個人を読者とみなすことに存する」(IX/118)。あるいは、ブルーストは、作品自体が彼の子孫を作らなければならない (VI/2) と言う。

読むと書くは同じ事柄の異なった側面である。同様に読者は書く人である。読者が書く人となり、書く人は「真の読者」を作るという形で書く。読む/書く、読者/作家のこの自己言及的な構造にホールの『覚書』の異様な力がある。以下、この力をそれぞれの事柄において探ることとする³⁾。

読むと書くが等価であるならば、書く人と読者も等価になる。それはホールの「書く」スタイルから由来する理念である。しかし近代社会では読者は消費者である。「その一方の芸術は群衆に、受取人たちの数字に依存している (一冊の本は数千の読者を必要としている、さもなければそれは印刷されない)。他の芸術はただ数人の〈専門家〉に依存している。そしてこれらの〈専門家〉(批評家、画商、コレクター) が真に理解する人であることは、決して必要ではない。彼らが作品に何かの理由から興味を持つことで十分である。彼らは価格を上昇させる、彼らは一人の画家を世の中に送り出す、彼らは彼を一つの世俗的な存在にす

³⁾ Stadler は読者の概念に関してノヴァーリスを引用している。「真の読者は拡大された著者でなければならない。彼はすでに下級裁判所(審級)で審理された事柄を受け取る最高裁判所である」(ノヴァーリス『花粉』)。Stadler, Ulrich: „Die Notizen“ oder Von der unerreichbaren Vollendung einer Sammlung. Versuch einer Gattungsbestimmung. In: text + kritik 161 Ludwig Hohl. München (edition text + kritik) 2004, S.54.

る、彼の足の下の地面を固め、彼が歩き続けることができるようにする、リアルなものを離れ、何かの種類のかいものの中に滑り落ちるといふこの危険は、言及された状況のゆえに、書いている人にとってははるかに大きな危険である」(VI/1)。

この事情は文学の諸形式により異なる。「抒情詩が散文とは反対に高い程度に自分を解放できた、新しい空間を獲得したということ、人が抒情詩にすべての可能な実験への権利を認めているということ、一方で散文はただ小説として現実に真剣に考えられているということ、それはどうしてか。／人は散文を群衆に、詩を専門家に公表する。／一つの芸術ジャンルが専門家のグループにではなく、群衆に依存しているところでは、その芸術ジャンルはその問題的な段階に入る。－ その中の価値は問題視される。／ － この〈専門家のグループ〉。そのようなグループが価値の出現を待って見張っているということ、－ そしてそれがかなりの程度のスノビズムの中で起こるのであれ－、そしてそのグループが楽しみを併せられることとは別の要求を持っているということ、それで十分である。それによってすでに一つの芸術ジャンルに存在と持続が可能にされるのである。それより良いことを芸術はそもそも決して期待することはできなかった。現実的に理解する人たちはどの時代においても全く孤独な人たち、稀な人たちである。ルイ XIV 世もフランソワ I 世も、彼らは芸術について多くを理解していなかった。しかし地上のこれらの権力者たちは彼らの野心を、価値あるものを要求し、価値あるものを私有することの中に置いた。そのようなことはしかし一つの文化を可能にし、担うために必然的な状態である、そしてそれでもって一つの並はずれた意義を持っている」(VI/3)。

この専門家が批評家である。かつて王侯君主は芸術家のパトロンであったが、市場社会は群衆という無知な購買者を「教育」する、同時に芸術家を保護する制度として批評家を作ったのである。批評家がいなくても、作品自体が批評的機能を持つようになる（「真の読者」を作る）。

批評とは何よりも「読む」ことである。「遺産。それはただ、人が似たように体験すること、あの男の文の中に表明されないものを再発見することによってのみ可能である。－ 人が総体からあれらの文を再び形成することができ、それでもって、同じ苦勞をして、相応する新しい文を形成することができることによって」(II/203)。過去の文についての言語が、より高次の審級の言説を産みだす。それは批評言語に他ならない。ホールは詩、短編小説を書いていた。それから『覚書』を書き、それ以降は、中断された初期の小説を完成した『山行 Bergfahrt』以外に創作を書かなかった。そこには 20 世紀初頭の小説形式から批評的言説への表現形式の移行が読み取れる。文学のパラダイムが変わったのである。「(もっと貧困であるもの、ドイツ文学に恐ろしいほど欠けているものは、担っていく中間層、教養の平均的な

水準、読者である。) それゆえにドイツ文学の批評に関してもっとも多く望まれるものは、一つの仕方で分解する批評、*鋭くする批評*である。主として風刺的な、おぼろげさを攻撃する、感覚を目覚めさせる批評」(IV/19)。

その際にホールはこの批評的言説の生成をゲートに見る。「すべての(価値のある)文芸批評は、一つの固有の創造的活動である。そしてそれはこの限りにおいて他の活動に、〈本来の〉詩作に促進的に作用する。どの現実的な活動も別の活動に促進的に作用するように。／ただ一番深い底でその二つの実行は共通のものの上であらねばならない。その共通のものが一様に成長しながら、その両者の各々を通り、その両者の各々の中で増加された能力を出現させることができるのである」(V/34)とホールは批評を〈定義〉する。そしてゲートはどうか。

「私には、まるでゲートが、書き改められた見解への途上にいた、— それからしかしためらった、それ以上進むことができなかつた、あるいはしたくなかつたかのように思われるのだ。— 以下のことだけは確かである。彼は隔たりを、芸術と批評の間に隔たりを認識した。〈真の媒介者は芸術である。芸術について語ることは、その媒介者を媒介しようとすることである〉。— 〈芸術は語ることのできないものの媒介者である。それゆえに芸術を再び言葉でもって媒介しようとすることは、愚かである〉。／彼はその隔たりを認識した、しかし結合、共通のものは?。〈そしてしかしわれわれにはだから多くの貴重なものが生じた〉。もう一つの個所は、〈しかしわれわれがその中で努力することによって、理解力にとってはかなりの利益が見出される、それはまた実行する能力に再び役に立つ〉。／そこに一つのためらいが知覚されないだろうか。明晰なものの中に一つのほやけるものが。〈芸術について語ることは媒介者を媒介しようとすることである〉、だから馬鹿げたこと!。— 〈そしてしかしわれわれには多くの貴重なものが生じた〉。この〈そしてしかし〉は暗闇の個所を表している。それに明晰な肯定が続く。しかしどのようにそれは、先行しているものと組み合わせられるのだろうか。／ゲートの格言(『散文による格言』)は芸術か、あるいは芸術ではないのか。そしてそれらは(リヒテンベルク、パスカル、カール・クラウスの散文のように)まったく同様に言い表すことのできないものの媒介者ではないのか。同様に、*不可解で、誤解を生じやすく、到達するのが困難で、無限なものの中に視線を開くものではないのか*」(V/34)。「そしてふたたびあの〈そしてしかし …〉に戻ると、その言葉は、一つの陳述から対立した陳述への橋を表していない、そうではなく突然、一つの肯定を聞くように強いる、その肯定は一つの隔たりによって分割された場所、一つの別の大陸から聞こえてくるが、われわれはその肯定がどのようにこちらに響くことができるのか、あるいはどのようにわれわれが向こうに行ったのかを知らない。しかし一つの橋は存在している」(V/34)。

ゲーテのためらいは、ホールのそれでもある。それは批評的言説の生成の事柄であるが、同時に彼は『覚書』の形式の正当性、文学史的な必然性を確認しようとしていた。ホールが主張したいことは次のことだ、「創造 *Schaffen* と批評の関係について非創造的な精神たちは予感すら持たない。／創造的なことと批評は、そもそも対立物ではない！。 - （言葉によって）言葉を促進することと書くことが対立物ではないように。そうではなく問題となっている唯一の対立物は、*創造的なものと慣習的なものである*」(XII/117)⁴⁾。

3 形式

批評的言説そのものが文学形式であるが、批評はそもそも形式についての反省である。

「そしてただ個々のものを読む人、この本をアフォリズムの集まりとして考える人、作品の全体的なものの意味の中に入り込まない人はそれを決して知ることはないだろう。第一巻についてのアルミン・モーラーの書評〈ルートヴィヒ・ホールはアフォリズムを書いていない。人は個別なものそれ自体を取ることは許されない、作品は関連の中で読まれなければならない〉」(VIII/7)。「アフォリズム」はホールにとって、慣習的な、容易に消費される形式である。ホールの形式を巡る思索には常に『覚書』とは何かという自己反省がある。Jürg Zbinden は、「それ自体の生成条件が作品の中で反省される、*work in progress*」について語る⁵⁾。「書くことの諸条件」が反省される。その記述が『覚書』の内容となる。

ホールは批評の実践を現実的にどのように考えていたのだろうか。ホールは体系的に記述しない。精神が個別の事柄に衝突し、そこに飛び散る火花がホールの「方法」である。そこでは各々の個別の事柄に即した尺度で測られる。「どのような尺度で君たちは測っているのか …。私をただ、私が測っている（測った）尺度で測れ。より厳密な尺度ではなく」(IX/114)。

文学形式も歴史的に変動する。「*批評*について。彼らは、最良の本はもうとっくに小説ではないことを見ていない。（本はもはや人物やストーリーの中において重要ではない、そうではなくて、取り組みの中において重要である。つまりその素材は、考えである、内的な経過である。ジャーナリズムがとっくに引き受けてしまった、外的な経過ではない）」(XI/57)。

形式についてホールは、ヨーゼフ・ロートの『美の勝利』に関して、「ただ*制限*によって

⁴⁾ 批評的言説はロマン派において指摘される。Haupt は、フリードリヒ・シュレーゲルの言葉、「それ自体芸術でなければならない芸術批評」を引用している。Haupt, Sabine: „Schwer wie ein weißer Stein“. Bern (Peter Lang) 1997, S.94.

⁵⁾ Zbinden, Jürg: Bedingungen des Schreibens. In: Ludwig Hohl (1904-1980). Akten des Pariser Kolloquiums. S. 141.

形式は生まれる」(XII/54)と言う。しかしホールは形式を定義するのではなく、「形式とはなにか」と問い続ける。「素材、内容、形式。形式があるところ、常に内容がある、そしてまた常に素材がある。詩人はだからまったく素材について気にする必要はない、内容について決して気にする必要はない。詩人はただ形式に向かえ。そして彼がそこで到達するものによって、彼はすべてに到達する。／内容を所有することは一つの恩寵である、素材は何でもないものである、形式に達することは、最高の労働と恩寵の生産物である。／素材を誰もが自分の前に見る、それに加えて何かするべきことを持っているものだけが内容を見出す、そして形式は大抵の人たちにとって秘密である（『箴言と省察』）」(IV/3)。

「形式。どの形式も常に時代遅れである。というのは、人が形式を示すことができるならば、形式はすでに作られてしまっている。形式は過ぎ去っている」(V/7)。ホールの重要な方法である引用によってホールは続ける。ゲーテ、「ごく最近の時代のもっともオリジナルな作家たちは、彼らが何か新しいことを生み出したからではなく、ただ彼らが同じものごとを、まるで彼らが以前に決して言われなかったかのように、言うことができるので、オリジナルなのである」。リヒテンベルク、「人は人間を彼の意見に従って判断してはならない、そうではなくこれらの意見が彼から作り出すものに従って」。カール・クラウス、「良き見解は価値がない。誰がそれを持っているかが重要なのだ」。そしてホールは言う、「形式とは何かとわれわれは尋ねる。形式とは、人が（再び）見出したという証明に他ならない。というのは、何かを現実的に見出し、言う人が、それを、それがかつて言われたのとは別の仕方と言わないということは、不可能であるから」(V/7)。

「自分の意識によって満たす」、パラフレーズする。その「満たす」形が「形式」である。ブルーストは従来の小説の形式を踏襲して書いたが、その時、小説の形式が廃棄され同時に創造されている。ブルーストは小説に新しい、彼固有の形式を与えたのだ。「小説が生を終えたとき、ブルーストのそれのような形式があった」(IX/56)。「芸術家はただ彼の生に、彼の手段に、やってくるものに即して生産すべきである。最高の努力は、彼の手段をコントロールする中で彼によって要求されてあれ。彼は決して、彼の諸形式の各々の最小の部分を検査し、欲せられているものにより適合したものにすることを止めてはならない。彼の領域の拡張のための努力、彼の本性や彼の時代によって条件づけられているのとは別の、もっと大きな（「より大きな」）形式を満たそうとする努力は彼に禁じられてあれ。／形式たちは決してとどまらなかった、新しい形式は各々の新しい精神とともに生まれる。ブルースト。崩壊した小説形式で（果てしない論述、ほとんど筋はなく、「いつも彼はただ自分について語っている」）、一方、明日、それは新しい古典的な形式となるだろう。／強い精神たちは常に彼らの形式を見出す、完全に十分である形式を見出す」(V/9)。

ここでホールは自分について語っている。『覚書』は固有の形式を作ろうとする試みである。『覚書』とは何かという自己反省が取る形としての形式。そこで決定的なのは精神である。「最良のものは言葉によって明らかになるのではない。－精神の中からわれわれは行動するのだが、その精神が最高のものである」というゲーテの言葉を引用し、ホールは、「一つの芸術作品の意義はしかしその（時代の）列の位置に依るのではなく、形成する精神の力に依る」(V/10)と言う。「すべての形式は移り変わる。秘密は単に、作家が研究者であり、語るということである（そして彼らの語りの形式を常に彼らの研究の結果によりふさわしくするという事）」(VI/12.)。ホールは、形式よりむしろ、形式を作る力を述べている。

ホールは個別の事柄に向かい、その事柄に即して考える。「形式」も個別表現形式に即して考察される。その考察の内容が『覚書』となる。『覚書』は「批評」なのである。

4 様々な形式

引用

ホールにおいて、「読む」は「書く」と等位である。それらは同じ精神的活動の異なった側面である。だから「読む」に関する事柄は、そのまま「書く」に通底している。「引用」は「読む」ことから生まれるが、引用は、古い形式を踏襲し、この形式の可能性の領野を横断し、新しい固有の形式を作る一つの手段でもある。

ここでもホールは始まりから考えて行く。過去は書かれたものの中にある。「過去は君たちにとって使い古されたものであり、過ぎ去ってしまったものだが、私にとっては常に、予感されない可能性の中で、開かれており、生産的である」(XII/137)。そして、時が過ぎ去ったということの中に引用の意義がある。「何か知られる強度は、人間から人間に、日から日へと異なっている。流れる水の中の、それどころか噴水の中の水滴の状態に劣らず変動的である。(それは、人が一つの認識を保存できないということ、救済はまさに最初に起こっていたに違いないということと関連している)。それゆえに(まったく知られたことの)引用、それどころか様々な強調はすでに大きな業績であることができる。－再び、語ることの意義を見る、一つの接近」(III/5)。

そしてホールは引用を「書く」ことに高める。「いったい書くことは引用することとそんなに計り知れないほど異なっているだろうか。言葉はすでにそこにあるのだ。／真剣なそして自然なままの判断の経過は創造のそれととても似ていて、人は判断されるべきものに対して、自分で創ったものに対してと同じ不確かさを感じるができるばかりでなく、時々ほとんど混同することも可能なので、－ただ密度の相違がその二つの活動の間にあるだけ

なので、引用することは、もっと大きな距離から見て、書くことと同様に困難である。二つの引用文の結び付きが既に空間の中に本来的な形成物を置く。／（…）しかしモンテニューの中に含まれている引用は、一冊の厚い本を形成するかもしれない、そして彼は謝ることを考えなかった。彼は、彼がもうそのテキストが彼のものなのか他の人のものなのか知らない、それほど力をもって読む。／－ 笑うのは早すぎる。彼は上る。〈しかしただ山とともに〉と君は言う。しかし山が終わるところで、彼はさらに上り続ける、同じ線の中、山を越えて。彼は書くことを始めた、そしてそれに気づいていない。／引用から書くことへ移行しながら、一つの相違を感じる人は、重いものから軽いものへ陥る人、努力から受け取ることへ、（骨の折れる）登攀から軽快に転がることへ陥る人のように、－ その人は全くたしかに、引用することも書くこともできない。／さもなければ同じ認識においても、アクセントの移動だけですでに、異なった作用を、意義を、価値を与える。強調することの中の強度の変化でさえも大きな意義を持つことができる。／ある人が意識的に強調することは、すでに一つの別の種類の知をもたらす、本来的な、人間的な知を。－ 人間の文化空間の中に、文学の中にすでに存在しているものを別の位階の中に置くことはすでに一つの業績となることができる。それが意味とともに起こるならば、ひよっとしたら創造的な業績に。／理念は存在している。一つの理念を際立たせることができるということは、容易なことではない」(VI/31)。

引用は自説を補強するために通常は用いられるが、ホールにとって、「私に外部から出会うものの中で、私の精神とある強い関係に立っていたものを際立たせることだけが重要であった。（…）つまり、これらの手段でもって私の見方の表現を強くすること、一つの方向をもっと明瞭にすること」(IX 序文)。引用文は、考え続けるための契機である。ホールの精神が引用を引き寄せ、時には変形させる。

「何度、どの現実的な作家もあの聖書の箇所を考えなければならないことか！。〈言葉はどの人間もつかむ *fassen* わけではない …〉。（再度調べてみて、その引用は誤りであることが明らかになった。そこに書かれていること － マタイ 19 － は、著しくもっと単純なことである。 *Non omnes capiunt verbum istud.*－ 誰もが言葉を理解する *fassen* わけではない。私はしかしこの文を、それが私の記憶の中に、私の私には知られていない作用のもとで生まれてきたままにしておく）／読者を満足させることを狙っている人は、決して芸術を作らない。いったい芸術は誰を満足させなければならないのか。世界のすべての広がり、そしてそれはただ未来の中において捕えられる。－ 言葉は誰でもつかむわけではない」(IX/123)。一つの文が「誤って」記憶される。その「誤解」は「意識で満たす」、固有のパラフレーズである。それはもう「引用」とは言われないものだが、それがホールにとって「読

む」ことである。

『覚書』の中にはかなりの引用文がある。ホールが「一日の響き Tagesklang」と名づけるもの。「長い間、私には、ほとんど毎日、あるいは数日ごとに、一つの一定の言葉が、大抵は詩句の中の言葉が与えられているのが常だった。－それがどのように与えられたか、どのような種類の道で到着したのか、それはどのコントロールからも逃れている－、それは目覚めている間ずっと私の中で響いている状態とどまった（…）／明白に遊戯的な性格を持っていたこの言葉は、私のその都度の主要な事柄に対する、いつでも一つの暗いしかし強力な関係の中にあった。私が意識して取り組んでいたものではなく、隠されている土台、もっと深い問題への関係の中に。（…）その言葉は常に私よりももっと多く知っていた」（VII/139）。例えば、ヘルダーリン『パトモス』、モンテーニュ、ギュンター『夕べの歌』、スピノザ「神はいかなる受動にもあずからず、またいかなる喜びあるいは悲しみの感情にも動かされない」（『エチカ』5 定理 17）。「例外的に、外的な事件と明瞭な関係にある言葉」として、それはパスカルの「もし私の手紙がローマで有罪になるならば、私がその中で有罪としていることは、天上において有罪になる」である。「私は、スイスの文学研究所宛に書かれた長い手紙、私の状況を変えることになったそれを並々ならぬ努力の後でついに終え、発送させた」（VII/139）という事情がある。

ホールは20歳のころから主としてフランスとオランダで過ごした、つまりドイツ語の本を手に入れるのが困難な状況にあった。ホールの引用文は、「言葉はつかむ」の場合のように、必ずしも原典と一致するわけではない。彼はおそらく多くの詩や作品を暗記していた、あるいはほとんど暗記するまで何度も読んだらしい。後にかなり貧困の中でも彼はテープレコーダーを持っていて、詩の朗読のテープを聞いていた。要するにホールの頭の中には、おびただしい量の詩やテキストが蓄えられていた。その図書館が彼にとって文学であり、そこから「一日の響き」が時に彼を訪れて来るのである。

「一日の響き」の中のゲーテの言葉をホールは自分に語っている。「さらばいま同胞たちの意欲と記憶とに／聖なる遺訓としてこれを残さん／苦しき奉仕を日々につづけよ／このほかにいかなる啓示も要なし」（ゲーテ「古代ペルシャの信仰の遺訓」、『西東詩集』）。ホールはまた、『ファウスト』第二部の場面〈暗い廊下〉、ファウストが〈母たち〉のところへ降りて行く場面を、「私の場面として、『覚書』の本来の序文として、これらの数年の現実的な、最も深い全体表現として」挙げている。（「あなたは寂しさや孤独ということをご存じですか」）。「…すでに造られているものから逃れて、／解き放たれた、形態の国へおいでください。……………新しい言葉が気にいらぬほど度量が狭いのですか。／これまで聞き慣れたことだけ聞きたいんですか」（VII/139）。あるいは、当時オランダで11ヶ月半続く半暗闇（濁った

灯油ランプの照明)の後で、「私の妻は、ついに電気の修理が実行されることを成功させた。

— 私は歯の痛みをもって雨の中、家に戻り、上に光を見る。 — その時私は真に詩的な気分になった。〈世界はどこまでも眺めて心地よい／とりわけ美しいのは詩人の世界である／色とりどりの、明るいまだ銀ねずみ色の野の上に／昼となく夜となく、燈火はかがやく〉(ゲーテ、「ズライカ」、『西東詩集』)(VII/139)。ホールは頭の中に詩の図書館を持っていた。それは、「著者のコントロール」なしに、言わば無意志的に現れる。

「一日の響き」という概念自体が一つの引用の手法である。その様々な引用の手法をゲーテの引用において見てみよう。全くの引用だけの文。「というのは、正確に考えて、そこにおいて美しい人間が美しくあるのは、ただ一瞬である、と人は言うことができる」(IX/113)。引用が思索の契機となる。「パンタリス(『ファウスト』第二部3幕)。強力な調子のこの言葉、すべての尺度を越えて素晴らしい言葉、ゲーテが合唱指揮の女、パンタリスに語らせるこの言葉は、一つの切り離す剣、一つの最後の裁きのようなものである。その裁きは人間を永遠に区分する、人間に彼らの場所を割り当てる、ただ価値を持っている二つのグループの中の一つか、あるいは第三のグループ、すべての他の人たちのグループの中に場所を …。／〈名を挙げたこともなく、気高い志も持たぬものは／元素に還るだけのことです。ではゆきなさい。／お妃様とご一緒になるのは私の熱望です。／手柄だけではなく、忠誠が人の人格を保つのです)。／もし君が、君が出て行かねばならなくなるまで、母のところにとどまるならば、その歩みは創造的になるだろう。(…)。／〈忠誠〉である人、母のもとにとどまる人の価値は何であるか。彼が将来の出発の構築に参加することを助けるということである。／しかし人間は、自分を万有の中にはめ込むこと、もっと正確には、自分がかめ込まれていることに意識的に参加することが成功するにつれて、自分の価値を得るのである」(II/133)。「引用」文と思索が浸透しあう。「ある書店のショーウィンドーの中にゲーテの素晴らしい言葉を読んだ、人間を本当に愛している人以外に誰も人間を笑ってはならない。／それは、私が当時、ある日曜日に路上で、 — 人々を観察しながら — 人間について、愛について、憎しみについて書いたことである」(VIII/125)。

『ファウスト』第二部のリュンコイス *Lynceus* の歌、「一艘の荷船が運河を通して／こちらへこようとしています」(第五幕)をホールは「ゲーテの最高の後期のスタイル」として評価した。その注でホールは、1944年、10年後に、カール・クラウスの〈一つのファウスト引用〉の中に「ファウスト教養は、〈一艘の荷船が運河を通してこちらへこようとしています〉の詩行が滑稽であること、人が無駄に証明するであろうような崇高さを持っていないことを確認した」の文を読んだことを書いている。「そして私は告白する、それは私にとって今一度現実的に一つの満足であった、私が私の仕事において今まで経験した、おそらく唯一の、

現実的な満足であったし、今もそうである、と」(IX/54)。ホールはカール・クラウスを読んだので、カール・クラウスのように読むのである。

自説の補強。その自説が些細な内容なので、一般的に権威とみなされるゲーテの、それも意外な引用は修辭的に効果的である。「砂と浜辺 ファウスト。いつも私は、砂 - この北海の浜辺 - に対する私の過度に激しい反感の中に共感を求めてきた。ついに私は、私が探していたものを、『ファウスト』第二部の四幕に見つけた。／そして私にはまるで、私が一つのため息をつくような叫び声を - 退いていく苦悩と感謝の叫び声を - 表明しなければならないかのように思われるのだ」(IX/49)。「一つの深淵が人間を動物から分け隔てているかどうか、それについての考察への寄与として、要するに神学に対する戦いへの寄与として、ゲーテのこの重要な(美しいと同様に重要な)文が存在している。〈お前はまた生あるものの列を導いて／おれの前を通らせ、静かな林や空中や、／また水の中に住んでいるおれの兄弟たちにも引き合わせてくれた〉(『ファウスト』第一部)」。(IX/86)。

あるいは引用しないことによる、引用文の強調。「私は、ゲーテに、『ファウスト』の第一部の第一幕の第一場の第三行目の〈残念ながら *leider*〉にどんなに感謝していることか」(VIII/33)。その文は、「ああこれで俺は哲学も、／法学も医学も／まだ要らんことに神学までも／容易ならぬ苦勞をしてどん底まで研究してみた」である。

『覚書』は読者に読む／書くことを強く促す本である。そして私はゲーテの『西東詩集』、『ファウスト』、スピノザ、モンテーニュ、バルザック、リヒテンベルク、カール・クラウスやリルケを再度、あるいは初めて読み始めた。ホールの他の作家の引用は、読者が自分で読むように促す力を持っている。つまり強度の批評となっている。

スタンダールの『アルマンズ *Armance*』から二つの「特に光に満ちた個所。〈繊細に弦を張られた魂にとって不幸をそんなに残酷にするものは、時々まだぱっと燃え上がる、一つの小さな希望の弱い光である〉」(IX/4)。

シラー。引用と言うよりも批評である。ホールは「極楽境 *Elysium* からの娘 *Tochter*」における *Tochter* の言葉の不正確さを批判する。「誰の娘かそこには書かれていない。だから絶対的な意味における娘、そこの〈家の娘 *Haustochter*〉」。…「〈喜び、美しい神々の火花、極楽境からの娘よ〉。どのように一人の賢い人間がそのように語るができるのか。 - もしシラーが長く下から社会的に揺れて登ってくる必要がなかったならば、それでもって禁じられた種類の読者を気にかける必要がなかったならば、あるいはもし彼が、ギュンターのように、もっと勇氣を持っていたら、それほど世俗的な野心を持っていなかったら、それはそれほどまでにはならなかつたらう」(IX/35)。それにもかかわらず、ホールはシラーを評価する。「シラー。誰もが彼を修正できる、しかし誰も彼を書くことはできない」(IX/2)。

「シラーとパトス。もしパトスでなければ、いったいシラーにおいて何が本物だろうか。シラーのもとにでなければ、どこに本物のパトスがあるだろうか。／私には、理念によって養われる（そして養う女たちと一緒に死につつあり、倒れる）一つの芸術よりも、それ自体が理念である芸術の方がもっと好ましい。シラーの芸術は理念によって養われている、たとえそれが、時間的な、論議する価値のある理念であり、全体体现によって永遠にリアルな理念でなくても - とにかく理念であり、流行の猿真似ではない。／理念たちはいつも一度高く上る。／そしていつでもその時、シラーによって創られたものが再び活発になる - 機械は走り続ける。もしこの同じ理念が再び世界を通して突進していくならば、機械は再び作動する。 - さもなければ、大抵の時間、機械は静止している。しかし真の芸術の形成物は、いつも生を持っている、いつも自分で補っている、それらは身体ではなく、理念ではない、そうではなく、身体化された理念である」(IX/78)。

バルザック。引用だけでバルザックの偉大さがわかる。「純粋な愛について」。「彼らはエモーションを望む。愛の中に無限を入れるために十分に強い女性の心（魂）は、天使のような例外から構成されている。女性の心は、人間の中の美しい素質（天分）であるところの女性の中にある。偉大な情熱は、傑作と同じくらい稀である」（『13人のフェラギユスの話 Histoire des Treize - Ferragus』）(IX/3)。「私は名前が運命に影響を及ぼさないと、敢えて主張したくない（『Z. マルカス』）(IX/6)。ホールはバルザックの食事を語る。「彼の一つの外出の際にバルザックの一つのメニュー。彼はそのすべてを一人で食べたようだ。百個のカキ、12のカツレツ、一羽のカモ、幾つかのヤマウズラ、一匹のヒラメ。バルザックは真の偉大さと力のどの現象形式も賞賛した」(IX/7)。

リヒテンベルク。「数千年を通して誰がかつて明晰に見ただろうか、もしリヒテンベルクでなければ」(IX/71)。リヒテンベルクはホールにとってドイツ語の散文の規範であり、精神活動のモデルである。「機知は偶然によって生まれることができる。〈機知は音楽と同じような事情である。人が聞けば聞くほど、人はいっそう微妙な状況を要求する〉とリヒテンベルクは言った。機知的なものは微細さによって特徴づけられる。ナイフの鋭さのように。／私はそもそも、同時に大きな真剣さを持っていないような現実的に良い機知を考えることはできない。それを通して人がとても遠くを見る門を瞬間的に開けないような良い機知を考えることはできない。リヒテンベルクについてのゲーテの有名な言葉。（リヒテンベルクは、ドイツ文学の誰よりもっと多く卓越した機知を残した）。〈彼が一つの冗談を言うところには、一つの問題が隠されている〉」。そして、ホールはシェークスピアにおける道化の意味を述べる。「真理を苛酷に、直接的に言わないことはしばしば一つ以上の理由から必要である。優美な形式の中で真理は人の気に入らないことはない - それはそれが向けられている人

たちの生も、それがそこから由来する人の生も脅かすことはない。大多数の人間は真理を見過す。幾人かの別の人たちは、各々の真理がいつかどのような力を獲得することができるか知らず、真理を我慢する。人は真理を火でもって抹消できない、それは世界の中にとどまることができる、――まで。道化性は真理に持続を供給する。そしてすべての時代の文学はひょっとしたらまったく別のものではない」(VI/42)。

リルケ。ホールのリルケ評価はかなり揺れている。特に『時禱集』に対しては批判的である。(しかし、『時禱集』から引用は多い)。「もう一度、『時禱集』に――〈おお、所有と時の中から／彼の偉大な貧困に至るほどそんなに強くなった人はどこにいるか、／彼が衣類を市場の上で脱ぎ捨てたほどに……〉。彼が、〈彼の真の尊厳に至るほどそんなに強くなった〉と書いたならば、それはなるほど美しくはないが、それほどナンセンスではないだろう。／私は、〈貧困と死についての本〉というタイトルのもとで何かを詩作するだろう、しかし貧困でもって私は貧困のことを言うだろう、死でもって死のことを言うであろうように。それを、その第二のことをリルケもまたしている」(IX/33)。「リルケが〈彼〉についてより少なく、〈道〉についてもっと多く語ったならば!。(…)〈君は、決して日曜日を持たぬもの、／労働に没頭したもの、／剣の上で死ぬことがありうるだろうもの、／まだ輝くようにも、滑らかにもならぬ剣の上で〉。それは甘受されることができる、それは正しいことを含んでいて、決してミステリアスな汝 *Du* ではなく、もっと多く、一人の人間に、真の芸術家に向けられている。しかしその後すぐに、〈人は君のハンマーの打ちならす音を聞く、／町の中のすべての教会の鐘の音に〉。リルケはまた『時禱集』の中で無趣味なことからしりごみしない。(いつも『時禱集』で!)――見ることの良心性と一つの真の感情をこの慣習的なオルガンのしきりに鳴る音に対置するために、私はリヒテンベルクの一つの文を引用する。〈教会の塔は、祈りを天の中に導くための、逆さにされた漏斗である〉。そして『ファウスト』第二部の第5幕を読み。〈鐘の音が死者の安らぎに何を貢献するか、私は決定しようと思わない、それは生きているものにとっては嫌悪すべきものだ〉」(IX/19)。

ヘリダーリンにホールは文を捧げる。「ヘルダーリン。彼は森を通り歩いていった。森は彼の周囲で暗くなった。それは悪い出来事ではない。間もなく君は彼らが不幸についてしわがれ声で話すのを聞くことができる。しかしこの森の出来事は彼らが目覚めていることよりももっと良かった」(XII/122)。

ニーチェ。「偉大な男たちの誤りをこの上なく明晰に際立たせることはなぜ必要なのか。ニーチェ、二つの誤り、1. 読者に譲歩したこと。(ツァラトゥストラにおいて)。2. 概念を過度に高めること、目指されている作用を越えて打ちつけようとする嗜癖。(それは常に、その打ちつける人自体が転落するか、あるいは自分の立場を危うくすることに導く)――

二つの誤りはちなみに一つの同じ理由に起因している。つまり、大きすぎる、彼にとって耐えられなかった孤独」(IX/43)。

ヘッセ。「人がヘッセにおいて煩わしいと感ずることができるものは、農民的なもの他に、この意識的な魂の豊かさ、永遠的な示唆である - まさにその解釈するものである。(…)ヘッセの要件の全体の中で幾つかのものは、石膏からできた、高くそびえるキリスト像を思い出させる、人が至る所で見るような、祝福する手をした」(IX/63)。

プルースト。「しかし一人のプルーストのための社会、それはフレスコ画ではなく、ただ壁である、一人の作家はもちろん、何かについて語らねばならない。この何かはしかし、ただ壁にすぎない。彼がどのように語るか、あるいは彼がこの語りの仕方によって何を表現するのか、それだけが芸術的にリアルなものである」(IX/102)。

剽窃

剽窃は、意図的に出典を隠蔽した引用である。引用を方法として用いるホールは、剽窃という引用の裏側から引用を考察している。

「リヒテンベルクが彼を描いたような、そんなに偉大な剽窃者に出会うならば、元気澆刺で強い剽窃者に！。今、偉大な剽窃者は偉大な作家と同じくらい稀であるように見える。〈剽窃はたいそう軽蔑すべきことであるということは、彼らがそれをただ少量、ひそかにしていることから来る。彼らはそれを、人が今や誠実な人々のもとに数えいれている征服者のようにするべきだろう。彼らは、まさしく見知らぬ人々の全作品を自分の名前で印刷させ、もし誰かがそれに反論するならば、彼の耳の後ろを殴るべきだろう、血が口や鼻に吹き出るくらいに〉。／今日、彼らはそれをどのようにするのか。彼らはものごとを別の剽窃者から受け取る、3度、4度、10度反射されたものを与える、彼らは各々の由来のものごとをごちゃ混ぜにする。〈君がそれを買い取ったことを証明できなければ、それで十分だ〉。／言葉は、いかなる窃盗も話題になることができない空気のような、すべての人の事柄ではないか。 - 言葉は、みずから語っている一つの事柄である。その事柄はその常に特別な構造を通して語る。それは一つの有機的なもの、一つの生き生きしたものである。そしてもしわれわれが今日、その木が君の地面の上に生えているかどうか、あるいは君がどこかで切り倒したのかどうか認識しなくても、でも明日には認識するだろう。君がもたらす最初の文がわれわれを不確かなままにしておいても、次に続く文がわれわれを明晰さに導くだろう。／そしてそこには、固有なものでも、盗まれたものでもないであろうものは何もない。固有なものでもないものはすべて、盗まれたものである。／固有なものとは何か。完全に、どの部分においても責任を負われているもの。／というのは、言葉、とりわけ単語たちは、まさに決して空気のように、誰でもない人の事柄ではないからだ。それらは誰かによって創られた、それらは

その誰かのものである、それらはただ彼らのものである、他の人がそれらを買取るまで。その身代金は、完全な必然性である。君がこの価格を支払うことなく、言葉たちを使用したならば、君はそれらを盗んだのだ。／何かを見、言う人はただ正しいことを言うことができる。現実的なものを。しかし大抵の剽窃者は彼らの不幸なことに一人の見る人の発言ではなく幾人かの見る人の発言の部分を書き取るので、幾つかの場所から語られていて、いかなる現実にも適合しない発言が生まれるのである。(…)／書くことの芸術全体の本質は、人が完全な責任なしには一つの言葉も使用しないということの中にある」(VI/30)。

剽窃の具体的な例をホールは「宝の小箱」の中で論じている。ホールは「一年に五百に及ぶ投稿をこの出版社に実施した」が、「空間の不足のゆえに、0から3の掲載を獲得した」(IX/68)。その時期に新聞に掲載された他の人の作品を論じたのが「文学の宝の小箱」である。ホールの筆は的確かつ辛辣で、カール・クラウスを思い出させる。そしてどのテーマを通して、ホールは言語表現(文学)を考えている。

「三つの作品、三つのケース、そのどれもが一つの特別な仕方で、典型的である。つまり、一つの文学企業における、一つの文学状況に一つの決定的な視線を開くのに十分である」。

「A 始める人が一人の名人の影響、それどころか呪縛の中に陥り、その名人の流儀にしばらくの間、従うという現象。(初期のヘルダーリンが最初にシラーの流儀で - たとえもちろんシラーよりももっと良くであれ - 詩作していたように)」。当該の詩は、リルケとC.F.マイヤーとゲーテからの「剽窃」であるとホールは論証する。「私は今しかし確信に近づいている、この〈沈黙してそこに立っている〉という言葉はわれわれの著者自身によって詩作されたのだと。というのは、そのような底なしの馬鹿げたことがかつてすでに印刷されたと仮定することは私には困難に見えるからだ」(IX/68)。

論争

その「文学的な宝の小箱」のBとCは「論争」のカテゴリーに入る。ホールの文体は常に挑発的だが、次の文は実証的であり、同時に辛辣(Sarkasmus)である。

Bのカール・ヘルプリング、1934年12月の「新チューリヒ展望」の書評、「新しいチューリヒの語り手たち」。内容よりもむしろヘルプリングの文章表現が批評される。「… というのは、いかなる文学ジャンルも、小説ほど永遠性の列車 *Ewigkeitszug* から(人を)遠ざけ *entrücken* ないからだ。小説にはいつも短い宿 *Bleibe* が割り当てられていた」という文について、「*Bleibe* (宿) が、住居を表す隠語表現であることを知らず、彼はその言葉を、それが彼にはより生気のある、上流階級風で、オリジナルに思われるので、彼が言いたかった、言わねばならなかっただろう〈とどまること *das Bleiben*〉の代わりに用いている」。「*entrücken*、一つの他動詞は目的語を持っていない。それゆえにたやすく、man (人) の4

格が補足されなければならない。だから *einen* (人を), *uns* (われわれを)。今しかし永遠性の列車 *Ewigkeitszug*。ここでそれはもっと困難になる。われわれはそれをアナロジーで試みよう。*Genferzug* - ジュネーヴ *Genf* に行く列車。*Güterzug*, 貨物 *Güter* を運ぶ列車。*Wolkenzug*, 雲 *Wolke* の流れ (列)。本質的特徴 *Wesenszug* - 本質の表現の一部であるところの列 *Zug*。 - 永遠の方へ向かう列車, 永遠を運ぶ列車, 永遠から形成されている列車, 永遠性の本質の表現の一部であるところの列車。第三のケースはそれ自体, 不条理である。それから, 永遠性を運ぶ …, 困難な。すぐにしかしわれわれは仮定する, 永遠の方へ向かって走る, それだけが言われていることが可能だ。われわれは今そこまで来ている。 - 小説は, 永遠性の方に行く列車からわれわれを遠ざける?。それが (いつも) そんなに読まれているにもかかわらず?。否, それがそんなに読まれているがゆえに, もちろん。それは, われわれがその文をもう一度観察すれば, 明らかになる。だから多く読むことは愚かにする, われわれを永遠へと運ぶ列車から遠ざける, とヘルプリング氏は主張している。その文の要約された意味はこれである, (いかなる文学ジャンルも, いつでも頻繁に読まれた小説の文学ジャンルほど, (小説がいつも頻繁に読まれたので, 小説の文学ジャンルほど) 愚かにすることはない)。小説を読むことは愚かにするということ, それはまた新しいことではない, すでにルソーが似たようなことを言った。しかし今度はそれはもちろんもっと説得的である」(IX/68)。

批評は何かについてのメタ言語である。それは他の批評との論争を前提としている。「宝の小箱」のようなジャーナリズム的な文の批判は近代の大衆文化の文体批判である。「論争。今われわれは小さな誤りで小さな人を攻撃する。われわれは個別の誤りの一つにまともに対応する。彼らが全体において悲惨であるから。彼らにはどの肯定的なものも欠けているとわれわれが即座に示すことができるならば, それはおそらくもっと良いのだろう。しかしどのようにして?。/人は雄牛の角をつかまねばならない。(…)人が雄牛をその外面のどこかでつかまねばならないから。(…)われわれは外面と関係しなければならない。/はるかに良いことは, われわれが個別なことを証明し, マイアー氏にその結論を自分で引き出させることである。 - われわれは最も大きなものごとにも個別なものでもって, 細部でもって名づける。(だから, 個別なものを通して, 全体を表す何かが浮かび上がらなければならないだろう)。/生産について何かを理解している誰も, 多かれ少なかれ論争的な形式に属しているあの生産の価値を, 相手や対象の価値に関して測定しなかった, あるいはそれと関係づけなかった。(…)論争が一つの文学的ジャンルである (他のジャンルと同等の) ことを知らない人は, この事柄の中で何も知らない」(VI/32)。

論争を文学にしたのは, カール・クラクスである。彼は言語表現に関して, 言語表現によっ

て当時の市民階級の意見や道徳と戦っていた。「私は私自身について話し、その事柄のことを述べている。あなたはその事柄について話し、自分のことを述べている」(カール・クラウス)」(IX/74)。

ホールの批評は常に、精神活動を促進することを求めている。「私は価値あるものごとを書いているか。憎しみから私にやってくる強調はいかなる生も与えないだろう。しかし人は、それが生産的であるところでは、誇張し、攻撃せよ。私は彼ら自身のために人々を追求しない。 - 幾つかの現象 - (原理として) 編集部や犬のような - に対して怒りは客観的である」(VIII/112)。

「小さな人」、市民階級の俗物的な存在をホールは「マイアー氏／夫人」「薬剤師」として形象化する。ホールはマイアー氏を「彼は自分の下に堅固な地面を持っていると断言する男」と定義する (I/14)。「それは、マイアー氏が決して、いかなる場合にも一つの働くことにかかわらないであろうことを意味している。一つの恐ろしい仕方で表現すれば。表現形式のこの山のように高い無意味性を通りぬけ、言われなければならないであろうことへ達することがどのように私に成功したのか。本当に私自身がそれについてほとんど驚いている」(I/14)。「マイアー氏」の定義がこのように誇張して語られるのは、市民階級は明確な実体ではないからだ。そしてそれが曖昧な、揺れるものであるがゆえに、きわめて批判するのが困難な存在であるからだ。

薬剤師は、「核心熱狂者 *Quintessenzenmeier*」(VIII/24) と呼ばれる。インテリと思っている俗物。あるいは、「薬剤師は、その中に人間たちが座っている暗い峡谷の中から宇宙への見晴らしの良い地点に導く梯子の多種性から、宇宙は存在しないと結論つける人々である」(VIII/8)。「薬剤師、〈私が、君達詩人がいつも王のところへ行くのを見るが、しかし王が詩人のところへ行くのを見ないということは〉。 - それは、と詩人は答えた、私たちが、王が持っているもの、地上的な所有物をおそらく正当に評価するすべを知っている、しかし私たちが持っているものを、王たちは理解するすべを知らないということから来る」(VIII/109)。

誇張

誇張は論争のレトリックである。「弁明、あるいは読者へ なぜ私は〈そんなに誇張して言う〉のか。私が読者を持っていれば、静かなままにいること、もっぱら正確さを求めることは私に許されるだろう。今しかし私は何が言われているのか、何が言われていないのか知らない。常に霧の中、闇の中を前進する者は、彼が既にどれほど遠くまで進んでいるのか知らない。彼が目的に達するという大きな衝動を持っていれば、彼は容易に目的を越えていく。ただ彼が余りにわずかしか遠くまで行かなかったということを確認するために。／それが慎重な態度でもってうまく行かなければ、私は君に一つの打撃を与えるだろう。私は君にいず

れにせよ何かを与えるだろう。私が君に与えることによって、私は取るだろう、君を私の方
 取るだろう、君がその中にある沼地から君を救い出すだろう。そして君が欲しなければ、
 君は夜の中でつかまえられるだろう。／人がだから私の孤独を考慮に入れるならば - 私
 は許しを乞う。他の人たちが手取りで言うことを、私が税込みで言うならば。他の人たちが
 税込みで言うことを、私が手取りで言うならば」(VI/45)。

スイス

「スイス」は、批評（その下位概念である剽窃、論争）の集約的な現れである。カール・
 クラウスの場合のように、ホールにおいて、言語批評は同時に社会・時代批判である。直接
 の環境であるスイス（特にドイツ語圏スイス）はホールの批判の最大の標的となる。何より
 も批判されるのは精神的な狭隘さである。

「スイス人はそんなに美しい山を創造したことを、自慢している」(VIII/67)。「*同国人主義*
Kompatriotismus。人は、この人はもう愛を持っていないと言う。彼が2メートルの直径の
 この炭焼人小屋の中で窒息したくないので、彼にとって愛は失われてしまったのだと。しか
 しいったい外には愛がないのだろうか」(VIII/69)。「*スイスと自由*。すべてのスイスの新聞
 の中でいつも戻ってくる、〈われわれの六百年の自由〉。それは何か。かつて一人の人間が何
 かを確認したか、この自由を表すために、引き合いに出されるであろう何かを。いったい、
 一人のスイス人が例えば一人のイギリス人に対して持っている、この自由の本質はどこにあ
 るのか。彼はひょっとして偽りのモラルからもっと自由であろうか。正しいことを理解する
 のにもっと能力があるのか。借金や税金からもっと自由なのだろうか。狂気から、吝嗇から？。
 ／(…) スイスの思考する人間は、世界の他のところよりももっと少なく圧迫されていると
 感じているか。彼はより少なく偏見に出会うか。人が〈六百年の自由〉のような意味のない
 ことを何度も繰り返すことができるということからすでに、決然と反対のことが語っている
 のだ。自由が六百年の古さであるということを私はおそらく信じる。それは恐ろしく老いて
 見える、それは盲目で、耳が聞こえず、歯もない、そして神のように崇拜されている、世界
 中のすべての神、偶像、君主を合わせたよりももっといとわしく」(VIII/76)。「スイスは性
 急な和解に病んでいる、それは正確に見て、表面性に他ならない。(スイスよりも) 文学的
 生産物における生 *LEBEN* の観察と測量からもっと遠く離れているところはどこにもない」
 (IX/10)。「芸術家が存在するばかりでない。郷土芸術家も存在している」(VIII/77)。

「新チューリヒ新聞（大陸での最良の機知-新聞）」(VIII/48)。「宝の小箱」で触れたように
 スイスにおける言語表現はホールの批評の格好の的である。「スイスの作家たち。彼らに固
 有なものが欠けているので、これらの詩人たちはそんなにも頻繁に〈生来そなわった *urei-*
gen〉とか〈固有の力強さの *eigenkräftig*〉という表現を使うのだろう。／一つの原則は、〈君

のものであることを言え、他の人のものであることを繰り返すな。－ 私はただ、私の心を燃やすものを言いたい。あるいは（リヒテンベルクから）、〈一つの良き表現は一つの良き考えと同じくらい価値がある。表現されたものを一つの良き側面から示すことなしに、自分をよく表現することは不可能であるので〉。あるいは、（同じリヒテンベルクから）、〈わずかの言葉で多く言うことは、最初に一つの作文をし、それからその双対文 *Periode* を短くすることではない、そうではなくて、むしろ、その事柄を最初じっくり考え、そしてそのじっくり考えられたことから最良のことを、理性的な読者が、人が削除したものに恐らく気づくように、言うことである〉」(IX/37)。

ケラー

ホールはゴットフリート・ケラーの詩（その受容）を批判するが、どの事柄においてもホールは詩を詩ならしめているのは何かという、いわば存在論的な考察をするので、それは優れた批評となる。ケラーには「彼が詩句を作るとき、意義に対する感覚、言葉の固有の生が欠けていた」(IX/39)。「言葉の正確さと正しい表象はしかし詩においては同一である！」とホールは強調する。ケラーの『夕べの歌』について。

「〈眼よ、私の愛しい小窓よ〉－ それはちなみに感傷的である、（しかしまさにこの感傷性がこの詩の名声を引き起こしたのかもしれない）－、それから第二の連の最初の詩句、それ自体として存続できない、条件法の副文、〈いつか疲れた臉が閉じるとき〉、そしてとりわけ、もちろん半分の詩句、〈その時、魂は安らぎを持つ〉。それは実際に彼の心に浮かんだのだ。それ以上の大抵のものは強制的に付け加えられた。（ヴァレリーはどこかで、一つの良き詩句を作るのは難しくない、しかし第二の良き詩句を付け加えることは、難しいと言っている）。ひょっとしたらさらにもう少しのインスピレーションが〈ただ沈んでいく岩石と仲間となって〉、－ 〈なお二つの小さな火花 …〉などの中を薄明るく存在している。それはそれ自体として悪くはない。しかしこの表象は先行しているものに対してどのような関係に立っているのか。眼は窓であると、彼は言う、臉は閉じられた－そして突然、小さな火花と星の物語。－人が最初にその上で倒れる、本来的に破局的な行は、第二の行である。そして人はもはや立ち上がらないだろう。より正確に言えば、その〈詩〉は決して再び立ち上がらないだろう、もし人がこの詩句の不可能性を認識するならば、その詩句はその時、どの表象能力にとっても、誠実につき従い、見ることを努力しているどの精神にとっても、耐えがたく、陰險な毒となる。（ゲーテの言葉に従えば、〈われわれは退けることのできない、日常的に更新されるべき、根本的に真剣な努力を持っている、つまり、感じられたこと、見られたもの、考えられたもの、経験、創造されたもの、理性的なものと言葉とを可能な限り一致させて把握するという努力を〉）」(IX/39)。

「私にそんなに長く愛らしい輝き *Schein* を与えよ」の「輝き *Schein*」の言葉の使用について。「動詞〈輝く *scheinen*〉が絶対的な意味で使用されることができ、〈大量の光を与える〉と表現する力を持っている（太陽は強力に海の上に輝いていた）一方で - その名詞〈輝き *Schein*〉がこの絶対的な意味を持っていない、あるいはもう持ってないということ。（…）その言葉が挙げられた二つの意味の中に押し戻されているということ、それをケラーは全く正確に知っていた。しかし詩作するとき彼はそれについてどんな釈明を与えたか、詩句を作る際に何を彼は気にかけたか。韻と詩句が完成されたら、人は個別なものを眺める必要がない、それは符合する必要がない、すべてを越えてよろめきながら歩め、終わりの方へ！。／しかし私には誰も詩作上の自由 *poetische Lizenzen* を伴って来てはならない。その言葉は、存在した最大の嘘の一つである。詩作上の自由は存在しない。（せいぜい、悲壮な自由が存在するだけだ）。詩人にとってすべては、反対に、何かの書く人、他の誰かにとってよりもはるかに厳密である）。その不愉快な感情を凡庸な読者はもちろん素早く越えて行く。彼らは読む際に常に先を急がなければならない。（そして彼らのためにまさにケラーは「詩作」したのだ）。／とりわけ、私にはゴットフリート・ケラーが問題になっていたよりもむしろ、ある文学の状況、一つの文学的生（あるいは死）の状況を示すことが問題であったからだ。一つの文学的生の中ではローベルト・ヴァルザーは決して正当に受け入れられることはなかった（ある指導的新聞の編集部は彼の時代に、彼にいつも作品を送り返したと自慢していたそうだ）」(IX/39)。

5 書く

方法として「読む」を考察し、「批評」を論じてきた。ホールの特徴は、「読む」「書く」が同じ精神活動の異なった現れと考えられていることである。言葉を巡る批評は「書く」ことへ移行し、「書く」ことの反省として書くことが現れる (*work in progress*)。言語表現についての反省的な考察が批評であるが、それをホールはイメージを用いて（いわば文学的に）表現する。批評と文学の差異がない。人はホールのどの文を読んでも、いきなり核心に運ばれる。事柄は、その事柄を反省的に表現することによって描写される。「比喩」は具体的な比喩を書くなかで、考察される。

「放蕩息子 新約聖書の大抵の比喩が一つの短い、光沢のある、鋭く磨かれた剣の力、阻止できない突きの中で実行される剣の力を持っている一方で、放蕩息子の比喩は失敗した。その不快な印象を不十分な才能が、新しいものを創造することの不能が、 - そもそも何かを創造することの不能が引き起こすのである。創造されたものは常に新しい。／創造的

なものは問題的なものから生まれる。カオス的なものによる受胎。(…)今その寓話はあまりに多くの余計な荷物を受け取ってしまった。(私には放蕩息子はいつも軽蔑すべき存在だった、そいつが豚飼いであったからではない、そうではなく、再び家に帰ってきたからだ) (ネストロイ)。放蕩息子は失われた、その状態にとどまった。そして彼は少なくとも再び戻ることはなかっただろう。 — そのような状態では。そのような状態で再び戻ることは、余計で、意味のないことだ。というのは、ものごとは、人が一つの物語の中で使用する個別の部分は、それ固有の生を持っているからだ。人は任意のものごとに、それらが、比喩を語る人が欲するように、語ることを強いることはできない。そうではなくそれらは、それらが欲するように語るのである。羊は今まさに他のことを言うことはできない、そしてそれゆえにあの比喩は良いのである。その比喩の中で使用されている部分は、その原動力全体を比喩を語る人に奉仕させ、そしてそれでもって彼の意味で果てしなく生産的である」(IX/48)。ホールは「もっと大きな曲線の中で帰郷しながら」(『ニュアンスと細部』II/6)と語った。彼にとって帰郷ではなく、その「より大きな曲線」、道が重要であった。ホールは本来決して帰郷しなかった。

「書く」ことの意味はその主題にあるのではない。「君はいつもただ芸術について語っている。君自身をより高い段階に高めよ、その時、君が何を言おうとも、それは一つのより高いものである。 — 君が言うすべては、一つのより高いものとなるだろう、君が眠りについて、朝の化粧について、一枚の木の葉について、それどころか一人の別の人間について、経済についてさえ、政治についてさえ話そうとも」(IX/51)。何について語ってもよい。ただ良く語れ。「書く規則 君のものを言え、他の人たちのものを繰り返すな。私はただ、私の心を燃やすものを言いたい」(VI/36)。

ホールが「書く」についてイメージすること。「イメージとして私の前に漂っている作家は、汗気のある焼肉を提供しなかった。彼の散文は旋律的にざわめき始めるものではない。しかし果てしない苦勞によって獲得された彼の著作の中のいくつかの文は、黒い、ガラスのように明るい鉄のきらめきを持っている」(VI/47)。「書く」はアフォリズムの文体で記されることが多い。「これらの文は金属のようであるべきだ。紙のようではなく。君はそれらを美しく彫刻しなかったか。(…)金属でなければ、石。最も神的なものは岩石である」(VI/48)。「私にはたくさん書く力はないので、文を鑿で彫らねばならない」(VII/162)。「すべての書かれたものにおいて調べられるべきは、何かを買収して手に入れた輝きを持っているか、あるいはあの輝く硬度を持っているかどうかである」(IX/70)。「私は欠点のないように書くためにいるのではない — そうでなければ何のためにわれわれは聖職者を持っているのか —、そうではなく、ますます純粋な証言をするために」(VII/176)。「人は詩作する際に詩作して

はならない、それは秘密である」(IX/28)。「何かを純粹に言うこと(邪魔になる異物なしに)は並はずれて多いというばかりでなく、それはすべてである。／その時、書くことはそんなに容易だろうか。－この容易さがどんなに困難であるか、それをただ実践的なものの観察だけが教えることができる。／それは単純に見える、それは容易に見える。それは単純であり、非常に難しい」(IX/65)。「芸術の中心的な問い。しかし、ある人が作家であることの真の基準は、すべてにもかかわらず、ただこれである、人が自分自身の中に、表現するという打ち破ることのできない激しさを持っていること」(IX/61)。「人間の力の実現の場所は各々人のもとにある」(II/174)。そして引用によっても、「幾人かの人は、すべての人が書くことができるであろうことを、頻繁に書きすぎる。そして彼だけが言うことができるであろうこと、それによって彼が永遠のものとされるであろうことを置き去りにする。リヒテンベルク」(VII 雑録 冒頭)。

言葉

ケラーの詩の批評で見たように、ホールは言葉の選択を重視する。「正しく選ばれた言葉よりももっと大きな奇蹟は存在しない」(XII/73)。言葉の選択、例えば「*zart*」について。「繊細な *zart* は、繊細なものの列の中で情愛のこもったこと *Zärtlichkeit* より以上である。(…) 繊細さは無限により高いものである。『ファウスト』第二部、〈なべて悔いを知る優しき者らよ、／救い手のおん眼を仰ぎまつれ〉」(VII/160)。「繊細 *Zartheit*。繊細は最も稀なものごとの一つである。ライオンはそれを持っている。(…) 情愛のあることはぴちゃぴちゃ音を立てている、いつも湿っている。繊細は常に乾いている」(VII/161)。

ホールはまた二つの「言語的な才能」を述べる。その第一は、「同義語の区別の中に」ある。「よりはっきりとした分離性が二つの同義語の間に誰かにとってあればあるほど、第一の種類の彼の言語的な才能はより一層大きくなる」。「第二の種類は言葉形式の区別の中にある。／第一の種類は語幹と関係している、他の種類は、単語たちの間の関係と関わっている、それとともにその言葉の諸変化と関わっている」(VI/39)。ここで第二の言語的才能がかかわる事柄は、文のシンタクスの構造である。「言葉たちは一人で生きているか。言葉はその意義を、コミュニケーションの強さによって初めて獲得する」(V/39)。要するに、ホールは「言葉」を文体の意味で用いている。そして文は人なり。言語表現が思索と同じ価値を持つのが、ホールの特質なので、ホールの言語表現を考えることが重要になるのだ。

「言語芸術の基本的なものはただ言葉であること。／そして人は常に別の形式の言葉の結合、言葉たちの別の関係を作るだろう－可能性は無限である－そこに進歩がある。芸術、それはそれ以前に世界の中になかったものをもたらしこと。そしてそれを人は、人がオリジナリティを探すことによってではなく、ただ人が勇気があることによって、できる。

— 何かそれ自体 — 物たちの中の — を取り押さえること、つかむこと、包むこと、離さないこと、持ってくること。それはいつでも芸術である」(V/21)。

「勇氣」というようなおよそ現代の批評的言説には登場しない言葉がホールには現れるのは、ホールが常に精神的労働者（ここでは言語の芸術家）の活動を促進することを念頭に考えているからだ。言葉の表現は、生のそれと同等の意味を持つ。「言葉の正確さの問いは、書くことを中断させる、ゆっくりさせるばかりでなく、一つの完全に遠くまで伸びて行く仕事を外的に静止させる、そして長い間。 — しかしまたふたたび遠方のもの、深いものへの門を開く、そしてその現実的な解決をもたらす」(IX/112)。「言葉において最も美しいものはそれらが（通常は）表さないものである」(XII/59)。「言葉は言い表すことのできないものの器ではない、そうではなく身体である。言葉は何かを持っていない、それをこちらに持ってこない。言い表すことのできない意味に対して、言葉は無言の役者のようである。彼らは身を傾け、お辞儀をする、自分の中に閉ざされた身体たちは。彼らは操り人形のようにある。しかし無言の役者がするダンスの中からいずれにせよ言い表すことのできないものへの眺めが君に瞬間的にでも予感するように次第に意識されてくるだろう。そして君は生を持つ。〈すべて無常のものは／ただ映像にすぎず〉（『ファウスト』第二部）。言葉は一つの移ろいゆくものである」(V/11)。

ホールは論述しない。イメージ的な文が散発的に投げ出され、読者は自分でその関連を読み取り、航路を形成するように要請される。

ドイツ語

言葉の選択はホールのドイツ語による文の中でのことであつたが、その母胎であるドイツ語についても「選択」を話題にすることができる。「その純粋なドイツ語はドイツ語圏の中では、どこでも、つまり全体としてのいかなる地域でも話されていない。／ドイツ語の発音にとって最良の影響は、イタリア語あるいはラテン語のそこから来る。（トーマス・マンの『魔の山』の中の、セテムブリーニ、ドイツ語ではなくラテン語の出身である彼は一番よく、正しくドイツ語を話した）。／スイスでは真にグロテスクな誤りが広まっている、人は正しいドイツ語を学ぶためにベルリンへ行かねばならない。（人々がその時そこで学ぶこと — 発音の無愛想さ、偉そうなこと、それは一つの言語の上にニスとして置かれているのだが、その言語は本質的に自分をそれ以上に形成せず、自分を方言の水準を越えて高めることはなかった — それはひどく憂慮すべきことの何かである。／ドイツ的なもの、発音と同様に言語は、ほとんどただ研究によって、思考によって、抽象的なものから促進されなければならない）」(IX/47)。

ホールは1924年から37年までのほとんどをパリやオランダで過ごした、37年の「帰国」

以降も、ジュネーヴに住み、生活の言語はフランス語であった。チューリヒ出身の妻、Hanny Fries への手紙の80%はフランス語で書かれている。そして彼はスイス・ドイツ語を「方言」とし、生涯標準ドイツ語しか話さなかった。それは、政治的ではなく、「精神的な亡命」である。「人は最大の力をその起源の領域から向きを変えることによって獲得する - 亡命によって」(II/27)。「良きドイツ語はすでに私にとって十分である。ドイツ的なドイツ語は多すぎる」(VIII/89)。「ドイツ語を人はフランスで、さらに良いのはラテン語を通して学ぶことができる」(IX/46)。ホールにとって言語は精神の活動を表現するための媒体である。彼の「ドイツ語」は時代的・空間的に限定されていない。それはかつてエラスムスなどの人文主義者、スピノザが使用していたラテン語に近い。当時、ラテン語は世俗的には使用されず、ただ精神の言語としてあった。現実世界や時代を超越する(それを志向する)言語をホールは彼の「ドイツ語」に求めていた⁶⁾。

6 何を書くか

「読む」「書く」「形式」「引用」「批評」など今までの述べてきたことはすべて、同一の精神の活動の様々な現れである。これから論じる「書く」は、ホールが「書く」ことと格闘している具体的な姿である。「書くことについてもっとも一般的なこと。何かを見る、そして言う。何かを見る、そして言うことはすべてである、それは稀であり、困難である」(IX/64)。ホールの「書く」ことのイメージは攻撃的ではない。「私は魚がそこにいるとき、魚を獲らねばならない」(VII/77)。「家 - そこに彼は待ち伏せして横たわっている。 - 漁師が岩のある海岸で魚を求めて横になっているように - 猟師が朽ちた溪谷の中で、切株の隣で、射撃姿勢で、待っているように、というのは、何かを通り過ぎるからだ、時々、間もなく、何かを通り過ぎる、その時、銃声が、鈍くどんという音をたてる、彼は集め、それを

⁶⁾ この文脈で「方言」についてのホールの考えが理解される。「私が方言を憎んでいると言えば、私はいったいすべての特性に反対であるか。文化言語の中では特性は生産的になる。方言の中ではそれはただ方言自体であり、君は何も付け加えていない。数千の人たちがそれについて思い違いをしている。彼らが何もしなかった、何も創造しなかったところに、一つの業績を想像した。多数の人たちの言語の中で語り、しかし独自であること、それは困難である」(VIII/79)。方言は、特性の固定された類型性である。しかし「言葉もまた、不断に死んでいくものであるし、不断にその生命を受け取らねばならない」(II/68)。「ことわざ」は言語の類型的表現そのものである。「ことわざで自分を表現する習慣のある人は愚か者である」(VIII/51)。ホールは「すべての始まりは困難である」ということわざを、「何十億の人間たち、彼らはみんな、生きることを始めた - 容易に。それは全く問題なく容易だった、彼らはそのために何もする必要がなかった。そしてそれからそれはますます難しくなった」と皮肉とともに批判する(VIII/51)。ホールは、〈家屋敷 Haus und Hof〉のようなことわざ的な言い回しを認めるが、「人が、言葉の中で一つの軽い変化を、例えば言葉の置き換えを生じさせるということがなければ」承認しない。「その置き換えは不可解なものを爆破し、言葉を再び活性化し、呼吸させる」(VI/34)。言語表現は、精神活動を活性化することに仕えるべきなのである。

見出す - そのように彼はこの疲れた一日に、陶酔を求めて待ち伏せしている。彼の状態はもろく、力がない。そしてその時、具象的に、一回的に、単純に、輝くものが近づく。彼はそれを集め、取り、見出す。／それは彼のものか。否、それは彼のものではない、誰が、そのようなものを所有していると誇ることができようか。彼はそれを盗んだ、こちらに持ってきた。彼は詩人である」(VII/79)。

観察

「われわれは退けることのできない、日常的に更新されるべき、根本的に真剣な努力を持っている、つまり、感じられたこと、見られたもの、考えられたもの、経験、創造されたもの、理性的なものと言葉とを可能な限り一致させて把握するという努力を」(IX/39)、すでに引用したこのゲーテの言葉が、ホールの言語表現のマキシムである。それは実践的には「観察」のことである。「観察とは何か。愛である」(II/242)。

観察されるものではなく、観察が重要である。「モデルは画家に教えない。彼がモデルを観察することを観察すること」(V/29)。「美しいものの謎(画家がモデルを描く)。ここでは思考の中にまったくゆっくりと一つの転換が現れた、一つのラディカルな混同が。その絵が実行する人に適合していることによるのみ、美が達成されるのである。いつか一人の人間が一枚の絵を世界の中に置くところで、彼に適合しており、彼に完全に仕えている絵を置くところで、その時その絵とともに美が達成されたのである。〈物質的なものは存在しない…〉。完全な生の出現はいつでも美しい」(V/36)。

手紙を例にしてホールは観察について語る。「大抵の手紙は、細部の代わりに、一般的なことが与えられているという点で病気である。／さらに、もし細部が与えられるならば、通常のもの代わりに特別なものが求められるという点で、病気である。／君は、一般的なものを書いてはならない、そうではなく細部を、そして特別な細部ではなく、普通の細部を書くべきだ。 - それが力を持つ、それが照らし出す、ここで君は現実的な特別性の表現から逃れられない、ここでわれわれに全体的なものへの視線の力が与えられる。／君が君の一日をどのように整えたか、朝起きるときの薄暗闇の中の6時からの気分(毎朝)、霧笛の響き(毎年)」(VII/102)。知人たちの手紙の中に、「彼らの半分の確信、彼らの一般化、彼らの〈意見〉」が書かれている。「意見は困窮の程度にまで成長しきっていなければならない、それがもはや許可を求めないほどに。／いったいただりヒテンベルクやカール・クラウスだけが彼らの意見を表明する権利を持っているのか。そうだ、ただこれらの人たちだけが。意見は現実性 WIRKLICHKEIT を持たねばならない、そして意見の現実性は、完全な必然性の中に存す」(VII/102)。

『覚書』の中には「文学」に分類される多くの文章がある。それらは「観察」の証言である。

「観察。金脈 - 強制されない物語 - その金脈はどの家の中にも伸びている, M 小母さんのところばかりでなく。彼女は厳しい, 辛辣なほど公正な女主人で, ある非難の余地のない人生の後で, 高齢になって, その地方のマスの小川に毒を入れた, 彼女があるパーティをする二日前に。- 強制されない物語のこれらの金脈を人は至る所に見出すだろう, 人がただ静かな(忍耐強い)観察によって見ることに達するところで。I) これらの人々の主要な関心は何か?。II) 彼らの一日の流れは何か?。III) 信じられない鉤が見つかるまで待つこと。例として私の一番近い隣人たち。 - この〈屋敷〉の中の」(VII/19)。例えば, 「犬を虐待する孤独な老人」。「高位の軍人」(「高位の軍人がここに住んでいるというのは, なるほど幾らか奇妙に見えたが, しかし結局, 世界の中では何が可能でないだろうか)。

「どの点に関しても粗野な女」。「恐ろしい大酒飲み」。「植物を食べる人」(「彼らの外見と生は雪のように白く, 純真だった。女はいくらかハラタケに似ていた, 長い首をした男はボーイスカウト団員とダチョウに似ていた。彼らは穏やかな狂気の評判を持っていた。しかし彼らの実際に奇妙なことは, 外見について語らないとすれば, 彼らが内面的に, 周囲全体の人たちの誰かに劣らず奇妙であるということであった)。「それは果てしない素材の痕跡である」(VII/19)。

ホールにとって観察の特権的な場は「カフェ, 飲食店」である。「あるカフェで私は, 私が何か月前から見なかった, 一人の漁師に再会すると思った。私は近づいて行った。それは彼ではなかった。別のカフェにその漁師」(VII/32)。「細部。そこに彼女は座っている, この華麗な, いかつい, 強力な酒場女, 酒場の主人の妹, 市民的な女王, そしてその巨大な肉体の中から不確かな, 縮れたまなざしが見ている」(VII/43)。「細部。すっぽりと覆われたコービーショップ。しかし人はまだその中を覗くことができる - , 一軒の別の家が立っていた, そこにはほとんど一人の客もいない。窓とドアの後ろの厚いカーテンで密封されていた」(VII/66)。「ある人が, 一般性の日常的に知覚可能なものの中にそれほど突出しているわけではない - 作用するものの中には突出しているのだが - 幾つかのものごとに対してもっと多くの知覚能力を持っているので, 迷信的とみなされることがありうる。/一定の場所が常に一つの作用を, そして別の一定の場所が別の作用を持つということは, 否定されないし, 余りにも頻繁に起こったことだ。そしてこのカフェで, そんなにも何度も, 奇妙な解明, 突然の思いつきが起こるのはどうしてか, あの別のカフェではそれに対して何も起こらず, 第三のカフェでは悲しむ傾向を持ったということは。もうこれらのものごとに注意を払うべきではないのだろうか。否定的な, それどころか危険な場所や家がある。一つの全く暗いものがある, その暗いものをわれわれは不安から, 弱さから, あるいは何らかの情動から信じない, そうではなく, その暗いものの認識はわれわれに観察によって伝えられるのであ

る。それをバルザック、ソクラテスは信じた」(VII/31)。

これらの細部はイメージか、現実か。ホールは「自伝的なもの」について述べる。「個人的に体験することの一つの断片が、その中から一つの稲妻が — 一つのイメージ、一つの考えが — 突然現れることができるような、そのような距離の中に置かれ、そのように操作されるならば、そしてこの突然現れてくるものが起こったことよりももっと重要であるならば、その時、その表現されたものは客観的にされており、もはや自伝的とみなされることができない」(VII 付録の冒頭)。だから「細部」を「客観的にさせるもの」は、その細部の内容ではなく、細部を言語的に表現する力である。悪く表現された細部は価値がない。ホールの「観察」の細部の描写は、ホールが個々の細部をどのように表現すべきかと反省しているそのプロセスを描いている。「ほとんどすべてのものが一つの深い意味を持っている。詩作することは、それに意味を再び授けることである。(…) われわれは歴史の中からもただ幾つかのものだけを探し出す、それを再活性化させるために」(XII/10)。

客観化とは、事柄を過不足なく言語で表現することである。『覚書』のすべての文が、その言語表現の試みである。それが「猫の眼」であっても。「一度、灯油の照明のもとでの太った猫の眼。少しの色調もない、明るいと同時に暗い緑の巨大な球体。透けて見えるが、明るい暗いは隣り合ってではなく、*同時*にある。人はその眼を明るいと暗いと名づけることができた、否、人はそれを両者として表さねばならなかった。これらの暗い、ほとんど黒みがかかった、計り知れない、透き通る、巨大な(しかしどこでも様々に色を変えない)光を保っている球体は一つのとても明るい緑色で規定されている。／あの山の湖。しかしそれは、*無色調性*で(最も冷たい宝石よりももっと冷たく硬い*無色調性*)、強さと一回性を持っているので、人はそれについていかなる観念も持つことができない。その周囲の岩や石の地形は完全に消えていた。その中の湖は、まるでそれが*世界の眼*であったかのようだった」(VII/104)。

ホールが時に用いる「顔」のメタファーは、観察とその「客観化」を意味するように見える。「何日も、決定的なときに、この出来事が私に取りついて離れなかった。／人は努力して、一つのかかなり遠い丘の縁を、あるいは壁の向こうの一つの線の小さな縮れたものを眺める。そして人は知る、そこで何かが起こっているはずだと。一つの顔 *Gesicht* が描かれている。人はそれをまだ見ない。(…) しかし人はそれに関して働いている。われわれは鋭くそちらの方を眺める、それを、それが生まれた瞬間に、認識しようと努力して。(…) この途方もない地図の上に、ここから森と丘の土地を越えて雲の方へ、空高い最高の中心にまで上昇しながら — この地図の上に、突然その顔 *Gesicht* が現れる。すべての線、個別の労働-群はつなぎ合わされた。(…) しかし空の天頂にまでその顔の強力な輪郭が上昇する。／われ

われ人間にとって、諸関連、ダイナミックなものは、はるかに明瞭である、次元よりもむしろ明瞭である。 - しばしばわれわれは観察できた、どのように預言者たちの告知が恐らく正しかったかを、 - ただ数字の言明が正しくなかったのだ」(XII/153)。

「顔」は認識が描く輪郭線のことだろう。その「顔」の認識／描写をホールは「幻想化」「空想」で表わす。描写し、現実には「客観化」である。その事情をホールは「リアル」の概念によっても表現している。「いったい、リアルなものの基準は何か。肯定することができるという尺度である」(VIII/28)。「すなわち、非リアルなものの中から、人間にとって、最も多くリアルなものが現れる。 - 人間に生を可能にするもの、あるいはもっと鋭く言えば、非現実的なものから人間にとってリアル REAL なものが現れる。 - 幻想、幻想化。(…)しかし生を与える一つの幻想、人間の領域の中で決定的なものを可能にする一つの幻想。その最高の段階における働くことは、空想となる。つまりわれわれにイメージを建てることを可能にする。(…)最高の認識、見方 *Schau* は、行為を肯定する。行為はその見方の召使い女であるので。何度もその見方を授けるために、見張る *die Schau halten* ために。(…)そしてついに、私に死の克服のための唯一の保証を与えるように見える命題。〈働くことは、死すべき運命のものから、歩き続けるものの中に翻訳することに他ならない〉」(XII/115)。

7 諸形式を書く

私は「批評」のところで「形式」についてのホールの考えを述べた。「書く」においても「形式」について論じることができる。ホールは言語表現の形式を考察、反省するのだが、それはホールがその形式を実際に書くことによってである。小説について考える小説、メタ小説のように、それぞれの形式(ジャンル)は、そのジャンルについて反省するものとしてある。『覚書』それ自体が『覚書』とは何かと反省する。それが従来の類似のジャンル、アフォリズム、エッセー、批評文、格言、詩等を考察し、その差異を解体、侵犯、確定、統合することによって。ジャンル(寓話、童話、アフォリズム、エッセー、小説など)の反省。形式の考察(メタ言語、批評)がその「形式」の文となっている。文学を文学たらしめているものは何か、と問う。

散文 - 「散文は、もしそれが価値を持とうとするならば、それ固有の領域を認識しなければならない、そこでは散文は映画と、ラジオ、ウォレス、新聞雑誌などとも競争することができない。(それは、散文自体が自明なことに常に負ける競争である)。平静な微笑みとともに散文はあのすべてを放棄することができねばならない、リルケが、ヴァレリーが、マラルメが指示した道の中を移動するために」(VI/4)とホールは散文についての反省を「散文」

の形式で書く。

童話 - 童話はもっとも虚構性の高い文学形式である。『覚書』の中には『三つの課題の童話』があるが、ホールはそれを、「童話」形式を反省しながら、語る。さらに童話を語る前にその「解釈」を書いている。「三つの課題の童話はその全体性において、月の森とハリネズミの森の私の虚構の中に沈殿したこの根本原則、一つの生産は別の生産を促進するという文以外の何を言っているのだろうか。鳥たち - 象、自然の部分、あるいは自然力の象徴。人間たちはまた自然力である」(VII/24)。

そして物語が語られる。「三つの課題の童話。一つの有名な童話をもう一度語ることはどんな意味を持つことができるのだろうか。特に個人的な精神的体験によって条件づけられている変更を伴って、その他にかなりの解釈する付属品を伴って。 - しかし一つの形式で書かれたものが別の形式で再び与えられることは許されないか。あの変更や付属品が重要であっても？。／昔々、一人の王様の息子がいた、そしてとても遠く離れたある国に一人の王様の娘がいた。一番美しい王の娘、つまり最高の意義、最高の意義をもったもの。／〈王の息子は愛に燃え上がった〉、つまり彼は、ほとんどすべてを満たす衝動を気分の中を感じた、彼女に到達し、彼女と結び付く力を感じた。最高の意義を持つものごとに達すること、成し遂げること。／そのような目的のために人はしかし出発しなければならない。今しかしその国の賢者たちが思いとどまらせようとした。彼が彼の中にあつたもの、大部分ただ彼だけが知っていたものの声に耳を傾けたならば、彼は、そこへ行くという彼の決心を再び避けられないものとして感じた。そしてついに、すべての抵抗に逆らって、出発した。／最初に、鳥たちが網の中にいた。(彼は小鳥たちを解放した)彼らのざわめきは彼にとって十分感謝だった。永遠の中への彼らのざわめきが。／第二に、彼は、(罫に落ちた)象を解放した、それは彼にとって容易なことだった。しかしまた避けられないことだった。つまり、一つの必然的な処理。彼は彼の道で、良く進み続けることができなかつただろう、それを処理しないままにしておくことはできなかつただろう、彼の道の上では。それは彼に、彼の内的な思案、彼の冷静さ、彼の正しい構想を妨げただろう。(先行者は似たような状況でそのような必然性を感じなかつた。彼らは目標をしっかりとらえて進み続けた。目標の力、彼らの中の愛は大きさが足らなかつた。それは分別に従って、自分に向けるのに十分であつた、しかしその男自身を夢中にさせるのに十分でなかつた。すべてのものごとの中を押し進み、自分の世界を変えるには十分でなかつた)。／第三に、記念碑を鑄造している巨人たち。彼は(傷ついた一人の巨人の傷を)洗浄し、傷に包帯を巻いた、彼はそれを、彼が先行する二つの行為を実行したのと同じ意味で同じ関連からした。／(到着した国の)老いた王、一人の灰色の、氷のような君主、王は、彼が一度ただ厳しい監視のもとで示した娘を囚われの状態にしてい

た。／最初の夜、様々な種類の穀物の数百万の粒が、何トンもただ一つの巨大な山となっていた。彼はその粒を明日までに正確に分離しなければならない。何ダースもの、何百もの小さな鳥が来て、それらの穀物を分けた。／第二の課題。〈湖を次の夜の間に汲み出さねばならない〉。象たちがやってきて、水を汲み出した。／第三の課題、〈その乾いた湖のところに一つの宮殿を建てよ〉。砂漠から巨人たちが来て、宮殿を建てた。太陽はその窓ガラスに輝き、白金の先端は輝いた、それは、灰色に、消滅したように外に出てきた王に向かって輝いた。／そして今、誰かある人が、何らかの形で抵抗することは、すべての可能性の外にあった。すべてが達成された、その王の息子はその王の娘をもらった、そして彼女と一緒に遠方に戻っていった」(VII/25)。

後にホールは記す。「三つの課題の童話は、一つのとても良い童話である。それが(…)、良き人が報われることと悪い人が罰せられることを表現している、あの道徳話に属していないことは、注意を払われなければならない。つまりその男が、自然の力を自分のために贈与した、(あるいはそれらに専念した)ことは注意されなければならない。人間や、社会や、制度や、神に報いることではない - いかなる報いることもない。(…)。その童話はだからまったく真である」(IX/101)。

夢 - 一つの章は「夢」の記述である。ここでも案内者はリヒテンベルクである。「夢は一つの生である、その生は、われわれの他の生と合成されて、われわれが人間的な生と名づけるものである」(X「夢と夢たち」の冒頭)。夢は日常の他の事柄と同じ一つのリアリティである。これは精神的にはフロイトの無意識の発見と符合する。「〈人類の歴史が為した最大の発見は〉とブルクハルトは、ピタゴラスとコペルニクスのそれについて言う。私はただ言うだろう、〈最大の天文学的な発見〉。リヒテンベルク - フロイトの発見、夢がリアルである、世界の一部である(泡ではない)という発見は、私にはそれに劣らない偉大さであるように見える。／狭い関係 - あるものが別のものによって貫かれていること。ここ夢の私の空間の中で、ここ精神的な空間の中で、心理学の中で、この命題の中からどのような内容が現れてくるのか、 - 私はそれをもう今は知らない。しかしそれは私を身震いさせる、私を駆り立て、それについての輪郭を書き留めさせる。 - これらの言葉、 - 私が半分の睡眠あるいはまったく夢の中で見たもの!。 - そして再び突然私からまったく逃れてしまったもの。その存在の条件や状況の何かをほとんど残さないで、まさにここにあるこれ、一種の殻 *SCHALE*。／(殻から貝動物へと突き進むことは困難である。しかし自然研究の中においては、人はまた殻を軽蔑しないだろう。そして人は化石から何を推論しなかっただろうか! - まさにそのようなもの、殻と化石は、夢の出来事の中からはしばしばわれわれのところへ投げ込まれた。 - 夢の海の中から、われわれの昼の浜辺に、われわれの

目覚めの中に)」(X/20)。

観察することをそのまま記述せよとホールが主張したように、ホールは夢を現実の出来事のように記述する。「君たちは、すでにそんなに性急に？。あのすべての別の夢の中に何があるのか、と君たちは主張するのか、蛇や、廊下、階段と塔、地下室や聖堂の夢の中に。まるで、夢がどのようにそう言うかということが、それだけで興味深いものでないかのよう」(X/8)。

解釈が重要なのではない。そうではなく夢をリアリティとして認め、「観察」し、描写すること。「夢がどのようにそう言うか、それだけが興味深い」。夢は一つの表現形式なのだ。そしてその表現の仕方に意味があり、その夢の意味を問うこと、夢解釈にはではない。しかし夢の描写はそれ自体矛盾した概念である。無意識の世界を言語によって意識の世界に翻訳する。しかしそのオリジナルはもう存在していないし、翻訳の正当性も確認されない。あるいはこの言い方自体がフロイトの精神分析のカテゴリーによって規定されている。フロイトの理論をカッコ入れして、夢を表現することは可能なのか。それはホールの主要な関心になる。夢とは何かを考えながら、ホールは記述する。夢記述の正当性を反省する媒体としての夢と夢記述。記述と反省が折り重なって進む。

ホールは、「私のところでは、夢の精神は数日間、同じ精神である」(X/10)と言う。「私は、私が夢の中で私の思考の仕事と同じテーマで継続するとき、同じ仕事を大きな深さの中にまで継続した、その昼には全く手をつかむことのできかなった深さにまで。その深さは、とても多くの日々の協同作業の後で、昼においても再び手をつかむことが可能になるだろう。この文は確かに妥当する。どの人間の精神的な能力も、夢の中では目覚めている時よりももっと大きい。／夢の中ではむしろ大抵の観念は、その同じ人間の、目覚めている時の観念よりもっと正確で、豊かで、明るい」(X/14)。

夢は精神の活動である。しかし、それは覚醒時のそれと同じ価値を持つのだろうか。ホールは、彼が行ったことのないバーゼルの夢を見たが、その夢の中でのバーゼルの認識は妥当性を持つか、問うている(X/13)。あるいは別の夢。走っている列車から「私」は、一つの小さな湖の港で一人の男が合図のように手を上げているのを見る。「それから、港の中には一艘の船があった。今その船は揺り動かされた、一つの途方もない波がまさにまだ滑らかな湖から打ち寄せるように見えた。波は今その船をとっても強力につかんでいた。(…)湖は再び静かになった」。「これは、今私が自分に置く最も困難な問いである。最初に私は、その腕を上げることが起こったとき、嵐、波の歩みについて予感もしなかった。その二つの部分、その記号と嵐の結び付きはどのようなものか。私、夢を構成する私が持っていたその結び付きは。私は二つの脳を持っているのか。その一つの脳の中では私は、全く確かにその記号の

際に嵐の何も予見していなかった。そうではなくその脳を通して私は一人の全く客観的な、事柄と結び付きのない、緊張して眺めている、それから完全に驚いた傍観者であった。そしてその後ろのもう一つの脳について私は絶対的に何も知らないのだが、しかしそれは夢全体を構成しているのだ。(というのは、私はそのすべてを一人で見たから)。その脳は最初記号を置き、それから嵐を置くのか、私を完全に観客のように取り扱いながら」(X/26)。

夢は覚醒時の現実と等位のリアリティである。夢は同じ精神の活動である。夢は覚醒時の自己とは異なった何かの語りである。夢を記述することは、異なった審級の言説を翻訳することである。この夢のパラドクスこそがホールを刺激する。

「突然彼は分かってきた、彼が久しい以前から一つの夢の面倒を見ていること、それを組み立てることと一緒に身をくねらせていたことが。(…)この夢作品を書いた後で - その書き記すことは、そこにおいて人が目覚めて、そもそも書くことのできる最も初期の状態において、起こった、その手書きははじめほとんど解読不能であった、それから徐々に、それほどぼやけない形式を取った、 - この書き記すことの後で私は何かを驚かしたという感情を持った。メモする経過の中で、私ははじめて本当に目覚めた、(その際に各々のもつと目覚めた段階は書くことのより大きな困難に相応していた。最初の瞬間での最大の明晰さ)。(…) /そして夢の構成を求めて努力することは、この関係自体の実現を求めて努力することの同じ流れの中から手に入れられていた。 /私は、詩作は全く単純に夢みることの模倣であると思う」(X/31)。「関係」とは夢の中での何かの精神活動に関する関係のことであるから、夢の構成を求めるとは、夢を記述する、「現実の言語に翻訳する」ことである。それは夢の中で何かの関係を求めることと同じ精神の活動である。夢が一つのリアリティであることを承認すると、夢は表現として文学となり、夢の記述は別の審級における文学となる。

夢はそもそも「文学」であり、夢の記述も「文学」である。「(夢、比類なく) - しかし夢は何度も比類なく見える。私は一冊の本全体を夢みた。 - また絵のついた -、その本を私は初期の年齢のころに書いた。(せいぜい20歳、むしろ18歳)。しかし後で、その本を良いとみなさないで、いわば自分で忘れてしまった。今、私はだからそれを、忘れられていたのと同然のそれを再び取り出した、そしてそれをある別の人の作品のように読むことができた。その中の素晴らしいもの - ただ山(私の幼年時代の最も初期の山)、愛の活発な白熱、そして芸術 - は言葉で言い表せないものだった！」(X/25)。この「絵本」が忘れられていた、それを夢の中で再び見た、読んだ。自分が書いた絵本、そして忘れていた絵本を再び見出した。これはその「絵本」自体が夢のメタファーとなっている。夢はまさに夢見る人が作ったものだが、それはその人とは離れてそれ自体としてある。私は、荘子の夢を思う。「荘子は蝶になった夢を見て、目覚めたとき、自分が蝶になった夢を見た人間なのか、

人間になった夢を見た蝶なのかわからなかった」。夢を一つのリアリティと考えるならば、このパラドクスは常に存在する。夢は常に自己言及的である。

「書く」に関するこのパラドクスを次の「夢」が表している。「夢の中で大量に書いた」(X/27)。「その週の間を通して、何度も、夢の中の大抵の時間を書きながら。この夢の書くことは全くそれぞれ違ったものである。猛烈に追い回すことと狩ること。凌駕し続け、もっと速く疾走し、私の頭上を波のように激しく打ち付ける素材 - 殺到によって圧倒されて。その結果、私は目覚めることを喜ぶのであるが、しかしその時、とても不快な気分の中において、私は初めに自分を元気づけなければならない、世話しなければならない。／そんなにも的確に、強力に、勝ち誇っているのだから、私は、目覚めながら、それが書かれているのを見出すことを確信している、夢見られたのではなく、物質的な紙の上に。そして(…)初めて私は、何もそこにはないこと、私のベッドの隣の紙は白く空っぽであることを確信しなければならない。／追跡しながら、洪水によって水浸しにされて書くこと、あるいは勝ち誇った書くこと。しかしそれは極端なケースで、その間にはあらゆる種類の段階が存在している、骨の折れる戦いと言葉による表現、〈私が維持しなければならない〉一つの文に達すること、〈少なくともそこにあり、あらゆる時代にわたって少なくともそこに書かれてある(たとえ他のものが沈没しても)〉文に達すること。 - そして、私がまだその字句内容を思い出すにしても、私が後に全く理解しない文に達すること」(X/29)。そしてホールは「夢の中で書かれたものを書き取る一つの装置が発明されるべきだろう」(X/30)と願う。

夢について考えることは結局、睡眠時と覚醒時の精神の働きの差異を考えることである。「暗くなる(眠りへと)中で考えた、〈彼女はいったい自分をきれいにしないのか - 徐々にすべてのパステルの色が再び遠ざけられるほどに〉。その際に、パステルで描かれた猫、あるいは私がちょうど表現しようとしている猫が問題であった。これは素早く取り押さえられる - というのは、私はまだ完全には眠っていなかった - そして目覚めた。／われわれはそんなにも単純な移動、変化の方法をとる。われわれに昼に本質的であるとして現れるものがわれわれのより深く見ることの前では本質的とは現れないから。／〈君は正書法を正しく持っていない〉と昼は言う、しかしそこでは正書法は存在しなかった。〈君は君の衣服を正しく着ていない〉とその小さな昼は言った。しかし彼らがそもそも衣服を着ていたかどうか、そこで動いている巨大なリアリティたちは知らなかった」(X/33)。昼と夜は別の正書法を持つ。覚醒時は、それらの正書法がいわば消える／現れる時である。不思議なその「時」は、文学的な活動をもっとも喚起する時だ⁷⁾。

⁷⁾ ノヴァーリス。「夢をみているという夢をみるとき、われわれは目ざめに近い」。(ノヴァーリス(前田耕作訳):花粉 日記。(現代思潮社)1977年,156頁)

夢を一つのリアリティと考えると、必然的に生じる、眠りと覚醒のパラドクス、それをホールは多く描いている。しかし「夢」はその事情だけに還元されるのではない。他の多くの夢の描写があるが、ホールは、「三つの課題の童話」のように反省的な考察を加えながら、描写する。

「ネッツタール（私の出生地）からシャモニーの方へ。素晴らしく - 無愛想に、（明るい褐色の軽石のように）ますますそっけなく出現してくる、もっと高い尾根。その時、小さな森の中で、かさかさ音がした。Lはそれはハリネズミではない、ビーバーだと主張した。Lは彼に何か食べ物を与えようと言った。（…）最後に私は彼と腕を組んで歩いた。／数週間、私は、私が忘れてしまっていた、この夢のスケッチを読んだ。〈素晴らしく - 無愛想に（明るい褐色の軽石のように）ますますそっけなく出現してくる、もっと高い尾根〉と私は読み、一つの観念を形成した。 - 突然、しかし、私は再び**忍い出す**、文書的な伝達に基づいて苦勞して構成された観念からすぐに飛び降りながら、それを投げ捨てながら。それから私はこのすでに遙か遠方に追放された観念をもう一度探した、それを近くに、思い出の隣に引き寄せ、**比較した**（その夢のルポルタージュによって引き起こされた観念を、思い出によって与えられた観念、つまり、夢の中に実際にあったイメージと比較した - その夢が一時的に抹消されたことによって、そもそも同じ個所に一つの別の観念を形成することが可能となった）。他ならぬこの問いがその実験の基礎になっていた。つまりどれくらい私は、夢の中で見られたものの一つの正確な観念を**他の人たちに与えることができる**だろうか。（突然に回想が始まったその瞬間の前に、私はその夢に対して一人の別人のように立っていた、つまりまったく文書的な伝達に頼っていた）。そして見よ、その二つの色 - その観念の尾根と回想の尾根 - が互いに二つの完全に無調和なものごと、別のカテゴリーのものごとのように凝視しあっている！。私は少しも正しい観念を呼びおこすことができなかった！」（X/32）。ここで問題となっている夢の伝達の困難（夢のメタ記述の困難）の考察を、ホールは夢の記述の中で試みる。夢の形式は夢を描くことによって継続される。その記録がホールの具体的な夢の記述である。

「〈それがどのような種類のものであれ、無条件の活動は最後に破産する〉。ゲーテのこの重大な文を読み、数日間それとともに私を運び、それから素晴らしく豊かにそれについて夢を見た。／私はある別の町にいた。流れ込んでくる物たちの多様性が、突然、住むことの一種類、人間との交際の一種類の中に、提供された、動物との交際の、庭の、都市の、生の種類の中に提供された。〈ここで私はわずかのお金でいつも十分に飲むことができる〉。／老いた猫たちが庭の中を散歩していた、新しく宿を提供されて、爽快な気分になって、疑いながら。庭の中に（あるいは部屋の中に）一本の草が立ち、片隅で成長していた。それは

この上なく神秘的なもので、中心だった」(X/5)。

動物の夢。「とても大きな高さからまっすぐに私のところに飛び下りてきたカラスの夢を見た。私は彼を家の中につれていった、慎重にドアを閉じ、私に一つの新しい動物が到着するときにはいつもそうであるように、興奮した。…」(X/11)。

「再びパリに引っ越した、しかし私は一頭の馬と一緒に連れていた。とても良き動物。それはホテルの部屋の一種のニッチに住んでいた、その小さな空間は、本来、一つの別の部屋との結合廊下だった、しかしそのドアが封鎖されてしまった。訪問がたくさん部屋の中に来た。その訪問は快いものではなかった。しかし私は愛想良く振る舞った。(おそらく、その近くの方を私が何度も眺める、その馬が私を慰めたので)。私が知っている恐ろしい女が、結合のドアを大きく開けたとき、私はがなりたてた。／Lはとても静かに振る舞い、大きくすべての側を眺めていた。晩にわれわれは最初の、都市を回る散歩をした(第13区に向かって、そして24時に)。そして私は最初に何かについて激しく罵った、そして反論が挙げられなかったときに安心した。道路、茶色の - 暗く。素晴らしい。パリ」(X/12)。ホールはパリにいたとき、パリの全区を、一区ずつ夜通し歩いた。この夢はホールのパリ体験のデッサンだろう。

「〈この地下室の中で私は落ち着いて仕事ができる〉と私は考えた。二つの地下室。最初の地下室は、一つの広間になった。道路に向いていた明るい窓、寄せ木張りの床、広間の中ですべてのものが輝き、純粹である。そして私の祖母の家の中に収められていた」(X/17)。ホールはジュネーヴでは主に経済的な理由から地下室に住んだ。しかしこの夢が記述されたのはその10年ほど前のことである。いわば予知的な夢。

「夢の中では、重い病気を抱えていることと、ひげ剃りのために石鹸を塗られていることは同一であった。…／第一にその夢は分析自体を片づけた、指示を与えた、どのように人が似たような場合に分析者と接するべきかと。第二にその夢は素晴らしい教えを表明した」(X/21)。

大聖堂。「大聖堂、最初は重要に見えない、そうではなく完全に月並みな、混合した様式の。他の建物の中から真ん中にそびえている塔、パンテオンの場合のように。途方もない高さ。私は上りそして上った。見通しのきくことなしに上ること、いつも内部で階段室の中を、ほとんど遠方への(向かい側への)見晴らしなしに。深いところへの見晴らしなしに。とてもありふれた階段。／一度その階段室は広がり、大規模な駅のホールとなった、駅のホール、列車がそこに入ってきた、線路の土手の上を(その国の遠方から)上に導かれて。／上り、上る。私にとって苦勞ではない、しかしすでに長く経過している。私と一緒に女。私の仕方の上ることに抵抗しながら。私の仕方は、この穏当に、受け入れるように(人が最高の音楽

を聴くように) 上ること, 内部から指導されて上ることである。／高さは増大した。突然私は外を見た, 下を見た。ある都市のありふれた道路を2か3メートルの深い所に発見した。歩行者たち, 平均的な路上生活。(人が二階から外を眺めるように)。／しかしその時私は, その都市の一部分全体がこの高さに, 大聖堂の全高のなにかの部分に高められていることを認識した。私は, 人が一つの大聖堂の屋根の上で, 途方もなく奈落によって他の都市から分けられて, 動いていたということを認識した。／ここで本来の塔がはじめて始まらねばならなかった。／塔の中を上り上る。すでに全部で数時間も。塔は徐々に先が細くなっていった。最後に塔は, 一軒の小さな家の直径だけを持っていた。時おり, 人はその塔を(あるいは部分的に)外部から見た。その時, 人は大抵, その塔の単純さ, 相対的に大きくないことに驚いた。(しかし, 塔の高さの真の途方もなさは, まさにわれわれの - 塔の内部を上昇していく - 道の長さの規模の中にあつた)」(X/23)⁸⁾。

物語 - 夢は表現として一形式(一ジャンル)と考えられる。夢について反省する, 夢を語る, 夢の表現を考える(表現形式としての夢), そして夢を表現する方法を考える, そのための「形式」として夢はある。

各々の形式(ジャンル)についてホールは, 実際にそれを書くことによって考える。各々の形式の文は, その形式についての反省の一つの表現である(メタ形式)。「物語 Erzählung」。 - 「三人の男たちは恐ろしい意見の衝突を持った。とりわけ誰もが互いに争った。その争いは, 一軒の家がどのような部分に区分されるかについて荒れ狂っていた。(…)その三人の男たちは死ぬまで戦ったと付け加えることが必要だろうか。誰も譲歩せず, 誰もが正しかったので。彼らは次々と死んだ, 愚か者として, 英雄として」(VII/10)。「短編 Kurzgeschichte」。 - 「最初彼らは, なぜその凍えた男がそんなに悪い状態にあるのか, 尋ね合った。…」(VII/11)。「小話 Historiette」。 - 「繊細な小淑女たち, 小紳士たち, シャンデリアの光の漏れる広間の中でダンスとおしゃべりに熱中しながら, ヒマラヤの岩壁と氷壁の中, 地下の改造されたホテルの中で。そのホテルの中で彼らは甘やかされた生活を送っていた。彼らは鉄道でやってきた, (ユングフラウ鉄道よりもっと高い種類のもの), そしてホテルの中で生活していた。(…)鉄道はもうないと, 到着した男たちは言った」(VII/12)。「王の小さな話 Geschichtchen」。 - 「その小さな話は, まだ王様がいた時代に由来している。 - つまり人がまだ王様を, 彼らが別の機能を持っていたことによって,

⁸⁾ 小説のような夢の記述がある。「最後の, 恐ろしい雄大さを持った夢」。チューリヒに現れた怪物, パニック, 逃走。「ただ瞬間的な思慮だけが救うことができる。 - そして幸運, 決定, とりわけそれ, 他にはほとんど何も無い。電光石火の行動能力と慈悲深い運命以外には何も」(X/4)。夢の記述ではないが, 寓話に分類される「眠りの祭り」(VII/109)。一つの町の住民全員が終日睡眠するという祭りがリアリズムの文体で描写されるが, それが非現実に変化する。

門番から区別することができた時代。それはただ、まさに、王が王であったその時代からの言葉が今なお一つの美しい響きを持っているからだ。／その権力のある人は、じきじきにその地方を通ってくるようになった、そして彼をふさわしく迎え入れるために、どの出費も節約されることはなかった。〈私は王のために道を準備している。私の邪魔をするな〉と道路労働者は、やってきた男に言った。しかしそこにやってきた男は、その王自身に他ならなかった、彼は彼のお供から離れ、一人で先に進んできたのだ。／そして彼は仮装して現れたのではなかった。彼は物乞いの姿をしていなかった。－ 嘘つきの童話よ、去れ！－ そうではなくまったく彼自身の姿だった。彼は、王が見えるのとまったく同じように見えた、そして他のようには見えなかった。そして彼らは彼を認識しなかった。／王は行った。後ろから従僕たちが疾駆してやってくる、そして彼らの前ですぐさま、その道路労働者は顔を下にうつぶせに倒れる。その物語の続きは、私の興味を引く人たちの誰の興味も引かない」(VII/13)。「二つの短編」－「この家では何かが正常ではない。題は教育。そして彼らはその家を砲撃した」(VII/15)。各々のジャンルのもとに想定したことをホールは描く。そしてそれはジャンルの概念が恣意的な限定であることを示唆している。

ホールは長編小説を書かなかった。ホールの文体は精確、直截性、塑像性を求める。「短編」の求心的な形式は彼に適していたのだろう。俳句などのように、緊密な狭い枠が表現を刺激するのである。

動物－夢は一つのリアリティであった。ホールの精神にとって動物は、人間と等位の存在である。「私は人間と動物の間にかなる本質的な相違も見ない。－ただ一つの量的な相違を見る」(VII/92)。だから動物をテーマにした文も、人間観察の文と同等であり、また同様に思索と表現が互いに拮抗するホールの文体の特徴がみられる。

「スズメはしかし－私はどのように君に話しかけようか、空の下の鳥たちの中で最も素晴らしい鳥よ。灰色で、一番深い地域の中に生きながら、思想の可視的な兄弟、屈託がなく！－至る所にいる。すべてを見ながら、すべての悪しき、飽食した魂によって迫害され、不審に思われて、常に観察しながら、いかなるごまかしにも理解を示さず、君は思想の可視的な兄弟だ！。スズメだけが真の至福の存在である。しかし君は確かにリヒテンベルクの動物だ。／君たち愛するものたちよ！。目立たないものたちよ、常に見るものたちよ。というのは、誰がいったい注意深く眺めているか。－スズメ。ただ闇の中では見ないが」(VII/60)。

地下室、洗濯ロープに洗濯はさみで留められた多数の原稿、そして猫がホールの *Attribut* (象徴的な添え物) である。「*円*について－一匹の休んでいる－眠っているのではなく、静かに思案しながら座っている－猫を見た。〈私は私のもとにいる〉というあの素晴らしい表現の、生きている図解。彼女は尾を彼女の基盤の周囲に軽快に密着した弧を描いて置い

ていた。一つの半円の形にではない。これ（円あるいは半円）はここでは考えられないだろう、それはその絵全体を壊してしまうだろうことが私には明らかになった。われわれはまた、われわれが向かって行こうと努力している、完成の点から生きている」（VII/103）。

漁師は詩人、魚は詩のメタファーとして使われていた。ここでは魚は美である。「魚の前の決定 動物園の水族館の中の一匹の小さな熱帯魚であった。— 今まで聞かれたことのない、名づけることのできない色の魚。私の生を与えることができたであろう色。（その魚の前でと似たようなことを私はバルザックの幾つかのヴィジョンを前にして感じた、『ざくろ屋敷 Grenadière』、『シャベール大佐』、『田舎医者』）、私は最も内的な底にまで、認識すると思った、私が生涯を通じて決して政治的であることはあり得ないだろうと。所属性が問題となっているのである。人はレーニン以上のものであることはできない、欲することもできない、ただ他の存在であり、他のようであるということが出来る」（VII/148）。

犬は人間の記号として批判される。「犬について 精神の男で犬を尊重する者は存在するか。犬は精神を殺す。／そもそも見張るべき何か存在しているのか。泥棒は決して犬ほど危険ではない。人は、盗まれることのできない、一つの所有物を身につけるべきである。人間は、豊かであるという義務を持っている。富は生産性である、支出することができるということである。もし所有がお金の中に本質を持つならば、人はそれを支出するがよい。／犬と比べると南京虫さえも素晴らしい。／原理が問題となっていて、個別の哀れな生き物に対する憎しみが問題となっているのではないこと、しかし最も多く、根本的に人間の特性と一つの人間のタイプについての怒りが問題となっていることを人が理解しないならば」（VIII/49）。犬に関してホールはゲーテを引用する。「一人の別の明らかに病理学的な素質の男が彼の病的な状態の中で述べた、〈いくつかの音は私には不快である。しかし犬の吠え声は私には一番嫌なものでとどまっている。それはぱっくりと口を開けて、私の耳を引き裂く〉、つまりゲーテが」（VIII/50）。

「ハトは、もし精霊が私にこの姿で現われることになれば、私はむしろ、精霊が私に現われないことを願う、そのようなものである。どのハトもできるだけ早く焼かれるためにそこにいる」（VII/59）。

手紙 - 『覚書』は手紙である。メッセージを伝達する一つの手段という意味ではなく、「手紙」という文学形式を反省する媒体として。各々の事柄におけるように、手紙においても、手紙を手紙たらしめている条件が反省される。まず、受信者の存在。「〈私の友人たちは遠く離れている〉。そうだ、彼らはとても遠く離れている」（XII/68）。ホールは『覚書』の執筆の時間までパリなどにいた、そして作家として無名に、孤独に生きていた。この「友人」はだからスタンダールが言う「100年後の読者」の意味に近い。「〈一人の友人以上のものを望

む者は一人の友人にも値しない) (ヘッベル)。作品は友人への手紙である。並はずれた性格の人は一般的に近くに友人を持つことはできない。彼らの作品は遠い友人への手紙である」(II/153)。「私は今、私の友人に、人間に、一通の手紙を書いている、そして彼はそれを読むだろう。それがすべてである」(VII/131)。「一人の人間が君に書いてくる、これは手紙ではない、いくつかの覚書、関連なしに並べられたものである、と。／しかし受取人である君はそれを手紙として把握する」(XI/16)。

手紙の受取人はホールのいう「真の読者」である。ここでも「書く」ことが問題となっている。「文通。私の鉄筆の中には鉛がある。極度の正確性、完全な妥当性が達成されるべきである。(私がそれに到達するかどうかは、別の問題である)。それゆえに文通に関する苦境。／文通の際には、私が、鉄筆でひっかくように書き続けるべく一つの外的な嵐を呼び起こすというように経過する。そしてその仕方です書かれたものを、発送することは、一つのはぎ取ることであり、私の魂の中が痛む」(VII/151)。「すべての芸術作品はより広い意味で手紙に他ならない」(V/13)。そしてホールは先行者の名を挙げる。「(スピノザ、リルケにおいては通常の意味での手紙があるが、それらは、前面の受取人の仮の名とともに、極端な遠方に規定されて、すでに半ば永遠性に向けられている)。ゴッホの手紙。(…) その中で彼が頻繁に〈自分自身についてだけ〉語っているリヒテンベルクの発言。人はすべてにおいて同じ高さに達することができる、そしてその高さに達することは困難である」(V/13)。「芸術全体は、いかなる人にとっても手紙以外のものではなかった。それに関して受取人ではなく、ただ送り主だけが知られている手紙。 - 人がその手紙を素晴らしいと考えれば考えるほど、愛が大きければ大きいほど、一層、手紙は良い。(…) 親愛なる読者よ、君は最大の人間になるべきだ。君はまだそうではない、しかし君はそうなるべきだ。別の言葉で言うと、私はできる限り良く書こうと努めている」(XII/40)。

語る - 「語る」は一つの表現形式である。「話すことはある時は労働である。それが生を促進し、闇を明るさに導くとき、それは労働である。しかし明白性がすでに達成されている場合、それでもって話すことがもう行為を、あるいは新しい行為を延期すること以外の何も表現していない場合、それは無価値で、非難すべきである。(…) われわれはある種類の話すことを簡潔に語る *Reden* と名づけ、他の種類のそれをおしゃべりすると名づける」(III/1)。

「話す」に関してホールは句読法について述べる。「沈黙することはその意味をただそれを囲んでいる語りによって持つことができる。それは句読点のようである、それは単独であることはできない。ダッシュ記号 (—) のような。さて句読点は重要である。それは、ただ句読点で詩を書いたあの人たちが詩を書いたことを意味しているのか。 - そして正確であるために言えば、句読点は別の沈黙以上のものである。というのは、それらは変えるが、

沈黙は変えないから。(終止符の不格好な、世俗的な沈黙がある、セミコロンより高い、透明な沈黙がある。コンマの単純な、一つの移動のように作用する沈黙がある、〈 … 〉 *Dreipunkt* の深い、強力な、空間をつかむ沈黙がある、あるいは〈 - - 〉 *zwei Striche* の矢のように遠方に飛ぶ沈黙がある)。通常の沈黙は一つの常に繰り返される句読点と同一のものとされることができる。／われわれはだから、人が常に語るべきだと主張しているのではない。もし君が君の沈黙によって、君が言ったことあるいは言うであろうことを強調するならば、君は沈黙するかもしれない。というのは、沈黙だけでは無であるから」(III/7)。

ホールにとってすべてが精神活動の表現となるべきである。「講演」もまた。「もし大きな集会に登場することと興奮が結び付いているのが大抵の場合でないならば、私は、語る事がより悪い状態であると仮定する。／あの内的な緊張、あの真剣な薄暗さ。その内的な緊張だけがそのような場での正当に居合わせていることにふさわしいものであり、だからまさに興奮はひよっとしたら生き生きと保ち続けられるのだ」(III/23)。

かくして「語る」は言語表現の一つの形式となる。それ故に「語る」ことについての批評も可能になる。「公的な語り手にとって、観衆との完全な結合を獲得しないことが重要である」(III/24)。そしてヴァレリーの例を挙げる。「ヴァレリーの講演の仕方は灰色である。彼はひどく悪い語り手であるようだ。精神の途方もないヴィジョンをもったこの男が。 - 彼は、ほとんど唯一の人として、わずかの人たちの一人として、今日なおも驚愕させることができる、以前はシェークスピアや別の偉大な詩人が人類を驚愕させたように。身の毛のよだつような幽霊話が子供たちを怖がらせるように。彼はそのように今日、われわれ、思考する者たちを驚愕させることができる。(というのは、驚愕させるためには、人は知られていることの限界を越えて行かねばならない。人は見抜かれるものでもって驚愕させることはできない。それゆえ人は、多くの書き手がそうしたいと思っているように、愚かに振る舞うことによって、驚愕させることはできない。われわれはそんなに愚かではない。そしてわれわれはただ笑うだけだ。驚愕させるために、人はすべてのわれわれの手段と共に - 人がそのいくつかを忘れることによってではなく - 活動的であらねばならない。それをまさしく今日ではほとんどヴァレリーだけができるのだ。そして彼の思考の偉大さが驚愕させることができるという彼の能力でもって測られるならば、ヴァレリーこそはおおよそ最大の思想家である)。そこで彼は前に机のところに立っている、何かをつぶやく、この力 *Gewalt* が与えられているその男は。彼は聴衆と駆け落ちしない。しかしあの力はわれわれの前にはないだろうか、彼の人物を通してそれでもなお」(III/25)。

そしてホールは「聴衆と駆け落ちする」、聴衆との共感を狙っている講演者の戯画を語る。

「語り手は彼の聴衆に対して、卓越した騎手が彼の動物に対してのように、振る舞っている、彼は聴衆の脇腹をくすぐる、聴衆は後ろ脚で立ちあがる、彼は〈铸合わせられたように〉座っている、聴衆は口から泡を吹く、彼は聴衆を強力に鼓舞する、彼らは一本の矢のように一緒に向こうに飛んでいく。彼らは飛んで離れていく。どこへ？」(III/25)⁹⁾

文集 - それは何であれ、事柄を精確に、美しく言語で表現すれば、それは「文学」である。『覚書』は、アフォリズムやエッセーなどの既存の形式を反復、逸脱、解体、調節することによって自己反省をし、自分の形式を画定する試みである。その中には、ジャンルに分類することをそもそも無効にする文が存在する。それはホールが『覚書』の境界を、「外部」であるそれらの文でもって定位しようとするかのようだ。それらの中には思索と言語表現が浸透しあう文が見出される。

「一つの素晴らしい言葉 - 予定よりも早い到着、大量の外的な個別なことを私に魔法のように見せるタイトル。岩から成る荒れ果てた海辺、山岳地帯、そこにいつか一つの都市が、都市の生活のすべての華美と自然らしさと一緒にそびえるだろう。しかしそこでは今はコクマルガラスがかあかあ鳴き、何も育たない。今その場所は、正確に正しい場所である、つまり不信仰なものたちに、人間は偉大な事柄に触れず、何も変えず、そのような地域に向かってはいけないという証明に仕えている場所である。 - 場所、そこに到達した最初の人間がくたばるであろうところ、彼の後ろの輻重隊との、群衆との結び付きもなく - しかし彼は一つの強力な叫び声を上から発するだろう、山の中を異質なものとして響き渡る叫び声を」(XI/42)。それは精神の叫びである。

「永遠は窓を通して中を見る、大きく、一つの顔 *Gecicht* が！。〈森の中の樵の小屋の中を突然一つの顔がのぞきこむように、 - - 一人の放浪者の顔、彼は、その樵が仕事に専念しているあいだ、すでに長くそこにいた、 - かまどのわきに。そして彼はまだ長くと

⁹⁾ 彼が多く詩を暗記していたからなのか、ホールは言語の音に対して独自の感覚を持っている。「言語における旋律的なものと熟弁家の話し方」について。「リルケの最良の詩の一つ、『心の頂にさらされて …』は高度に無調 *atonal* である。それに対して、彼の詩作の始まりが対置されなければならない。つまり、悪しき『時禱集』が。そこでは旋律がすべてを満たしている。一般にほとんどすべての偉大な言語芸術は、無調である」(IX/87)。「中期のヘルダーリン、複雑な古代の頌詩の形式の彼においてすでに、調性はとても筋度のあるものである。子音によって何度もブレーキをかけられ、引き戻され、中断され、互いにびったりと押しつけられて。〈ひと夏のみ与えよ 力強いものたちよ！／まだ熟した歌のために ただひと秋を。／わが心が 甘美な戯れに／満ち足りた末 死を迎えるように〉(『運命の女神たちへ』)。この詩は、もし人が〈甘美な戯れに／満ち足りた末〉を、母音の強調でもって朗読するならば、だから *üü* と *ii* と歌うならば、誤って理解される。人はその鋭い *s* と *tt* を強調すべきである。そして人は利益を得るだろう。／母音は外面化することである。それは真に生き生きとしているものの道を遮断する。子音は壁である、子音は内部空間を可能にする。／人間の言語は子音によって特徴づけられている、それが母音なしにはやっていけないにしても。 - 母音は主に動物の音に付き添われる。／ゲーテが朗読するのを初めて聞いた幾人かは、彼の朗読の〈単調さ〉、〈冷やかさ〉と〈鈍いこと〉に驚いたようだ。そして後になって初めて彼らは、〈内的な火〉あるいは〈地下的な火〉の何かに気づいた。彼らは、ドイツの朗読家の響きのよい轟き渡る音に慣れていた」(IX/87)。

どまるだろう)」(XII/149)。精神の活動は承認される、絶対的な審級としての「私」によって。

「黄昏。一つのトンネルのように長い通路の中に一人の女が立っているのを見ること。人はただ彼女のシルエットだけを明瞭に知覚した、その通路の中にすでに支配している半分の闇のために。この女は身じろぎせずまっすぐに遠方を見ている、人はそれに彼女の姿勢全体で気づいた。／そうして私たちは長く立っていた、ひょっとしたら一分間。それから女は動き、振り向くことなく私の方へ来た、その結果、私には驚きとともに、われわれの誰もが凝視していたものが明らかにならねばならなかった」(VII/42)。見られていたものが重要なのではない。「見る」ことの強度が見られるものを決定するのである。

「〈今〉と思想家は、彼が何時間も黙って彼の部屋の中であちこち歩いた後で、叫んだ、〈一度私は時計を見たい〉。そして彼は温度計を見た。後に彼は温度を知らなかった」(VII/89)。高い次元で実践的な精神は日常では実践的ではない。

「花火 - 私は、その都市を魅了している出来事が演じられているあいだ、散歩をしていた。路面電車の一つの車両。 - 不思議なことに完全に空っぽではなかった。しかし、その火薬の驚異の終わりの前にそこから乗りもので離れた僅かの人々、彼らはどこへ行くのだろうか、彼らは誰なのだろうか。ひょっとしたら彼らはこの時間にまだ、あるいはすでに仕事に行かねばならなかったのか。不幸な人たち、あるいは…。 - その車は消えた、人は決して、その中に不幸な人か、あるいは賢人がいたのか、見つけ出すことはできないだろう」(VIII/131)。精神は傍らで観察する。

「清潔さについて。私は、下着について多く語るよりも、むしろ汚れた下着を身につけていたい」(VIII/104)。「私は言うことができるようになりたい。〈私もまた分別を失うという能力がある。しかしどの他の人のようにはなく。もっと少なく〉」(II/314)。

8 作品

個別のテキストの群れの中に迷いこんだようだ。「もっと大きな弧を描いて帰郷しながら」(『ニュアンスと細部』II/9)とホールは語るが、これでは弧はますます大きくなり、帰郷がおぼつかなくなる。しかしホールの強調は「帰郷」ではなく、それまでの道のりの大きさの中にある。「ニュアンスと細部」の群れに身をゆだねることをホールは目指していた。人が世界に対して持っている統一的な観念は、狭隘で強迫的である。ホールの文は人が閉じ込められている観念の牢獄を爆破し、人を個別性のアナキーな世界へ解き放つ。

しかしこの「より大きな弧」はホール自身にとってもアポリアである。「動揺 *Alteration* が観察される、もし人が書く際の一つの終わりに至るならば、大抵は一つの外的な終わりに、

一つの作品の仮綴じされることのできる部分の終わりに来るとき、現れる動揺が。そして幸福は、人が、パスカルがパンセをそうするように、終わりなく書くとき、ある」(VI/49)。ホールは際限なく書き続けることを願い、彼はまた書き続けざるを得ない。「私がつい、私が古いページの一枚を完成する前に、10枚の新しいページを書くならば、どうして私はそれを完成するだろうか」。ホールは〈確定的なもの〉を求める。「この、最後の、最高の、到達することができる、一番現在の言葉の表現」(VII/175)。

それについて書かれるべき事柄をその事柄に内在する論理、構造を読み取り、その論理構造に即して書くことは、ホールの原則的な方法である。事柄の内在的な反省の記述(批評)。狭義の文学ジャンルの考察は、その文学ジャンルを書くことで試みられる。読者はそれを読み、その内在的な反省を継続する。『覚書』以前にホールは「創作」を書いていたが、その「創作」の方向線は、批評の形で継続される。形式の反省は、各々の形式の限界を超えるところまで進むが、それによってその形式の可能性が試されるのである。「物語」、「短編」、「童話」などがその形式を内在的にその限界に至るまで反復し、反省する形で、書かれた。そうして『覚書』の中には、ジャンルに分類されない文が存在している。しかしそれらの文は『覚書』の中にある。

『覚書』はアフォリズムではない、エッセーではない。『覚書』は独自の「覚書 Notize」というジャンルである。ホールは覚書 Notizen を書いた。そしてこの「覚書」とは何かと考えた。小説形式がそうであったように、ホールは異質なものを詰め込み、それで統一性が壊れないか確かめるようにして、「覚書」形式の可能性を限界にまで広げた。ヴァレリーの散文、スピノザの『エチカ』、リヒテンベルクの『控え帖 Sudelbücher』、ゲーテの『箴言と反省』、モンテーニュの『エッセー』、ジッドの日記などが「覚書」の形式を反省するモデルとなった。その反省を彼は、統一的な形式の概念を超えて行くまで、実験をする形で成した。『覚書』の中の個別性の氾濫は、統一的な形式を想定させないが、それは暴力的に一個の作品となる。そして一冊の書物という枠が遡及的に求心的な力をもたらし、作品を成立させるのである。Sudelbücher も、パスカルの『パンセ』も、ヴァレリーの『カイエ』も著者の死後に現われ、そして作品として存在し始める。

『覚書』の中の文たちは個別性の相貌を擁しながら、読者に航路を見出すことを要請する。それによって『覚書』の統一性が創られる。「作品」を参照指示するベクトルとしての「統一性」。細部の海を漂流したその航路は残されている。それは各々の読者が描く「統一性」の痕跡となる。そこで、われわれは本稿の最初の「統一性」の議論に戻るのである。

「個別性と統一」をホールは再びバルザックから見出した。「バルザックの陶酔状態、並はずれた感激、彼を、彼が人間喜劇をはじめて(精神の中で)自分の前に発見したとき、つか

んだ感激はどのような事情にあるのか。－ 人間喜劇を構築することを他の百人の人もできただろう。しかしバルザックの個別なものでもってではできなかった。バルザックの真の高さは個別なものの中にだけある。－ バルザックが彼の個別のことをそれほど広げることができたということを見たとき …。キャサリン・マンズフィールドは、彼女が完成した本が自分の前にあるのを見たとき、幸せだった。この外的なもの、内的に獲得されたものより外的な延長を発見することについて全く単純に、普通に人間的な仕方ですんだ」(V/20)。

バルザックにおいて「人間喜劇」は、多数の作品を包括する高い審級の言語ではない。彼の文学世界のすべての細部が「人間喜劇」という概念により遡及的に意味を与えられるのである。「人間喜劇」の概念が細部を活性化し、それによって細部の群れに運動を与え、全体を拡張する。ホールは「統一性」をそのようにイメージしていた。マンズフィールドにとって作品は「主観的な思考の客観的なものへの転化」(XI/7)である。「読む／書く」の循環はこうして作品に収斂する。

「統一性はただ人物の意義によって与えられることができる。人物は自分に出会うことすべてを自分の仕方ですら洞察し、活性化する」(VII/112)。「人物＝文体」が、「断片の中を通っていく流れ」(VII/146)であり、「統一性」としてのテキスト＝作品を決定している。『覚書』は Notizen であろうが(リヒテンベルクの場合、無冠詞の Sudelbücher である)、ホールは定冠詞を付けている。それは統一性への強い求心性を暗示している。

「かつて建築家がめまいのするような高いところで丸天井の中に大聖堂をまとめあげたように－ しかしふたたび幅広く、確実で、とても強力な壁でもって地面と結び合されて」(IX/21「スピノザ」)¹⁰。パスカルの断章は、後に「パンセ」と呼ばれて、一つの作品になった。額が絵を作品にするように、「Die Notizen」というタイトルがすべての細部＝個別の文 Notizen を、求心的にまとめ上げるのである。

「私は一つの作品を仕上げたと決して言いたくない。すべては作品である」(VII/150)。

次のテキストを使用した。Hohl, Ludwig: Die Notizen. 1. Aufl. Frankfurt am Main (suhrkamp-taschenbuch 1000) 1984. そこからの引用は()に章をローマ数字、項目をアラビア数字で記した。

¹⁰ この文は、スピノザの『エチカ』の最後の命題の形容である。スピノザのホールへの影響は巨大であるが、それは思想内容よりむしろ、スピノザがただ知の力でもって世界に対抗することができたその精神に対する畏怖の念である。「スピノザの倫理学」(IX/21)を参照。

Ludwig Hohls „*Die Notizen*“ lesen Ausdruck 2)

Adolf Muschug sagt : „Hier sucht jemand für seine Sprache eine Form, die des lebenden Menschen, dessen er gedachte, würdig war.“ Hohl will sein Denken auf die dem Denken äquivalente Weise ausdrücken. Denken und Schreiben sollen gleichwertig sein. Dabei kommt es auf die Sprache an, um das Denken darzustellen. Die Sprache übermittelt die Werte und zugleich sich selbst. Vergangene Werte lesen heißt, deren sprachliche Ausdrücke lesen. Die Erbschaft zu erhalten ist nur dadurch möglich, „dass man ähnlich erlebt, das Unausprechliche in den Sätzen jenes Mannes wiederfindet – dass man vom Gesamten aus jene Sätze wieder bilden kann und somit, mit gleicher Mühe, entsprechende neue“ (II 203). „Sicher hat der Ausdrückende Vergangenes aufgenommen : aber er hat es völlig durchglüht, flüssig gemacht, (das Vergangene ist liquidiert), so dass er dann nur genau das fließen lassen konnte, was seine Notwendigkeit ausfüllt. Alles dient“ (V 8).

Lesen – Leser

Hohl liest die Sätze der Vergangenheit und setzt deren Gedanken fort ; und diesen Prozeß drückt er mit der dem Denken gewachsenen Intensität aus. „Das beste Lesen treibt uns zum Schreiben, zum Reden, zum Denken oder doch wenigstens zum Wiederlesen des eben Gelesenen – nicht zum Weiterlesen“ (IV 18). Hohl fordert das Auswendiglernen (IV 6) und redet über eine Leseschwindigkeit, die zu dem betreffenden Buch passt.

„Lesen und Schreiben sind nur zwei freilich potenziell verschiedene Äußerungen von der großen Arbeit“ (IV 4). Jede wirkliche Arbeit muss „sich einem Außen zuwenden mit dem Innern. Alles Schreiben im letztem Sinne ist nur ein Reden. Um zu reden, brauchst du aber ein Du. (Es kommt darauf an), dass es sich zu sammeln gelinge, dem einen, Einzigen gegenüber, mit dem der Künstler ein wahres, sittlich vollkommenes Verhältnis haben kann“ (IV 20). Proust sagt, dass das Werk selbst seine Nachkommenschaft schaffen müsse. (VI 2) Der Leser wird der Schreiber und dieser schreibt, damit er den wahren Leser schafft. Der aufeinander bezüglichen Struktur von Lesen – Schreiben, Leser – Schreiber verdanken *Die Notizen* ihre Kraft.

Dieser „wahre Leser“ ist nicht der allgemeine Leser, sondern ist dem Spezialisten, dem Kritiker näher. Oder das Werk selbst trägt die Funktion der Kritik. Kritik heißt Lesen.

Die Sprache über den vergangenen Diskurs bringt einen Diskurs der höheren Instanz hervor.

Das ist nichts anderes als die Sprache der Kritik. Darin kann man den Übergang der Ausdrucksform vom Romanschreiben zum Kritikdiskurs im frühen 20. Jahrhundert lesen.

Hohl sieht die Entstehung des Kritikdiskurses in Goethe. „Alle literarische, wertvolle Kritik ist eine eigene schöpferische Tätigkeit. Und diese wirkt nur soweit befruchtend auf die andere, auf das eigentliche Dichten. Nur im allertiefsten Grunde müssen beide Ausübungen auf etwas Gemeinsamem ruhen, das gleichmäßig wachsend durch jede von ihnen, auch in jeder von ihnen, die vermehrte Potenz zur Entstehung bringen kann“ (V 34). Goethe „hat die Kluft erkannt, die zwischen der Kunst und der Kritik besteht. Die wahre Vermittlerin ist die Kunst.“ Also sei es sinnlos, über Kunst zu sprechen (d.h. Kritik zu üben). „Ist da nicht ein Zögern wahrzunehmen? Sind Goethes Sprüche nicht Kunst? (wie die Prosa eines Lichtenberg, Pascal, Karl Kraus) nicht ganz ebenso Vermittler des unaussprechlichen? nicht ebenso hermetisch, mißverständlich, schwer erreichbar, den Blick ins Unendliche eröffnend?“ (V 34) Hier handelt es sich um die Entstehung der Kritiksprache, aber Hohl sucht nach der Legalität, der literaturgeschichtlichen Notwendigkeit der Notizen. „Schöpferisches und Kritik sind überhaupt keine Gegensätze. Die einzigen Gegensätze, um die es sich hier handeln kann, sind: Schöpferisches und Konventionelles“ (XII 117).

Form

Kritik heißt Reflexion über die Form. Hohl meint, *Die Notizen* seien keine Sammlung von Aphorismen (VIII 7). Jedoch handelt es sich bei Hohl immer darum, was *Die Notizen* sind. Jürg Zbinden spricht über ein „work in progress“, d.h. „dass die Bedingungen ihrer eigenen Entstehung im Werk selbst reflektiert werden.“ Die literarischen Formen wandeln sich in der Geschichte und „die besten Bücher sind längst keine Romane, ihr Stoff ist der Gedanke, der innere Vorgang“ (IX 57). „Form ist nichts anderes als der Beweis, dass man (wieder) gefunden hat. Denn es ist unmöglich, dass einer, der etwas wirklich findet und sagt, es nicht auf eine andere Art sage, als es je gesagt worden ist“ (V 7). Die Form, wodurch man die Gedanken der Vergangenheit untersucht und auf neue Art ausdrückt, ist „Form“. „Die Formen sind nie geblieben: neue werden geboren mit jedem neuen Geiste. Es bleibt, dass die mächtigen Geister immer ihre Formen finden, Formen, die vollständig genügen“ (V 9). „Die Bedeutung eines Kunstwerkes aber hängt nicht vom Ort in der Reihe, sondern von der Macht des gestaltenden Geistes ab“ (V 10). Die Notizen sind ein Versuch, nach der eigenen Form zu suchen. Die Form der Selbstreflexion bezieht sich auf das, was die Notizen seien. „Alle Formen wandern. Das Geheimnis ist einfach dies, dass die Schriftsteller Forscher sind und reden (und die Formen

ihrer Rede dem Resultate ihrer Forschung immer adäquater zu machen)“ (VI 20).

Zitat

Das Zitat ist ein Mittel, um die vergangenen Formen zu wiederholen, deren Möglichkeiten zu erwägen und eine neue eigene Form zu schaffen. „Die Stärke, mit der etwas gewußt wird, ist verschieden von Mensch zu Mensch, von Tag zu Tag. Daher kann Zitieren schon eine große Leistung sein“ (III 5). „Wäre denn Schreiben so unermesslich verschieden vom Zitieren?“ (VI 31)

Zur Weise des Zitates sagt Hohl : „Montaigne liest mit solcher Kraft, dass er nicht mehr weiß, ob der Text von ihm ist oder jenem andern. Er hat zu schreiben angefangen und merkt es nicht.“ (VI 31) Hohl selber zitiert das, „was mit meinem Geist in einer starken Beziehung stand.“ (IX Vorrede) Er spricht von „Tagesklang“ : „Lange Zeit pflegte mir fast jeden Tag ein bestimmtes Wort, meistens in Verse, gegeben zu sein. Es entzieht sich jeder Kontrolle“ (VII/139). Über die Zitate aus Goethe ist es nachzudenken. Es gibt viele Zitate aus dem zweiten Teil von *Faust* (VII/139) und dem *Westöstlichen Diwan* (VII 139). Im Fall vom Lynceus-Lied im 2. Teil von *Faust* war Hohl nachher erfreut zu finden, dass Karl Kraus es erwähnt hat. In der Welt der Literatur hat er eine Verwandtschaft bestätigt gefunden. Hohl findet in Goethe die gleiche Abneigung gegen Sand und Strand (IX 49). Eine besondere Weise des Zitierens : „Wie bin ich Goethe dankbar für das ‚leider‘ in der dritten Zeile der ersten Szene des ersten Aktes des ersten Teils von Faust!“ (VIII 33)

Die Notizen sind ein Buch, das den Leser stark veranlässt, selber zu schreiben. Auch die Sätze, die Hohl aus verschiedenen Schriftstellern zitiert, haben Kraft, den Leser die Werke des betreffenden Autors lesen zu lassen. D.h. es ist intensive Kritik selber. Ein Gedicht von Schiller wird scharf kritisiert, aber „wo wäre solches Pathos, wenn bei Schiller nicht?“ (IX 78) Zu Lichtenberg : „Wer, durch die Jahrtausende hin, hat je klar gesehen, wenn nicht Lichtenberg?“ (IX 71) Über das *Stundenbuch* von Rilke : „Ich werde auch noch etwas dichten unter dem Titel ‚Das Buch von der Armut und vom Tode‘, mit der Armut werde ich aber die Armut nennen, wie mit dem Tode den Tod“ (IX 33). Zu Nietzsche : Er zeigt dessen „Fehler, dem Leser Zugeständnisse zu machen. Beide Fehler sind demselben Grunde entsprungen : der übergroßen, für ihn nicht ertragbaren Einsamkeit“ (IX 43). Zu Proust : „Wie er redet oder was er durch die Art seines Redens zum Ausdruck bringt, das allein ist das künstlerisch Reale“ (IX 102).

Plagiat

Jede Sache wird ihrem Wesen nach behandelt. Plagiat ist das verhüllte Zitat und davon hebt

sich das Eigene ab. „Was ist Eigenes ? Das voll, das in jedem Teil Verantwortete. --- Die ganze Kunst des Schreibens besteht darin, daß man kein Wort verwendet ohne volle Verantwortung.“ (VI 30) Die konkreten Fälle des Plagiates behandelt Hohl im „literarischen Schatzkästchen“ (IX 68). Das ist ein ausgezeichnetes Beispiel für den satirischen, ironischen und sarkastischen Stil. Und bei jedem Thema geht es ihm um den sprachlichen Ausdruck.

Polemik

Polemik ist für Hohl „eine literarische Gattung“ (VI 32). Polemische Haltung nimmt die Kritik des sprachlichen Stils ein, der sich in der Massenkultur in der Moderne zeigt : „Doch übertreibe man und greife an, wo es produktiv ist. Ich verfolge die Leute nicht um ihretwillen. Einigen Erscheinungen gegenüber ist Wut objektiv“ (VIII 112). Dem Philistertum des Bürgertums gibt Hohl Gestalt in der Figur von Herrn Meyer oder dem Apotheker.

In diesem Zusammenhang wird auch die Schweiz erwähnt. Deren geistige Enge wird kritisiert : „Die Schweizer sind stolz darauf, so schöne Berge geschaffen zu haben“ (VIII 67). „Die Schweiz leidet an vorzeitigen Versöhnungen, was nichts anderes ist, als Oberflächlichkeit“ (IX 10). Bei der Kritik des sprachlichen Ausdrucks in der Schweiz zitiert Hohl trefflich Lichtenberg : „Ein guter Ausdruck ist so viel wert als ein guter Gedanke, weil es fast unmöglich ist, sich gut auszudrücken, ohne das Ausgedrückte von einer guten Seite zu zeigen“ (IX 37). Gottfried Keller wird kritisiert, denn „wenn er Verse machte, ging jeder Sinn für die Bedeutung, das eigene Leben des Wortes ab“ (IX 39).

Schreiben

Schreiben heißt : die Sprache reflektieren. Man betrachtet eine Sache, und dann wird dieser Prozess beschrieben, was die Betrachtung der Sache befördert. Hohl spricht von „heimkehrend nur in einem größeren Bogen“ („Nuancen und Details“). Für Hohl kommt es nicht auf die Heimkehr, sondern auf den Bogen, den Weg an. „Das wahre Kriterium, dass einer ein Schriftsteller sei, ist nur dies : dass einer in sich eine unbesiegbare Vehemenz habe, auszudrücken.“ (IX/61) Hohls Schreibregeln heißen etwa : „Das deinige sage, wiederhole nicht das der andern. Ich will nur sagen, was mich brennt“ (VI/36). „Etwas rein sagen, es ist alles“ (IX 65).

Wort

Schreiben heißt : ein Wort wählen. „Ein größeres Wunder als ein richtig gewähltes Wort gibt es nicht“ (VII 161). Das gilt auch für Kunst. „Dass das Elementare der Wortkunst nur das Wort ist. Kunst, das ist etwas bringen, was vorher nicht in der Welt war. Und das kann man, indem man mutig ist. Etwas an sich - in den Dingen - ertappen, greifen, packen, nicht loslassen, brin-

gen, das ist alle Male Kunst“ (V 21). „An den Wörtern ist das Schönste das, was sie nicht vorstellen“ (XII 59).

Deutsch

„Reines Deutsch wird im deutschen Sprachgebiet nirgends gesprochen“ (IX 47). Seit 1924 lebte Hohl fast immer außerhalb deutschsprachiger Länder. Er nannte das Schweizerische einen „Dialekt“ und sprach Hochdeutsch. Das ist eine Methode, „durch Andrehung aus ihrem Ursprungsgebiete, Exil“ (II 27). Für Hohl ist die Sprache ein Medium, um die Aktivität des Geistes darzustellen, und sein Deutsch ist zeitlich und räumlich nicht beschränkt, ist dem Latein nahe, das die geistige Sprache für den Humanisten war.

Was schreiben ?

Goethes Satz ist die Maxime für den sprachlichen Ausdruck von Hohl. „Wir haben das unabweichliche, täglich zu erneuernde, grundernstliche Bstreben : das Wort mit dem Empfundenen, Geschauten, Gedachten, Erfahrungen, Imaginierten, Vernünftigen, möglichst unmittelbar zusammentreffend zu erfassen“ (IX 39). Dabei kommt es auf die Beobachtung an. „Beobachten seines (des Malers) Beobachtens des Modelles“ (V 29).

„Allein dadurch, dass das Bild dem Ausführenden entspricht, ist die Schönheit erreicht“ (V 36). Und was schreiben? „Du sollst das gewöhnliche Detail schreiben, das hat Kraft, das beleuchtet, --- hier wird uns Blickkraft verliehen aufs Ganze“ (VII 102).

Viele Sätze in *Den Notizen*, die sich in die Literatur einteilen, sind Zeugnisse der Beobachtung. „Diese Goldadern ungezwungener Geschichten wird man überall finden, wo man nur durch stille Beobachtung zum Sehen gelangt“ (VII 19). Für Hohl ist das Café der privilegierte Ort für das, was Genius loci ist (VII 31). „Wenn ein Fragment persönlichen Erlebens in eine solche Distanz gestellt, so gehandelt wird, dass aus ihm ein Blitz - ein Bild, ein Gedanke - brechen kann, und wenn dieses Hervorbrechende wichtiger geworden ist als das, was sich zugetragen hat, dann ist das Dargestellte objektiviert und kann nicht mehr als autobiographisch betrachtet werden.“ (Anfang von VII) Es ist die Kraft des sprachlichen Ausdrucks, die das Detail objektiviert.

Wie schreibt man – oder Form

Hohl denkt über literarische Formen nach, indem er selber in Formen schreibt. *Die Notizen* selber sind eine Form, die darüber nachdenkt, was Notizen sind. Über Prosa schreibt und reflektiert Hohl in der Form der Prosa (VI 4). Das Märchen von den drei Aufgaben (VII 25) fragt : „Darf jedoch, was in einer Form geschrieben wurde, nicht in einer andern wiedergegeben werden?“ (VII 25)

Traum als eine literarische Form

Am Anfang zitiert Hohl Lichtenberg. „Der Traum ist ein Leben, das mit unseren übrigen zusammengesetzt das ist, was wir menschliches Leben nennen.“ (X Vorrede) Der Traum ist eine Realität genau so wie allgemeine Sachen im Alltag. Hohl sagt, der Traum sei „eine Art Schale. Schalen und Versteinerungen werden aus dem Geschehen des Traums oft zu uns geworfen – aus dem Meer des Traums an den Strand unseres Tages, in unser Wachen“ (X 20). Hohl betont den Ausdruck des Traums : „wie der Traum es sagt, wäre das allein interessante“ (X 8). Der Traum ist eine Art von Ausdrucksform. Und Hohl beschreibt den Traum, indem er nachdenkt, was der Traum ist. Der Traum ist eine Tätigkeit des Geistes. „Ich glaube, dass das Dichten ganz einfach eine Nachahmung ist des Traums“ (X 31). Der Traum selber ist Literatur. Die Beschreibung des Traums ist auch Literatur auf einer anderen Instanz. Der Traum ist ein Werk des Träumers, aber steht ihm indifferent gegenüber. So wünscht Hohl : „Ein Apparat wäre zu erfinden, das im Traum Geschriebene aufzuzeichnen“ (X 30) und „ändern eine richtige Vorstellung des im Traum Gesehenen geben zu können“ (X 32). Bei der Beschreibung des Traums geht es um das gleiche wie bei der Literatur.

Erzählungen

Damit es eine Reflexion über die Form wird, wird der Satz in jeder Form ausgedrückt, ist somit ein Ausdruck der Reflexion über diese Form : Meta-Form. Erzählung (VII 10) – Kurzgeschichte (VII 11) – Historiette (VII 12) – Geschichtchen (VII 13) – Zwei Kurzgeschichten (VII 15). Hohl schreibt, was er sich unter jeder Gattung vorstellt. Das zeigt, dass jede Gattung willkürlich begrenzbar ist. Jede Sache wird beschrieben, um über sie nachzudenken. Tier : „Ich sehe keinen wesentlichen Unterschied zwischen Mensch und Tier, nur einen quantitativen.“ (VII 92). Sperling : „Des Gedankens sichtbarer Bruder, unbeschwert, überall da.“ (VII 60). Die Katze, das Attribut von Hohl : „Eine ruhende, still sinnend sitzende Katze gesehen : die lebendige Illustration jenes wunderbaren Ausdrucks ‚Ich bin bei mir‘. --- Wir leben auch von den Punkten der Vollendung, deren wir entgegenstreben“ (VII 103). Der Hund wird als ein Zeichen des Menschen kritisiert. „Dass es sich um Zorn über menschliche Eigenschaften und einen menschlichen Typus handelt.“ (VIII 49).

Der Brief

Die Bedingungen, die den Brief zum Brief machen, werden reflektiert. “Die Werke sind Briefe an den Freund“ (II 153). Der Empfänger des Briefs ist der wahre Leser. „Und die ganze Kunst ist keinem etwas anderes gewesen als Briefe. Je wunderbarer man ihn sich denkt,

je größer die Liebe ist, umso besser sind die Briefe. Lieber Leser, Du sollst der größte Mensch werden. Du bist es noch nicht, aber du sollst es werden. In andern Wörtern: Ich bemühe mich, so gut wie möglich zu schreiben“ (XII 40).

Reden

Das Reden ist eine Ausdrucksform. Sprechen kann Arbeit sein. „Es ist in den Fällen Arbeit; wo es das Leben fördert, ein Dunkles zur Klarheit führt“ (III 1). Beim Reden kommt es darauf an, „jene innere Gespanntheit, jene ernste Düsterteit zurückzufinden, die allein einer legitimen Anwesenheit an solchem Ort gebührt.“ (III 23) Also, Valéry soll ein abscheulich schlechter Redner sein. „Valéry, der fast als der einzige heute noch erschrecken kann“ (III 25).

Sätze

Es ist Literatur, wenn man eine Sache exakt und sprachlich schön darstellt. *Die Notizen* sind ein Versuch, nach der Form der Notizen zu suchen. Darin gibt es Sätze, die eigentlich den Begriff der Gattung außer Kraft setzen, in denen Denken und Ausdruck einander durchdringen: „Verfrühte Ankunft“ (XI 42). „Die Ewigkeit schaut herein durchs Fester, groß. Ein Gesicht.“ (XII 149) „Abenddämmerung. In einem tunnelartigen Durchgang, eine Frau stehen sehen: Diese Frau starrte unbeweglich geradeaus in die Ferne“ (VII 42). Über die Personen in der Straßenbahn, die früh von dem Feuerwerk weggefahren sind, „man wird nicht herausfinden, ob in dem Wagen Unglückliche oder Weise gewesen sind“ (VIII 131).

Das Werk

Für Hohl kommt es darauf, „sich um dieses, die letzte, die höchste erreichbare, gegenwärtigste Formulierung zu bemühen“ (VII 175). Weil es nicht leicht ist, denkt er, das glücklichste sei, dass man, „wie Pascal die *Pensée*, ohne ein Ende schreibt“ (VI 49).

Die Notizen sind eine eigene Gattung der Notizen. Hohl schreibt Notizen und überlegt, was sie sind. Hohl nimmt eine fremde Form ein, erweitert dadurch die Möglichkeiten der Form der Notizen äußerst und fixiert sie zugleich. Valéry's *Cahiers*, Lichtenbergs *Sudelbücher*, Montaignes *Essais* usw. sind Vorbild dafür. Die Flut der Einzelheiten in den Notizen lässt nur schwer die Einheit der Form erraten, aber sie vereinen sich zu einem gewaltigen Werk. Und dann lässt der Rahmen des Buchs zentripetal das Werk erstehen. Lichtenbergs *Sudelbücher* und Pascals *Pensées* sind zwar erst posthum erschienen, sie beginnen jedoch schon vorher als Werk zu bestehen. Und so, wie Hohl seine Notizen zum Buch macht, ist auch der Leser aufgefordert, eine dem Leser eigene Einheit über *Die Notizen* zu erreichen. „Die Einheit kann gegeben werden allein durch die Bedeutung der Person, die alles ihr Begegnende auf ihre Art

durchleuchtet, belebt“ (VII 112). Diese Person (=der Leser) liest „den Strom, der durch die Fragmente geht“ (VII 146) und verweist auf das Werk als Einheit. Den Begriff des Werks findet Hohl in Balzac. „Balzacs wahre Höhe liegt im Einzelnen ganz allein“ (V 20). Der Begriff von *Comédie Humaine* aktiviert die Details, gibt der Menge der Details Bewegungen, erweitert das Ganze. In dem vollendetem Buch erblickt Katherine Mansfield „diese Äußere, eine äußere Ausdrehung von innerlich Errungenem“ (V 20). D.h., dass „das subjektive Denken ins objektive umschlägt“ (XI 7). Dadurch zieht sich der Zirkel von Lesen und Schreiben zum Werk zusammen : „Wie einer der Baumeister in schwindelnder Höhe seinen Dom in der Kuppel zusammenfaßt“ (IX 21). So wie der Rahmen das Bild zum Werk macht, fasst der Titel *Die Notizen* alle Details der Notizen zentripetal zusammen. „Ich will nie mehr sagen, dass ich ein Werk fertig habe. Alles ist Werk“ (VII 1502).

[Article]

The Effect of Self-Gravity in Linearly Perturbed Euler Equations for a Rotating Thin Fluid Disk

TAKAHASHI Koichi

Abstract : The stability of a rotating thin fluid disk bound by weak self-as well as a central gravity is studied within the linearly perturbed Euler equation. The algebraic equation that the eigenfrequencies (EFs) must satisfy is derived and is solved. In absence of the self-gravity within the disk, it has been known that, in addition to the exponential instability caused by the imaginary part of EF, the polynomial instability (PI) exists in which the amplitude of the density perturbation grows linearly in time. The exponential instability is occasional, while the PI is ubiquitous over the disk. The self gravitation of the disk shifts the phase of the density wave and gives rise to a new sinusoidal variation of the EF to the radial direction. The WKB-like approximation shows that the net effect of the self-gravity of perturbations is to increase the central mass.

Keywords : galaxy rotation ; self gravity ; eigenfrequency ; polynomial instability

1. Introduction

The endeavour to understand the hydrodynamical origin of the structure of spiral galaxies started from the works by Lindblad (1948 ; 1964), Toomre (1964), Lin and Shu (1964), and Goldreich and Lynden-Bell (1965). Through successive studies, a close consensus that the arms are density waves seems to have been reached, although such problems as on the age, winding direction, metamorphosis, etc. of the arms still remain unsolved (For reviews, see Binney and Tremaine 2008 ; Sellwood 2014) .

In theoretical studies, spiral galaxies are frequently treated as thin fluid disks. Equipped with the WKB approximation method, the fluid disk models have been widely employed in astrophysical problems because of their tractability (Griv et al. 2008 ; Binney and Tremaine 2008 ; Roshan and Abbassi 2015). There, all radial variations of physical quantities except for the phase oscillation in the radial direction are ignored. Supplemented by the assumption of barotropicity of the fluid, the WKB method provides the dispersion relation and the stability condition that govern the dynamics and the fate of the spiral structure.

One problem in the WKB approximation lies in that, despite of the starting assumption, the resultant dispersion relation is strongly dependent on the radial coordinate. Another is the appearance of

singularities in the equations of motion, the Lindblad and the corotation resonances, that require an additional careful prescription to deal with them (Goldreich and Tremaine 1979 ; Lubow and Ogilvie 1998).

In addition to the problem inherent in the WKB method, the density perturbations give rise to another obstacle that renders the study to unveil the nature of solitary galaxies complicated. Namely, the modulations of gravitational interaction among density perturbations alter the pattern of the perturbations themselves.

How does the density wave form and behave? The purpose of this paper is to find an answer to this question by exploring a solvable disk model of spiral galaxies analysed recently by Takahashi (2015). In this model, together with the viscosity expansion method for the compressible fluid, Takahashi found novel vortical solutions with new radial velocity profiles. The azimuthal velocity profile of these solutions survives in the inviscid limit and thus can be a basic state of the corresponding Euler equation. Furthermore, the resultant density profile is such that the integrated mass is proportional to the radial distance from the origin at long distances. The rotation curves of the disk were found to be consequentially consistent with observations.

The stability of the disk model introduced by Takahashi was also explored within the linear perturbations. It is noticeable that the secular equations can be treated rigorously and the eigenfrequencies (EFs) are exactly determined *provided that the self-gravitational interaction can be ignored*. The remarkable fact is that the EFs are generally dependent on r , the distance from the centre of the disk, and is decreasing with r at large distances. The tight winding of arms of the density wave takes place owing to the temporally growing phase $-\omega(r)t$, where t is the time variable. This gives the basis for the WKB approximation. In Takahashi (2015), the results of perturbation analysis are concisely summarized.

The gravity plays the fundamental role in the dynamics of astrophysical disk. In Takahashi (2015), only centripetal gravity exerted by the central mass is considered. Of course, the effects of the self-interaction among the density perturbations are of the greatest interest in the dynamics of galaxy and are remained to be clarified.

In this paper, more general arguments of deriving the local EFs are presented. It will be shown that there exist a large number of solutions with distinctive temporal behaviours, of which the solution found in Takahashi (2015) is of the simplest one. The gravitational interaction among the perturbations will also be taken into consideration through the modulations of the gravitational potential.

This paper is organized as follows. In sec.2, the perturbed Euler equation with the axisymmetric

gravity is solved. A new parameter, s , will be found that distinguishes the temporal behaviours of the perturbations. The local EFs are obtained for the simplest case of $s = 0$. A review of the case of the central point mass dominance is presented in sec.3. In sec.4, the algebraic equation for the EF under the non-axisymmetric self-gravity interaction is found. Summary is presented in sec.5.

2. Linear perturbation of the Euler equation

Following Takahashi (2015), we consider a thin fluid disk of an inviscid and circular flow with the inner radius r_1 . The velocity field is given in the cylindrical coordinate system (r, θ, z) by

$$\mathbf{v} = (0, v_\theta, 0), \quad (2.1)$$

where v_θ is the azimuthal component. The radial and axial components vanish. We examine the linear perturbation of the Euler equation on the background velocity (2.1) under the action of axisymmetric gravity.

The small variations of the velocity field, the pressure and the density denoted by $\delta\mathbf{v} = (\delta v_r, \delta v_\theta, \delta v_z)$, δp and $\delta\rho$, respectively, are generated at time $t = 0$. These are functions of radial coordinate r , azimuthal angle θ and t . In this section, for the sake of transparent arguments, we further make three assumptions. First, the gravitational force

$$\mathbf{f}_G = -2\pi G \frac{\hat{\mathbf{r}}}{r^2} \int_{r_1}^r \rho(r') r' dr', \quad (2.2)$$

where $\rho(r)$ is the two-dimensional mass density and G the gravitational constant, that acts on the fluid element at \mathbf{r} is dominated by the central force exerted by the axially symmetric mass distribution, so that the self-gravitational force among fluid elements due to a small perturbation can be neglected, i.e., $\delta\mathbf{f}_G = \delta\mathbf{f}_{G0} = 0$. Second, deformations are restricted to take place within the disk plane and the disk itself does not deform. Third, v_z is fixed to zero on the disk, i.e., $v_z = \delta v_z = 0$. The effect of the self-gravitation is intriguing and will be treated separately in sec.6. Then the temporal evolutions of the perturbations are governed by the linearly perturbed Euler equations

$$\left(\partial_t + \frac{v_\theta}{r} \partial_\theta\right) \delta v_r - \frac{2v_\theta \delta v_\theta}{r} - \frac{\delta\rho}{\rho} \left(\frac{v_\theta^2}{r} + f_{Gr}\right) + \frac{\partial_r \delta p}{\rho} = 0, \quad (2.3a)$$

$$\left(\partial_t + \frac{v_\theta}{r} \partial_\theta\right) \delta v_\theta + \frac{1}{r} \partial_r (r v_\theta) \delta v_r + \frac{\partial_\theta \delta p}{r\rho} = 0, \quad (2.3b)$$

together with the mass conservation equation

$$\left(\partial_t + \frac{v_\theta}{r} \partial_\theta\right) \delta\rho + \frac{1}{r} \partial_r (r\rho \delta v_r) + \frac{1}{r} \rho \partial_\theta \delta v_\theta = 0. \quad (2.3c)$$

Substituting to (2.3) the density wave form

$$\delta v_r = A e^{im\theta - i\omega t}, \delta v_\theta = B e^{im\theta - i\omega t}, \delta p = C e^{im\theta - i\omega t}, \delta \rho = D e^{im\theta - i\omega t}, \quad (2.4)$$

for the perturbations, equations (2.3a)~(2.3c) are rewritten as

$$(\partial_t - i\tilde{\omega})A - 2\Omega B + \frac{1}{\rho}(C' - i\omega' t C) - \frac{1}{\rho}(r\Omega^2 + f_{Gr})D = 0, \quad (2.5a)$$

$$(\partial_t - i\tilde{\omega})B + \frac{(r^2\Omega)'}{r}A + \frac{im}{r\rho}C = 0, \quad (2.5b)$$

$$(\partial_t - i\tilde{\omega})D + \rho A' - \left(i\omega' t \rho - \frac{(r\rho)'}{r}\right)A + \frac{im}{r}\rho B = 0, \quad (2.5c)$$

where $\tilde{\omega} \equiv \omega - m\Omega$ and the prime stands for a differentiation in r and $\Omega \equiv v_\theta/r$. The EF ω has an r dependence for the fluid in differential rotation. The differentiation of the Fourier factor with respect to r therefore yields the factor $i\omega' t$. Note that, if the set of (2.5a) and (2.5b) is solved for static amplitudes A and B in terms of C and D , then the solution for the amplitudes has the factor $\Delta = 1/(\kappa^2 - \tilde{\omega}^2)$ with $\kappa \equiv 2\sqrt{|\Omega(\Omega + r\Omega'/2)|}$ being the epicycle frequency, thereby giving rise to the well-known Lindblad resonances at $\kappa^2 = \tilde{\omega}^2$. Any divergence should not be involved in reality. Since there exist explicit t -dependences in (2.5a) and (2.5c), some of the four amplitudes will have temporal dependences. It is such t -dependences which render our system of equations free from divergences mentioned above.

Before entering into details of our arguments, it may be instructive to recall the case of incompressible vortex studied by Kelvin (1880) for $v_\theta \propto r$ and Synge (1933) for more general r -dependence (See also Ash and Khorrami 1995 ; Takahashi 2013). They considered the three-dimensional perturbations on the background field (2.1) of incompressible fluid and the corresponding pressure. The perturbations were expressed in terms of a normal Fourier mode with respect to θ , z and t . Then, the flow turns out to be stable for axisymmetric perturbations when $v_\theta(rv_\theta)'$ is positive at any spatial point. In such a situation, ω is real and constant and the explicit t -dependences in (2.5a) and (2.5c) disappear. For nonaxisymmetric perturbations, the stability condition has been found to be more intricate and does not seem to be suited to practical use (Ash and Khorrami 1995).

In the followings, by preserving the terms with explicit t -dependence in (2.5a) and (2.5c), thereby focusing our interest to the case that $\omega(r)$ is a nontrivial function of r , we will find new solutions adapted to compressible fluid. The result for the simplest case has been summarized in Takahashi (2015). Below, we want to generalize the arguments.

The terms with explicit t -dependence in (2.5a) and (2.5c) must be cancelled by some t -dependences in the amplitudes. We may try the simplest polynomial forms

$$A = \sum_{i=s-3}^s A_i t^i, \quad (2.6a)$$

$$B = \sum_{i=s-3}^s B_i t^i, \quad (2.6b)$$

$$C = \rho \sum_{i=s-3}^s C_i t^i, \quad (2.6c)$$

$$D = \rho \sum_{i=s-2}^{s+1} D_i t^i, \quad (2.6d)$$

where the powers of t are positive and the coefficients A_i , etc. are functions of r only. The temporal behaviour of the density that is polynomial in t was already noticed by Goldreich and Lynden-Bell (1965), but for $\omega=0$ only (For polynomial instability of plasma, see Smith and Rosenbluth 1990).

In (2.6), each of the amplitudes A , B , C and D involves four unknown coefficients so that totally sixteen unknown coefficients are present, while substituting (2.6) to (2.5) gives sixteen equations. Therefore, the polynomial expressions (2.6) for the amplitudes are generally necessary and sufficient to find non-trivial solutions. See Appendix A for details. In the followings, we restrict ourselves to the minimal case of $s = 0$ with the non-vanishing coefficients being A_0 , B_0 , C_0 , D_0 and D_1 . Specifically, D is a linear function of t :

$$D = D_0 + D_1 t. \quad (2.7)$$

For $s = 0$, there exist five equations that are linear in five unknown functions A_0 , B_0 , C_0 , D_0 and D_1 , in which the first order derivatives of A_0 and C_0 are involved. When the unperturbed density is uniform and $\rho' = 0$, it is possible to eliminate those derivatives, thereby reducing (2.5) to simultaneous linear algebraic equations of unknown functions that do not involve their derivatives. Then, by requiring the existence of nontrivial solutions, it is straightforward to derive the algebraic eigenvalue equation for ω :

$$Z^4 - \left(2 + 2a - \frac{r f_{Gr}}{r \Omega^2}\right) Z^2 - 4maZ - (ma)^2 = 0, \quad (2.8a)$$

where

$$Z \equiv \frac{\omega(r)}{\Omega(r)} - m, \quad (2.8b)$$

$$a \equiv 1 + \frac{f_{Gr}(r)}{r \Omega(r)^2}, \quad a \leq 1. \quad (2.8c)$$

Here $\Omega Z/m$ is the Doppler-shifted angular frequency and f_{Gr} is the r -component of the gravitational force (2.2). A concise explanation on the derivation of (2.8) has been given in Takahashi (2015) and is elaborated in Appendix A.

For a given integer m , there generally exist four solutions, two of which are always real. Both of

the other two are either real or complex. The EFs are obtained from Z as

$$\omega = \omega(r) = (m + Z(r))\Omega(r). \quad (2.9)$$

The density wave propagates to the azimuthal direction for $m > 0$. Its angular velocity is given by

$$\Omega_p = \frac{\omega}{m} = \left(1 + \frac{Z}{m}\right)\Omega. \quad (2.10)$$

The relative speed of the density wave to the fluid flow is given by $Z\Omega r/m$.

— $\text{Re}\omega t$ is the so-called shape function by which the spiral pattern of the perturbation is determined (Binney and Tremaine 2008). In general, $\text{Re}\omega$'s are functions of r that vanishes at long distances. As t gets large, therefore, the phase factor $\exp(-i\text{Re}\omega t)$ rapidly oscillates with the change of r over the disk. This leads to the tight winding of arms, the situation for the WKB approximation to be validated (Binney and Tremaine 2008).

In the WKB approximation, the perturbations are expanded in Fourier components as

$$a(r)\exp[ikr - i\omega(k)t] \quad (2.11)$$

where the amplitude a is assumed to be a slowly varying function of r , while, with $\text{Re}k$ being large, the phase factor $\exp(ikr)$ is rapidly oscillating. $\omega(k)$ in (2.11), assumed to have no coordinate dependence, gives the dispersion relation. We have seen that the correct phase factor is $\exp[-i\omega(r)t]$ where $\omega(r)$ given by (2.9) has a non-trivial r -dependence. Does this phase factor have a Fourier decomposition like (2.11)? The answer is generally *no* except for special cases. This problem is elaborated in Appendix C.

The stability of the axisymmetric perturbation is manifested by setting $m = 0$ in (2.8a). The EF of the unstable mode is given by $Z^2 = 0, 2 + 2a - (rf_{Gr})' / (r\Omega^2)$. The former gives the static solution $\omega = 0$, which exhibits no temporal dependence (See Appendix B). Concerning the latter, we have

$$\omega^2 = 4\Omega^2 + \frac{1}{r}[f_{Gr} - (rf_{Gr})']. \quad (2.12)$$

If we choose the Newtonian central gravity (2.2) for f_{Gr} , (2.12) reads

$$\omega^2 = 4\Omega^2 - \frac{2\pi G\rho}{r} \left(\frac{M_r}{\pi r^2 \rho} - 1 \right), \quad (2.13)$$

where $M_r = 2\pi \int_0^r \rho(r')r' dr'$ is the mass inside the radius r . (2.13) may be compared with the WKB result (Binney and Tremaine 2008)

$$\omega_{\text{WKB}}^2 = 4\Omega^2 + 2r\Omega\Omega' - 2\pi G\rho |k| + v_s^2 k^2, \quad (2.14)$$

where k is the radial wave number and, with p being the pressure, $v_s = (dp/d\rho)^{1/2}$ is the sound velocity.

The sum of the first two terms is the square of the epicycle frequency. (2.14) with $\omega_{\text{WKB}}^2 < 0$ gives the Toomre's instability condition (Toomre 1964). The appearance of k is due to replacing the derivative d/dr in the perturbation equations by ik .

The wave number k does not appear in our model of $s = 0$. This is because, when $s = 0$, the proper equation for the EF is not affected from the derivatives of amplitudes. The situation is intricate in the case of $s \neq 0$, in which it is impossible to delete the derivative of amplitudes from the linearized perturbation equations. Unfortunately, it is quite difficult to determine how ω depends on s , which is an obstacle in finding the general stability criterion in our model.

The relation between the pressure and the density has been determined not a priori but by the Euler equation. This seems reasonable for weak gravity because, in that case, the density can vary kinematically without affecting the pressure. Thus the sound velocity v_s that is usually determined from the barotropic equation of state does not appear in (2.13).

The system of equations (2.5a)~(2.5c) and (2.6) are sufficient to obtain the exact and tractable expression for the solution. It is also applicable at the resonances. In fact, we can easily find finite solutions at the Lindblad and corotation resonance. See Appendix D for details.

3. Solutions to (2.8) and the polynomial instability

The eigenfrequency equation (2.8) has been solved in Takahashi (2015) for some cases of gravity strength. It may be interesting that complex modes emerge for $|m| \geq 2$ when the gravity due to the central mass is weak and the disk mass is totally ignored.

Below, we summarize the results for finite gravity.

3.1 Central mass dominance

Let us consider the case in which a mass M_c locates at the centre of the disk of low density and is exerting the gravitational force $f_{\text{Gr}} = -GM_c/r^2$ to the fluid. The interactions among disk masses are neglected. Noting that $(rf_{\text{Gr}})' = -f_{\text{Gr}}$ for the Newtonian gravitational force, we parameterize a given by (2.8c) as

$$a = 1 + \frac{f_{\text{Gr}}}{r\Omega^2} \equiv 1 - \frac{\alpha}{r^3\Omega^2}, \quad (3.1)$$

and rewrite (2.7a) as

$$Z^4 - (1 + 3a)Z^2 - 4maZ - (ma)^2 = 0. \quad (3.2)$$

For a given $\Omega(r)$, it is easy to find numerically the EFs from the roots of (3.2) for arbitrary a defined

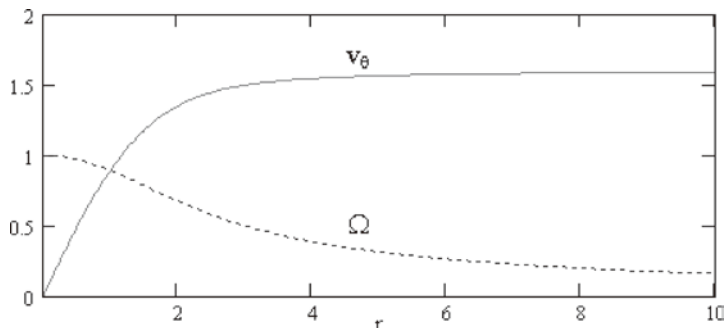


Fig. 1 The model rotation curve v_θ (solid curve) and the corresponding circular frequency Ω (dotted curve) used for calculations of EFs.

by (3.1). The results have been given by Takahashi (2015). In the followings, we argue the case of the flat rotation curve presented in Fig. 2 in the above reference.

The units chosen are $10^4 \text{ ly} = 3.1 \times 10^3 \text{ pc}$ and 100 km/s for the length and the velocity, respectively. The unit of time is therefore $10^4 \text{ ly}/100 \text{ km/s} = 3 \times 10^7 \text{ yr}$. With these units, writing the central mass as N times the solar mass, α is given by

$$\alpha = 1.3 \times 10^{-10} N. \tag{3.3}$$

Some typical examples of ω for $\alpha=10$ and $m=2$ are depicted in Fig. 2 together with $\omega_{L\pm} = m\Omega \pm \kappa$ and $\omega_C = m\Omega$ that correspond to the Lindblad and the corotation resonances, respectively. The singularities at $\omega = \omega_{L\pm}, \omega_C$, which we shall call the L_\pm - and C-singularity, respectively, are inherent in the self-consistent WKB approximation (See, e.g., Binney and Tremaine 2008). From Fig. 2(a), we see that it is impossible to avoid all of the singularities. There exist a bifurcation point A and a coalesce point B. The gross basic patterns of ω 's do not change for other choice of parameter values (except for $m=0$).

Six branches of $\text{Re}\omega^{(j)}, j = \text{I, II, III, IV, V, VI}$, are observed in Fig. 2(a). The branches I, III, IV and V are real and are of neutral stability. The branches II and VI are of complex ones, each of which are denoted as II, II', VI and VI', where the prime denotes the branch with a negative imaginary part. $\omega^{(\text{I})}$ is real and decreases monotonically as r increases. $\omega^{(\text{III})}$ bifurcates at A ($r = r_A \approx 3.8$) to real $\omega^{(\text{IV})}$ and real $\omega^{(\text{V})}$. $\omega^{(\text{III})}$ and $\omega^{(\text{IV})}$ coalesce to $\omega^{(\text{VI})}$ at B ($r = r_B \approx 4.2$). The complex ω 's are of exponentially growing and decaying modes for $\delta v_r, \delta v_\theta$ and δp .

The density perturbation evolves in a way different from the velocity and pressure. Because the amplitude D given by (2.7) is a linear function of time, there exists a section AB in which the eigenfrequencies are all real but D of all modes grow linearly in time. This is the 'polynomial instability

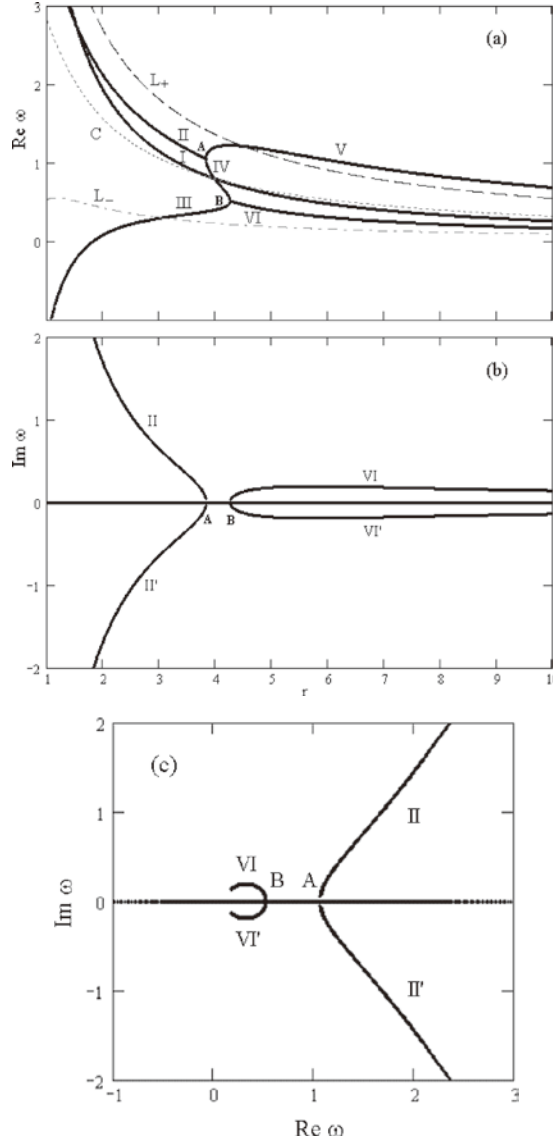


Fig. 2 Solutions of (5.10) for the rotation curve with $k_1/k = 1$ in Fig. 2 and $m = 2$. (a) $\text{Re } \omega$ vs. r . $\omega_{L\pm}$ (dashed and dot-dashed curves) and ω_c (dotted curve) are labelled by L_{\pm} and C, respectively. (b) $\text{Im } \omega$ vs. r . (c) $\text{Im } \omega$ vs. $\text{Re } \omega$. Parameter values are $\alpha = 10$, $k = 10 \text{ ly}^{-2}$. v_{θ}/r is also shown by dotted curve in (a).

section (PIS)' (Takahashi 2015). This linear growth is attributable to the modulation of matter velocity, by which fast moving matter catches up with or runs ahead of slow matter. Concerning the density, all of the four modes are 'unstable' in short term because of such one-way amplifications of oscillations.

Obviously, the growth rate of perturbations is smaller in PIS than inner or outer region of exponen-

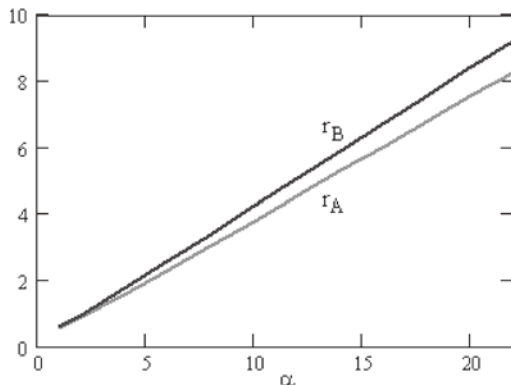


Fig. 3 r_A and r_B as functions of α . Values of other parameters than α are same as those in Fig. 4.

tial growth. In reality, no discrepancy in the growth rates of spiral arms in a single spiral galaxy is observed. In other words, the PIS seems not to be preferred in real galaxies.

The bifurcation point A and the coalesce point B shift left or right as α gets smaller or larger, respectively. We observe approximate linear dependences of r_A and r_B on α , particularly for large α , as is shown in Fig.3. $\alpha=20$, which corresponds to 15×10^{10} solar mass, gives $r_A > 7 \times 10^4$ ly. Sufficiently large central mass expels the PIS too far from the centre of the disk to be observed.

3.2 Finite disk mass

In case α is small, the mass of the disk will play a role. This corresponds to the existence of the dark matter. Here, we aim at getting an insight into the effect of the disk mass by referring to (2.2) for the expression of gravitational force. After small variations were taken, the strongest inter-matter interaction will be the one between $\delta\rho(r)$ and the mass inside the radius r

$$M_d(r) = 2\pi \int_0^r \rho(r') r' dr'. \quad (3.4)$$

Since M_d is a function of r only, we may express an approximate gravitational force in the variational equation (2.3a), i.e.,

$$f_{gr} = -\frac{\alpha}{r^2} - \frac{GM_d(r)}{r^2}. \quad (3.5)$$

Concerning $M_d(r)$, several kinds of behaviour are possible near the disk centre, while, for $r \rightarrow \infty$, M_d grows linearly in r (Takahashi 2015). Once $\rho(r)$ is fixed, finding the EFs numerically is a rather easy task. Grossly speaking, the distributions of EFs are determined by $\alpha' = \alpha + \langle GM_d \rangle$, where $\langle GM_d \rangle$ is some characteristic value of $GM_d(r)$. In other words, the stability of the massive disk is very similar to the one that consists of a central mass with a modification $\alpha \rightarrow \alpha'$ that has been consid-

ered in the previous subsection.

4. Effect of perturbed gravitation

We here estimate the effects of the self-gravitation due to the density variation within the disk. The perturbation equations (2.3a) and (2.3b) are modified by equating l.h.s. of these equations to the gravity modulation δf_{Gr} and $\delta f_{G\theta}$, respectively, where $(\delta f_{Gr}, \delta f_{G\theta}) = -(\partial_r, r^{-1}\partial_\theta)\delta\Phi$ and

$$\delta\Phi(\mathbf{r}, t) = -\frac{G}{4\pi} \int \frac{\delta\rho(\mathbf{r}')}{|\mathbf{r}' - \mathbf{r}|} d\mathbf{r}', \quad (4.1)$$

where $\delta\rho(\mathbf{r}) = \delta\rho(r)\delta(z)$ with $\delta\rho(r)$ being given by (2.4).

The resultant integro-differential equations may be converted to the higher order differential equations with use of Poisson's equation $\nabla^2\delta\Phi = 4\pi G\delta\rho(\mathbf{r})$. The eigenvalue equations corresponding to (2.5) now involve terms of the second and third powers of t , which renders the problem awkward. Instead, in order to see the effect of self-gravitation, it is convenient to seek an approximate expression for $\nabla\delta\Phi$ that has an explicit factor $e^{im\theta - i\omega_m t}$ that is common to all the perturbation amplitudes. For this purpose, with the help of the Gauss integration formula, we express (4.1) as

$$\begin{aligned} \delta\Phi(\mathbf{r}, t) &= -\frac{G}{4\pi} \int \frac{D(r', t) e^{im\theta' - i\omega(r')t}}{\sqrt{r'^2 - 2rr' \cos(\theta' - \theta) + r^2}} r' dr' d\theta' \\ &= -\frac{Ge^{im\theta}}{\sqrt{\pi}} \int_0^\infty \int_0^\infty D(r', t) e^{-i\omega(r')t} e^{-(r^2 + r'^2)s^2} I_m(2rr's^2) r' dr' ds \end{aligned} \quad (4.2)$$

where I_m is the modified Bessel function of the first kind.

We restrict ourselves to the case that there exist the wound spiral arms of density modulation, i.e., $m \geq 1$ and to the point far from the core region, i.e., $r > r_1$ where r_1 is the inner radius of the disk. Furthermore, we assume that $r'D(r')I_m(2rr's^2)$ rapidly approaches zero as $r' \rightarrow 0$ and the integration in (4.2) is governed by the form $I_m(z) \sim e^z/\sqrt{2\pi z}$ with a restriction $|z| > 1$. In terms of the variables r' and s , this implies $s > 1/\sqrt{2rr'}$. Then $\delta\Phi$ may be approximated by

$$\delta\Phi \sim -\frac{Ge^{im\theta}}{2\pi\sqrt{r}} \int_{r_1}^\infty \sqrt{r'} dr' \int_{1/\sqrt{2rr'}}^\infty D(r', t) e^{-i\omega(r')t} e^{-(r'-r)^2s^2} \frac{ds}{s}. \quad (4.3)$$

Next, the r' -integration is performed by replacing $e^{-(r'-r)^2s^2}$ by $\delta(r'-r)\sqrt{\pi}/s$, which will be valid when $|D(r)|$ is very small near r_1 and $\omega(r)$ is slowly varying. Thus we have

$$\begin{aligned}\delta\Phi &\sim -\frac{Ge^{im\theta}}{2\pi}\int_{1/(\sqrt{2}r)}^{\infty}D(r,t)e^{-i\omega(r)t}\frac{\sqrt{\pi}}{s}\frac{ds}{s} \\ &= -\frac{GD}{\sqrt{2\pi}}re^{im\theta-i\omega t}.\end{aligned}\quad (4.4)$$

If the factor r on the r.h.s. of (4.4) is replaced by ΔR , the pitch of winding of spiral arms, then the expression (4.4) is essentially same as the expression obtained by the WKB approximation (see, e.g., Binney and Tremaine 2008). Write $\omega_1 = \text{Re}\omega$. In the decreasing region of ω_1 , then, ΔR for trailing spirals in our model is related to ω by

$$\omega_1(r+\Delta R) - \omega_1(r) = -2\pi m/t, \quad |m| \geq 1, \quad (4.5)$$

Expanding $\omega_1(r+\Delta R)$ in ΔR up to the second order, we have

$$\Delta R \approx -\frac{1}{\omega_1''}\left(\omega_1' + \sqrt{\omega_1'^2 - 4\pi m\omega_1''/t}\right). \quad (4.6)$$

For $\omega_1 \approx w_1/r^p$ with $w_1 > 0$ and $p > 0$, (4.6) leads to

$$\Delta R \approx \frac{r}{p+1} - r\sqrt{\frac{1}{(p+1)^2} - \frac{4\pi mr^p}{w_1 p(p+1)t}}. \quad (4.7)$$

In the region where $r^p/t \sim w_1 p/(4\pi m(p+1))$, therefore, (4.4) is equivalent to the result by the WKB approximation.

The contribution of perturbation to each component of f_G is given by

$$\delta f_{Gr} = -\partial_r \delta\Phi \sim \frac{r}{\sqrt{2\pi}}\left(\frac{D'}{D} - i\omega_m' t\right)GD e^{im\theta - i\omega t}, \quad (4.8a)$$

$$\delta f_{G\theta} = -\frac{1}{r}\partial_\theta \delta\Phi \sim \frac{im}{\sqrt{2\pi}}GD e^{im\theta - i\omega t}. \quad (4.8b)$$

Placing (4.8a) and (4.8b) with their Fourier factors being deleted on the r.h.s. of (2.5a) and (2.5b), respectively, yields the modified equations of perturbations. In this modification, a replacement of gravitational force

$$f_{Gr} \rightarrow f_{Gr} + \frac{r}{\sqrt{2\pi}}\left(\frac{D'}{D} - i\omega_m' t\right)G\rho \quad (4.9)$$

is taking place in (2.5a). Since f_{Gr} is negative, this replacement acts to enhance (suppress) the effect of gravity by the central mass if D'/D is positive (negative) as long as the radial motion is concerned. As the time elapses, the change in the phase indefinitely develops.

A , iB , iC and D are chosen to be real when δf_G is neglected. Therefore (2.5) and (4.8) mean that, concerning the azimuthal motion, the self-gravitation gives rise to the phase shifts. An additional effect of $\delta f_{G\theta}$ on (2.5) is that the amplitude A , B or C will acquire a term linear in t because D with $m \geq 1$ is already linear in t .

The derivation of the eigenfrequency equation is straightforward but cumbersome. The details are relegated to Appendix E. The result is

$$Z^4 - \left(\frac{(II+\varepsilon)'}{\Omega^2} + \frac{II+\varepsilon}{r\Omega^2} + \frac{2rQ'}{\Omega} + 4 \right) Z^2 + 4m \frac{II+\varepsilon}{r\Omega^2} Z - m^2 \left(\frac{II+\varepsilon}{r\Omega^2} \right)^2 = 0, \quad (4.10)$$

where $II \equiv -r\Omega^2 - f_{gr} = -r\Omega^2 a$ and $\varepsilon \equiv (Gr\rho/\sqrt{2\pi})'$. Z and a have been defined by (2.8b) and (2.8c), respectively. (4.10) reduces to (2.8a) for $\varepsilon = 0$.

It has been proved in Takahashi (2015) that $\rho \propto 1/r$ for large r , so that ε will asymptotically behave as $1/r^2$. Furthermore, on the basis of the analyses in Takahashi (2015), it is easy to show that the next-to-leading term is d_{-2}/r^2 with $d_{-2} > 0$ for the family of solutions with constant rotation curves. Therefore, in such solutions, $(r\rho)' \propto 1/r^2 < 0$ for $r \rightarrow \infty$, meaning that the effect of the intra-disk interactions at long distances on the eigenfrequencies is equivalent to increasing the central mass of the disk. The increase of the central mass is reflected as the increase of the parameter a in (3.1). From Fig. 3, this implies that the PIS is expelled toward the outer region of the disk.

5. Summary

The linearly perturbed Euler equations were solved for an axially symmetric and differentially rotating thin fluid disk bound by a central gravity and/or pressure gradient. The self-gravitational interaction among the fluid elements was approximately taken into account. The algebraic equation for the EFs was obtained. The EFs depend on a parameter s which specifies the polynomial structure of amplitudes in time variable t . The case of $s = 0$ that corresponds to the previous work was solved. The EFs are all real in some cases, can be complex in the other, depending on the relation among the gravitational force, centrifugal force and pressure gradient. In all cases, the amplitude of density perturbation grows linearly in time, irrespective of the form of rotation curve. In this sense, the axially symmetric rotating thin fluid disk is unstable.

The self-gravity due to perturbations is approximately estimated by the saddle point method and is found to yield an effect equivalent to increasing the central mass. Accordingly, the PIS is shifted further outward of the disk.

The system considered does not have one to one correspondence between the density and the pressure. Namely, the fluid must be baroclinic. Specifically, the density modulation takes place as a consequence of velocity modulation and occurs at zero pressure. This is the reason that the stability

condition of our system does not take the form of Toomre's (Toomre 1964).

Appendix A : Equations for the amplitude coefficients in (2.6)

In this appendix, we derive the equations for the coefficients in the polynomials (2.6). Substituting (2.6) to (2.5) and matching the coefficients of the same powers of t , we have (All suffices are zero or positive integer.)

$$(i+1)A_{i+1} - i\tilde{\omega}A_i - 2\Omega B_i + C'_i + \left(\frac{\rho'}{\rho} - i\omega'\right)C_{i-1} + IID_i = 0, \quad (\text{A1})$$

$$(i+1)B_{i+1} - i\tilde{\omega}B_i + \frac{(r^2\Omega)'}{r}A_i + \frac{im}{r}C_i = 0, \quad (\text{A2})$$

$$(i+1)D_{i+1} - i\tilde{\omega}D_i + A'_i - i\tilde{\omega}A_{i-1} + \frac{(r\rho)'}{r\rho}A_i + \frac{im}{r}B_i = 0, \quad (\text{A3})$$

where $-II \equiv r\Omega^2 + f_{gr}$ is the sum of the centrifugal force and the gravity (per unit mass). In other words, II is the pressure gradient per unit mass of the unperturbed system. Here the suffix of each amplitude stands for the associated power of t . (A1) ~ (A3) are rewritten as

$$(s-3)A_{s-3} = 0, \quad (\text{A4})$$

$$(s-2)A_{s-2} - i\tilde{\omega}A_{s-3} - 2\Omega B_{s-3} + C_{s-3}' + \frac{\rho'}{\rho}C_{s-3} = 0, \quad (\text{A5})$$

$$(s-1)A_{s-1} - i\tilde{\omega}A_{s-2} - 2\Omega B_{s-2} + C_{s-2}' + \frac{\rho'}{\rho}C_{s-2} - i\omega'C_{s-3} + IID_{s-2} = 0, \quad (\text{A6})$$

$$sA_s - i\tilde{\omega}A_{s-1} - 2\Omega B_{s-1} + C_{s-1}' + \frac{\rho'}{\rho}C_{s-1} - i\omega'C_{s-2} + IID_{s-1} = 0, \quad (\text{A7})$$

$$i\tilde{\omega}A_s + 2\Omega B_s - C_s' - \frac{\rho'}{\rho}C_s + i\omega'C_{s-1} - IID_s = 0, \quad (\text{A8})$$

$$i\omega'C_s - IID_{s+1} = 0, \quad (\text{A9})$$

$$(s-3)B_{s-3} = 0, \quad (\text{A10})$$

$$(s-2)B_{s-2} - i\tilde{\omega}B_{s-3} + \frac{(r^2\Omega)'}{r}A_{s-3} + \frac{im}{r}C_{s-3} = 0, \quad (\text{A11})$$

$$(s-1)B_{s-1} - i\tilde{\omega}B_{s-2} + \frac{(r^2\Omega)'}{r}A_{s-2} + \frac{im}{r}C_{s-2} = 0, \quad (\text{A12})$$

$$sB_s - i\tilde{\omega}B_{s-1} + \frac{(r^2\Omega)'}{r}A_{s-1} + \frac{im}{r}C_{s-1} = 0, \quad (\text{A13})$$

$$i\tilde{\omega}B_s - \frac{(r^2\Omega)'}{r}A_s - \frac{im}{r}C_s = 0, \quad (\text{A14})$$

$$(s-2)D_{s-2} + A_{s-3}' + \frac{(r\rho)'}{r\rho}A_{s-3} + \frac{im}{r}B_{s-3} = 0, \quad (\text{A15})$$

$$(s-1)D_{s-1} - i\tilde{\omega}D_{s-2} + A_{s-2}' - i\omega'A_{s-3} + \frac{(r\rho)'}{r\rho}A_{s-2} + \frac{im}{r}B_{s-2} = 0, \quad (\text{A16})$$

$$sD_s - i\tilde{\omega}D_{s-1} + A_{s-1}' - i\omega' A_{s-2} + \frac{(r\rho)'}{r\rho} A_{s-1} + \frac{im}{r} B_{s-1} = 0, \quad (\text{A17})$$

$$(s+1)D_{s+1} - i\tilde{\omega}D_s + A_s' - i\omega' A_{s-1} + \frac{(r\rho)'}{r\rho} A_s + \frac{im}{r} B_s = 0, \quad (\text{A18})$$

$$\tilde{\omega}D_{s+1} + \omega' A_s = 0. \quad (\text{A19})$$

From (A4), (A10) and (A15), we have $A_{s-3} = B_{s-3} = D_{s-2} = 0$ for general s , thereby leaving thirteen equations for thirteen unknowns.

Since these equations involve the derivatives of amplitudes, further approximation that replaces the derivative by ik is usually invoked. This is nothing but the one that consists of the WKB method. However, when $s = 0$, (A4) ~ (A19) enables us to derive the exact algebraic equation that the EFs satisfy as is explained in Appendix B.

Appendix B : The case of $s = 0$

In this appendix, we derive (2.8a) for the eigenfrequency ω . Let us consider the case of $s = 0$ in Appendix A. Recalling that the coefficients with a negative suffix identically vanish, (A4) ~ (A19) reduce to

$$iID_1 = i\omega' C, \quad (\text{B1})$$

$$\tilde{\omega}D_1 + \rho\omega' A = 0, \quad (\text{B2})$$

$$i\tilde{\omega}A + 2\Omega B - \frac{II}{\rho} D_0 = \frac{1}{\rho} C', \quad (\text{B3})$$

$$i\tilde{\omega}B = \frac{(r^2\Omega)'}{r} A + \frac{im}{r\rho} C, \quad (\text{B4})$$

$$i\tilde{\omega}D_0 - D_1 - \frac{(r\rho)'}{r} A - \rho A' - \frac{im}{r} \rho B = 0. \quad (\text{B5})$$

Here $A \equiv A_0$, $B \equiv B_0$ and $C \equiv C_0$. As mentioned above, the wave number k may be introduced in (B3) and (B5) by the replacement $d/dk \rightarrow ik$. We will see below that ω for $\sigma=0$ does not depend on k .

There exist five equations for five unknown functions A , B , C , D_0 and D_1 . By using (B1) and (B2), C and D_1 are expressed in terms of A , thereby C and D_1 can be eliminated from (B3)~(B5) to yield

$$\left[\frac{\tilde{\omega}}{\rho II} \left(\frac{\rho II}{\tilde{\omega}} \right)' - \frac{\tilde{\omega}^2}{II} \right] A + 2i\Omega \frac{\tilde{\omega}}{II} B = i\tilde{\omega} \frac{D_0}{\rho} - A', \quad (\text{B6})$$

$$i\tilde{\omega}B = \left[\frac{(r^2\Omega)'}{r} - \frac{m}{r} \frac{II}{\tilde{\omega}} \right] A, \quad (\text{B7})$$

$$i\tilde{\omega}\frac{D_0}{\rho}-A'+\left[\frac{\omega'}{\tilde{\omega}}-\frac{(r\rho)'}{r\rho}\right]A-\frac{im}{r}B=0. \quad (\text{B8})$$

From these equations, $i\tilde{\omega}D_0/\rho-A'$ is eliminated and we have two linear equations of A and B :

$$G\begin{pmatrix} A \\ iB \end{pmatrix} \equiv \begin{pmatrix} \frac{\tilde{\omega}}{\rho\Pi}\left(\frac{\rho\Pi}{\tilde{\omega}}\right)'\frac{\tilde{\omega}^2}{\Pi}+\frac{\omega'}{\tilde{\omega}}-\frac{(r\rho)'}{r\rho} & 2\Omega\frac{\tilde{\omega}}{\Pi}-\frac{m}{r} \\ \frac{(r^2\Omega)'}{r}-\frac{m}{r}\frac{\Pi}{\tilde{\omega}} & -\tilde{\omega} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} A \\ iB \end{pmatrix} = 0. \quad (\text{B9})$$

Note that no derivatives of amplitudes are involved in (B9), which enables us to resort to no further approximation. Nontrivial solutions exist when $\det G = 0$ or

$$\frac{\tilde{\omega}^2}{\rho\Pi}\left(\frac{\rho\Pi}{\tilde{\omega}}\right)'\frac{\tilde{\omega}^3}{\Pi}+\omega'-\frac{(r\rho)'}{r\rho}\tilde{\omega}+\left(2\Omega\frac{\tilde{\omega}}{\Pi}-\frac{m}{r}\right)\left[\frac{(r^2\Omega)'}{r}-\frac{m}{r}\frac{\Pi}{\tilde{\omega}}\right]=0. \quad (\text{B10})$$

(2.7a) in the text is obtained by rearranging (B10). D_0 , the initial density perturbation, remains undetermined.

In the text, we have seen that the EF equation for $m = 0$ gives a solution $\omega = \tilde{\omega} = 0$. In this case, however, the matrix elements of G are undetermined, so that we have to go back to the original equations (B1)~(B5). We readily have

$$A = D_1 = 0, \quad (\text{B11})$$

$$C' + \Pi D_0 = 2\rho\Omega B. \quad (\text{B12})$$

(B11) means that the amplitude of the density perturbation does not have the t -dependence. (B12) expresses the balance of the pressure gradient and the centrifugal force.

Appendix C : Impossibility of Fourier transformation of $\exp[-i\omega(r)t]$

Here, we show that the double Fourier transformation of $\exp[-i\omega(r)t]$ generally does not exist. Suppose that $\omega(r)$ is a real, continuous and non-constant monotonic function of r and that the expression

$$e^{-i\omega(r)t} = \iint a(k, \nu) e^{ikr - i\nu t} dk d\nu \quad (\text{C1})$$

is possible. Here the integration in (C1) is supposed to be well-defined, so that the order of integrations is always interchangeable. Multiplying both sides by $\exp(i\nu t)$ and integrating them with respect to t over $-\infty < t < +\infty$, we have

$$\delta(\nu - \omega(r)) = \int a(k, \nu) e^{ikr} dk. \quad (\text{C2})$$

Further multiplication by $\exp(-ikr)$ and integration with respect to r over $-\infty < r < +\infty$ yields

$$a(k, \nu) = \frac{1}{2\pi} \int \delta(\nu - \omega(r)) e^{-ikr} dr = \frac{1}{2\pi} \frac{1}{|w_1(\nu)|} e^{-ikr_1(\nu)}, \quad (\text{C3})$$

where r_1 is the root of $\omega(r) = \nu$ and $w_1 = d\omega/dr|_{r=r_1}$. $r_1(\nu), w_1(\nu)$ and $a(k, \nu)$ are continuous functions of ν . (C3) is the formal expression for the Fourier transform of $\exp(-i\omega(r)t)$.

Now, evaluating (C1) at $t = 0$ yields

$$1 = \iint a(k, \nu) e^{ikr} dk d\nu = \iint a(x/r, ry) e^{ix} dx dy, \quad (\text{C4})$$

where the integration variables are changed by $x = kr$ and $y = \nu/r$. The integration in (C4) must not depend on r . This is possible when the dependences of $a(x, y)$ on x and y appear through xy , i.e., $a(k, \nu)$ is a function of $k\nu$. Together with (C3), this requires w_1 be a constant and r_1 be proportional to ν . Since r_1 is a root of $\omega(r) = \nu$, the proportionality of r_1 to ν is assured when ω is a linear function, or

$$\omega(r) = w_1 r. \quad (\text{C5})$$

Of course, constant ω is also allowed, i.e.,

$$a(k, \nu) = \delta(k) \delta(\nu - \omega). \quad (\text{C6})$$

For other forms of ω , consistent Fourier transformation of the form given by (C1) will not exist.

Appendix D : Resonances

There exist two cases in which the system (A1)~(A5) must be treated carefully for nontrivial solutions.

1. *Lindblad resonances* : Let the external force and the pressure be zero, i.e., $C = \Pi = 0$. Then we have

$$\tilde{\omega} D_1 + \rho \omega' A = 0, \quad (\text{D1})$$

$$\tilde{\omega} A - 2\Omega i B = 0, \quad (\text{D2})$$

$$\tilde{\omega} i B = \frac{\partial(r^2 \Omega)}{r} A, \quad (\text{D3})$$

$$A' + \frac{\partial(r\rho)}{r\rho} A + \frac{m}{r} i B - \frac{\tilde{\omega}}{\rho} i D_0 + \frac{1}{\rho} D_1 = 0, \quad (\text{D4})$$

where $\tilde{\omega} \equiv \omega - m\Omega$. (D2) and (D3) lead to the condition for the Lindblad resonances, $\tilde{\omega}^2 = \kappa^2$, where κ is the epicycle frequency. The amplitudes at the resonance are obtained by solving, e.g., the equation for A :

$$\frac{A'}{A} + \frac{(r\rho)'}{r\rho} + \frac{1}{\tilde{\omega}} \left(\omega' + \frac{m(r^2 \Omega)'}{r^2} \right) - \frac{\tilde{\omega}}{\rho} \frac{i D_0}{A} = 0. \quad (\text{D5})$$

(D5) does not bear the singularities associated with the Lindblad resonances.

2. *Corotation resonance*: By definition, $\tilde{\omega} = 0$. In order for (A1)~(A5) to have nontrivial solutions, we impose additional conditions

$$\frac{II}{\tilde{\omega}} = \xi, \quad \frac{\omega'}{\tilde{\omega}} = \eta, \quad (\text{D6})$$

where ξ and η are arbitrary finite functions of r . Then, we have

$$\xi D_1 = \eta i C, \quad (\text{D7})$$

$$D_1 + \rho \eta A = 0, \quad (\text{D8})$$

$$2\Omega B = \frac{1}{\rho} C', \quad (\text{D9})$$

$$\frac{(r^2\Omega)'}{r} A + \frac{m}{r\rho} i C = 0, \quad (\text{D10})$$

$$\rho A' + \frac{(r\rho)'}{r} A + \frac{m}{r} \rho i B + D_1 = 0. \quad (\text{D11})$$

There are five equations for four unknown amplitudes. The equation corresponding to (D5) is

$$\left(1 - \frac{(r^2\Omega)'}{2r\Omega}\right) \frac{A'}{A} + \frac{(r\rho)'}{r\rho} - \frac{(\rho(r^2\Omega)')'}{2\rho r\Omega} = \eta. \quad (\text{D12})$$

η puts the boundary condition. ξ is used to keep the consistency.

At present, whether the dynamical systems (D1)~(D4) and (D7)~(D11) in fact have physically meaningful solutions is an open question.

Appendix E : Taking account of gravity within perturbed disk

The density perturbation gives rise to the modulation of gravity, which in turn modifies the perturbed Euler equations and the continuity equation as follows :

$$\begin{aligned} -i\tilde{\omega}A - 2\Omega(B_0 + tB_1) + \frac{1}{\rho}(C'_0 + tC'_1 - i\omega't(C_0 + tC_1)) - \frac{1}{\rho}(r\Omega^2 + f_{gr})(D_0 + tD_1) \\ = \frac{Gr}{\sqrt{2\pi}}(D'_0 + tD'_1 - i\omega't(D_0 + tD_1)), \end{aligned} \quad (\text{E1})$$

$$-i\tilde{\omega}B + \frac{(r^2\Omega)'}{r}A + \frac{im}{r\rho}(C_0 + tC_1) = im \frac{Gr}{\sqrt{2\pi}r}(D_0 + tD_1), \quad (\text{E2})$$

$$D_1 - i\tilde{\omega}(D_0 + tD_1) + \rho A' - \left(i\omega't\rho - \frac{(r\rho)'}{r}\right)A + \frac{im}{r}\rho B = 0, \quad (\text{E3})$$

where the amplitudes C and D have been assumed to be linear in t . Comparing the terms of t^2 , t^1 and t^0 , we have

$t^2 :$

$$C_1 = \frac{Gr\rho}{\sqrt{2\pi}} D_1 \quad (\text{E4})$$

 $t^1 :$

$$\frac{1}{\rho}(C_1' - i\omega' C_0) + \frac{\Pi}{\rho} D_1 = \frac{Gr}{\sqrt{2\pi}}(D_1' - i\omega' D_0), \quad (\text{E5})$$

$$\frac{im}{r\rho} C_1 = \frac{imG}{\sqrt{2\pi}} D_1, \quad (\text{E6})$$

$$-i\tilde{\omega} D_1 - \omega' \rho A = 0, \quad (\text{E7})$$

 $t^0 :$

$$-i\tilde{\omega} A - 2\Omega B + \frac{1}{\rho} C_0' + \frac{\Pi}{\rho} D_0 = \frac{Gr}{\sqrt{2\pi}} D_0', \quad (\text{E8})$$

$$-i\tilde{\omega} B + \frac{(r^2\Omega)'}{r} A + \frac{im}{r\rho} C_0 = im \frac{G}{\sqrt{2\pi}} D_0, \quad (\text{E9})$$

$$D_1 - i\tilde{\omega} D_0 + \rho A' + \frac{(r\rho)'}{r} A + \frac{im}{r} \rho B = 0, \quad (\text{E10})$$

where $\Pi = -r\Omega^2 - f_{gr}$. Since (E4) and (E6) are equivalent, we are left with six equations for seven unknown functions A, B, C_0, C_1, D_0, D_1 and ω .

We aim to obtain an equation of a single amplitude, say, A . From (E4) and (E7), we readily have

$$D_1 = -\frac{\omega' \rho}{\tilde{\omega}} A, \quad (\text{E11})$$

$$C_1 = -\frac{Gr\rho}{\sqrt{2\pi}} \frac{\omega' \rho}{\tilde{\omega}} A. \quad (\text{E12})$$

Rewrite (E8), (E9) and E(10) as

$$i\tilde{\omega} A + 2\Omega B = \frac{1}{\rho} \left(C_0 - \frac{Gr\rho}{\sqrt{2\pi}} D_0 \right)' + \frac{1}{\rho} \left[\left(\frac{Gr\rho}{\sqrt{2\pi}} \right)' + \Pi \right] D_0, \quad (\text{E13})$$

$$\frac{(r^2\Omega)'}{r} A - i\tilde{\omega} B = -\frac{im}{r\rho} \left(C_0 - \frac{Gr\rho}{\sqrt{2\pi}} D_0 \right), \quad (\text{E14})$$

$$A' + \left(\frac{(r\rho)'}{r\rho} - \frac{\omega'}{\tilde{\omega}} \right) A + \frac{im}{r} B - i \frac{\tilde{\omega}}{\rho} D_0 = 0, \quad (\text{E15})$$

respectively.

Eliminate C_1 from (E4) and (E5) as

$$\left(\frac{Gr\rho}{\sqrt{2\pi}} \right)' D_1 - i\omega' C_0 + \Pi D_1 = -\omega' \frac{Gr\rho}{\sqrt{2\pi}} D_0$$

Rearranging the terms with a use of (E11), we have

$$C_0 - \frac{Gr\rho}{\sqrt{2\pi}} D_0 = i \left[\left(\frac{Gr\rho}{\sqrt{2\pi}} \right)' + \Pi \right] \frac{\rho}{\tilde{\omega}} A. \quad (\text{E16})$$

Substituting (E16) to (E13) and (E14), with $\varepsilon \equiv (Gr\rho/\sqrt{2\pi})'$

$$\tilde{\omega}A - 2\Omega iB + \frac{i}{\rho}(II + \varepsilon)D_0 = \frac{1}{\rho} \left[\left((II + \varepsilon) \frac{\rho}{\tilde{\omega}} \right)' A + (II + \varepsilon) \frac{\rho}{\tilde{\omega}} A' \right], \quad (\text{E17})$$

$$-i\tilde{\omega}B + \frac{(r^2\Omega)'}{r}A = \frac{m}{r\tilde{\omega}}(II + \varepsilon)A. \quad (\text{E18})$$

(E17), (E18) and (E15) for A , B and D_0 are remaining. (E18) is used to eliminate B from (E15) and (E17) as

$$A' + \left(\frac{(r\rho)'}{r\rho} - \frac{\omega'}{\tilde{\omega}} \right) A + \frac{m}{r\tilde{\omega}} \left[\frac{(r^2\Omega)'}{r} - \frac{m}{r\tilde{\omega}}(II + \varepsilon) \right] A = i \frac{\tilde{\omega}}{\rho} D_0, \quad (\text{E19})$$

$$\rho\tilde{\omega}A - 2\Omega \frac{\rho}{\tilde{\omega}} \left[\frac{(r^2\Omega)'}{r} - \frac{m}{r\tilde{\omega}}(II + \varepsilon) \right] A + (II + \varepsilon)iD_0 = (II + \varepsilon) \frac{\rho}{\tilde{\omega}} A' + \left((II + \varepsilon) \frac{\rho}{\tilde{\omega}} \right)' A. \quad (\text{E20})$$

respectively. From (E19) and (E20), one can eliminate $A' - i(\tilde{\omega}/\rho)D_0$ to obtain

$$\begin{aligned} & \left[\rho\tilde{\omega} - 2\Omega \frac{\rho}{\tilde{\omega}} \left(\frac{(r^2\Omega)'}{r} - \frac{m}{r\tilde{\omega}}(II + \varepsilon) \right) - \left((II + \varepsilon) \frac{\rho}{\tilde{\omega}} \right)' \right] A \\ & = -(II + \varepsilon) \frac{\rho}{\tilde{\omega}} \left[\frac{(r\rho)'}{r\rho} - \frac{\tilde{\omega}'}{\tilde{\omega}} + \frac{m}{r\tilde{\omega}'} \left(2\Omega - \frac{m}{r\tilde{\omega}}(II + \varepsilon) \right) \right] A, \end{aligned}$$

where a use has been made of the relation $\omega = \tilde{\omega} + m\Omega$. Assuming that $A \neq 0$, the eigenfrequency equation (4.10) that takes the self-gravity into account is obtained.

References

- Ash R L and Khorrami M R 1995 Vortex stability in *Fluid Vortices* (ed. Green S I, Kluwer, London) 317.
- Binney J and Tremaine S. 2008 *Galactic Dynamics* Princeton Univ. Press.
- Goldreich P and Lynden-Bell D 1965 II. Spiral arms as sheared gravitational instabilities *MNRAS* **130** 125.
- Goldreich P and Tremaine S 1979 The excitation of density waves at the Lindblad and corotation resonances by an external potential *ApJ* **233** 857.
- Griv E, Liverts E and Mond M 2008 Angular Momentum Transport In Astrophysical Disks *ApJ* **672** L127.
- Kelvin L 1880 Vibrations of a columnar vortex *Phil. Mag.* **X** 155.
- Lin C C and Shu F H 1964 On the spiral structure of disk galaxies *ApJ* **140** 646.
- Lindblad B 1948 On the dynamics of stellar systems *MNRAS* **108** 214 ; 1964 On the circulation theory of spiral structure *ApNr* **9** 103.
- Lubov S H and Ogilvie G I 1998 Three-dimensional waves generated at Lindblad resonances in thermally stratified disks *ApJ* **504** 983.
- Smith R and Rosenbluth M 1990 Algebraic instability of hollow electron columns and cylindrical vortices *Phys. Rev.Lett.* **64** 649.
- Roshan M and Abbasi S 2015 On the stability of a galactic disk in modified gravity *ApJ.* **802** 9.
- Sellwood J A 2014 Secular evolution in disk galaxies *Rev. Mod. Phys.* **86** 1.

- Synge J L 1933 The stability of heterogeneous liquid *Trans. Roy. Soc. Canada* **27** 1.
- Takahashi K 2013 Multiple peaks of the velocity field as the linear perturbation on the non-Eulerian inviscid vortex *Tohoku Gakuin Univ. Review* **166** 1 <http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/research/journal/bk2013/pdf/no10_02.pdf>.
- Takahashi K 2015 Application of the viscosity-expansion method to a rotating thin fluid disk bound by central gravity *PTEP* 073J01.
- Toomre A 1964 On the gravitational stability of a disk of stars *ApJ* **139** 1217.

誤り訂正

東北学院大学教養学部論集 第 171 号 pp 105-146 高橋光一 『単純渦と台風』

温度計算のコードに誤りがあり訂正した。結果, p 133 図 6.1 と p 135 図 6.3 を次の図で置き換える。同時に, 文中の「図 6.3」をすべて「図 6.2」と読み替える。その他, 図の説明文および本文に変更はない。計算の詳細は改めて報告する予定である。

図 6.1

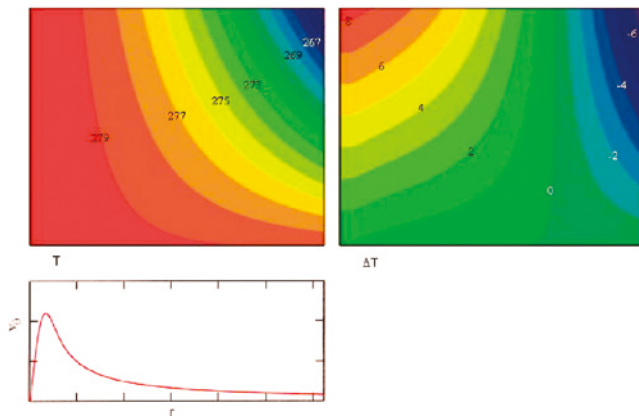
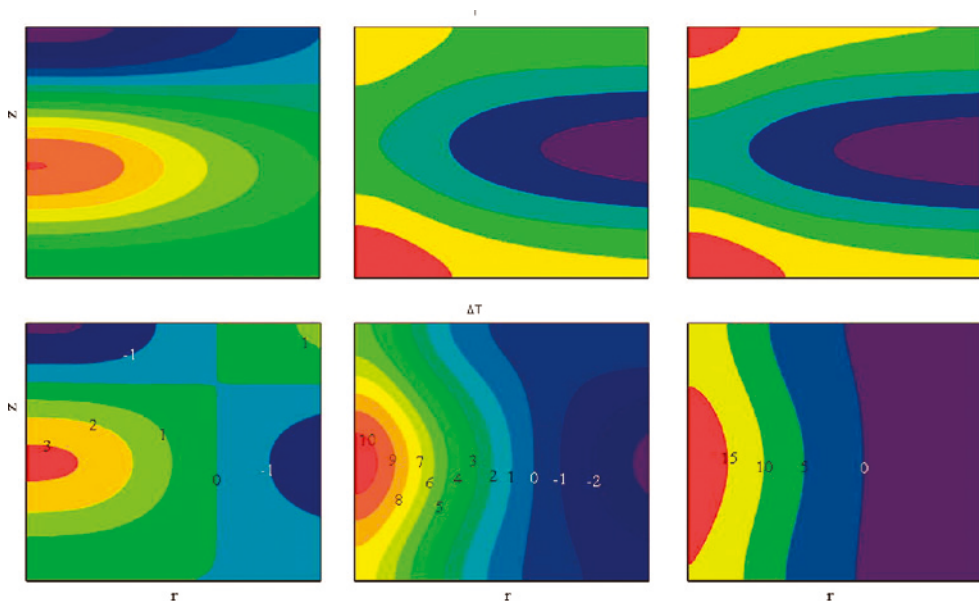


図 6.3 (図 6.2 と読み替え)



「生きる力」の展開

八 幡 恵

はじめに

「生きる力」をはぐくむという教育目標が、学習指導要領に登場したのは1998年のことである。それから15年以上経過して、生きる力という言葉は日常生活の様々な場面で使われるようになった。生きる力を書名に使用する本も少なくはない。しかし、学習指導要領の改訂当初、生きる力という教育目標の評判は芳しいものではなかった¹。私もそのように感じていたひとりであった。それが変わったきっかけは東日本大震災の経験である。生きる力という言葉に、なぜか説得力を感じるようになったのである。それから少しずつ、「生きる力」にポジティブな面が見いだせないか、と考えるようになった。本稿では、この考え方にもとづいて、1996年の中教審答申から2006年の教育課程部会報告まで、テキストに即して、生きる力の展開について考察している。1章では生きる力の位置づけについて、2章では1997年の中教審答申第5章の意義について、3章では生きる力の展開について、それぞれ考察し、4章では3章までの考察をまとめている。

1. 「生きる力」の位置づけ

「生きる力」という言葉が中教審答申の中ではじめて使用されたのは、「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（中央教育審議会 第一次答申）—子供に[生きる力]と[ゆとり]を一」（平成8年7月19日）においてである。そこで、この答申²において「生きる力」がどのように位置づけられているか、まず確認しておこう。

96答申は、「第1部 今後における教育の在り方」の冒頭で、答申の意図について、「子供たちが成人するころの社会はどのようなものになり、そこではどのような教育が必要になるであろうかが検討されなければならない」と述べている。今後の社会変化として答申が挙

¹ 批判の論陣を張った一人は荏谷剛彦である。大事なことは基礎的・基本的な知識をしっかりと身につけさせ、知識を積み上げていくことである、という観点から批判を展開している。

² 以下、この答申を96答申とする略記する。

げているのは、国際化の進展、情報化の進展、科学技術の著しい発展、高齢化の急速な進展であり、こうした変化にもとづいて、これからの社会を「変化の激しい、先行き不透明な、厳しい時代」と捉えている。そして、先行き不透明な社会にあっては「その時々状況を踏まえつつ、考えたり、判断する力が一層重要」になるという立場から、「生きる力」について次のように述べている。

「我々はこれからの子供たちに必要となるのは、いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性であると考えた。たくましく生きるための健康や体力が不可欠であることは言うまでもない。我々は、こうした資質や能力を、変化の激しいこれからの社会を「生きる力」と称することとし、これらをバランスよくはぐくんできていくことが重要であると考えた。」³

上記では、「自ら学び、自ら考える」力、「豊かな人間性」、「健康や体力」の三つが挙げられているが、答申はすぐ続けて、「[生きる力]は、全人的な力であり、幅広く様々な観点から敷衍することができる」として、生きる力を次のように説明している。長くなるが、その部分を引用しよう。

「まず、[生きる力]は、これからの変化の激しい社会において、いかなる場面でも他人と協調しつつ自律的に社会生活を送っていくために必要となる、人間としての実践的な力である。それは、紙の上だけの知識でなく、生きていくための『知恵』とも言うべきものであり、我々の文化や社会についての知識を基礎にしつつ、社会生活において実際に生かされるものでなければならない。

[生きる力]は、単に過去の知識を記憶しているということではなく、初めて遭遇するような場面でも、自分で課題を見つけ、自ら考え、自ら問題を解決していく資質や能力である。これからの情報化の進展に伴ってますます必要になる、あふれる情報の中から、自分に本当に必要な情報を選択し、主体的に自らの考えを築き上げていく力などは、この[生きる力]の重要な要素である。

また、[生きる力]は、理性的な判断力や合理的な精神だけでなく、美しいものや自

³ 96 答申、第1部(3) 今後における教育の在り方の基本的な方向

然に感動する心といった柔らかな感性を含むものである。さらに、よい行いに感銘し、間違った行いを憎むといった正義感や公正さを重んじる心、生命を大切に、人権を尊重する心などの基本的な倫理観や、他人を思いやる心や優しさ、相手の立場になって考えたり、共感することのできる温かい心、ボランティアなど社会貢献の精神も、「生きる力」を形作る大切な柱である。

そして、健康や体力は、こうした資質や能力などを支える基盤として不可欠である。⁴

96 答申は、生きる力を人生の様々な局面に即して敷衍した後で、生きる力の展開に関連する重要な提言を行っている。それは「体験活動」の充実である。体験は子どもたちの成長の糧であり、生きる力をはぐくむ基盤であるという立場から、子どもたちに生きる力をはぐくむために、自然や社会の現実に触れる実際の体験が必要である、と主張する。なぜなら、子どもたちは具体的な体験や事物とのかかわりをよりどころとして、「なぜ、どうして」と考えを深める中で、実際の生活や社会、自然の在り方を学び、そこで得た知識や考え方をもとに、実生活の様々な課題に取り組むことを通じて、よりよい生活を創り出していくことができるからである。ところが現状では、子どもたちの直接体験が不足⁵しており、「子供たちに生活体験や自然体験などの体験活動の機会を豊かにすることは極めて重要な課題」であるというわけである。

こうした体験活動の意義をふまえて、96 答申の翌年に提出された「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について（中央教育審議会 第二次答申）」（平成 9 年 6 月 1 日）⁶では、生きる力の育成について改めて論じている。その中から、まとまりのある説明がなされている箇所を引用する。

「子どもたちは、[ゆとり]の中で、学校・家庭・地域社会それぞれの場において、様々な生活体験や自然体験、さらには社会体験やボランティア体験などの豊かな体験を積み重ね、様々な人々と交流していく。そして、子どもたちは、そうした実際の体験や人々との交わりを糧として、試行錯誤を繰り返しながら、個性の萌芽とも言うべき興味・関心を触発され、生活や社会、自然の在り方を学んだり、人間としての在り方や生き方を

⁴ 同上

⁵ 「疑似体験や間接体験が多くなる一方で、生活体験・自然体験が著しく不足し、家事の時間も極端に少ないという状況がうかがえる」、「生活体験や社会体験の不足もあって、子供たちの人間関係を作る力が弱いなど社会性の不足が危惧される」（96 答申、第 1 部（1）子供たちの生活と家庭や地域社会の現状 [1] 子供たちの生活の現状）。こうした状況認識が、「生きる力」という言葉を選んだ一因になっているのではないか。

⁶ 以下、97 答申と略記する。

じっくりと内省する。こうした過程を経て、子どもたちは、机上で学んだ知識を生きたものとし、自ら学び、自ら考える力などの「生きる力」を身に付け、豊かな個性をはぐくんでいくのである。』

上記の引用では、「ゆとり」と「生きる力」をキーワードにして、体験活動を重視する立場から生きる力を意味づけようとしている。96 答申・97 答申に対しては、とくに学校の教育内容を精選する、厳選するという方向性（ゆとり教育）に対しては、周知のように、子どもたちの学力低下をもたらすものであるという批判が浴びせられた。その「ゆとり」と一体のかたちで語られた「生きる力」という教育目標に対しても、批判⁸が向けられた。本田によれば、生きる力の育成は「曖昧で拡散しており」、教育目標として相応しくない。96 答申・97 答申がこのように批判されることになったこと背景については、4 章で考察する。

2. 97 答申第 5 章「高齢社会に対応する教育の在り方」

97 答申（第二次答申）は、96 答申（第一次答申）の続編として翌年に出された答申である。「生きる力」の育成について敷衍する第 1 章（「一人一人の能力・適性に応じた教育の在り方」）に続いて、第一次答申では詳しく取りあげられなかった「大学・高等学校の入学者選抜の改善」（第 2 章）、「中高一貫教育」（第 3 章）、「教育上の例外措置」（第 4 章）という個別問題について提言を行っている。そして最終章の第 5 章において、2～4 章とはかなり趣の異なる論題である「高齢社会に対応する教育の在り方」について取りあげている。この章は、「生きる力」育成の具体例を示していると考えられる内容⁹なので、ここで論じておきたい。

答申は第 5 章の冒頭において、この論題を取りあげる理由について、「21 世紀の我が国の社会を展望すると、高齢社会という問題は、避けて通ることができない重要な課題である。そこで、我々は、特に、高齢社会に対応する初等中等教育段階の子どもたちに対する教育の在り方について検討を行った」と述べている。数字¹⁰の上では、平成 27 年（2015 年）には高齢化率（全人口に占める 65 歳以上の人口の割合）が 25.2%、4 人に 1 人が高齢者という

⁷ 97 答申、第 1 章（1）一人一人の能力・適性に応じた教育の在り方

⁸ 代表的な反対論は荻谷剛彦（教育改革の幻想、筑摩書房、2002）。最近では、本田由紀が文部科学省の推進するキャリア教育や生きる力の教育について、「生きる力」的な「汎用的・基礎的能力」の育成は、曖昧で拡散しており、より具体的な知識やスキルを確実に伝える教育が必要である、とする批判を展開している（教育の職業的意義、25～27p、筑摩書房、2009）。

⁹ 97 答申の「はじめに」の中で、「今後、我が国において急速に高齢化が進行することを展望すると、高齢社会を生きていく子どもたちをどう育てていくかは、極めて重要な課題であることから、第一次答申における社会の変化に対応する教育の在り方に関する提言に加えて、第 5 章において、高齢社会に対応する教育の在り方について述べている。」と記されている。

¹⁰ 厚生省人口問題研究所「日本の将来人口推計」（平成 9 年 1 月）による推計。

超高齢社会となり、「我が国にとって、21世紀は、正に『高齢者の世紀』と言える」という認識を示している。子どもたちは確実に到来する、これからの高齢社会を生きていくのであり、長寿化の進展のなかで、老いや死の問題を含めて、長い人生をどう生きていくかを学ぶことは、子どもたち自身にとっても重要なことなのである。一方、こうした高齢化の急速な進展にもかかわらず、都市化や核家族化の進行によって、子どもたちが高齢者と接する機会は減少しており、自然な触れ合いのなかで、高齢者の抱える問題を身近な問題として学ぶことができにくい状況となっている。この意味で、「これからの高齢社会を生きる子どもたちの教育の問題は、極めて重要な課題である」というわけである。

こうした状況認識から、答申は高齢社会に対応する教育の在り方についての基本的な考え方として次の3点を挙げる¹¹。

・ これからの社会においては、年齢だけでなく、ものの見方や考え方の異なる人間と共に生きていくことの必要性が一層増していく。そうした社会を生きていくためには、他者を尊重する態度や尊敬する気持ち、他人を思いやる心などの「豊かな人間性」をはぐくむことが重要である。そして、更に重要なことは、「高齢社会がどのような社会であるかを学びつつ、実際に地域社会や高齢者のために主体的に行動し、高齢者とともに豊かな社会を築いていく意欲や実践的な態度をはぐくんでいくこと」である。

・ 子どもたちがこれから、長い人生を自立して生きていくということを考えれば、生涯にわたり心身ともに健康な生活を送るための基礎的な健康や体力をはぐくんでいくことが大切である。

・ 長年培ってきた豊かな経験と知識を有する高齢者が、子どもたちの教育に積極的に参加することは、子どもたちが「高齢者から様々な生きた知識や人間の生き方を学んでいく」ことを可能とするものである。

以上をふまえて、答申は高齢社会に対応する教育への取り組み方として次の点を挙げる。まず、高齢社会についての基礎的な理解を深め、介護や福祉の問題など的高齢社会の課題について考えを深めていくことが重要である。そして、地域社会や高齢者のために主体的に行動する意欲や実践的な態度をはぐくむためには、高齢社会の問題を知識として教えるだけではなく、子どもたちが、自ら実際に高齢者と触れ合いながら様々な体験をする中で学んでいくことが有意義である。しかしながら、上述のように子どもたちが日常生活の中で、高齢者

¹¹ 97答申、5章(1)[2] 高齢社会に対応する教育の基本的な考え方

と触れ合う機会は減少する傾向にある。そこで、「今後、幼稚園から高等学校までの各学校段階において、子どもたちと高齢者が実際に交流し、触れ合う体験活動や、子どもたちが高齢者の介護や福祉に関するボランティア活動を体験することなどを一層重視していくことが必要」であり、「こうした取組を進めるに当たっては、学校のみで取り組むのではなく、地域社会や学校外の関係施設と積極的に連携していくことが大切」であるとして、関係施設と連携のあり方の具体例を挙げて説明¹²している。そして、こうした体験活動を行う際の活動枠として、「介護や福祉など的高齢者に関する問題が、教科の枠を越えた横断的・総合的な問題であることから、『総合的な学習の時間』を活用していくことが有意義」として、教育課程に新設されることになる「総合的な学習の時間」の活用¹³を提言している。

答申はまた高齢社会に対応する教育について、体験学習の重要性を強調し、以下のような多様な例を挙げている¹⁴。

- ・幼稚園や小学校の段階においては、地域の高齢者を学芸会や運動会などの学校行事などに招待したり、高齢者福祉施設を訪問し、高齢者の豊かな体験に基づく話を聞くなどの高齢者との触れ合いを行うプログラムに積極的に取り組むこと。

- ・中学校や高等学校の段階においては、上記の活動に積極的に取り組むほか、高齢者福祉施設などで、実際に介護体験などの活動に積極的に取り組んでいくこと。

- ・子どもたちが、地域の企業や商店、工場あるいは農業の場などを訪れ、高齢者などの大人たちが働いている姿を見たり、仕事の苦勞や喜びなどに関する様々な話を聞くことなども有意義であること。

- ・体験学習を一律に進めるのではなく、工作や絵が得意な子どもの場合には、高齢者福祉施設に飾る置物や、高齢者を描いた絵をプレゼントするなど、自らの得意なものを生かした活動から、高齢者との交流に入ることを促していくこと。

- ・地域に高齢者福祉施設がない場合には、手紙やインターネットなどにより、遠方の高齢者との交流を試みるといった方法も考えられること。

答申はさらに、高齢社会に対応する教育を進めて行く上での教育条件の整備について、教員の指導力の向上と高齢者の活用を挙げている。後者について引用してみよう。

¹² 97 答申, 5 章 (2) [1] 教育内容・方法の改善

¹³ 同上

¹⁴ 同上

「豊かな経験と知識を有する高齢者を学校教育の場において、積極的に活用することが重要である。こうした高齢者を活用することにより、子どもたちが、様々な生きた知識を学ぶとともに、高齢者との触れ合いを通じ、高齢者から人間の生き方を学んでいくことができるのである。具体的には、例えば、豊かな職業体験に基づく、進路や職業の選択に役立つ啓発的な話や、様々な生活体験に基づく『生活の知恵』とも言える話など、実体験に根ざした有意義な話を聞くことを通じて、子どもたちは多くのことを学んでいくことができるであろう。こうしたことは、単に高齢社会に対応する子どもたちの教育を進めるということだけではなく、子どもたちにこれからの学校教育が目指す「生きる力」をはぐくんでいく上で極めて重要である。」¹⁵

以上をまとめよう。我が国にとって、21世紀は「高齢者の世紀」である。子どもたちは確実に到来する高齢社会を生きていくのであり、長寿化の進展のなかで、長い人生をどう生きていくかを学ぶことは、子どもたち自身にとっても重要である。高齢社会とはどのような社会か、今後、どのような問題が生じてくるか、高齢社会についての基礎的な理解を深め、介護や福祉の問題など的高齢社会の課題について、社会科、保健体育、家庭科などの授業のなかで学んでいくことが必要である。さらに、子どもたちに、豊かな人間性をはぐくみ、地域社会や高齢者のために主体的に行動する意欲や実践的な態度をはぐくむためには、子どもたちに対し、高齢社会の問題を知識として教えるだけではなく、子どもたちが、自ら実際に高齢者と触れ合いながら様々な体験をする中で学んでいくことが重要である。高齢者福祉施設を訪ねたり、学校の行事に地域の高齢者を招待したり、高齢者福祉施設で、実際に介護体験などの活動に積極的に取り組んだりして、体験を積み重ねていくこと。そして、体験活動を行う際には、「高齢者のために何かをして役に立つ」という気持ちにとどまらず、「高齢者から自分たち自身が学んでいる」という気持ちを自然に培っていくことが重要である。こうした高齢者との触れ合いの中で、豊かな職業体験に基づく、進路や職業の選択に役立つ話や、様々な生活体験に基づく「生活の知恵」ともいえる話など、実体験に根ざした有意義な話を聞くことを通じて、子どもたちは多くのことを学んでいくのではないかと、つまり「生きる力」につながるものを学んでいくのではないかと、いうわけである。

第5章は97答申の最終章であるが、「子供に「生きる力」と「ゆとり」を」という副題を有する第一次答申と翌年の第二次答申という一連の答申の掉尾を飾る章であることをも意識して、作成された章ではないだろうか。97答申第5章の提言について、もうひとつ取りあ

¹⁵ 97答申、5章(2)[2]教育条件の整備

げておく。それは、学校と高齢者福祉施設との連携を進める方策として、「学校施設と高齢者福祉施設との複合化について検討されてよい」¹⁶という踏み込んだ提言がなされていることである。文部科学省が設置している調査研究協力者会議のひとつに「学校施設の在り方に関する調査研究協力者会議」があり、その会議の部会のひとつとして「学校施設と他の公共施設等との複合化検討部会」が2014年8月に活動を開始¹⁷して、2015年の9月(第6回部会)には報告書の取りまとめを行っている。この提言はふたつの施設の複合化の方向性を先取りしたものとして注目してよい。

3. 「生きる力」の展開

1章末尾において述べたように、生きる力をはぐくむという教育目標については反対の立場も多かった。しかし文科省は、生きる力という目標設定を後退させることなく、次の学習指導要領改訂に向けて、その肉づけをはかっていったのである。ここではまず、2003年の「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について(答申)」、2003年10月7日、中央教育審議会¹⁸と2006年の「審議経過報告(平成18年2月13日)、中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会」¹⁹を中心に生きる力の展開についてまとめ、その後で学習指導要領以外の分野における展開について取りあげる。

03答申は、96答申・97答申を承けた1998年の学習指導要領の路線に対する学力低下批判に応えて、「確かな学力」の育成を提言した中教審答申²⁰である。この答申で注目されるのは、生きる力には三つの構成要素がある、という捉え方をしていることである。三つの構成要素とは、確かな学力、豊かな人間性、健康・体力であり、この捉え方は、「[生きる力]の知の側面である[確かな学力]を育成するという理念」²¹という記述や「[確かな学力]、豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力までも含めて構成する[生きる力]がこれからの子どもたちに求められる力である」²²という記述から確認できる。さらに03答申に付された「答申の概要」においては、生きる力が概念図として図示²³されている。即ち、確

¹⁶ 同上

¹⁷ 第2回の部会では「以前、相当数の複合化した学校を調べたことがあるが、複合化をして大失敗をした学校はほとんどなく、例えばデイサービスと小学校の複合化などは、双方に思いやりの心が生まれたなど好事例が多かった。」という発言がみられる。http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shisetu/013/008/gijiroku/1353968.htm

¹⁸ 以下、03答申と略記する。

¹⁹ 以下、06報告と略記する。

²⁰ 03答申では、もはや「ゆとり」というタームは使用されていない。

²¹ 03答申、前文

²² 03答申、第1章—2—(1) 子どもたちに求められる学力=[確かな学力]、下線は筆者による。

²³ 本文の後に掲載する。

かな学力，豊かな人間性，健康・体力に対応する三つの円が描かれ，三つの円が交わる中心に「生きる力」を示す四角形が描かれており，この概念図は生きる力が三つの構成要素から成ることを視覚的に示している。

06 報告は，学習指導要領改訂のもとになった 2008 年の中教審答申²⁴と 96 答申・97 答申・03 答申とを結ぶ位置にある重要な報告である。報告は 21 世紀の社会を「工業化社会から知識基盤社会へと大きく変化する」社会と位置づけ，これからの学校では知識・技能を習得するだけでなく，「知識・技能を生かして社会で生きて働く力，生涯にわたって学び続ける力を育成することが重要である」として，学習指導要領改訂に向けた基本的立場として，「基礎的・基本的な知識・技能を徹底して身に付けさせ，自ら学び自ら考える力などの『確かな学力』を育成し，『生きる力』をはぐくむという現行学習指導要領の基本的な考え方は今後も維持することが適切である」²⁵という認識を示している。生きる力の構成要素という点でも，教育に求められているのは「子どもに基礎的・基本的な内容を確実に身に付けさせ，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，行動し，よりよく問題を解決する資質や能力（確かな学力），自らを律しつつ，他人と共に協調し，他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性（豊かな心），たくましく生きるための健康や体力（健やかな体）などの『生きる力』をはぐくむことである」²⁶という記述から，03 答申の考え方を継承していることがわかる。

06 報告で特徴的なことは，生きる力の育成を論じるにあたって「言葉」と「体験」に注目していることである。例えば，報告の「終わりに」において，これまでの審議をふりかえりながら，「教育課程部会においては，前述のとおり，今，子どもたちに必要なものは，学習や生活の『基盤』であると考えた。また，その際『言葉』と『体験』を重視する必要がある」²⁷と言及されている。世界的な学力調査，各種の意識調査などの結果から，子どもの学習や生活の状況をめぐって，「読解力の低下，学習意欲や学習習慣が十分でないという問題，学習や職業に対する意欲，規範意識や体力の低下など」²⁸さまざまな課題が指摘されており，まずは学習と生活の基盤づくりからはじめなければならないという認識である。しかし基盤が脆くなっているとすれば，その強化には基軸となるものが必要であり，それが私たち人間の基本となる構成素である言葉と体験²⁹だというわけである。この点について 06 報告第 2 章「教育内容等の改善の方向」では，次のように述べられている。

²⁴ 「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」(平成 20 年 1 月 17 日 中央教育審議会)，以下では 08 答申と略記する。

²⁵ 06 報告，6p.

²⁶ 06 報告，12p.

²⁷ 06 報告，59p.

²⁸ 06 報告，5p.

²⁹ 06 報告の言葉と体験への注目は，08 答申の言語活動と体験活動の重視へとつながっていく。

「子どもの心と体や学習の状況を見ると、『生きる力』を育てるためには、まずは、①生活習慣、学習習慣、読み・書き・計算など、学習や生活の基盤を培うことが重要である。そして、②将来の職業や生活への見通しを与える、国際社会に生きる日本人としての自覚を育てるなど、実生活を視野に入れて、学習や生活の目標を持たせることが重要である。子どもの発達の段階に応じて、こうした学習や生活の基盤づくりを重視する必要がある。その際、言葉を重視することが大切であるとの意見、体験を充実することが重要であるとの意見が数多く示されている。」³⁰

言葉と体験は学習や生活の基盤づくりの柱になるだけではない。学校における教育活動の展開の柱でもある。報告は、義務教育修了段階までに教科横断的に身につけさせたい力として4点を挙げ、その意義について以下のように述べる³¹。

- ① 体験から感じ取ったことを表現する力（感性や想像力を生かす）
- ② 情報を獲得し、思考し、表現する力（言語や情報を活用する）
- ③ 知識・技能を実生活で活用する力（知識や技能を活用する）
- ④ 構想を立て、実践し、評価・改善する力（課題探究の技法を活用する）

このように、①感性に基づいて情報を処理する力や、②理性に基づいて情報を処理する力などを通じて、体験から知識・技能を獲得し、深め、実際に活用するための基盤となる力を養うとともに、③知識・技能を実際の生活や学習において活用する力、④課題探究や創意工夫をすることで、課題自体を発見したり、課題を解決したりする力を育成することが重要である。①～④の力はいずれも、言葉の重視、体験の充実と深く関連する力である。

充実した体験から確かな言葉と知識をつかみとること、学んだ言葉と知識を生活へ社会へと届かせること、このふたつの方向性が重要なのである。氏家³²のタームを借りれば、「知識から経験へ」、そして「経験から知識へ」である。このふたつの往還から、生きる力が立ち上がってくること、06報告はこのことを期待しているのではないだろうか。

96答申・97答申と比べると、生きる力を学校教育において具体化するための道具立ては整ってきた。これをふまえて、学習指導要領改訂に向けた08答申がつけられていくのである。

³⁰ 06報告, 13p.

³¹ 06報告, 19～20p.

³² 氏家重信, 「勉強は面白くなれるだろうか」, 『問いとしての教育学』11章, 沼田裕之・増渕幸男(編著), 福村出版, 1997

この章の終わりに、生きる力と学習指導要領関連以外の答申、文書とのかかわりについて簡潔に触れておこう。ひとつは安全教育・防災教育文書であり、もうひとつは第2期教育振興基本計画についての中教審答申である。

2010年3月に、『『生きる力』をはぐくむ学校での安全教育』（文部科学省）という冊子が学校安全参考資料として教職員用に作成された。そこでは、生きる力と安全教育との関連性について、「『生きる力』で目指す資質や能力は、安全教育で目指す『自他の生命尊重を基盤として、自ら安全に行動し、他の人や社会の安全に貢献できる資質や能力』と軌を一にするものといえ、『生きる力』の涵養にとっても、安全教育の充実が不可欠ということが出来る」³³と述べられている。そして東日本大震災の2年後、2013年3月に、『『生きる力』を育む防災教育の展開』（文部科学省）が学校防災のための参考資料として作成された。同書の第2章では、08答申の「生きる力」を引き合いに出しながら、「これらは東日本大震災後の被災地での復興、復旧に向けての学校教育を考えた場合、改めてその重要性が意識される」とし、すぐ続けて「防災教育で目指している『災害に適切に対応する能力の基礎を培う』ということは、『生きる力』を育む』ことと密接に関連している。今日、各学校等においては、その趣旨を活かすとともに、児童生徒等の発達の段階を考慮して、関連する教科、総合的な学習の時間、特別活動など学校の教育活動全体を通じた防災教育の展開が必要とされている」と述べている。学校は自然災害から子どもの命を守らなければならないが、同時に子どもが自分自身の命を守ることができるように教育する責任を有している。こうした安全教育・防災教育の推進は生きる力の育成の最もわかりやすい例のひとつであろう。

「第2期教育振興基本計画について」の答申は、「教育振興基本計画について―「教育立国」の実現に向けて―（答申）平成20年4月18日 中央教育審議会」に続いて、2013年4月25日に中教審から提出された。いずれも、改正された教育基本法の第17条（教育振興基本計画）³⁴にもとづく答申である。答申は、第2期計画がめざす「四つの基本的方向性」のひとつとして「社会を生き抜く力の養成」³⁵を挙げ、それについて次のように説明している。即ち、「多様な知識が生み出され、流通し、課題も一層複雑化し、一律の正解が必ずしも見いだせない社会では、学習者自身が、生涯にわたり、自身に必要な知識や能力を認識し、身に付け、他者との関わり合いや実生活の中で応用し、実践できるような主体的・能動的な力」³⁶が求められるのである。そしてそれを、ますます厳しさを増す多様で変化の激しい社会にお

³³ 「生きる力」をはぐくむ学校での安全教育、25 p.

³⁴ 条文は、「政府は、教育の振興に関する施策の総合的かつ計画的な推進を図るため、教育の振興に関する施策についての基本的な方針及び講ずべき施策その他必要な事について、基本的な計画を定め、これを国会に報告するとともに、公表しなければならない。」

³⁵ 第2期教育振興基本計画について、16 p.

³⁶ 第2期教育振興基本計画について、17 p.

ける個人の自立と多様な人々との協働に向けた力であるとまとめている。こうした意味での「社会を生き抜く力」とは、96 答申から 08 答申へと展開されてきた「生きる力」の延長線上にあるものと位置づけることができるだろう。

4. 結びに代えて

前章では、生きる力をめぐって、96 答申・97 答申から 03 答申、06 報告への展開について考察したが、本章では考察の方向を逆にして、03 答申における生きる力の構成要素という視点や、06 報告における言葉と体験への注目が、96 答申・97 答申においてどの程度意識されていたのか、この点を考察して本稿をまとめたい。

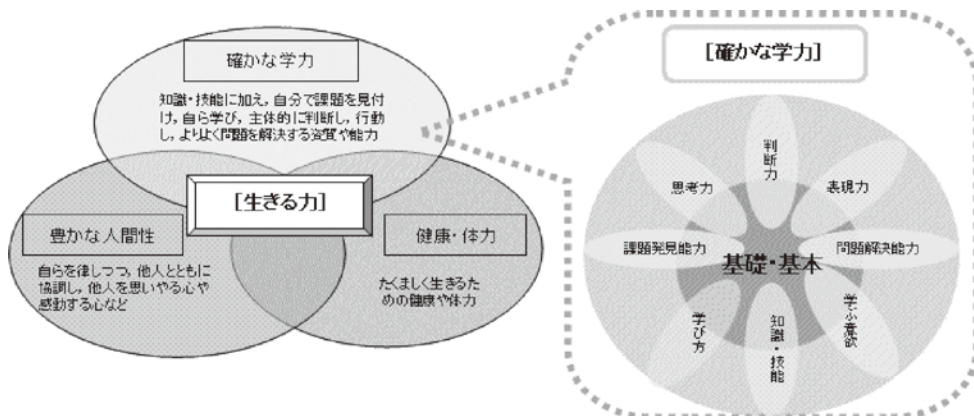
03 答申における生きる力の構成要素は三つであった。それは、確かな学力、豊かな人間性、健康・体力である。この三つは、表現こそ違え、96 答申の生きる力の説明にも含まれていた。本稿 1 章のまとめ方を記すと、自ら学び自ら考える力、豊かな人間性、健康や体力の三つである。96 答申においても、生きる力はこの三つで表せるということは意識されていたのである。しかしそれが構成要素という認識にまで進めなかったのは、「自ら学び自ら考える力」と「確かな学力」との違いによるものと言えないだろうか。やはり、「確かな学力」という概念及び表記は他のふたつとのバランスがよく、生きる力の概念図のように、それぞれが円で示されるのに相応しいものになっている。この点に 96 答申と 03 答申の違いが認められるのではないだろうか。

言葉と体験への注目についてはどうだろうか。97 答申をもう一度引用してみる。

「子どもたちは、[ゆとり]の中で、学校・家庭・地域社会それぞれの場において、様々な生活体験や自然体験、さらには社会体験やボランティア体験などの豊かな体験を積み重ね、様々な人々と交流していく。そして、子どもたちは、そうした実際の体験や人々との交わりを糧として、試行錯誤を繰り返しながら、個性の萌芽とも言うべき興味・関心を触発され、生活や社会、自然の在り方を学んだり、人間としての在り方や生き方をじっくりと内省する。こうした過程を経て、子どもたちは、机上で学んだ知識を生きたものとし、自ら学び、自ら考える力などの[生きる力]を身に付け、豊かな個性をはぐくんでいくのである。」

上記では「体験」することの意義については説得的に書かれているが、「言葉」への言及がない。上記下線部のように、体験したことを学んだり、じっくりと内省すれば、そこから

「生きる力」の展開



生きる力の概念図

言葉が立ち上がってくるはずであるが、その点が焦点化されていない。言葉が焦点化されないがゆえに、体験されたことがどのように取りまとめられ、取りまとめられたものがどのように生活や社会へと届けられるのか、その道筋が見えてこない。言葉の力を十分に意識しているかどうか、この点に96答申・97答申と06報告との違いがある。そして、96答申・97答申における生きる力の説明が曖昧で拡散的であるように見えるのも、この点に一因があるのではないだろうか。

参考文献

- ・ 21世紀を展望した我が国の教育の在り方について(中央教育審議会 第一次答申)—子供に[生きる力]と[ゆとり]を一、平成8年7月19日
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/1309579.htm
- ・ 21世紀を展望した我が国の教育の在り方について(中央教育審議会 第二次答申)、平成9年6月1日
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/1309655.htm
- ・ 初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について(答申)、2003年10月7日、中央教育審議会
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/f_03100701.htm
- ・ 審議経過報告(平成18年2月13日)、中央教育審議会初等中等教育分科会 教育課程部会
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212706.htm
- ・ 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)、平成20年1月17日、中央教育審議会
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1216828.htm
- ・ 「生きる力」をはぐくむ学校での安全教育、文部科学省、平成22年3月
http://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/anzen/1289310.htm
- ・ 「生きる力」を育む防災教育の展開、文部科学省、平成25年3月
http://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/anzen/1289310.htm
- ・ 第2期教育振興基本計画について、平成25年4月25日、中央教育審議会
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1334377.htm

- ・ 荻谷剛彦, 教育改革の幻想, 筑摩書房, 2002
- ・ 田中耕治他, 新しい時代の教育課程, 有斐閣, 2011
- ・ 本田由紀, 教育の職業的意義, 筑摩書房, 2009
- ・ 水原克敏, 学習指導要領は国民形成の設計書—その能力観と人間像の歴史の変遷—, 東北大学出版会, 2010
- ・ 森良和, 歴史のなかの子どもたち, 学文社, 2003

【論 文】

戦後初期話し言葉教育の史的検討

—— コミュニケーション概念受容の変遷から ——

渡 辺 通 子

キーワード：コミュニケーション，昭和20年代，話し言葉教育，柳田国男，西尾実

0 はじめに

近代学校成立以来のわが国の言語教育は、国語国字問題と密接に関わりながら展開されてきた。それゆえ具体的な国語国字改良のための視点を提供すると同時に、あるべき日本語の姿を普及する役割を担ってきた。言語の運用には、語義や文法体系、その他の知の伝達のほかに、何らかの社会的文化的価値観の付与が伴う。それは話し言葉により顕著である。本小論は、このような視座から戦後初期の話し言葉教育政策を検討するものである。

1 昭和20年代の意味づけ

1939（昭和14）年前後における用語「話し言葉」の創出は、コミュニケーション概念を包含した話し言葉教育の重視と、それに伴う国語科カリキュラム再編の機運をもたらした。用語「話し言葉」は、動的で不可逆的な言語のやり取りを含意する音声言語の位相のひとつであり、この語の創出によって日常の生活言語の学習に着目し、その指導のあり方を考究する姿勢が生まれた。それは、我が国の伝統的なコミュニケーションのスタイルであった「語る」から「話す」への転換の兆しでもあった。だが、それが直ちに広く実践に結びつくというものではなかった。1941（昭和16）年国民学校令施行の中で、当局は「話し言葉」ではなく「音声言語」を用語として用いた。しかし、戦後になると、この様相は転換し、話し言葉¹⁾は文部省関係者を中心に、新教育推進の中でむしろ積極的に用いられるようになる。

¹⁾ 国語教育では戦後のこの時期より「話しことば」、「はなしことば」と表記するのが一般的となるが、必ずしも統一されたものではない。「話し言葉」も使われた。本稿では、引用以外は「話し言葉」と表記する。

本稿の目的は、こうした史実を踏まえ、終戦直後から『22年度版学習指導要領国語科編（試案）』（以下、22年度版と表記）と、その改訂版である『26年度版学習指導要領国語科編（試案）』（以下、26年度版と表記）発表の頃、1950（昭和25）年前後までの話し言葉教育をコミュニケーション教育の視座から検討することで、コミュニケーション概念受容の変遷の特質を明らかにすることである。

2 教育政策上の時期区分

唐沢や飛田らの先行研究を参照に²⁾、教育政策上から昭和20年代の時期区分を試みると、学習指導要領の発表を中心に以下の四期に分けるのが妥当である。

第1期	民主主義確立のための国語教育模索の時期	1945年8月～
第2期	米国プラグマティズム教育受容の時期	1947年12月～
第3期	言語生活の視点からの新教育の修正の時期	1949年～
第4期	国語教育の体系化と新教育の見直しの時期	1951年～

(1) 第1期 民主主義確立のための国語教育模索の時期

第1期は、終戦直後から22年度版が発表されるまでの混乱期である。この時期は、戦争遂行のための教育施策を一掃した自省の時期であった。当時、文部省教科書局第一編修課長であった石山脩平（のち東京教育大学教授、「新教育指針」作成の中心）が後に、「教育におけるボツダム宣言³⁾」と比喻する第一次米国教育使節団報告書（1946年3月31日）⁴⁾が以後の具体的な教育政策を決定づけていった。以来、国語教育のキーワードとして導入されたコミュニケーションなる外国語は、言語を社会生活の手段ととらえる言語観として受容され、話し言葉教育の推進というありかたで浸透していったとするのが当時の一般的なとらえ方であった。だが、言語の社会的機能に着目した国語教育とはいかなるものか、具体性を欠く漠然と

²⁾ 唐沢富太郎「第四章第四節戦後の教育」長田新監修『日本教育史』（御茶の水書房、1961）pp. 284-314。飛田隆『戦後 国語教育史上』（教育出版センター、1983。）目次。

³⁾ 海後勝雄・金子孫一・馬場四郎とによる「再びアメリカ教育使節団を迎えて—ミッションレポートとカリキュラム—」（『カリキュラム』第22号、1950年10月、p. 15.）と題する座談会で次のように述懐している。

石山「あのレポートが出た時は、敗戦後で心理的にも混乱していたし、現実離れしているようにも感じて、詳しくあれを検討して吟味したという人は存外少なかったのじゃないかね。一般の人は特にそうだったろうし、教育に直接関係している人たちも軽く考えていた傾向があるね。ところがその後の教育政策の動きを検討してみると、みんなあれに書いてあることばかりだ。そこでこれはというのであわてて読み直したなんてことも本当のところだろう。いわば、教育におけるボツダム宣言のようなものなんだね。」

⁴⁾ 報告書は、①教育目的と教育内容 ②国語の改革 ③初等・中等学校の教育行政 ④教育方法および教師養成教育 ⑤成人教育 ⑥高等教育の根本的な改革の六章から成る。

したものであり、明確な指針をもたない混沌とした状態にあった。

(2) 第2期 米国プラグマティズム教育受容の時期

第2期は、このような模索の状態に、一つの方向性をもたらした22年度版の発表と、その後の反響から修正に至る時期である。米国プラグマティズムの教育が国語科カリキュラム、指導方法、教材の検討といった具体的な形で示され、半ば指導、半ば強制としてそれらを受容した時期である⁵⁾。この時期の動向を見ると、22年度版発表の数か月後には、改訂版である26年度版の作成に入っている。同時に、全国を8区に分けた国語科指導要領講習会が開催されるなどして、その普及と修正が同時に進められた。

(3) 第3期 言語生活の視点からの新教育の修正の時期

第3期は、学力低下論が浮上した1949（昭和24）年から26年度版の発表までの時期である。学力低下論は26年度版の発表（昭和26年7月10日）を俟たずに起こっている。他方、この頃から、国語科教育改革の中心は単元学習の普及という、より具体性を増した指導方法論へと方向性を変えていった。西尾実が言語生活主義を唱えた時期でもあり、言語生活という大きな視点を得たことで、国語科の再体系化が目睹され、初期新教育の修正に向けて胎動が始まった時期ととらえることができる。

(4) 第4期 国語教育の体系化と新教育の見直しの時期

第四期は、26年度版発表以後である。これ以降、新教育の見直しがなされるようになる。26年度版の発表は、講和条約締結の年であり、この時期の動向は戦後処理政策と無関係ではない。この前後よりCIEによる占領政策としての教育改革を見直そうとする動きが出てくる。

3 昭和20年代におけるコミュニケーション概念の導入と受容

3-1 興水の述懐

昭和20年代のコミュニケーション概念の受容の経緯については、興水実が下記のような反省的証言をしている。戦後、最初に正面に出てきたのは、言語生活主義ではなく、コミュニケーションの考え方であった⁶⁾

戦後最初に正面に出てきたのは、「言語生活」でなく、「コミュニケーション」の考え方だった。それによって、言語がもっと広い生きた場面に置かれ、それによって国語教

⁵⁾ CIE 担当官と折衝しながら教科書編集、学習指導要領の作成に携わった石森延男は、「半ば指導であり、相談であり、半ば指示である。」と述懐する。石森延男「国語教育の回顧と展望（三）」『国語教育問題史』刀江書院。1951. pp.75-111.

⁶⁾ 興水実『言語観の改造』明治図書。1969. pp.99-127.

育は、新しい生命、使命を獲得するよう見えた。(略)

コミュニケーションは、「通じ合い」などというよりは、もっと大きな、基本的な概念であったが、ある人々によって、わかりやすくそのように解説された。そのために、この考え方は、「自己表現」とか「記録」とかの機能をふくまず、主として、「伝達」の機能を強調するものになってしまった。それも、戦後の話し合い主義、民主主義実現の過程では自然の成り行きであった。

引用中の「ある人々」とは、西尾実を中心とする国語教育界の動向を指すものと思われる。西尾は戦前より国語教育界をリードした人物で、戦後の国語教育の実践・研究の多くは西尾理論を基礎に発展してきたといつてよい。このことは輿水の言説にもみてとれる。コミュニケーションは新教育のキーワードのひとつであったが、西尾はそのまま用いることなく、その対訳に腐心し、「通じあい」をあてることで、これを国語教育の目的だとした。

これまで国語教育においては、戦前の言語活動主義が戦後になって言語生活主義に移行したとするのが一般的理解であるが、輿水の述懐からは、戦後の新教育においては、コミュニケーションの考え方から言語生活主義への移行があったこと、この概念の受容に関しては、国語教育独自の受容がなされたことあったことの2点がわかる。

では、コミュニケーション概念と言語生活概念とはどのように整理されるのだろうか、また、西尾らを中心とするコミュニケーション概念の受容が戦後の話し合い主義、民主主義に及ぼした影響とはいかなるものであったのだろうか。コミュニケーションを「通じあい」と対訳した西尾理論を中心にみていくことで、この概念がどのように受容され、具体的にどのように摂取されていったのかをみていく。

3-2 コミュニケーション概念の2つの解釈

そもそもコミュニケーションの考え方は、必ずしも話し言葉教育に限定されるものではない。

例えば、思想の科学による第1回コミュニケーション講座で「コミュニケーション総論」と題して、この概念を紹介した波多野完治は、雑誌「カリキュラム」第19号（1950年7月）掲載の「コミュニケーションとしての教育」と題する論考で、教育にコミュニケーション概念を導入することで得られる効果として、教育を目的としてみると同時に、目的を実現する「手段」「技術」としてみることを可能にするを指摘する。具体的には、①教育概念の一面性を克服して教育者と被教育者の両者の「関係」という複合性、全体性においてながめることを可能にすること、②教育をひとつの本質として善悪の判断をこえて、観察するこ

とを許す科学の立場を持たせうこと、③ 教育者と被教育者の両者の間にある「心理的場」を考察できることの三点を挙げる⁷⁾。

波多野の指摘は、教育的価値を一方的に定め、教育者側から与えるものととらえる傾向の強かったわが国の伝統的な教育観に、この概念の導入が客観的な科学的視点を与えたことを示すものである。例えば、教師と子どもとの関係が作り出す場に着目する視点、そこに生ずる心理的な葛藤に着目する視点を与えたのである。波多野は、この概念を指導方法として転用している。上述の米国使節団報告書においても、子どもたちには秩序あるコミュニケーションの技術の訓練が必要であるとして、その方法の一つとして、子どもたちに会合をもたせ、順番に司会をやらせるという指導方法を具体的に挙げている⁸⁾。

では、国語教育の場合はどうか。国語教育は明治以来、言語教育として国語国字問題と常に密接に関わってきた。話す聞く書く読むの言語行為は、知の伝達にとどまらず、その社会集団固有の思考やコミュニケーションの在り様（ふるまい）を組織し決定づける。とりわけ話し言葉の役割は大きい。戦後の話し合い主義、民主主義の実現に国語教育が大きく影響を与え、寄与したことは想像に難くない。国語教育では、コミュニケーションの在り様自体が模索された。つまり望ましいコミュニケーションとは何かといったあるべきコミュニケーションの姿が問われたのである。では、コミュニケーション概念の受容によって国語科は、具体的にどのような影響を受けたのだろうか。

3-3 コミュニケーションの視座からの時期区分

新教育のキーワードとして導入されたコミュニケーション概念は、1939（昭和14）年頃に発見された話し言葉概念を包摂、止揚する概念として受容されている。前述の教育施策上から分けた四つの時期区分のうち、本稿の対象範囲である第1期から第3期までをコミュニケーション概念の受容の経緯を基に、コミュニケーションの視座からとらえ直して時期区分を試みると、厳密な時期の特定はむずかしいが次のような再区分が可能である。第1～2期が前述の輿水証言に当たる時期である。

第1期	言語の社会的機能としてのコミュニケーション概念受容の時期
(1) 前期:	コミュニケーション抑制への自省の時期 : 1945年8月～
(2) 後期:	「話し言葉」と「話す」スタイルが公認された時期 : 1947年3月～
第2期	コミュニケーションを中心に据えた二対四面の国語科カリキュラム再構成の時期 : 1947年12月～
第3期	「通じあい」の発見から言語生活主義展開への時期

⁷⁾ 波多野完治「コミュニケーションとしての教育」「カリキュラム」第19号、1950年7月、pp.13-16.

⁸⁾ 村井実『アメリカ教育使節団報告書』講談社、1979、pp.37-42.

以下に受容の変遷と各期の特徴をまとめる。

4 コミュニケーション概念の受容と国語教育

4-1 言語の社会的機能としてのコミュニケーション概念の受容

民主主義確立のための国語教育模索の時期（1945年8月～）には、コミュニケーション概念は言語の社会的機能として受容された。この期は、『学習指導要領一般編（試案）』（以下、一般編と表記）発行（1947年3月20日）の前後でさらに分けることが妥当である。一般編の発行に伴い、国語教育界にも一層の新教育実現に向けての機運が高まった。この時期は、戦前戦中におけるコミュニケーションの抑制を自省し、コミュニケーションが言語倫理に深く関わることを認識する前期と、戦前に発見された用語「話し言葉」が広く公認されるようになった後期とに分けられる。これにより、「話しことば」（あるいは「はなしことば」と表記されて話すこと聞くことが重視され、学校教育として話すスタイルの表現が進められるようになる。

(1) 第1期前期：コミュニケーション抑制への自省

第1期前期には、これまでコミュニケーションを抑制し続けたことへの反省にもとづき、コミュニケーションが言語倫理と深くかかわることを指摘する発言があった。

柳田国男は終戦直後の1946年夏より執筆した『展望』（筑摩書房、1946年1月1日創刊）連載の「喜談日録」で、国語教育が聞く力の修練と考える習慣を与えることの重要性を説き、日本の学校では、これらがまだなされていなかったとする。同年11月の国語教育関係者に向けての講演では、「言葉を口から外へ出すのは勇気の問題であらうが、その勇気を鈍らせることには、国語教育が手伝をして居る。それだけならまだ辛抱も出来るかも知れぬが、それがなほ一歩奥に進んで、是では心の中の考へ又は感じを結んで言葉にする能力を、抑圧するのではないかとさへ私は心配する。」と述べ⁹⁾、わからぬことをわかぬと言える勇気的重要性を取りあげる。

西尾実は、翌1947（昭和22）年12月の22年度版発表に先立ち、同年3月に岩波書店から『言葉とその文化』を刊行し¹⁰⁾、生きた言葉の実態を見据えることと話し言葉教育を重視し、話す聞くことこそが言語文化の基盤となることを説いた。初版の「はじめに」（昭和21年10月17日の日付）では、「国字問題解決の根基を培うために、また、国語問題解決の地盤

⁹⁾ 柳田国男「是からの国語教育」『標準語と方言』（明治書院、1949）

¹⁰⁾ 西尾実『言葉とその文化』（岩波書店、1947.3.20.）あながきでは、『言葉とその文化』を書名としながら、内容は、「話し言葉とその文化」である」と述べている。

としての国語教育を確立するために、さらに、民主主義的革新の礎石たる健全なる世論を育成するために、話し言葉とその文化について小考を試みた」とあるように、B6 四六版の103頁ほどの本であるが、そのほとんどが聞くことを含めた話し言葉についての言及である。これまでの会議が会議として機能していなかったことを例に挙げて¹¹⁾、言うべき時に言わない不信義を取り上げる。話し言葉の重要性を説き、「単に講演や演説だけでなく、日常の対話・会話から、問答・討議・協議・会議等に至るまで、その改善が必要である」とする。

そのなかで、言葉についての戒めとして、「しかし、それら（詭詐や阿諛 引用者注）の言葉にもまして戒めなくてはならぬ欠陥は、言うべき時に言わない不信義である。ひとりの人が、言うべき事を、言うべき場合に言わなかつたために、ひとを大なる不幸に陥れ、一国を挙げて戦争の惨禍に陥れるというようなことさえある。（略）以上、わたくしは、話すことに関しては、積極的・能動的に言うべきを言うという新しい倫理の樹立を希い、また、聞くことに関しては、受容としての聞くことから表現の根基としての聞くことに及び、さらに、創造としての聞くことに至っては、その考察を後項に残した。」と述べ、話し言葉の教育が言語能力だけでなく世論を形成する倫理に関わることを強く意識した発言をした。

垣内松三は、1947（昭和22）年4月に『国語の力再稿』（牧書房）、同年9月に『国語の新生—国語教育はどう改まるか—』（非凡閣）を刊行した。前者はドイツ哲学に基づく国語論であり、第4章に「沈黙と談話」を置く。後者は4月から使用予定の第六期国定教科書の編集、教材を論じたもので、第4章「ことばのはたらき」では言語生活、言語行為、言語作用について詳述している

柳田の「言葉を口から外へ出す勇氣」、西尾の「言うべき時に言う新しい倫理」とは、従来の国語教育が子どもたちのコミュニケーションを抑制してきたことを自省するもので、言語倫理と結びついた言語教育が目指されている。特に柳田の発言は、米国教育使節団報告書の発表以前に表明されたものであり、米国教育使節団報告書に基づく勸告¹²⁾によってではなく、有識者としての独自の見解であったことに注目したい。米国教育使節団を迎えるに当たって日本側は、1946年1月9日「日本教育家ノ委員会ニ関スル件」（連合国軍最高司令官総司令部発350号、民間情報教育部）により、教育家委員会を組織して使節団とは別に改革案を提出することになっており、柳田発言の委員会への影響も考えられる¹³⁾。

¹¹⁾ 10)に同じ。第3刷『西尾実国語教育全集』第4巻、教育出版、1975。pp.26-28。

¹²⁾ 米国教育使節団報告書は、1946年4月7日に公式発表され、全面的に承認する旨の覚書がつけられ、以後、これに沿った教育改革が決定づけられており、その影響は計り知れない。

¹³⁾ 日本側の改革案は使節団報告書とは別に、当時、秘密の建議書として2月に 教育使節団と政府に提出された。南原繁『現代の政治と思想』東京大学出版会、1957。

(2) 第 1 期後期：「話し言葉」と「話す」スタイルの公認

米国教育使節団報告書発表後は、言語の社会的機能に基づく国語科教育改革が積極的に推進され、それは主として話し言葉教育の充実につながった。コミュニケーション概念は、言語は社会生活の手段であるという言語観として紹介されたからである。言語はコミュニケーションの手段（道具）であり、子どもを社会化（民主的な人間の育成）する手段としてとらえられた。

このような考えの下、民主主義社会の実現のために、国語教育においては話すことや聞くことの教育、つまり対面コミュニケーションの場を意図的に設定する授業が推進された。討議法（ディスカッション・メソッド）、話し合い学習の積極的実践は、封建社会から民主主義への改革を促すための教育方法であった。

この教育観の転換の下、新教育推進の中で用語「話し言葉」は、国民学校期に用いられた「音声言語」に代わり、文部省関係者を中心に、積極的に用いられるようになる。戦後の国語教育を推進するにあたって、文部省関係者らを中心に刊行された『国語教育辞典』（東京堂、1950年）には、「話しことば」が立項され、術語として措定することで、この語を積極的に用いようとする意図がうかがえる¹⁴⁾。

やがてこの語は、国語教育関係者ととどまらず、広く社会的な用語として広がりを見せる。初めての学習指導要領の発表を前にして、1947（昭和 22）年 3 月には、はなしことばの会が設立され¹⁵⁾ 話し言葉教育の啓蒙が進められた。会の目的は、主として小中学校の国語教育指導における話し言葉教育についての調査・研究を行うもので、「生きた『はなしことば』」を中心に家庭教育・学校教育・社会教育を推進することにあつた。

話し言葉教育を充実させようとするこうした動きには、話し手が一方的に話し、個々の聞き手への意識の少ない伝統的な雄弁や朗読を中心とする「語り」のコミュニケーションを転換させて、日常生活の実情に適正な「話す」スタイルを定着させようとする意図がうかがえる。国語教育は学校教育にとどまらず、家庭教育や社会教育と連携を図りながら、「話す」スタイルを拡大するようになる。結果として、「話し言葉」は一般語として市民権を得るようになっていった。

4-2 第 2 期：コミュニケーションを中心に据えた二対四面の国語科カリキュラム再構成

米国プラグマティズム教育受容の時期（1947 年 12 月～）には、コミュニケーション概念

¹⁴⁾ 編者は、白石大二（文部事務官）・新聞進一（北海道大学助教授）・広田栄太郎（文部事務官）・松村明（東京女子大学助教授）、東京堂、pp. 475-476.

¹⁵⁾ 顧問に垣内松三、葛原齒、下位春吉、神保格、保科孝一、柳田国男の 6 人、委員長は東京高等師範学校教授石井庄司である。80 人の発起人は、行政、学校、放送、出版各界に及ぶ。

を中心に据えた二対四面（表現〔話す書く〕と理解〔聞く読む〕）の国語科カリキュラムの再構成がなされた。

この新しい領域構成は、倉澤栄吉によれば、当時、表現〔話す・書く〕と理解〔聞く・読む〕とに分ける二対四面の構造の中心にコミュニケーションがあり、これら話す書く聞く読むの4つの言語活動は、相互に関連し合って進められるものととらえられた¹⁶⁾。コミュニケーション概念をそれぞれの領域を結びつける統合の原理として機能させることで国語科カリキュラムの体系化を図ろうとしたのである。この見解は、以下に述べる22年度版から26年度版への改訂からもみてとれる。さらに、西尾が1952（昭和27）年「これからの国語教育のために」（全6巻）の『書くことの教育』において、コミュニケーションとしての書くことを提唱するようになったこともその裏付けとなる。

(1) 学習指導容要領改訂の経緯

22年度版では、話すこと聞くことの重視が明示されて国語科カリキュラムに位置づけられた。それは国語科学習指導の範囲として【表1】のように示された。指導方法としては、「参考」として単元学習が示され、以後、実践現場では具体的な学習指導法としての単元学習の実現が積極的に模索されるようになる。26年度版の改訂では、国語科の目標のうち「学習指導の目標」として、【表2】のような4つの言語活動として整理された。4つの言語活動ごとに、主な言語経験例、国語能力表も示された。

【表1】 22年度版 国語科としての指導

(一) 話すこと（聞くことをふくむ）
(二) つづること（作文）
(三) 読むこと（文学をふくむ）
(四) 書くこと（習字をふくむ）
(五) 文法

【表2】 26年度版 国語科学習指導の目標

聞くこと
話すこと
読むこと
書くこと

22年度版では、「話すこと（聞くことをふくむ）」を最初に挙げ、続いて「つづること」を挙げて表現活動の指導を重視している。26年度版になると、「話すこと」に含まれていた「聞くこと」を独立させ最初に挙げて対面コミュニケーション指導を重視している。また、22年度版では、文字言語による表現教育を、「つづること（作文）」と「書くこと」としていたが、26年度版では「書くこと」に統一した。22年度版では、「つづること（作文）」と表記されていたものの各章の表記は「作文」とされ、統一性を欠くところがあったが、26年度

¹⁶⁾ 筆者の問合せに対する倉澤栄吉氏談話（2001年3月3日）

版ではこれも解消された。

これらの改訂によって、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことは独立した言語活動として学習指導の目標となった。表記の順番からは、音声言語による理解と表現の学習が重視されたことがみてとれる。

(2) 西尾実によるコミュニケーションとしての書くことの提唱

戦前に創出された用語「話し言葉」は、生活言語を中心とした音声言語に着目し、そこで展開される相互行為の過程や不可逆性、動的性質を含意する語である。当時は一部有識者によって用いられた語である。このように「話し言葉」は、文字言語教育に偏重してきた国語教育を改善する過程で創出され、話す聞くという対面コミュニケーションに限定された意味内容をもつ。

戦前に、西尾の提唱していた言語活動主義は、国語教育の基盤に話し言葉教育を位置づけようとするものであった。だが、戦時中ということもあって西尾のこの言語教育論は、「それかと言って、国語教授の第一義諦を音声言語に置かうとする一派の主張は肯定し難い。殊に国内の児童を相手とする国語教授は、国語を外国語として教へる日本語教授と自ら趣を異にする。」(『国民学校教則説明要領及解説』1940)として退けられていた。

戦後になると、この状況は一転する。新教育の導入が後押しとなって、用語「話し言葉」は、その意味内容を継承し、文部省関係者を中心に用いられるようになる。西尾の主張もまた同様である。西尾は、新教育のキーワードであるコミュニケーション概念を積極的に咀嚼し、受容に努めた。聞く話す読む書くの4領域を、コミュニケーションのためになされる言語活動として関連的に独立させ、国語教育の体系化を図ろうとした。

26年度版発表の翌年に刊行された『書くことの教育』において、西尾はコミュニケーションとしての書くことを提唱し、この概念を話す聞くの対面コミュニケーションから書くことに拡大して受容するようになる。西尾によるコミュニケーションとしての書くことの提唱には、当時、話題となっていた作文教育か綴り方教育かの問いに対し、新たにコミュニケーションとしての書くことを提示することで、両者を克服して止揚しようとする意図がみられる¹⁷⁾。

ここまですべてを整理すると、第一期では、コミュニケーション教育としての話し言葉教育が推進され、コミュニケーション教育は話し言葉教育と同様の意味で用いられた。第二期になると、コミュニケーション教育は、話し言葉教育だけでなく、書くことの教育を含むものととらえられるようになる。学習指導要領の一連の改訂にみられるように、コミュニケー

¹⁷⁾ 倉澤栄吉「『書くことの教育』解説」『西尾実国語教育全集 第3巻』教育出版、1975。pp.393-404.

ション概念を受容した国語教育体系は、1951（昭和26）年時点で一応の整備がなされたことになる。

4-3 第3期：「通じあい」の発見から言語生活主義展開への時期

新教育が言語生活の視点によって修正される時期（1949年～）になると、言語生活の考え方が定着していくことで、コミュニケーション概念はその一視点として包含されていく。この過程の特徴として、コミュニケーション概念の具現化である話し言葉教育は、言語生活概念に内包するものととらえられるようになり、コミュニケーションの内実を「通じあい」ととらえる視座が出てきたことが挙げられる。

では、言語生活論が形成される過程において、コミュニケーション概念と話し言葉とはどのように整理されていったのだろうか。その手がかりとして、西尾実の『言葉とその文化』の編集過程と1950～51（昭和25～26）年に刀江書院より刊行された国語教育講座編集委員会編『国語教育講座（全6巻）』の編集方針がある。

(1) 「通じあい」の発見—西尾実『言葉とその文化』の編集過程—

西尾実の『言葉とその文化』は、2回の整理がなされている。

一回目は、初版から三年後、1950（昭和25）年の第三刷で、新たな章「言葉の社会的機能」が加えられたことである。この章において西尾は、コミュニケーション概念の訳語として「伝達」では一方的な働きとして受取られてしまうと、「通じあい」という社会的機能ととらえるべきだという明確な主張をしている。そしてコミュニケーションの目的とは「相手にわかり、相手をうなずかせ、相手を動かすこと」にあるとした。同時に、この時期、注目を浴びてきたマス・コミュニケーションにも敷衍して、コミュニケーションと区別する。

二回目は、1961（昭和36）年に刊行した『言語生活の探究』（岩波書店）に、『言葉とその文化』の全内容に一部修正を加え、「ことばとその文化」として収められたことである。コミュニケーションの対訳を「通じあい」とすることが定着したこの時期になると、コミュニケーション概念は、ことばの実態を言語の社会的機能だけでなく、人間的構造を紡ぎ出す機能を備えるものとして捉えられるようになる。「通じあい」は西尾の言語生活論のキーワードであり、この経緯は、桑原が指摘するように、西尾の国語教育論の展開において重要な意味をもつ¹⁸⁾だけでなく、国語教育界へ与えた影響も大きかったと考えられる。

(2) 言語生活の一視点としてのコミュニケーション

—国語教育講座編集委員会編『国語教育講座 第一巻 言語生活』編集方針—

『言葉とその文化』の一回目の整理がなされた翌年、国語教育講座編集委員会編として『国

¹⁸⁾ 桑原隆『言語活動主義・言語生活主義の探究』（東洋館出版、1996.）pp. 283-290.

『言語教育講座』全6巻が「言語生活の実態と問題を分析し、言語生活の構造と発達の面から考察によって、国語教育の範囲と順序の方向を示すことで、国語学習の計画と方法を導き出し、国語教育の実践体系を樹立し、この体系の教育史上の意義や世界の言語教育における位置づけを明らかにすること」を目的として刊行された。この書は、当時のこの時点での国語教育を集大成したものにとらえられる¹⁹⁾。第1巻は『言語生活』（刀江書院、1951年9月5日）で、【表3】に示した三部構成である。

【表3】『言語生活』目次

(1) 言語生活（上）	
(イ) 柳田国男「言語生活」	(ロ) 柳田国男「はなしことば」
(ハ) 西尾実「話しことばの諸形態—対話（電話）・会話・問答・討議・講演—」	(ホ) 山田肇「演劇」
(ニ) 崎山正毅「放送」	(ト) 高木卓「音楽」
(ヘ) 杉山誠「映画」	
(2) 言語生活（中）	
(イ) 時枝誠記「かきことば」	(ロ) 大村浜「手紙・日記・メモ」
(ハ) 林大「起案：記録・報告・論文」	(ニ) 椎橋勇「宣伝・広告と言語・文字」
(ホ) 土岐善麿「新聞」	(ヘ) 福田恆存「文学—創作と鑑賞」
(3) 言語生活（下）	
(イ) 釘本久春「現代の言語生活」	(ロ) 小林淳男「社会集団と言語」
(ハ) 藤原与一「標準語と方言」	(ニ) 柴田武「コミュニケーション」
(ホ) 時枝誠記「国語生活の歴史」	

『言語生活』は、柳田国男による「言語生活」を巻頭に、それと呼応するように下巻に釘本久春による「現代の言語生活」が設けられている国語教育を言語生活の視座からとらえようとする編集意図である。三巻を大別すれば、上巻には音声言語にかかわる内容を、中巻には文字言語に関わる内容を、そして下巻には現代において話題となる内容が置かれている。コミュニケーションは下巻に置かれ、言語生活の一視点という位置づけである。

コミュニケーション史からみた場合、この時期になるとコミュニケーション研究は、ラジオやテレビの普及と共に、清水幾多郎の『ジャーナリズム』（岩波書店、1949.）の刊行を機に、マス・コミュニケーションに、その主流が移っている。コミュニケーションという概念のもつ内実や研究体系が十分に咀嚼、整理されないままに、マス・コミュニケーションにすり替わった時期である²⁰⁾。このような事情は、上巻に放送、映画が、中巻に宣伝・広告、新聞が取り上げられており、本書の編集にも反映されている。マス・コミ研究の主たる研究対象である新聞、テレビを音声言語と文字言語とに分けて編集している点は、読み書き教育と

¹⁹⁾ 執筆者は国語教育関係者（ここには、実践家である大村浜も含まれる）のほかに文学、言語学、国語学（当時）の第一人者57名によってまとめられた。石井庄司によれば、刊行まで西尾実（国立国語研究所所長）を中心に編集会議が何度も開かれた。

²⁰⁾ 「マス・コミュニケーションへの長い道」『思想の科学事典』（1969. 勁草書房.）pp. 328-334.

話し言葉教育に分けてきた国語教育ならではの特質であり、本書の編集の特徴となっている。この意味において、両言語にまたがって機能し、かつ話し言葉教育を優先するコミュニケーション概念は、我国の国語教育の伝統に染じまない概念であったと言えるのである。

本書において「コミュニケーション」は、社会言語学の柴田武が、「一、コミュニケーションとは何か」「二、社会集団とコミュニケーション」「三、言語の地理的分布とコミュニケーション」「四、コミュニケーションの要素と型」「五、コミュニケーションに関する諸問題」の章立てで執筆している。

柴田は、言語を社会的機能として見ることで言語現象の新たな解釈を可能にすることを強調する。ブルムフィールド (L. Bloomfield) を引用してコミュニケーションの要素分類 (話し手、聞き手、手段、内容) と型 (マス・コミュニケーション、シングル・コミュニケーション) を紹介する。またサピア (E. Sapir) を引用してコミュニケーションの手段、内容による型の分類を紹介する。そして、学校における言語教育が目指すコミュニケーション技術は、主としてコミュニケーションの効果を上げる訓練にあると主張する。たとえ共通語が全国に普及し、適当な発声発音、効果的な身振り手振り、効果的手段の能率化が進み、相互的なコミュニケーションが行われようと、話し手と聞き手間に何らかの共通の基盤がない限り効果の完全を期することはできないとも述べる。

柴田のこの見解は、コミュニケーションの要素分析に重心を置くものであり、柳田や西尾がコミュニケーションの実態をとらえることで、その推進を教育において図ろうとしていたのとは異なる。国語教育にコミュニケーション概念を導入することの意義は、西尾の場合、国語学 (当時) や言語学では対象外とされる生きた言語の現実を取り上げるためであった。また学生時代に政治学を学び、民俗学を確立した柳田は、伝統的な我が国の学びの実態や郷土の生活の実態を踏査し再分類するというプラグマティックな手法の成果を国語教育に還元する独自の言語教育論を主張した。両者のコミュニケーション論については、稿を改めて述べる必要があるが、柴田によるコミュニケーションについての執筆は、言語生活の実態よりも言語体系や言語使用研究の体系化に重点を置くものである。国語教育におけるコミュニケーション論を再び言語学に依拠したコミュニケーション研究に体系づけようとするものともみてとれる。

5 まとめ—昭和 20 年代のコミュニケーション概念受容の変遷

国語教育は、昭和 20 年代における占領政策に基づくコミュニケーション概念の導入を、「戦前のコミュニケーション観の自省」→「戦前に創出された『話し言葉』の認知」→「コミュ

ニケーション概念に基づいた教科カリキュラムの構築」→「新しいコミュニケーション観の確立」の4段階の経緯をたどって摂取していった。

昭和20年代のコミュニケーション概念の受容は、次の点で国語教育の在り方に大きな変化をもたらした。

第一に、これまで読むことや書くことの指導である文学教育やつづり方教育が中心であった国語教育に話し言葉教育の重要性をもたらし、話し言葉教育の実践が推進された。その結果、言語の教育としての国語教育の立場を意識させることになった。

第二に、話し言葉教育の推進によって、これまでの雄弁や朗読を中心とした語りのスタイルから対話や討議、話しあいなどを重視した話すスタイルへの意図的な教育的転換が進められた。

第三に、コミュニケーション概念に基づいた二対四面の教科カリキュラムが再編成された。コミュニケーション概念は、話す聞く書く読むの四つの言語行為を関連づけ、国語科カリキュラムを体系化する統合の原理として機能し、学習方法としての、言語活動の必要性や教育的有効性を裏づけるものとなっていった。

第四に、上記の3点によって話し言葉教育に内在する課題もまた見えてきた。具体的には、話すことが言語倫理と密接にかかわること、話し言葉教育と学力観との関係をどうとらえるかといったことが挙げられる。

これらの変化は、占領期という特殊な時期であったこともあり、CIE主導の教育政策を直接の契機として現れた。では、なぜコミュニケーション概念の受容は言語生活概念に吸収されていくような経緯をたどったのだろうか。この疑問を考えるうえで、注目すべきは第二期と第三期の動向である。この時期、コミュニケーション概念は、戦後の国語教育の方向性を示すものとして摂取されることで、学習指導要領に代表されるカリキュラム再編と、その指導方法としての単元学習の模索が進められた。しかし一方で、併行してこれらを見直す以下の視点に対応するかのように言語生活主義に基づく言語教育としての体系化が進められている。CIE主導の教育政策を見直す当時の教育界の動向として特徴的なものに以下が挙げられる。

まず、デューイとその経験主義への批判である。ドイツ教育学の影響が強かった我が国において、戦後は一変してアメリカ教育学、デューイ教育論に移行した。このことへの批判や疑問があった。次に、国語科指導と社会科指導の連続性の問題である。戦後に生まれた社会科の推進は、実際には戦前の生活綴り方の教師たち、すなわち国語教師によって推進されて

いたことが指摘される²¹⁾。このことは、いかなる理念であっても具体的な学びの場面を作り上げる優れた指導方法が欠かせないことを意味する。第三に、26年度版の発表を俟たずに起こった学力低下論による新教育批判がある。国分一太郎は、「実力とか学力というのは、単によみ・かき・計算の力のようなものだけを意味しない。こうわたくしも思っている。けれども、そのような力さえ十分につけてやれないような学校は、ろくな学校ではないし、教育でもない」と述べて新教育を批判した²²⁾。第四に、文学・国語学（当時 以下同じ）や言語学の関連諸科学からの批判である。例えば国語学の時枝誠記は22年度版発表後、国語学の知見から独自の学習指導要領試案を作成して発表している。

これらは教育思想、カリキュラム、学力論、指導方法にかかわる批判・疑問であり、コミュニケーション概念がもつ統合の原理がもたらしたともいえる。国語科カリキュラム、すなわち国語科に話し言葉教育をどのように位置づけるかということは、国語科のみならずカリキュラム全体にかかわり、学力をどうとらえるかといった本質が問われることになる。また、話し言葉教育は、話しあいや討論などを活性化し、それが指導方法のあり方ともなることから、この点においても国語教育だけでなく全教科の指導方法に影響を及ぼすことになる。

言語の教育としての国語教育は、一つに教科国語科としての指導内容にとどまらず、指導方法とも密接に関連し、他教科に影響を与えること、二つに、米国経験主義教育の摂取だけでなく、戦前までの我が国の国語教育の蓄積を継承することも当時の重要な課題であったことがみてとれる。言語生活概念は、これらの批判や課題に対して国語教育の独自性を担保しつつコミュニケーション概念の統合の原理を引き継ぐ概念として案出されたと考えられる。

²¹⁾ 滑川は戦前の生活綴り方における生活指導と新教育の連続性を指摘する。滑川道夫「社会科と生活教育」『生活学校』第2巻第5号。(1947.2.)。高森は戦前の生活綴り方の教師たちが新教育を自らの思想の現実化と受け取り、戦後、まず、社会科の実践に積極的に取り組んだとする。高森邦明『近代国語教育史』鳩の森書房、1979、pp. 373-374。

²²⁾ 国分一太郎「よみ・かき・計算能力の低下」『新教育と学力低下』（原書店、1949）

付記 本稿は十九世紀後半ドイツの小説家ウィルヘルム・ラーベ (Wilhelm Raabe 一八三一―一九一〇) の作品 *Zum Wilden Mann* (一八七四、邦題『薬局ヴィルデマン』) の、第四章から第六章までの翻訳である。第一章から第三章まで翻訳は、本誌第一四五号に掲載済みである。また、残りの第七章から第十六章までについては、逐次本誌に掲載する予定である。底本は以下の通り。Wilhelm Raabe *Sämtliche Werke, Braunschweiger Ausgabe, 11. Bd., 1973, Göttingen, S. 159-256.*

るのを二人で待ちましようよ。おじさんにはどこからか遺産が入ったということにしておけばいいわ。今からすぐにでも彼にそう言つてちょうだい。やむを得ない場合のささやかな嘘ですもの、私の良心は痛まないわ』

お分かりますか、皆さん。これが、いつも座る主のないままそこに置かれた椅子のいわれです。これが三十一年もの間、常に私どものテーブルの席が、一つ空いたままになっていることの理由です。しかしあの友人は、今日まで一度も戻つては来なかつた。こちらにやつて来てからの私の生活は、皆さん方がご存知です。ご承知のように、私は以前二度も倒産したことのあるこの薬局を引き継ぎました。この職業は、私の前任者たちにとっては、この上なく危険なものだったので、私は四苦八苦しながらも、なんとか今日までやり通すことができたのです。しかし皆さんも知つてのとおり——」

「あなたは、ある大変な苦痛を耐え忍ばなければならなかつた、そうでしょう、お兄さん」と、年老いた妹は激しく心を揺り動かされて叫んだ。「もちろんそのことは、誰でも聞いたことがありますわ。でも、本当の事情を知っている人は誰もいなかったのですね」

「本当にそれは痛ましいことでした、ミセス・クリステラー」と牧師は言った。そしてウレボイレは、深いため息をついてつぶやいた。

そんなふうにはコップごと口元から奪われた人は、あなたが最初じゃないでしようからな」

「家は建ちました。しかし婚約者、若い奥さんはその家に住むことはできませんでした。彼女は結婚式に定められた日に亡くなったのです。そして私が、彼女の代わりにかわいそうな兄の家政を取り仕切つてきたのです。一世代に相当する、三十年の長きにわたつて。その間の出来事については、今日この嵐の晩に、もう十分に語り尽くされてきたのですが」

「そして私たちは、平凡な毎日でしたが、今まで幸せに暮らしてきました」ヴァイルデマンの薬剤師は、悲しそうに微笑みながら言つた。「私たちは平安のうちに髪も白くなり、窓の前をざわざわと通り過ぎてゆく嵐でさえ、もう私たちを苦しめることはありません。空いたその椅子は今でも主がいませんが、そこに座るべき人は、きつとどこか他の、遠い異国の地に安らぎを見いだしていることでしょう。望むらくはその乱暴な手紙に書いてあるように、再び人間に戻つた後で。しかし私たち、この地で老いてきた私たちは、お互いに信頼と好意を寄せ合いながら、もう少しこうしてお話を続けましょう。重苦しい気分を、次にお会いする時までお互い持ち越さないためにも」

「そろしましよう」と、二人の男は声を揃えて言った。

「全くそのとおり。しかしフィリップ、飲もうと思つていた水を、

「もちろんそれがいいわ」と、妹も声をあわせた。

るのを見守ってくれるような、しっかりとした家をお建てなさい。さようなら、親切な方たち、——お元気で、ごきげんよう、フィリップ・クリステラー——人間に復帰するための道すがら
血の椅子の愚か者より

一八三一年十月三十日、ハンブルクにて」

牧師は黙って手紙をテーブルに置き、ウレボイレはテーブルをどしんと叩いた。食器が一斉に跳ね上がり、コップは互いにおつかつて、鋭く不気味に鳴り響いた。

「これはたまげた、だつてそうでしょう、そんな『ごきげんよう』なら私だつて大歓迎だ」

「そして当時のあなたは、この書類を手にしてもなお、これらすべてが夢物語だと思つていたのですね」

「何日間も、何週間も私は夢遊病者のようにうろつき回りました。手紙ばかりでなく、お金も手に持つて。しかもそれらはみな、掛けた値なしの国債証書か様々な国の地方債券でした。それらは一夜にして黄色いゴボウの葉っぱに変わることもありませんでしたし、私の鼻先で気味の悪い煙になつて消えてしまつたわけでもないのです。それらは本物で、それぞれ債券として通用しました。銀行家たちは、喜んで換金するなり両替するなりいたしましたしようと申し出ました。しかし私は、それらを手紙と一緒に婚約者のところに持つていき、これらすべてのことにどう対処したものか尋ねました。——さし

あたり私は、親切なおじさんのところへはありがたい御意見を聞きに行かなかつたのです。

ヨハンネも、もちろん最初はある種の驚きを隠しきれませんでした。やがて彼女は、理路整然と落ちて着いて自分の意見を述べました。私はそれに従つたのです。

『私はあなたのお友達と一緒にいるだけで、たまらない気持ちになり、不安を感じさせましたわ。でもそれは、たとえば彼が悪い人だとか、よこしまな人だとかいう恐怖感ではなかつた。私は彼にとても同情していたし、不幸から救つてあげられるのなら、喜んでお手伝いしたいと思つていたの。でもフィリップ、この人はいつも正確に考え抜いていて、自分の言うことやすることをちゃんと知り尽くしている、私はいつも彼からそんな印象を受けていたわ。あの人は、たとえ気分が憂うつな時でも、明晰な賢い頭脳を持つている。だから今回のことがどんなに奇妙なことに思えても、ほとんど狂気の沙汰に見えても、きつと彼は前もつて考え尽くし、準備を整えていたのだわ。きつとそれが、彼の考え出した自分にとつての最善の方法だつたのよ。あなたはお金を受け取つてかまわない、その上にあなたの幸運を築き上げてみてもかまわないと思うわ。私たちはそれを貸付金だと考えて管理しましょう、フィリップ。私たちは、送り主のための椅子を毎日テーブルに用意しましょう、いつも彼のために一番いい席をとつておきましょう。そして毎日毎日、彼が来てくれ

に別れを告げることになりました。それ以来彼とは一度も会っていません。しかし、彼からは一度だけ連絡がありました。——彼は手紙を一通書いてきたのですが、それから三十年、ずっと私は薬局ヴァイルデマンの主としてやってきたのです」

第六章

牧師と森林監督官は、椅子の背にもたれかかって天井を見つめていた。妹は膝の上に手を組み合わせて、兄の方を見上げた。嵐の風がひとしきり吹き渡るのがはっきり聞こえた。一同は長いこと黙りこくっていたが、何かを言わなくてはと思ったのだろう、森林監督官が口を開いた。

「血の椅子あたりでも、今頃はヒューヒュー、ゴーゴーの大荒れだろう」さらに彼は唐突にこう付け加えた。

「三十年とはずいぶん長い時間ですな」

「全くです」と牧師は言った。そして、物思いに沈んだ主人の方に向き直って、こう尋ねた。

「その人物の職業や本当の名前は、まったく見当がつかないのですか」

「皆さん、ちょっと失礼しますよ」フィリップ・クリステラー氏はこう答えて、この晩これを最後に、もう一度調剤室の文書箱を開

けるために部屋を出て行った。彼は大きな筒を携えて戻ってきたのだが、そこにはたった一通の手紙しか入っていないかった。そしていくつかの消印が押し印してあり、五つに砕けた封蠟に覆われた封筒は森林監督官ウレボイレに、手紙の方は牧師シェーンランクに手渡し、自らはゆっくりと腰を下ろした。目の前に手をかざして、パイプにあらためて火をつけると、この書類に友人たちがどんな反応を示すのか、静かに待った。

「内容——国債の証券で九千五百ターラー」と、森林監督官は口ごもった。「無償で——フィリップ・クリステラー氏へ——」

「実に驚きだ」牧師は牧師で、添書にざっと目を通しながらこう叫んだ。「全くこれは風変わりな手紙、謎めいた、ミステリアスな郵便ですな」

「ええいつ、じれったい、早く声を出して読んでくださいよ」森林監督官がこう叫ぶと、牧師は読み上げた。

「人生を最初からやり直そうと心に決めた一人の男が、ここで自分に負わされたこの上なく不愉快な荷物を降ろし、友人に同封した額のお金を贈呈するものとする。この人物はやがて姿をくらまし、何の手がかりも残さないから、探そうとしても無駄であり、そうする必要もない。ああ、フィリップとヨハンネ、これを受け取ってください。どうせこの男が持っているも、それは彼を奈落の底に引きずり落とすだけなのだから。幸福な、元気のいい子供たちが成長す

おうではありませんか』

彼は心の奥底で、恐ろしく手強い敵と格闘しているように見え
ました。やがて彼は相手を打ち負かし、地に横たわった敵の胸を、凱
歌をあげながら足で踏みつけにしたかのようでした。彼は歯をきし
ませて右手をこすりました。まるでそれが濡れていて、乾かさねば
ならないと思っているかのように。最後に彼は私を鋭く、冷ややか
に見つめながら静かに話しました。

『よろしいですか、あなたはどんなにしたって私の役に立つてく
れることはできません。お願いですから、そんな努力をするのはお
やめください。クリステラー、あなたもご存じのように、私は今ま
での人生で自分の考え以外のことを口にしたことはありません。今
日のこの気違い沙汰にしても、それなりに筋は通っているのです。
私はちゃんとした意図をもって、この冷たく硬い石の上に身を投げ
出しました。私の心の血液は、この溝を通って下に流れていきまし
た。かつてカール大帝が招集したフランク人の兵隊たちが、捕虜と
してここで血を流したのと同じように。とにかく私はひとりぼっち
です。そしてそうありたいと願うのです。どうか立ち去ってください
。私に対するあなたのお気持ち、あなたの優しい思いやりはじゅ
うぶんに理解しています。ですから私たちは、お互いに思い出の中
で信頼を抱きあきましょう。——お元気で、フィリップ・クリス
テラー』

その言い方は、ひどく冷徹で不快ですらありました。しかし私と
て人間の心理というものをよく心得ていましたから、この口調が全
く別の心の揺れから溢れ出てきたものだということを知っていまし
た。それゆえ、自分可愛いさから一方的に、この不幸な人に有罪を
宣告することはできませんでした。つまり、慇懃に別れを告げて、
腹を立てつつさつさと家路につくというわけにはいかなかったのだ
す。

『私たちがどうしてもここで永久に別れなければならぬなら、
それも致し方ありません』と私は言いました。『しかし、なぜ私た
ちはこんなかたちで別れなければならないのですか』

相手の目からは涙があふれ出てきました。

『わかっています、わかっています』と彼はすすり泣きました。『あ
なたのおっしゃるとおりです。決してふさわしい別れ方ではありません
せん』

彼は私の首に手を回し、口づけをしましたが、どうしても私から
別れたくない様子でした。

『お元気で、優しい方。私のことは全て忘れてください、私の
この不幸を除いては。私のことはもう振り返らないでください。後
で一度、お便りを差し上げます。フィリップ、お元気で、さような
ら』

こうして私たちは長いこと抱き合っていました。やがては実際

したのと同じように。それは私の仲間、私の謎に満ちた友人、私の植物学研究の同僚ではありませんか。しかもその表情は恐ろしく荒んでおり、苦痛や不安や怒りのためにひどく歪められておりましたが、その有様はとも言葉でお伝えできないくらいです。

ゆっくりと、ほんとうにまるで癲癇の状態から身を起すかのようには立ち上がり、私を呆然と、一言も発せずに見つめました。しかしやがて、場所や時間や状況についての意識が徐々に戻ってきました。

『フィリップ』と彼は気抜けしたように言いました。

『おお、アウグスト』と私は叫びました。

『あなたでしたか、あなたがここで私を見つけてくれたんですか』

『いやほんとうに、一体どうしたんですか、一体何が起きたんですか。喜んでお力になりますよ』

『そんな必要は全くありません。お願いですから、見つけた時の姿のまま私を放り出して、あなたは一人でお帰りください。私はもう、どんな人とも交際する資格のない人間なのです』

彼はこれらのこと全てを、とても理性的に、落ち着いて慎重に話しましたので、なおのこと彼の取り乱しぶりが、痛切に私の胸にこたえました。私が彼の手を握ろうとすると、彼は素早く怒ったように自分の手を引っ込めて、こう叫びました。

『そうじゃない、そうじゃない、もうおしまいなんです、クリス

テラーさん。私は今日この手で、自分の運命に封をしてしまったんです。ですから私は、もうどなたにも友情や尊敬や愛情の印に、この手を差し出すことはできません。どうか私が愚か者になったとは思わないでください。——ああ、愚か者になれたらどんなにいいか。

でも私はそうではないのです。この三日間、私は願いつけていました。私の心をあなた方の世界——あなた方の日常の世界に結び付けている最後の糸が切れてしまえばいいと。原生林でよく、道に迷った哀れな人間が発見されることがあるでしょう。そんなふうに誰かが私を見つけてくれはしないかと。フィリップ、あなたのお顔ほど、今日の私の心の慰めになったものはありません。しかし、あなたに手を差し出すことはどうしてもできないのです。周りを見回してごらんさい、たくさんの町や村が点々と見えるでしょう。しかし、もう今からの私にとっては、あの数知れない人間の住居に近づく道は、完全に閉ざされてしまいました。私は、あなた方とはもうお付き合いすることはできない、私は一人ぼっちなのです。もうこの世には、今の私ほど孤独な人間はいないのです』

『でも、私がここにいますよ。運命がちょうどの時間に私がここに来るように導いてくれたではありませんか。私は、私の婚約者、愛しいあの娘を失ってしまいました。あるいは、無理やり私から取り上げられたと言ってもいいでしょう。私にとっても世界は閉ざされてしまったのです。ですから、お互いに慰め合い、励まし合

した。私の親方が新鮮なままの標本で手に入れたいと願っていた、ちっぽけな、地にへばりついたあの植物は、血の椅子のどんな割れ目にも生えてはいませんでした。それに加えて、前の晩の出来事や、眠れぬ一夜に見た様々な幻想や、朝に出会った三角帽姿のおじさんの姿が、ぼやけたまなこに浮かんできたものですから、これもまた搜索の著しい妨げになりました。

こうして私は、岩の間をあちこちよじ登り、這いずり回りましたが、目指す地衣類は見つかりませんでした。しかし、私は別のものを見つけたのです、つまりは財産を」

「えっ」薬局ヴィルデマンの裏の小部屋に集まった聴衆は、こう叫んだ。

「成果のあがらない仕事でヘトヘトに疲れ果てた私は、とうとう先にお話しした一番高い岩塊、つまりは本来祭壇として使われていたあの岩石群の基底部のところまで登ってきていました。すると突然、多分反対の側から大急ぎで登ってきたのでしよう、頂上に一人の人間が姿を現し、叫び声をあげたのです。私は仰天して思わず後ずさりしました。周りのものすべてと同様、薄い霞のヴェールがかかっていましたが、その姿は、腕を高く突き上げて、両手で髪の毛をかきむしりました。そしてふたたび叫び声を上げながら、最初は膝にくずおれ、次にはすっかり地にひれ伏してしまいました。私は立ち上がり、震えながらすぐそばにあった花崗岩の塊にしがみつき

ましたが、我を取り戻すまでにはしばらく時間がかかりました。ようやくのこと一つ疑問が浮かんできました。あれは何だ、という疑問が。

さよう、あれは一体何だったのでしょうか。そもそも何かでありえたのでしょうか。一人の酔っ払いか。気の狂った人かそれとも癩癩病みか。あるいは生きることに疲れた不幸な人が、この場所を選んでやってきて、今から自分の人生に終止符を打とうとしているのか。こんな思いが、一瞬のうちに次から次へと私の脳裏をかすめていきました。しかし、生贄の崖の頂上からは何の答えも返ってきませんでした。

どうしてもあれが一体何者なのか確かめなくちゃならん、それがお前の義務だぞ、と心の中で声がありました。唇を堅く結び、歯をしっかりと食いしばって、私は勇気を奮い起こしました。万が一に攻撃された場合の用心に、ストックを固く握りしめ、我々の祖先たちの聖なる生贄の場に続く石段を、ゆっくりと注意深く登っていきました。おそろおそろ慎重に、顎を平坦地の上に出してみると、あの男がそこに倒れていました。——不幸な男はピクリとも動かず、顔を石に押し付けたまま長々と横たわっていました。私は大急ぎで駆け登って、そばに歩み寄り、男の肩をつかんで話しかけました。間もなく男は顔をあげ、私をじっと見つめました。

私はあやうく叫び声をあげそうになりました。この男がさきほど

う犬がやってきて、死んだあなたをみつければ盛んに吠え立てると
いうわけです」

「黙って先を聞きましよう」と牧師は言い、一同は再び耳をかた
むけた。

「勝手の知った土地ではめつたに起きないような事を、私はあの
とき経験しなければなりませんでした。つまり私は一度ならず道に
迷い、その度ごとにやっこの思いで本道を見つけ出すというありさ
まだつたのです。人生に対する混乱した思いと、途方に暮れた思い
が、私の内と同様、外にもあったという事なのでしょう。私の行く
べき小道は、さらに上へ上へと続いていましたが、しかし幸いにも
私は、時計の下げ紐にコンパスをぶら下げていました。こうして私
はブナの林を曲がりくねって突き進み、縦の森林帯に入りました。
風変わりな太古の花崗岩が崩れ落ちてきて、本当に不気味な地形を
なしている急斜面を、さらに斜めに登っていきました。そして木の
全く生えていない平坦地、やはりごっこつした、奇怪に重なりあつ
た岩塊に覆われた平坦地を過ぎるころになると、霧の中からやつと
太陽の光が顔をのぞかせました。正午の太陽は、秋晴れにふさわし
く光り輝いていました。私は自分が登ってきた道や谷間を振り返り
ながら一息つきました。霧は一日じゅう谷間に立ちこめていました
が、私が休息を終えてさらに先に歩き出した時には、再び音もなく
私の背後に忍びよってきました。そして、今回親方が私を送り出し

たあの有名な場所が目の前に見えだすころになると、再び私は霧に
追いつかれてしまいました。しかし、それはもう低地に立ちこめる
濃密なもやではなく、すべてを魔法の布で包み込んでしまうような、
軽やかな霞でしかありませんでした。道を曲がったところで、表現
しようもないほどグロテスクに割れ目の入った岩盤の塊、——つ
まり血の椅子——が姿をあらわしました。私は縦の木の茂みを抜
け出して、六十フィートから八十フィートもあるその平坦な頂上を
見上げました。私は短い草の生えた地面を、ゆつくりと、四苦八苦
しながら登っていきました。そして、岩盤のたもとで一息ついて、
目指す希少な地衣類を探すための力を蓄えたのです。

ウレボイレさん、あなたなら血の椅子をご存知でしょう。それは
幾つかの石の積み木でできた迷路のようなもので、山頂の平坦地の
かなりの部分を占めています。岩石群の多くには不思議な伝説めい
た名前が付いており、一番高いところへは、磨り減った石の階段で
よじ登る事ができます。そして岩盤全体は、この一番高い岩石群の
名前を使って命名されているのです。我々の民族の太古の異教時代
に、生贄を捧げる祭壇として使われたためにあの名がついたらしい
のですが、それもさもありなんと思わざるを得ません。

気分はとても憂鬱だったにもかかわらず、何よりもまず私は、持
参してきた弁当を旺盛な食欲でたいらげました。それから与えられ
た課題に取り組んだのですが、なかなか容易にははかどりませんで

イギリスの詩人シェークスピアが、自分の戯曲の登場人物に言わせているセリフです。私はこの詩人が好きで、いつも読んでいます。翻訳を一冊持っていて、その中にはいろんな箇所アンダーラインが引いてあります。あの時には『荊棘』と『この世』のセリフが心にしっくりとしましたので、山への道すがらこのセリフを幾度となく反芻しました。実際、いまや私の四方見渡す限りには、荊棘の藪がびっしりと生い茂っていたも同然でした。そもそもこの世の中というものは、浅ましくもあれば、大抵は涙に満ちあふれているのだということを、足下の大地と頭上の天空が私に証明してくれたのでした。

谷間を過ぎてしまうと、そこにとどまっていた霧からは抜け出すことができず。しかし、私の胸に淀んだ濁りは、日の光にあふれた頂上までつきまとってきました。私は歩みを速めました。何度か冷たい沢の水にハンカチを浸して、熱くなった徹夜あけの額と、熱を帯びたこめかみにそれを押し付けました。私はまわりを見回すことはしませんでした。美しい風景や、荘厳な崇高な眺めが、不幸せな、あるいは悩みや不安に打ちひしがれた人間にとっては、救いの糧とも治癒の糧ともなるとはよく言われます。しかしそれは、何かの思い違いか、そうでなければ真つ赤な嘘です。そんなことは絶対ありません。

ほんとはその逆で、苦悩に満ちた、苦痛を負わされた人間にとつ

ては、陽の光に照らし出された山の頂上からの遙かな眺め、様々な魅力的な色合いに輝きわたる、大地の遙かな眺めほど厭わしく思えるものはありません。それは本当に不幸なこと、空恐ろしいことですらあるのですが、しかし実際にそのとおりなのです。気分が優れない時の嵐や雨はまだしも我慢ができます。しかし自然の美しさは、自分に対する嘲りや侮辱と考えてしまい、天地創造の七日間をのり始めさえするのです」

牧師はここで気遣わしげに頭を振った。ドレット・クリステラー嬢は確かにうなずきはしたが、やはりひどく気遣わしげな不安げな様子だった。しかし森林監督官ウレボイレは、パイプでテーブルをたたきながら叫んだ。

「まさにそのとおり、確かに一理ありますな。よくよく考えてみれば、ますます思い当たる節があります。弱りきった奴ら、つまりは昔の鉄砲傷や病気で衰弱した獣のことですが、奴らだって天地創造の壮麗さにはもう一切かわりを持つとはしません。健康な時にはどんなにそれに親しみを感じ、どんなにそこから恵を受けていようともです。動物を相手にしている人なら誰だって、大地や水や光や空気に関するあらゆる事柄で、奴らと人間との間にほとんど違いがないってことを知っています。その時のあなたはまさしく手負いの獣だったわけですな、クリステラー。おじさんの撃った弾は見事にあなたに命中した。やがて他の獣の場合と同じように、運命とい

た。それに私は、かわいそうな愛しいヨハンネも、あの晩泣き明かしたことを知っていました。朝の五時頃、やはり不眠症に悩まされていた私の親方が、ランプを手に私の部屋の入り口にやってきました。彼は自分の新たな希望を語り、その日の指示を私に与えたのですが、ふぬけのようになっていた私は、彼の言っていることがほとんど理解できませんでした。ようやくのことで私が事情を飲み込むと、彼は包帯を巻いた頭を振りながら、いまいませいげに出て行きました。そして、ドアの敷居のところで聞こえよがしに咄くのが聞こえました。

『あの男、またしてもお頭がどうにかなりおったわい』

『あの娘のために誠実で心のこもった手紙を一通書いてもらえまいか。必要最小限のことに少しだけ色をつけてくれればよろしい。私がそれを手渡ししましょう。もちろん私も率直に私の考えを言ってみるつもりです。悲しみは時が解決してくれます。あなたご自身もこの上なく惨めな気持ちになるでしょうが、それも時間の経過に委ねるのが一番です。そうすればきっと全てがうまくいくでしょう』

おじさんは、前の晩のありがたいお説教の終わりにこう忠告してくれました。そんな時にまともでいると言うほうが、無理な話でしょう。こんな事情があったものですから、薬局『ダビデ王』とあのおじさんと私の婚約者の家から三マイル離れた所に咲き誇った苔の花は、私にとって本当にこの世でただ一つの救いでした。とにかくそ

こまで歩いて行って、苔を探さなければならなかったわけですから。私と哀れなあの娘にとって、少なくとも一日の時間稼ぎができたわけです。人間というものは、苦しい時にはたったの一日、たったの一時間、たったの一分間にすらしがみつこうとするものです。どんな形であれ、誰もが一度は経験することではあります。

当然ながら、私はヨハンネの窓の下をこっそり通り過ぎてみました。あの娘の姿は見えませんが、おじさんの姿は目にとまりました。彼はパイプをくわえながら窓の向こう側に立って、寒暖計を眺めている様子でした。彼自身の体温は昨日の夜から変わっていないらしく、慇懃にナイトキャップを取って、人差し指を立てて見せました。この身振りはこう解釈する以外にありませんでした。お忘れになってはいけませんよ、あなた、私が昨日申し上げたことを。私は決して譲るつもりはありませんし、われわれ全員にとって何が良いのかも知っているつもりです。——私とてだてに年をとっちゃいませんし、あなた方のような、無邪気な、若い、考えなしの青年よりは、少しばかり詳しく世間でものを知っていますので。——私のほうも、いままでどんな人間に対してもしたことがないほど慇懃に、恭しく挨拶を返しました。こうして私は、秋の朝特有の灰色のもやの中を、ぼんやりとため息をつきながら、重い足取りで歩いていきました。

『ああ、このせち辛い世の中は、なんと荆棘の多きこと』とは、

は言った。

「いやはや、なんとという晩でしょうな」と牧師は言った。「まったく、この嵐の音ときたら。いや、お続けください、どうぞ先をお話しください」

実際のところ、ほんとうにすごい嵐の夜だった。夜が深まるにつれて、北からの風がよいよ激しく山脈に打ちつけて、ヴィルデマンの薬局もまともにその余波をこうむった。

「あの日は今日のような天気ではありませんでした」フィリップ氏は普段と変わらぬ調子で、冷静に落ち着き払ってこう言った。一つの体験を長きにわたってじっくりと考え抜いてきた人のするよう。しかし、彼の話は再び中断された。お客がグロッシエン分の苦味塩を買いにやってくる、店の主人に一五分ほど使用目的を説明したのである。——どっちにしたって、そんなことは明日でもよからうと、不満げに呟いたのはウレボイレである。しかし妹は、この小休止を利用して、テーブル上の陶磁の深皿をあらためて一杯にした。そしていよいよ一同は、薬剤師クリステラーが十月十五日のあの日に体験したことを聞く段取りが整った。

「朝の九時頃、朝食をカバンに入れ、胸乱を背に負って、私は親方から命じられた仕事を果たすべく店を出発しました。ちなみに店の屋号は『ダビデ王』といいました。風の静かな、濃い霧の立ち込めた日でしたが、私はひどく打ちひしがれた、落ち込んだ気分でした。

た。たとえ願ってもない上天気だったとしても、私は憂鬱に歩を進めざるを得なかったとは思いますが、もちろんそれには訳がありました。前の晩私は、ヨハンネのおじさんから、ほんのひと時、家を訪ねてはくれまいかと請われたのです。訪ねてみると、おじさんのもてなしは二時間にも及びました。二時間の間、彼は私に切々と言い聞かせました。そろそろあなたも分別というものを持って、自分の将来設計をはっきりさせたらどうか、と言うのです。そして彼の姪を不幸にすることだけはまかりならんとも言いました。手短かに申しましょう、私の婚約者との約束はなかったことにして、そのかわり彼の、つまりはおじさんの変わらぬ友情と好意を信じてほしいというのです。あの人の言うことは何もかも筋が通っていました。しかも彼の話ぶりには、思慮深さばかりでなく人柄の良さにもじみ出ていました。みじんも高ぶることもなく、怒りをあらわにするでもなく、彼は自分の、そして世間の意見というものを語りました。なにも私に不満な点があるというのではない、それどころか、彼にとつて私は本当に好ましくもあり親しみも感じている、だけどね、というわけです。私はどうかこうにか家にとどり着きました。あるいはよろめき歩いたといったほうが正しいかもしれません。そのままベッドの前の椅子に座り、両手で頭を抱えながら夜を明かしました。あの思慮深い説得のおかげで、全てに意気消沈し、じっくり思いをめぐらすことも、筋道を立てて考えることもできませんでし

話することにしましょう」

第五章

薬局ヴィルデマンの、絵がたくさん飾られた奥の小部屋に会した一同は、テーブルに身を乗り出した。この親しい友人がかなりの話し上手であることは、彼らも知っていた。しかし、彼が今日ほどの才能を発揮したことはなかった。森林監督官ウレボイレのパイプの火は消えてしまい、妹のドレッテは兄の手をしっかりと握り締めていた。土地の牧師は、嗅ぎ煙草入れでテーブルを静かに叩きながら言った。

「やつの事で、というわけですな。柔らかいクッションの肘掛け椅子、なんの変哲もないこんな家具が、三十年ものあいだ人を焦らし続けることができるなんて、誰も信じちゃくれないでしょう。しかしクリステラー、実際にこの椅子は、私を三十年も前から焦らし続けてきたんですよ」

気持ち張りが詰めていたにもかかわらず、一同は声を出して笑った。フィリップ氏も一緒に笑い、そして物語を続けた。

「夏は去り、秋がやってきました。九月になり、十月になり、とうとうこの年も自然の華やかさや豊かさが衰え始める時期になったのです。私の親方は、彼岸の嵐が訪れるこの時期になると、きまっ

て顔面の痛みに悩まされたものですから、以前に増して私を調剤室に縛りつけざるを得なくなりました。彼が再び私を野に送り出してくれたのは、かれこれひと月ばかり経ってからのことです。十月の十五日に、私は三マイルほど離れた『血の椅子』と呼ば慣わされている有名な岩盤地帯に行くように命じられました。この時期に、その場所だけで開花する苔があったのです。

その時は確かに私は血の椅子に登りました。しかしその後は一度も行ったことはありません。私はその荒涼とした場所にある種の恐れのおかけで、私はこうしてこの家を手に入れ、今のような生活を送ることができなくなりました。謎は未だに解き明かされないままです。親愛なる皆さんが、後でこの謎に挑んで、ご自分の頭のキレをお試しになるのも一興でしょう。私はいえ、まるまる一世代の間、余儀なくその謎解きに思い煩わされたあげく、すっかりそれも諦めてしまいました。ここにお集まりのどなたかが、最後に正しい答えを見つけようと見つけまいと、今の私にはどうでもよいことです。しかしあの日、私にとって非常に重要な意味を持つ十月十五日の出来事については、今から細大漏らさず、できる限り詳しくお話しますが、皆さんにもきくとそれでご満足いただけましょう」

「うさぎは後ろ足で立って聞き耳をたてるといいますが、どんなうさぎだって今の私ほど物見高くはないでしょう」と、森林監督官

も何かお役に立てることがあるのではないですか、と。私は、ぜひ勇気を奮い起こして、あなたの心を苦しめていることを全て私に打ち明けてくださいと、心の底から彼に訴えました。私の血と心は、あなたをお助けするために脈打っているようなものなのです、とも言いました。人は誰でも、このように激しく心を揺り動かされた場合には、まして自分が愛し、評価し、尊敬している相手に対してならば、真心を込めて真剣に話すべきことがあるのですが、当然私もそうしたことを付け加えました。もちろん彼はそれを笑い飛ばそうとし、きっぱりと私に言いました。自分は肉体的にも精神的にも全く健康であり、口に出して言えないような何か恥すべき行いが、自分の良心を苦しめているわけでもない。しかし、持って生まれた気質は自分でも如何ともし難く、言ってみればそれは愉快ならざる性質のもので、それが他の人の目に止まるのではないかと。さらに彼は続けました。自分は祖先から不幸な血を受け継いでおり、平凡に暮らす毎日が、一日たりとも腹立たしい、不愉快な終わり方をしていないようにするには、常にその血を力づくで、注意深く押さえ込まねばならないのは確かだと。彼は彼の言うところの私の思いやり心に心から感謝しました。彼の目には涙が浮かんでいるように見えました。しかしそれは私の思い違いだったかもしれせん。ローマの貨幣に鑄出されたような彼の顔は、とてもあの時のような愁嘆場にふさわしい表情をすることはできなかつたでしょうから」

「その人はどんな面構えだったのでですか、クリステラー」と、森林監督官ウレボイレは尋ねた。

「ドゥカーテン金貨に刻印された、皇帝ネロ、カラカラ、カリグラミみたいな顔でしょう」と牧師は解説した。ヴィルデマンの薬剤師はかぶりを振ったが、もうその答えに付け足す必要はないと考えたのだから、さらに話を続けた。

「彼は私の婚約者が大変気に入りました。彼は彼女の容貌ばかりでなく、一緒にいたわずかな間に彼女が口にしたこと全てを、ことさらに褒めちぎったのです。彼女は本当に素敵な、健気な少女——実際に彼女はそれとおりだったので——だと言ひ、ため息交じりに、あの娘のような妹が自分にもいればとさ言ひました。この時とばかりに私は、巧まぬ風を装ってもう一度彼の家族について尋ねました。しかし彼は、自分は天涯孤独の身の上で、父と母はすでに亡くなり、兄弟姉妹は最初からいなかったと言ひ張るばかりです。そして話題の向きを変えようとするかのように、今度は彼の方が、私の婚礼の日取りはもう決まったのかと聞きました。

それがどんなことになっているかを彼に話すと、彼はため息をつきながらこう言ひました。『ああ、フィリップ、僕があなを援助できれば、今日にでも結婚させてあげられるんです——どうやって彼が私たちを援助し、そこにある名誉の椅子が、どうして三十年來空席のまま彼を待ち続けているかを、これからいよいよお

使うために、彼は山の中に一軒の宿を取っていましたが、そこでも彼はただアウグストさんと呼ばれているだけでした。彼は低地の大学町からやってきた学生で、『他の学生さんたちと同じように』、『植物を研究しに』山へやって来たというのです」

「まるで足跡を残さない獲物みたいですね」と森林監督官が言うと、牧師もそれに同意した。

「私はそんな事は気にも留めず」と、クリステラー氏は話し続けた。「今までどおりの交際を続けました。山で彼に会うようになって、五回目か六回目くらいのことでした。偶然にも彼は、私の婚約者とも知り合うようになったのです。ある晴れた日曜日のこと、親類や知人たちと彼女は森にハイキングに出かけました。ヨハンネと私がにぎやかな一行から離れて歩いてみると、草の生い茂った小道で、私の謎に満ちた友人にばったり出くわしたのです。私たち二人は手に手を取って、彼自身はいつものように一人で歩いていただけですが、彼の顔はいつになく深刻そうに曇っていました。彼が私たち二人を目に留めたときには、もちろん彼の表情は明るく輝きましたが、それも長くは続きませんでした。彼は私たちの前で、努めて明るく、快活そうに振舞おうとはしましたが、なかなかうまくはいきませんでした。彼はとても親しげに、やさしく私の恋人に話しかけてはくれました。しかし、私たちと一緒に歩けば歩くほど、私たちが元氣よく話しかければ話しかけるほど、彼はますます黙りが

ちになりました。そしてお供の一行が、歌をうたい、笑い声を上げ、歓声を上げながら私たちに落ち合おうと、彼は突然再びどこかに行ってしまう。愉快に過ごしたあの日に、もう二度と彼の姿を見かけることはできなかつたのです。『ねえフィリップ、あの人は以前に大変な不幸に見舞われたか、今でもそれにつきまとわれているかのどちらかよ』と、あとでヨハンネは言いました。『フィリップ、あの男の人を見てみると、私はたまらなくつらい気持ちになるの。あなたは彼のそばにいて、不安になったり悲しくなったりしたこと、は、いままで一度もなかつたの』

女の人たちは、こんな問題になると非常に敏感な洞察力や感覚を持つていますから、私たち男がはつきり意識せずに感じていた多くのことを分からせてくれることがよくあります。私は一瞬たじろぎました。そういえば思い当たる節があります。確かに私の無口な友人は、今まで何度か私をたまらない気持ちにさせたことがありました。彼と一緒にいるときには、もちろん不安を感じたことなどはなかつたのです。場合によつたらこれからも時々、不安な気持ちに襲われるかもしれないということを、あの陽気な遠足の帰り道、私ははつきり意識しました。その日以来、私は友人アウグストを、以前に増して注意深く見守るようになりました。そしてあるとき一度、持てるかぎりの説得力と弁舌の才を駆使して彼に尋ねたことがあります。どこか身体の具合でも悪いのですか、ひよつとしたら、私に

おうとはしませんでした。私たちが交際していた間じゅう、彼は会話の主導権を専ら私に任せたのです。それに、あなた方もご存知のように、私自身が常にぎやかな、おしゃべりなおつきあいを好むたちで、時には少しばかり度を過ぎすこともありましたが――

ここで妹は、ひとこと言わずにはいられなかったのだから、少しばかり不満げに言った。

「兄さんのおしゃべりについては、村の人たちがもう嫌というほど話の種にしていますわ」

牧師は微笑んだ。しかし森林監督官は、大声で笑いながらこう言った。

「ドレットさん、まさにそのとおり。彼の性格が待ち伏せ猟に全然適していないことは、私がもう二度も経験済みですからね。今度三度目の狩猟許可を求められても、ご一緒するのは御免被りたいもんです。きつねがこつちにやつて来たら、パーンと銃で撃つ前に一席きつねに演説をする、きつねとそんなところがおちでしようから。しかしあなたのお兄さんは、逆に駆り立てる猟にはもってこいでしょ。ウサギを追い立てる鳴子をやつてもずいぶん重宝するにちがいない」

「あなたのご意見には心から感謝申し上げますわ、ウレボイレさん」と、老嬢は皮肉混じりに、ぞんざいに言った。ここでフィリップ・クリステラー氏は笑みを浮かべると、中断はこれぐらいにして

先を続けた。

「もちろんそうする以外に仕方がなかったのですが、私は素直に自分の性格に従いました。私自身の人となり、私の人生、私の置かれた立場などについて、重要と思われることは全て、私は徐々にこの新しい知り合いに話していききました。しばらくすると、彼は私が生まれてからこのかたの出来事を、全て知り尽くすことになったのです。それに対して、私が彼から知り得たことは極々わずか、ほとんど皆無に等しいものでした。それでも彼は、私にとつては気のあつた話し相手でした。そして会うたびごとにますますその感は深まっていたのです。私たちはやがて、落ち合う場所を前もって約束するようになり、おそらくは気ままな身の上だったのでしよう、彼は必ず約束の場所に姿を現しました。何度か彼は、私の町がある緩やかな丘陵地帯のそばまで私についてきたことがありました。しかし、一緒に町までおりにみないかと私が誘うと、理由は言わずにいつもきつぱりと断りました。町の北の方の森のはずれのところ、決まっています。彼は別れを告げ、私の手を握って帰っていくのです。何度か彼のことを人に問い合わせてみたのですが、それで明らかになったことはといえば、町やその周辺に住む人々で、彼の身の上を知っている者は、一人もいないということだけでした。彼の姿を見かけたり、その風貌や仕事に目を留めた人はもちろんたくさんいました。しかし、それ以上のことは誰も教えてくれませんでした。馬や軽馬車を

てくれました。

しかしどんな薬を飲んでも、もとの健康体に戻ることはできませんでした。ヒポコンデリーと快活な気分との間を行ったり来たりしながら、それでも私は野を歩き回りました。そしてとうとう、私を助けてくれたあの男に出会ったのです。

親愛なるみなさん、私はちょうどその年の夏にあの男に出会いました。本当に風変わりな、謎に満ちた、ヨハンネに言わせれば、本来不気味とも思える出会いでした。私が今こうして薬局ヴァイルデマンの主人でいられるのも、あの巡り合わせのおかげなのです。そしてあの出会いは、三十年以上経った今になっても相変わらず解き明かされぬ謎、私の人生の神秘のままなのです」

「聞かせてください、ぜひ聞かせてください」牧師は、息もつかせず物語のやま場を話し続ける語り手を、張りつめすぎた緊張感のあまり思わずさえぎって、息せききってこう叫んだ。フィリップ・クリステラー氏は、物語を続ける前に、この機会を使って一息ついた。

しかし彼は実際のところ、心に秘めた自分の人生の秘密を打ち明けたがっているようにさえ見えた。彼は続けて話した。

「なんのことはない、私は一人の山歩きの同行者、いくなれば、若くて身なりのきちんとした一人の仕事仲間を見つけたのです。彼もやはり植物学を研究していました。私よりも少しばかり若いよう

に見えましたが、やがてひとかどの自然愛好家、ひとかどの植物通であることが明らかになりました。人を虜にしてやまないこの学問に対する、彼の理解力に満ちた探究心は、私の親方のそれをすら凌ぎました。彼はあの地方出身ではありませんでしたし、一度として彼から本当の名前を聞いたこともありませんでした。私たちはアウグストさんと呼んでいましたが、後にはただアウグストとだけ呼ぶようになりました。いずれにしてもそれは、彼の本当の名字ではなかったのです。

われわれ二人が七月のある日の暑い午後、まわりには花崗岩の塊がゴロゴロし、人の背丈ほどもあるジキタリスの茂みの生えた山の斜面、木の切り倒された、灼けつくような山の斜面で出くわしたのは全く偶然のことでした。私たちはすぐに同業者として親しく打ち解けましたが、その前にめいめいが丁寧に挨拶をかわし、お互いをまじまじと観察しあつたことはいまでもありません。この見知らぬ人物が、私を見てどう思ったかは分かりません。しかし彼の姿は、今になつてもなおあの当時のまま明瞭に、はっきりと私のまぶたに焼き付いています。すでに申しましたように、彼は私とほぼ同年代の若者で、背は高く、体格も立派でした。髪の毛は黒で、真面目そうな精悍な顔は少しばかり黄色がかっていましたが、けつして病的な色ではありませんでした。彼の頭は少しうなだれ気味で、声は心地よい響きを持っていました。しかし彼は、めつたにその美声を使

たのです。さて、私の親方はその後、本草学を習得させるべく実地に私を野に送り出しました。彼自身は家にとどまり、実務を司るかたわら、所有する植物学の本を読んで時を過ごしました。これらの本は、それ自身非常に珍しいものだったのですが、彼が亡くなった後にはゴミ同然に捨てられてしまいました。私は彼のかわりに、ほとんど季節を問わず野山を走り回らねばなりません。なぜなら、彼は蘚苔類についても造詣が深かったからです。しかし、それ以外の植物が目もあやに咲き誇る数ヶ月がくると、私はほとんど毎日、何マイルも離れた野や山に出かけては珍しい植物を探しまわりました。その当時の彼は、そうやって私が集めた植物を自分のものにおき、詳しく研究することにし心血を注ぐことができなかつたのです。——本当にそれは素晴らしい日々でした。あれからもう何十年も経ちますが、あの時ほど幸福な毎日が次から次へとめぐってくるのを、私は未だかつて経験したことはありません。おまけにすでにお話ししたとおり、高い山、日のあたる斜面、あるいはまた薄暗い谷間であろうとも、私はじきに婚約者の名前と面影を胸に抱いて歩き回るようになりました。ですから、あの当時大地に降りそそいだ日の光は、今になっても何ものにも比べ難いほど貴重なものに見えるのです。だからといって私が、日の光に耀きわたった山の上で有頂天のあまりとんぼ返りをしていたというつもりはありません。むしろその逆だったのです。人生の歓喜の中には、いつも一筋

の不安が紛れ込んでいました。慣れ親しんだ森の中から、せせこましいあの小さな町に、人の数は少ないとはいえ、ごった返すあの雑踏と口やかましい混乱の中に再び戻ってきたときには、しばしばとても不安な気持ちになるのです」

「それは誰だってそうですよ。特に野に出て仕事をする機会の多い人はね。私だってそうですよ」と、森林監督官は言った。

「しかしまだしばらくは」と、語り手は話の腰を折られたの意に介する様子もなく話し続けた。「まだしばらくの間は、私にとつて野山を駆け回るその瞬間こそが全てでした。ところが徐々に、徐々にではありましたが、ふもとの町での将来の生活、やっかいな、不安に満ちた、霧に閉ざされた将来の問題が心を領しはじめたのです。

お前と、お前の愛するあの娘は、一体これから先どうやって暮らしていっていいのか。

あの町に住んで二年目に、ひどい憂鬱症に襲われたことについては、すでにお話ししました。陰気な、不安な思いは、最初はいつも町の古い城壁の中に留まって、郊外の遠出にまでついてくることはありませんでした。しかしやがてそれは、人里離れた郊外にまでつきまといはじめ、どんどん私を追いかけてくるのです。とうとう三度目の春には、得体の知れぬ指先が行く先々で私を脅かすようになりました。親方は私が恐ろしくやせてきたと言ひ、私の身を案じて、在庫部屋にあるいろいろな神経に効く葉や健胃薬を飲むように勧め

ぐらいの気持ちで、薬局の調剤助手の生活に入りました。それから五年か六年のあいだ、薬の甘さ、酸っぱさを嗅ぎ分けたり、伝染病に取り組んだり、真夜中にたたき起されたり、医者之家に使い走りしたり、そんなこんなで各地を転々としました。そしてとうとう私は、愛するヨハンネと巡り会った〇〇〇町にやってきたのです。ですからウレボイレさん、私が本当にひとかどのことをやり遂げたのは、つまり私の人生の中で唯一充実した、幸福な日々を送ることができたのは、他ならぬあの町でのことだったのです」

「それについてもお祝い申しあげます」と森林監督官は口ごもった。

「こうして私は、人生のうちでも幸福な時期をむかえました。まるまる一年の間ではありましたが、やることなすこと歯車が噛み合いはじめたのです。

あらゆる点で私はついていました。当時の親方は一風変わった偏屈者の老人でしたが、この人物についてはもう少し詳しくお話ししなければなりません。私との関係からしても、彼自身の人柄からしても、あらゆる意味で彼はここでお話しするに値する人物だからです。彼はもちろん思いやりを持った薬剤師ではありませんが、幾分か気違いじみた熱狂者、高尚な学問、植物学の熱狂者でした。そして実際のところ、著名な植物学者だったのです。事情が許すかぎり、第一助手や見習いに調剤室を任せ、彼自身は森や野原で自分の好き

な研究に没頭していました。しかし、私が彼の家に雇われたときには事情が変わりはじめました。齢六十歳を越えてしだいに彼の目は弱りはじめ、背中がまがらなくなってきたのです。山や谷間で見つけた植物にかがみ込んだはいいものの、呻き声を上げ、いまいまげに腰に手を当てなければ立ち上がれないような有様でした。私が彼の門を叩いたとき、彼は私に植物学の試験を行いました。この上なく難しい試験でしたが、幸いにも結果は上々でした。この試験をきっかけにして、彼のもとでの私の立場は上向き始めました。試験結果に満足してくれたのでしよう、その後彼は私にシュテーパーの書いたカール・リンネの伝記を一冊くれました。さらに彼は、我々の『女神』に身を捧げた人々について語り、一七世紀最大の植物学の天才、シャルル・ド・レクリューズ、ラテン名カロルス・クルシウスをお手本にするよう勧めました。ネーデルラントのアラス出身のこの人物は、植物学に携わるうちに二四歳で水腫症にかかり、三九歳のときには、スペインで馬ごと地面に叩き付けられて腕の骨を折り、さらに傷が癒えた直後には右足の太ももを骨折したのです。五五歳の時にはウィーンで左足の骨を折り、八年後には右の腰の骨を外しました。ひき続き彼は杖をたよりに歩き回り、さらにヘルニアと結石痛の病を得たにもかかわらず、あの驚嘆すべき書物、『稀観植物の自然史』を書き上げたのです。自らが生きて活動した暗黒の世紀から、彼は栄光に満ちた光明として、後の時代を照らし出し

ヴィルヘルム・ラーベ作

薬局 ヴィルデマン (二)

門 間 俊 明 訳

第 四 章

「親愛なる友人であり隣人でもある皆さん」森林監督官ウレボイレの意見によれば、この村でひとかどの事をやり遂げた人物、つまり少なからぬ財を成した人物はこう語りだした。「実は皆さんが今日こちらにいらっしやる前、私は昔の思い出にひかされて、調剤室にある文書箱を二度ばかり開いては、長い間に積もったほこりを吹き落としたのでした。そこから一揃いの証拠書類を取り出して、ここで皆さんにご披露しようと思います。私の運命は摩訶不思議な謎に満ちているにもかかわらず、この書類の上に、分かりやすく、きちんと記されています。たとえば私が日記のようなものをつけていたというわけではありません。それはまぎれもない公式の文書で、皆さんには後で手ずからご確認いただくことになりました。」

私の父は、私に数千ターラーの財産を遺してくれました。しかし

私の後見人は、親切なお人好しではありましたが、すこぶる軽率で、大ざっぱな性格の人でした。彼は私の財産をいい加減に運用したのです。私が自分でお金を使ってもいい年齢に達したときには、お金はあらかた消え去ってしまいました。後見人は泣きながら私に打ち明けてくれました。一体どこへ行ってしまったのか、自分にも覚えがないというのです。気休めにでもなると思ったのでしょうか、彼がさらに付け加えたところによれば、彼自身の財産状態も同じようなものだということでした。かなりの高齢だったこの人物には、やはりもう若いとは言えない三人の未婚の娘がおり、三人とも私の仲の良い友達でした。私に残されたことはといえば、彼らと一緒に涙を流し、お互いの愛情と思いやりで過酷な現実を少しでも耐え易いものにするということだけでした。親切な三人の娘たちは、私の衣類やその他必要な品々を取りそろえ、行李に詰めてくれました。こうして私は見習い期間を終えて、先行きどう転んでも万年徒弟で終わるだろう

平成 27 年度 東北学院大学学術研究会評議員名簿

会 長	松本 宣郎
評 議 員 長	小宮 友根
編 集 委 員 長	小宮 友根
評 議 員	
文 学 部	[英] 植松 靖夫 (編集)
	[総] 佐々木勝彦 (編集)
	[歴] 熊谷 公男 (会計)
経 済 学 部	[経] 舟島 義人 (編集)
	[経] 白鳥 圭志 (編集)
	[共] 小宮 友根 (評議員長・編集委員長)
経 営 学 部	矢口 義教 (編集)
	小池 和彰 (会計)
	折橋 伸哉 (編集)
法 学 部	岡田 康夫 (庶務)
	白井 培嗣 (編集)
	大窪 誠 (編集)
教 養 学 部	[人] 前田 明伸 (編集)
	[言] 伊藤 春樹 (庶務)
	[情] 上之郷高志 (編集)
	[地] 柳井 雅也 (編集)

東北学院大学教養学部論集 第 173 号

2016 年 3 月 2 日 印刷 (非売品)
2016 年 3 月 7 日 発行

編集兼発行人 小 宮 友 根
印 刷 者 笹 氣 義 幸
印 刷 所 笹氣出版印刷株式会社
発 行 所 東北学院大学学術研究会
〒980-8511
仙台市青葉区土樋一丁目3番1号
(東北学院大学内)

FACULTY OF LIBERAL ARTS REVIEW TOHOKU GAKUIN UNIVERSITY

No. 173

March, 2016

CONTENTS

Articles

- El Greco and the Art of His Ancestors : His Annotations on Ancient Art and
Byzantine Style in Vasari's *Vite* MATSUI Michiko 1
- Aufzeichnungen von TILESUS zu den drei Aufenthalten in Kamtschatka 1804
und 1805 1. Teil : Ankunft in Kamtschatka im Sommer 1804
..... Frieder SONDERMANN 29
- Ludwig Hohl „Die Notizen“ lesen 2) Ausdruck
..... YOSHIMUCHI Senji 67
- The Effect of Self-Gravity in Linearly Perturbed Euler Equations for a Rotating
Thin Fluid Disk TAKAHASHI Koichi 123
- Development of “Zest for Life” YAHATA Megumu 145
- A Study on Japanese Linguistic Education in the Postwar Early Stage
..... WATANABE Michiko 159

Translation

- Wilhelm Raabe, *Zum Wilden Mann* (2) translated by MONMA Toshiaki 194